

栗田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

栗田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

三遊亭圓朝

青空文庫

一

さて今日こんにちから寛保かんぼう年間にございました金森家の仇討あだうちのお話で、ちとお話にしては堅くるしゅうございますから、近い頃
 ありましたお話の人情をとりあわせ、世話と時代を一つにして永
 らくお聞きに入れましたお馴染なじみのお話でございますが、ちと昔の
 模様でございまして、草双紙くさごうしじみた処ところもございます。栗田口あわだぐちく
につな國綱くにつなと云う名剣が此の金森家にございます。これはその北條ほうじょう
ときまさ時政ときまさの守刀まもりがたなで鬼丸おにまると申します名刀がございました、これ
 と同作でございます。かの國綱の刀の紛失ふんじつから末が敵討かたきうち

になります。このお話の発端^{おこり}は、寛保三年正月の五日でござい
ます。昔も今も変りませんのは、御婦人は春羽根をつき毬^{まり}をつい
てお遊びなさいます。男の児^こは紙^{いかのぼり}鳶^{とり}といつて風^{たこ}を揚げるとい
うのが春の遊びで、どこともなく陽気なものでございます。一体
空を見るのは薬だというので、皆仰^{あお}向くような遊びでございます
から、紙鳶^{とり}をびいゝゝと揚げますれば、是非子供は空を見な
ければなりません。また羽根を突けば必ず空を見る。只今あの皆
様が椅子にかゝつてコップで御酒^{ごしゅ}を飲^{あが}る時は、仰^{あおむ}向いてグーツと
飲まなければならんような事になつて居ります、つまり人間の
健康のために致すことで、アノ羽根を突くのをよくゝ聞いて見
ますれば、あれは蚊に喰^くわれないまじないだと申しました方がご

ざいますから、どういふ訳かと質たずねましたらば、子守が児こを負おぶい
 まして、カチーリ／＼と羽根を突くと云うと、むくれんじの玉の
 返る処が蜻蛉とんぼという虫に似て居りますから、蜻蛉とんぼ返りと云つて、
 くる／＼ツと返る、蜻蛉とんぼと云うものは蚊を捕とり喰う虫だと云うの
 で、赤ん坊の頭を蚊に喰わさんがためにカチーリと羽根を突き、
 くる／＼ツと返ると蚊が逃げるんだそうですから、一体は夏つか
 なければならんものだが、何どういふ訳か正月羽根を突くことにな
 りましたが、昔の羽子板は誠に安っぽいものでございます、只今
 でも何うかすると深ふか川がわ八幡はちまんの市で売って居りまするのは、殿
 さま、かみさま、さんじやさまとか云う昔風の絵が書いて有いま
 すが、只今は役者の押絵で誠に美しい大きいのが流行はやります。近

年は羽子板の外へ刀を持った手などの出たのが有りまして、羽子板のおおき大きさが六尺三寸と云うので、まさか、朝飯前には中々持ち切れません、それで力チーリ／＼と突きますが、能く突けたもので、親の教おしえより役者の押絵の方が大事だと見えて、

女「いえ、これは貸しません、私のは大切な新駒屋しんこまやのだから中々貸されません、似顔へ吉野紙を当てゝしまつて置くのですから」
男「そんな事を云わないで貸しておくれよ、追羽根おいばねをするんだから」

女「顔を汚すといけないからさ」

男「じゃア宜いい、塵取ごみとりでも持つて来よう」

と正月は必ず追羽根を突きます。丁度其の頃湯島切通ゆしまきりどおしに

鋏はさみ鍛冶かじ金重かねしげと云う名人がございました。只今は刈込かりこみになり

ましたが、まだ髷まげの有る時分には髪結床かみゆいどこで使う大きな鋏でござ

います。鍛えきたが宜よろしいから、ジョキリと一ひとはさみ鋏で剪きれるが、下

手な人のこしらえた鋏で剪ると、バラ／＼に先が散ちらばつて幾度こ

いても揃そろいせんから、また剪ると額の処こまつへ細かい毛がはらく

落ちて、余りぞつと致しません。金重の鍛うつた鋏はジョキリと一

鋏で真直まつすぐに剪れるので大層に行われました。金重は六十五にな

りますが、無慾な爺さんでございます。只ただた一人年寄子としよりごでお富とみ

と云う娘がございましたが極別ごくべつ嬪びんでございます、年は十八に相

成りますが、誠に世間でも評判の好よい娘で、少し赤ら顔たちの質たちだが、

ふたえまぶたふたえまぶた一二重瞼で鼻筋の通つた、口元の可愛らしい、笑うと靨えくぼと申して

ちよいと頬に穴があきますが、どういう器械であくか分りませんけれども、その穴は余程深く、二分五厘有つたと云います、誰が尺を突^{つっこ}込んで見たか、髪の毛の艶^{つや}が好く、中^{ちゆうにくちゆうぜい}肉中丈^{じやう}で、お臀^{しり}の小さい、踵^{かかと}の締つた、横骨の引^{ひっこ}込んだ上ものでございます。一人娘ゆえ秘蔵に致し氣儘^{きまゝ}に遊ばして置きましたが、日暮方から羽根を突きに往つて歸りません。此の家に恭太郎^{うち きやうたろう}という弟子がございましたが、親方にも当人にも年の分らない、色氣もなく喰い氣一方の腑^{ふぬけ}抜な男でございます。金重は大人^{たいじん}ゆえ愚^{おろか}なものほど愛して居りました。

金「恭太や〜」

恭「え〜」

金「お富は何処へ往たのう」

恭「表のての字の前で羽根を突いてたよ」

金「往って呼んで来な、日が暮れるからさつさと御飯を食べてお寐なさいと云って呼んで来な」

恭「あいよ」

と云いながら外へ出て参りました。その横町を真直に出ると、
ての字と云う居酒屋の前が広く成って居りまする処で、カチーリ
くとお富は友達と羽根を突いて居りまする傍へ恭太郎が来て、

恭「おい、お富さん、お富さん」

富「何んだよう」

恭「あの親方がもう止せてえから、羽根を突くのは明日におし

よ、日が暮れると暗く成るよ、お飯を喰^{まんま}べないと腹が空^へるとき、早く寐ないと眠く成るとき」

富「何を同じような事をいうのだよ、あいよ今直^すぐに帰るから少し待っておいで……きいさん上げますよ、宜^ようございますか、さア上げますよ」

カチーリとはずれで駈けて突く機^{はず}みに通り掛りの人の腮^{あご}をポンと突きましたが、痛いもので、年始廻りの供の帰りが、首に大きな風呂敷を掛け、千草^{ちくさ}の股引白足袋に雪踏^{せった}を穿^はいた小僧が腮を押え泣声を出して、

小「あの娘でございます、突^{だしぬけ}然に來て私の腮を払ったので、あいたくく」

若「宜^いいや仕方がない、腹ア立つもんじやアないよ」

小「腹ア立つツて立^たないツて、人の腮を払つて置きながら謝りもしないで、彼^{あそこ}処のお飾松の処へ隠れて、そうしてお前さん私を見て居やアがる、あんな奴は有りません、いや此^こ処へ来て謝まれ」
若「そんな事を云うもんじやアない、笑い顔をしろ」

小「痛くつて笑い顔は出来ません、小言を云つて下さいよ」

若「彼^{むこう}方も面目なくつて間が悪いから、慌^{あわ}てゝお飾松の蔭^{かげ}へ隠れたのだが、若^もしお前の方が板で彼方が腮ならばお前が謝らなければなるまい」

小「詰らない事を仰しやる、あたりまいでございます、小言を云つておくんなさいよ、私の腮を払われたから」

若「払われたら目出度いではないか、宅の安兵衛が去年の暮に払われなかつて心配をしてえたが、まだ松もとれないのに払われたら結構じゃアないか」

小「ウーン、掛廻りじゃアありませんし、若旦那はあんなことばかり云つてる、鳶頭小言を云つておくれよ」

鳶「おゝ娘さん冗談じゃアねえぜ、羽根を突くならもつと端ぱたへ寄つて突きねえ、人に怪我をさせて何うするんだ、冗談じゃアねえぜ、広え處で羽根が突きたけりやア地面を買つて突くが宜いや」

小「鳶頭これ御覧、腮から鼻から耳へかけて払われたんだ」

鳶「それじゃア、正月の耳鼻腮痛だ」

小「鳶頭まであんなことをいうのだものを」

若「そんな事を云うもんじやアない、何でも春は心を柔やさしく持つて賑にぎやかにしてなければいけない」

と宥なだめて居ります。息子の年頃は二十三四で、色のくつきりと白く、鼻筋の通った、口元の締った眉毛の濃い、薄く青髭あおひげが生えて居りまして、つや／＼しい大結髪おおたぶさで、けんぼう行義ぎようぎあられの上下かみしもに、黒斜くろななこ子の紋附を着、結構な金蒔きんまきえ絵の印籠いんろうを下げ、茶柄ちやづかに蟬鞆せみざやの小脇差を差して居りますから、年始歸りと見えます。

若「さア／＼往いこう、これから腹を立つものじやアないよ」

と小僧を宥なだめている、物の云いよう男振りまことなざけと云い、真に情の有

りそうなお方と世間知らずの生うぶな娘もぞつと身に染しむ恋風こいかぜに、
何処どこの人だか知れませんが好よい息子さんだと思そい初め、ぼんやり
として後うしろすがた姿を見送つて居りました。これが因果の始りでござ
います。無闇に男振や顔形を見て人に惚れべきものでは有りませ
ん。姿形じゃア心意氣が分りません。心意氣を見ないで惚れては
ならんと圓朝が咎とがめる訳は有りませんから惚れても宜しいが、実
は何処町何丁目何番地何なんたれの誰と云うことを区役所へ往つて戸籍を
あらつて、其の人の身分を調べた上に、智慧が有るとか財産かねが有
るとか、官員に成つても勅ちよくにん任にでもなれる人には惚れても宜
いが、只顔の綺麗なのを見て浮気な岡惚おかぼれをするのは、今開化の
世の中には智慧のない話でございしますが、そこがそれ恋は思案の

外^{ほか}で、お富は彼の息子は何処の方とも知らず、只何時^{いつ}までも立止まつて見て居りました。

恭「おい、お富さん、だから親方が早くお帰りと云つたんだよ、お侍さんの臆などを払つて」

富「お侍さんじゃアないよ」

恭「でも上^{かみしも}下を着て、はさみ箱を担^{かつ}いで、お槍を立てゝ居たぜ」

富「なアにあれば、年始帰りのお人だよ」

恭「早く家^{うち}へお帰りよ」

富「今帰るよ、きいさん、みいちゃん、左様なら、また明日^{あした}」

と云い捨てゝ宅^{うち}へ帰つて臥^{ふせ}りましたが、何う云う因果か寝ても覺めても現^{うつ}にも、彼の息子の顔が眼先を離れませんで、漸^{だん／＼}々々

鬱^{ふさ}ぐような事に成りましたゆえ、親父^{おやじ}も心配いたしましたが、金重はもうこれ六十五でございます、不^ふ図^と風を引いたのが原因^{もと}で漸々病が重くなり、僅^{わず}か二十日^{はつか}ばかり煩^{わづら}つて死去^{みまか}りましたが、江戸表には別に身寄り親類も有りませんが、下^{しも}総^{ふさ}の矢切^{やきり}村^{むら}から金重の妹^{いも}が出て参りました。お富のためには真実の叔母ゆえ、後^わ懇^んに野辺の送りも済ませてから、丁度七日の逮^{たい}夜^やの日に、本^{ほん}郷^{ごう}春^は木町^{るき}の廻^こりの髪^{かみ}結^{ゆい}で長^ち次^{ようじ}さんと云う、色の浅黒い、三十二三になる小^こ粋^{いき}な男^やが遣^やつて参りました。

長「え御免ねえ、真^{まっぴら}平御免ねえ」

恭「あい、おいでなさい」

長「兄さんの名は何か云ったつけ、ポン太さんじゃアねえ恭太さんか、親方にそう云っておくれ、去年の十月^{あつ}詔^{めい}らえた二挺の鋏はもう出来上ったかつて」

恭「鋏は出来やアしないよ」

長「出来やアしねえって、親方が^{うけあ}請合つたのだぜ」

恭「請合つたって出来ねえよ、何うしたって出来やアしねえ」

長「困るナア、出来なけれア出来ると云って請合わなけりやア宜^いいに、困るナア、親方にそう云っておくれ、お老^{じい}爺^{やう}さんは何うした」

恭「何うしたって眼を眠って固くなつて、冷たくなつたから、桶の中へ入れッちまつたのだ」

長「フーン……じゃアお老爺さんは死んだのか、これはどうも惜い^{おし}ことをしたのう、名人を一人なくなしちまつた、^{につぽんじゆう}日本中

の髪結が何^どのくらい困るか知れやアしない、そういう事と知つたら二十挺ばかり誂^あらえて置いて、後^{あと}で売れば何のくらい儲^{もう}つたか知れねえのに、惜いことをした、此の人は、斯^こう云う氣だから力を落さねえのだな、おいお老爺さんが死んだら困るだろう」

恭「ウ、親方が死んだって哀^{かな}しくはねえが、親方のいる時分にア何か喰^{すく}いてえと云えば直^{すぐ}に買^かつてくれたが、親方が死んじやア何も買^かつて喰^くえねえから、己^{おれ}も一緒に桶の中へ入れて呉れろつて

だが、生きている中^{うち}はいけねえって入れて呉れねえのだ、いけなしねえ」

長「可愛そうに、それが人情だ、娘^{ねえ}さんはさぞ力を落したろう」

恭「なにそんな物はおつことしやアしないよ」

長「さぞ泣いたろうね」

恭「毎日泣いてるよ、だからね、矢切村の叔母さんが出て来て、

そう泣くんじやアない、今日は精進^{おまんま}もんで御飯^{おまんま}ア食わせるとよ」

長「そんなら今日は七日^{なぬか}か」

恭「なに今日は二十六日だ」

長「はゝ面白いことを云う人だなア」

と云ううちお富は奥から店へつかゝと出て参り、

富「親方おいでなさい」

長「誠に何うも、私^{わっち}些^{ちつ}とも知らなかつたのですが、今恭太さんから聞いて驚いたんですが、あんなに御丈夫でおいでなすつたのにね、とんだ事でござえやした、嘸^{さぞ}まアお力落しでござえやしやう」

富「有難うございます、お誂^{おつ}らえの鋏はまだ出来ずに居りまして誠に相済みません」

長「どう致しやして、鋏どこじやアござえやせん、実に惜いことをいたしやした、宝物をなくしたようなもので、何^どのくらい私^{わっち}共^{ども}は困るか知れやせん」

小「おい長次さん何うしたんだ」

長「あゝ悔^{びつく}りした、後^{うしろ}から突^{だしぬけ}然^にに突ツついちやアいけねえ」

小「おまえくらい怠^つける髪結はないって、大旦那が大層腹ア立っているぜ、嘘ばかり吐^ついて丁場を明けたり、若旦那を遊びに誘い出したりして悪い髪結だって」

長「嘘を吐いて明けるわけじやアねえが、此^{こゝ}家の親方がおめでたく成ったので悔^{くやみ}に來^{あした}たんだが、明日は屹^{きつと}度往^いきますから宜しく、また濱田へお使いかえ」

小僧はげぐんな顔にてお富を見ながら、

小「おや、この娘^{ねえ}さんだ、此の間私が若旦那のお供して年始廻りに歩いた歸りに、私の腮を払ったのは」

富「おやまアどうも、誠に相済みませんでした」

小「あゝ、この姉さんねえは口を利く、私は唾おしかと思つた」

長「何をいうのだ、それじゃア明日は屹度往きますから宜敷よろしく、左様なら、姉さん、あの小僧さんを宜く知つておいでゝすね」

富「なに此の間五日の日に、私が羽根を突きかけて、あの小僧さんの腮わびを払つて気の毒とは思いましたが、間が悪くから隠れてお詫わびもしませんでした、あなた宜くあの小僧さんを御存じですなえ」

長「私わっちの大切だいじなお店たなで、紀伊國屋きのくにやという質両替屋です」

富「あなた其店そこへ入いらつしやるの」

長「えゝ」

富「そこに二十二三で色の白い好よい男の若旦那がいらつしやいま

すか」

長「え、伊之助さんいのすけと云う一人子息ひとりむすこで好い若旦那でさア、若旦那

に済みません事でもございますか」

富「有るくらいでは有りませんの」

長「私わっちは毎日往つて、撫で附けて上げ、一日置きに若旦那の髪を

結います」

富「お前さんのような汚ない方が、おや御免なさいよ、あなたが

若もしその若旦那のお髪をお結いなさるのなら、過日羽根いつかを突い

て小僧さんの腮を払った娘がございますが、お詫をしたくも間が

悪いのと悔りしたので、御挨拶も致しませんで、誠に馬鹿な娘と

思おぼしめ召しましょうが、間が悪いのでお詫も致しませんと、宜くあ

なたからお詫をなすつて下さいまし」

長「若旦那は男が好いから岡惚れをしてはいけません」

富「あら、そんな訳では有りませんが、お内儀かみさんがお有んなさい
ますかえ」

長「えゝ、嫁を探してるんだが、お世話アするような嫁さんがね
えんです」

富「おつこちが有りましたようね」

長「そんな事はどうか知りません、だがね堅かてえ子息むすこさんでござ
います、此の頃足を近く廓なかへどんくと花魁おいらんを買いに往つて

も、若旦那が惚れて何うの斯こうのと云う方ではない、たゞ浮うかれに
往いきなさるが、ほんの保養で、松葉屋まつばやの八重花やえはな花魁を買つてゝ、

これへ時々往くばかりなのさ」

富「花魁などと云うものは本当に仕合せでございますねえ、あんな美しいお方がお金をもって遊びに来て下さるのねえ」

長「その代り忌^{いや}なのが有りますから埋合せでございましょう、花魁は随分苦しいことも有りましたよう、傍^{そば}に居るのも忌な客でも一緒に寝なけりやアならないからねえ」

富「本当にそうでございますね、松葉屋の八重花さんと仰しやるのは吉原でございますか」

長「えゝ、京町でございます」

富「親方少し待って下さいまし」

と云いながら奥へ這入り、暫くして鍬を手に持ち出て参り、

富「是はアノ宅のお父さんが鍛つて置いたお誂えのすえが一挺残つてあるんですが、お役に立つか立たないか知りませんが、お使い料になすつてくださいな」

長「えゝ、これは宅のお爺さんが鍛つた、これは有難い、大切に遣いやす、それじゃア若旦那への言附けは八百ばかり云いましやう、大きに有難う、左様なら」

と長次が帰りました。お富は本郷春木町の紀伊國屋という質両替屋の若旦那と初めてわかりましたが、あの若旦那にお目にかゝるのは、吉原の花魁でなければ逢われないことだと不図思い違いをいたしました。何かの本に浮気娘は女郎を羨ましがると云うことが有りましたが、それに父の金重は無慾の人でございますから、

娘へ残します処の物とてもございませぬ。少しく借財が残ったぐ
らいの事で、死にます時の遺言に己おれも人に知られた金重だから恥
かしくない石塔を建てゝくれろと云うので、立派な石塔を建てゝ
借財の極りをつけ、是でちゃんと自分の身の立つというように致
しますには、金子かねが入りますことゆえ、お富が叔母と相談して私
を吉原の松葉屋へ娼妓に売り、その身代みのしろでお父さんの石塔を建
てゝ吊とむらい料にして下さいませんと、お父さんの耻になりますから
と申しますと、田舎氣質かたぎの叔母ゆえ泣いて止めるのを聴入れず、
お富は自身に松葉屋へ駈込んで頼みますと、半藏はんぞうも感心して、
半「誠に親孝行な事だ、器量と云い姿と云い申分がないから、お
前さんの入用いりようだけの金子きんすを上げますが、親類が得心でなければ

証文は出来ません」

と云うので、叔母を呼び相談のうえ談が付き、其の頃百二十両に身を売ったと云うから、余程別嬪でございます。身の代は皆な叔母に預け、金子を持たして帰す。叔母は残らず跡の始末を致し、金重の家を仕舞つて下総の矢切村に帰りました。

お話二つに分れて、是も同年正月五日の話でございます。紀伊國屋伊之助の許嫁の娘は、深川万年町に岡本政七という諸侯方のお目利をする小道具屋で、この妹娘が紀伊國屋の息子と許嫁の約束に成つて居ります。此の家に重三郎という番頭が居ります。年齢二十七まで奉公を致した堅い人でございますが、御酒ごしゅのうえが悪いので、御酒をたべると様子が違う。酒は謹ま

なけりやならんから止せと、親にも云われて、弁天様へ願掛がんかけをして酒を断ちましたが、扱さてこうなるとまた飲みたいものと見えま
す。金森さまへ主人の代だいとして年礼ねんれいに参りまして、御馳走にお
屠蘇とそが出ましたが、三合入の 大 盞おおさかずきで目出度く祝せというので、
三杯続けたから三三が九合で、後は小あとさいお盞と云われたが、屠
蘇でも余計に飲めば何どんなものでも酔えいますが、重三郎も酔いま
したが、昨年の十一月お下げになりましたとお刀をかき入れを致し
て、二日の研初とぎぞめに研上げも出来ましたから、一度御覧に入れて、
それから廿日正月までに、お鞆さやぬりの塗から柄糸つかいとを巻上げますのは
間に合いますと、そこは酔つていても商売ゆえ、後藤祐乗ごとうゆうじょうの
作にて縁頭ふちがしらに赤銅斜子しゃくどうなこに金の二疋ひきのくるい獅子の一輪牡

丹、金の目貫は英一蝶めぬきはなぶさちようの下絵を宗珉そうみんが彫りました銘作でござい
ます。鍰つばは信家のぶいえ在銘ざいめいで山水に釣り人物で、お鞘に塗は相違な
く間に合いますから、柄糸は黒の五分に致しますと申し上げ、お
下げになったのを自分が大切に脊負せうつて外へ出ましたが、屋敷内うち
にいた時は気が張つて居りますから酔えいが出ませんが、外へ出ると
一時じに酔よいが発したから、歩くにも足元が定まらなかったので、小僧が心
配を致し、介抱しながら漸く永代橋えいたいばしを担かついで通つた様なもので、
佐賀町さがちようど通りをひよろ／＼参りまして、佐賀町川岸がしから仙台川岸
を向うに見て、十間ばかり往くと、番頭は袴はを穿き羽織を着たな
りでベタ／＼と大地じびたへ坐つてしまい、動きません。今と違つて若わ
春かはるは余寒よかんも強く、松の内は夜よに入ると人ツ子一人通りませんか

ら寂^{しん}として居りまして、往来はぱったり有りません。日光風^{おろし}がビ
ーくくと吹来る。

小「番頭さんく、もう少しだから往^ゆきましよう、番頭さんく」
と呼んでも重三郎は正体なく酔^よばらい、まわらぬ舌で、

重「あゝ宜しいよく」

小「宜しくは有りませんよ、其^{そこ}処へ坐つちやアいけません、此^こ処
は家^{うち}の中じやありません、表でございます、こんな処に居ては淋^{さみ}
しいし、寒くつて堪りません、もう少しだからサア往^いきましよう、
直^{じき}にお店^{たな}でございますよ番頭さん」

重「常^{つねきち}吉く」

小「此処に居ますよ」

重「あゝ有難いナア、今日往ったのは何というお屋敷だか知ってるか」

小「芝の金森さまのお屋敷でございますよ」

重「能く覚えて置け」

小「覚えていますよ」

重「芝だぞ」

小「知ってますよ、もう少しだから、さアお出でなさいよ」

重「宜いじゃないか、今日は己が旦那に二百両も三百両も儲けさせる事をして居るから、少しぐらい酒を飲んで酔っても宜いんだ、

有難いことだ、金森さまの御重役でいながきごえもん稻垣小左衛門さまというお方

は七百五十石お取りなさるお方だ、そのお方がちゃんとかみしも上下を

着けて己の前へ手を突いてお辞儀をして、重三郎目出度いのと仰しやるから、へえ御意にございます、毎年まいねん相変らず主人の代りに手前が参り誠に目出度いナア、へえくお目出度うございまず、相変らずどうぞと云うと、手前は主人政七よりも馴染が深くなア、御意にございます、格別のお馴染で有難う存じます、酒を禁たつたかえ、禁ちました、そんなら屠蘇を飲め、殿様から拝領の松竹梅の大おおさかずき盞で飲め、己が酌ついで遣ろう、へえ有難うございまずと云つて己は三杯飲んだ」

小「お前さんは酒を三杯飲んだろうが、私は待つてる間にお餅かちんを二タ切焼いて呉れたぎりだから腹へが空つて仕様がな、もう直に戌刻よつになりますから早く往いきましよう」

三

重「こゝに脊負^{しよ}つてゐるこれを覚えて置け、刀屋になるのなら是を覚えて置かなければならんぜ、粟田口國綱という勝れた逸^{わざ}物だ、刀屋になれば能く覚えて置け、五郎入道寶龍齋正宗、伯^ほ耆^{うき}の安綱、皆神棚へ上げて御神酒^{おみき}を供え拜んでも宜^いいくらいの物だから、よく覚えて置け、あゝ有難い」

小「番頭さん、犬の糞^{ふん}の上へ手を突いちやアいけませんよ」

重「なに犬の糞結構有難い目出度い」

といって動きませんから、小僧も呆れ果てた故、早く帰つて主

人へ知らせようと思ひまして、あちらばたくこちら駈出してまいりました。
 番頭は何か独り言を云いながら彼方へパタリ此方へパタリ遣つて
 参ると、五六間先に一挺の四ツ手駕籠が下りている様子、只今で
 は人力ですが、其の頃は駕籠に乗つて歩いたもので、正月のこと
 ゆえ、ちよつとわかざりうしろ輪飾が後に附いて居ります。駕籠のあお煽りをポカ
 リと揚げて中から出た侍は、山岡頭巾をまぶか真深に冠り、どつしりし
 た無紋の羽織を着、せんだいひら仙台平の袴を穿き、は四分一拵えの小長い大
 小を差し、紺足袋で駕籠から足袋はだしの儘つかくと重三郎の
そば傍へ寄るより早く、粟田口の這入った箱へ手を掛けて無理に取る
 うと致します。重三郎は小僧にも持たせず、自分が脊負つて来る
 くらいですから、驚いて大声を揚げ、

重「泥坊く」

と呶鳴ると、彼の侍は突然腰に帯して居た一刀を引抜く刃の光

に、重三郎は堪らんと心得て逃げたが、横へ切れゝば宜いの真

直に往つたから仙台堀へ駈込んだが、暫くして浮み上り、がぶ

く遣つてゐる処を上からスーツと一刀浴せたが、水の中ゆえ鋒

鉋が肩へ中つたか何うだか様子は分りません。侍は刀を提げた

なりで水面を透して見て居り、暫く経つて後へ退り、懷中から小

菊の紙を出して刀を拭きましたが血染もない様子ゆえ、其の儘

鍰鳴をさせてピタリと鞘へ収め、刀箱の風呂敷包を解き、中か

ら取出して見ると、白茶地亀甲形古錦欄の結構な袋に這入つ

て居ります。其の儘袋ぐるみ腰に差し、箱も風呂敷も川に投込み

まして悠々として後の方へ下りますと、昇夫が一人駕籠の後に肝を潰して小さくかたまり、真青になつて居ります。

侍「これ、そこに居るのは何者だ」

昇「へい、へい、只今往つて参りました」

侍「お、若い者か、小菊や煙草を買つて来てくれたのか」

昇「へえ直に往つて参りますつもりでございましたが、大きに遅くなりました」

侍「いや存じの外早かった、手前先程から其処に居たか、また今歸つて来たか」

昇「へえ今……もう少し先刻のような……今のような、ちよいと廻つて直に歸りました」

侍「何を申す、それでは只今の様子を見たな」

舁「へえ少しばかり拝見を致しました」

侍「これには少し仔細の有る事だから口外して呉れるなよ」

舁「決して他言は致しません」

侍「その代り手前^{てまい}には多分の手当を遣ろう」

舁「なに旦那さま、お手当さえ下されば随分お手伝も遣るくらいで」

侍「中々気丈な奴だ、サ、こゝへ来い、手当を遣ろう、向うの仙台侯のお長家下に二人ばかり頭巾を冠^おつてゐる奴が居るようだが、気を付けてくれ」

舁「へえ、二人、何処に」

と、うつかり舁夫が向川岸を見る隙を覘いすまし、腰を居合
 に捻つて不意に舁夫の胴腹へ深く斬りかけ、アツと声を立てる間
 もなくドンと足下にかけたから、舁夫はもんどりを打ってドブリ
 と仙台河岸へ落ると、傍に一艘の荷足船が繋いで居りまして、
 此の中に居たものは伊皿子台町の侠客で荷足の仙太という
 人で、力は五人力有つて、不死身で無鉄砲という危険な人で、
 始終喧嘩の仲人をしたり、喧嘩をするので生疵の絶えない
 人ですが、親父が死んでから余程我も折れましたが、生れつきの
 侠だから、斯ういう悪人を見ると我慢が出来ません、船の中へザ
 ブリと水が跳込んだから苦を上げてもうろく頭巾を冠つたなり、
 と見ると侍が拔身を提げて立って居りますから、心の中で人を馬

鹿にしやアがる、こんな野郎が此の町中をのそく歩きやアがるんで、夜商人よあきんどの蕎麦屋だの家台店やたいみせなどは何のくれえ困るものが有るか知れねえから、殴り倒してやろうと思ひ、手頃の板子いたこを一枚持つて、止せば宜いいのに、上潮あげしおばなで船がガツシリ岸へ着いて居りますから、仙太は身軽にひらりと岸へ飛び上り、彼の頭巾を冠かぶつた侍の後うしろへ廻る、途端に向うから提灯を点つけて駈けて来る人があります。

政七「何処だく、常や」

小「何でも此処の地べたへ坐つてたんです」

政「お下げになつた大切な御刀を脊負つてながら本当に何てえことだろう」

小「何でも此処らに違いないんです」

と云いながら提灯を振廻し、うろ／＼方々を見廻す中に、侍が
 閃つく長い^{きら}のを持って立つて居たのを火影^{ほかげ}に見たから、小僧は驚
 き提灯を^{ほう}投り出して向うへ逃げ出したから提灯は燃え上る、政七
 は何が有ったのか分りませんけれども、小僧がキャーと云つて逃
 げるに驚いて、無闇にこれも一緒に^{あと}後から逃げました。荷足の仙
 太は提灯の燃上る火影に^{つく／＼}熟々と侍の姿を見済まして板子を取
 直し、五人力の力を^{きわ}極めて振り冠^{かぶ}り、怪しい侍の腰の番^{つがいねら}を覗い、
 車^{くるま}骨^{ほね}を打^{うち}砕^{くだ}こうという精神でブーンと打込みますと、悪
 事をいたすくらいの侍ゆえ腕^{うで}に覚^{おぼえ}が有ると見え、ひらりと飛び上
 りながらスーツとまた長刀を引抜き、仙太郎の鼻の先へ、^{ひらめ}閃くと

ころの鋒きつさき尖を突き附けられ、流石さすがの仙太郎も驚き慌て、船の中へ飛込み、繫繩もやいを解いて是から無闇に船を漕いだが、後あとから追掛おつかけて来るような心持で川中へ漕出すが、上潮始はじめで楽ゆえ段々漕こぎ上ぼって、よう／＼万年橋の下へ船を突込みました。此の時に彼かの刀屋の番頭重三郎は川の中へ投り込まれたが泳を存じておりますというは、羽根田はねだで生れた人ゆえ少ちいさい時から海の中に這入って泳ぎつけて居ります。なれども、袴羽織に小袖を着て、小脇差を差している上に印籠を下げて居りますゆえ、泳げるものでは有りませんから、がぶ／＼しながら石垣へよう／＼這い上ると、万年の橋詰でございます、河岸へ立上たちあがりますに、ブーと吹きおろす寒風に袖も袂たもともつら／＼のように氷って、ずぶ濡れゆえ、酔えいが醒め

とみると夢のような心もちで、判然^{はつきり}分りませんけれども、お刀
 は慥^{たし}かに己が脊負^{せふ}つてお屋敷から出たに違いないが、河岸縁^{がち}へ来
 て、己が正体なくなつて土地^{じびた}へ坐つた時に、常^いが往^いこうくと云
 った事は微^{かす}かに覚えて居^おるが、泥坊が脇差を抜いたから驚いて己
 が川へ駆け込んだのか投^{ほう}り込^こまれたのか些^{ちつ}とも分らないが、お刀を
 脊負^{せふ}つて来たに違いないのが、無いからには取られちまつたのか、
 あゝ飛んだ事をしちまつた、これが小僧の使いじやアなし、三十
 近^{ぢか}い年をして、お大名からお下げになつた大切なお刀を泥坊に取
 られると云うは、災難とは云いながら、お屋敷さま御伝来の大切
 な御宝刀で有るぞよと、稻垣さまが仰^{たしか}しやつた事を慥^{たしか}に覚えてい
 るが、これが紛^{なく}失^なるとお屋敷の方も大騒ぎになるだろうし、また

主人へはお屋敷から何んな難題がかゝつて来るか分らない、こりやア^{とて}迎も生きている事は出来ないで、面目ないから寧^{いっ}そ一^{ひと}思いに死ぬより外に仕方がない、寧そのこと身を投げようか、いや己は身を投げてでも死ねゝえや、斯ういう時には生^{なま}じいに泳ぎを知つてるのはいけないナア、首を縊^くつて死のうかしらん、併^{しか}し能く往來中の松の樹^きの枝などへぶら下つてるのが有るけれども、随分ぎまの悪いもんだ、己の耻を曝^さらすばかりじゃアない、主人や親までの恥になる、困つたなア……あゝ好^いいことがある、この橋の欄干に帯を縛つてぶら下れば、船で通る者ばかりしか見られない、船頭などに見られたつても構わないから、此処からそうしよう、併しナア正月五日に首を縊ることになろうとは思わなかった。と

云いながら羽織を脱ぎ、袴を取り、帯を解き、真田さなだの下締したじめを締めまして、黒くろ紬つむぎの紋附を着たなり欄干へ帯を縛り附け、脇差や印籠を一緒にして袴つくりすの上へ取捨とりすて、片手にて欄干へ捉つかまり、片手にて輪にしたる帯を首に巻き附け

「あゝ己の死ぬのは心柄だから仕方はねえけれども、己が此処で死んだという事を、羽根田にいる親父が聞いたらば嘸さぞ忸つくりするだろう、虫が知らせたのか去年の暮の二十日だつけ、久し振りで親父の処へ尋ねて行き、一両小遣を遣つたらば、何で己に小遣をくれるのだ、己は梨子なしを一荷担かかついで歩き、幾籠売つても一両の金は儲からないのに、己に一両も小遣いを呉れられるような身の上に成つたは、御主人さまのお蔭だから、御主人を大事に思うなら、

好^{すき}な酒だから飲むなじやアないが、手前が一己^{いッきだち}立になるまでは酒だけ止めてくれろよ、と手を出して頼むと云われたから、お父^{とつ}さん、そんなら私は羽根田の弁天様へ酒を禁^たとうと云つて、親父と手を引合つて弁天さまへ参詣して願^{がん}掛けをしたが、酒を禁つて置きながら味淋でも呑んで酔えば同じことだ、味淋酒というからこれも矢張^{やっぱり}酒だ、どうぞ堪忍しておくんなさい、どうも済みません、災難で、これも皆約束事と諦めておくんなさい、先立ちます、また万年町の御主人も嘸^{にく}悪い奴と思^{おぼしめ}召しましょう、後^{あと}でお屋敷から難題が掛つて来たら、何^どのくらい御立腹になるか知れません、どうも私には致^{いたしかた}方^{かた}はございません、その代り私が死にましてもお刀の処は私が幽霊になつて尋ね探し、御難儀のかゝ

らないように致して：お係りの稻垣様のようなおやさしい御重役を、しくじらせるような無調法ぶちようほうを致し、事に依つたら切腹でも仰付けられるようなことが有つては濟まない、あゝ何んと云つても酒からだ、意見を云われても是だけが止まないからだ、何たる因果なことだなア」

と男おとこ泣なきに後悔して居りましたが、また氣を取直し、何程思つたつて悔くやんでも返らない事だ、仕方がない南無阿弥陀仏くゝと口の中にて念仏を唱えながら、スーツと手を放す、途端にグツと縊くびれるものだそうで、行やつて御覧なさい、何のくらい苦しいか知れますまい。

四

すると、橋の下に繋いでいた船の舳みよし端ばたに立つて居ました男が、此の体ていを見て、重三郎の腰を抱えて、

男「おい、これさ待ちねえ泡ア喰っちゃアいけねえってば」

重「お放しなすって、どうぞ殺して下さい」

男「おい、そう動いちやアいけねえと云うに、まア氣を落着けて己のいうことを聞きねえ」

と云いながら首ツ玉へ巻き附けた帯を解き、船へ下おろし、

男「どうせ死のうとするからにやア種いろく々事いり情わけが有つて能よく々
の事だろう」

重「へえ、どうしても生きては居おられません、種々深い訳がござ
いますので、お止めなすつても中々一通りの訳じやアございませ
ん、みんな私の不調法から多おおぜい数の人の難儀になる事ですから、
どうかお殺しなすつて」

男「これさ、お前めえひとりくやが独で悔んで居たのを皆みんなな聞いたが、泡を喰つ
ちやアいけねえぜ、死ぬのは何時でも死なれる事だ、斯うやつて
お前を助けて置き、そんなら死になさいとは云えねえじやアねえ
か、膝とも談合という事があるから、まア着物でも烘あぶつて温あつたけえ
物でも喰いながら緩ゆるりと話をするが宜いい、慌てゝも仕様がねえ、
己きつとが屹度お前の助かるようにして遣つたら宜いかろう」

重「そう致しますには肝腎なの紛失した物が出なければいけないの

でございます」

男「だからよ、※物が出るように己がするから、それまで己の云うことを聞いてくんな、炭団たどんの頭を叩はつて見な、まだ少しは火が有るだろう、泡ア喰つてまた川の中へポカリをきめちやアいけねえよ、そんな事をするとまと苦へふん縛るよ、宜いいか、紛失なくつた物は出るような工夫をするから、その相談をするまで待つてくんな」

と船を漕出し、永代橋を越して御浜沖へ出て、あれから田町たまちの雁木がんぎへ船を繋つけまして、

男「エ、コウ潮時が悪いわりもんだから滅法界めつぼうけえに遅くなつた、なにしても寒くつて堪らねえから何処かで一杯飲べいろうかや」

重「いえどう致しまして、私は御酒と聞くと敵でかたきございます」

男「違えねえ、そんならあつた温けえ御飯おまんまでも喰いな」

と口の利きようは粗いようだが真実の男で、手を引いて馴染の夜明しの居酒屋へ這入つてまいり、

男「お爺さん」

爺「いや親方大層遅く、今夜は深川へお泊りのような話だったが」

男「泊る積りだったがけえ帰つて来た、爺さん其の衝立ついたてを二重に建

てゝおくれ、そうして火を沢山入れて、火鉢を二つばかりよこしてくんな、何かあつた温かい物が出来るかえ」

爺「蛤鍋が出来ます」

男「それアいけねえ」

爺「独活鱈うどたらが出来ます」

男「そいつは強氣だ、他に何か出来るかえ」

爺「柱豆腐」

男「そりやア結構、それから熱くして一本爛けて来て呉れ、兄さん此方へお這入り、己がお前をマア／＼と云つて無闇に船の中へ押込んで漕ぎ出したから何処へ連れて往くのかと思つたかも知れねえが、己ア伊皿子台町にいる仙太と云うもので、船も五六艘あり、野郎共も宅に居て、何うやら斯うやら暮して居るものだが、餓鬼の時分から喧嘩ツ早く、無法で随分親父に苦勞をさせたが、彼処の喧嘩の中、人に這入つて謝つてくれと頼まれ、中え這入り、出刃庖丁でジョキ／＼遣られた事も有つて、何のくれえ親父が苦勞をしたか知れねえが、三年あとに親父が死ぬ時に、短慮功

を為さずと遺言され、それから些^{ちつ}とばかりおとなしくなつたが、
 氣の暴^{あれ}えのは性^{うまれつき}質だから止まねえのよ、今日高輪^{たかなわ}から乗^{のりえ}
 合^{いぶね}船で客を送り、深川へ上げて佐賀町の友達の處で用を達^たし、
 仙台河岸へ船をもやつて一服喫^やつてると、船の中へザブリと水が
 跳ね込んだから、何だと思つて苦を撥^はねて向うを見ると、頭巾を
 冠^{なげ}つた侍が長えのを引^{ひっこぬ}抜いて立つて、投^{ほう}り込まれたのは舁^{かこ}夫の
 ようだツけ、斬つて投り込んだのだかどうか様子は分らねえが、
 何しても斯んな侍を打^{うち}棄^ちて置けば、多^{おおぜい}勢^{うしろ}の人の難義になる
 と思つたから、板子を持つてそツと其の侍の後へ廻り、どやそう
 とすると、ひよいと飛びやアがつて引っこ抜いたから、驚いて船
 へ逃込み、慌てゝ川中へ漕ぎ出しながら、と見ると船の中に財布^{せえふ}

が一つ有った、縞の財布よ、其の中に金が三両二分に端だが些とばかりと印いんぎよう形が這入へえつてたから、遺おとし主へ知らせ遣りたいと思つて、万年の橋間はしまで船を繫もやつて、また一服喫つてるとお前が上でよめえ言を云いながら帯を首へ巻き附けて、了簡ちげ違えをしたので、屋敷の役人は腹ア切るとか、主人に何んな難題が掛るとか、親父が恟びつくりして死ぬだろうとおろ／＼泣いていると、その落る涙が己の額へポタリ／＼中あたつたので、あゝ氣の毒な人だ、己も腹一ぺえ杯親に苦勞をさせたが、此の人は嘸さぞマア困るだろうと思つて、いらざる事だが無理にお前を助けたのだ、お前の物を盗んだ奴は己が打ぶん殴ろうとした侍だ……此の財布は事に寄つたらお前が落したもんじゃアねえか」

重「はいく」

と云いながら手に取上げて見ました。

重「誠に思い掛けない事でございます、この財布の中には印形に金が三両二分と二百五六十文這入って居りますので」

と打返し見て、

重「これでございます、あなたがこれをお拾いなさるというは誠に不思議なことでございます」

仙「そればかりじゃアねえ、よく聞きねえ、その侍を打ん殴ろうとしたから侍の姿形は悉なり皆知すつかりつてゐるから、宜いいかえ、お前が幽霊になつて刀の詮議をするよりか、生きていて知れりやア死ぬにやア及ぶめえ、刀せえ出れば死しななくツても宜いんだろう、己も乗

り掛った船だ、殊に侍の姿を知ってるんだからお前と二人で方々詮議に歩こう、その刀は滅法に善い刀だという事だから、無闇と質に置いたりする事は出来めえと思う、また質に置けば斯ういう品が何うとか、質屋へ、着物ならば古着屋へお触が廻るから、売ることにも質に置くことも出来ねえに違えねえから、その侍は自分の差料にして居るだろうという考えだ、違ってるか知れねえがお前と己と二人で手拭で鼻ツ冠りをして、矢ツ張己のようないなせな股引腹掛で、半纏はんてんを引掛ひっかけて人繁さがしい処を歩いて、もし怪しい侍が居たら、己の方からポカリと突当つきあたって置いて悪体あくていを吐くと、怪けしからん奴だ斬ツちまうと云う隙を覗ねらつて、その刀を挽取もぎとつてお前に渡すから、紛失なくした刀だと思つたらそれを持つ

て何処へでも逃げちめえねえ、己は後あとで其の侍と喰い合おうと死に合おうと構わねえからよ」

重「へい、それは誠に御親切な事で有難う存じますが、あなたがまたお怪我でもなさるような事があると誠に相済みませんが」

仙「なに己アふじみだから二寸や三寸斬られても痛くねえという妙な性うまれつき 質だから、無法に喧嘩を仕掛ける心しんてい底だ、お前めえが死

んでしまえば役人に主人にお父さんとつにお前よにんと四人が死なゝけりやアなるめえから、己が一人死んでも四人助よつたりかる方が割じやアねえか、だから己の云う事を聞いておくれ」

重「でも見ず知らずのあなたに御迷惑を掛けては相済みません」
仙「見ず知らずだツて宜いいから己に任せねえ」

と云つてゐる処へ表から昇夫さんでございましょうか、十二分に酔つてヒヨロ／＼しながら這入つて参り、

昇「お爺さんとつ今晚は」

爺「いや安さんやす、おくれ仕事でたんまり有つたね」

昇「甘え仕事もねえのサ……親方御免なせえ……お爺さん熱くして一本酩つけておくれ、お爺さん、カラどうも酩えいが醒めちやア生地いくじがねえんだ、寒い時こえと怖え時は酒でなくツちやア凌しのげねえから、熱くして一本酩けておくれ」

爺「大分だいふ御機嫌ですな」

昇「親方どうも大きな声をしてお八釜やかましゅうございます、え、おいお爺さんとつ、己ア此処迄よたびに四度飲んで来たが、直ぐに酩よいが醒める

んだ、醒めるから又居酒屋へ飛び込んで飲^やつて来たが、丁度五度^{たび}
 目^めだよ、慄^{ふる}えて仕様がねえから、もつと熱くしておくれ、肴^{さかな}何
 か一品^{しな}ばかり摘^{つま}んで持つて来ておくれ、何でも宜^{いい}い、塩氣せえ有
 れば宜^{いい}いやア、おいお爺^{おや}さん、今日^{けふ}のう寅^{とら}の野郎と己と二人で新
 橋に客^{きやく}待^{まち}をしてえると、え、おい駕籠^{かろう}に乗る人担^{かか}ぐ人と云う
 が、おらツちは因果^{いんぐわ}だな、若^わえ旦那^{だんな}が通^{とほ}つたから御都合^{ごごう}まで廉^{やす}く
 参^{まゐ}りましうと云うのだ、辻駕籠^{つじかろう}の悲^{かな}しさには廉^{やす}くつても仕事を
 する方が割^{わり}だぜ、オーそうだと云う訳^{わけ}だ、え、おいお爺^{おや}さん、頭
 巾^{きん}を冠^{かぶ}つた侍^{さむらい}が来て、おい若^わ衆^{しゆ}深川^{ふかがわ}の木場^{きば}までやれ、へい畏^{かしこま}
 りました、駕籠賃^{かろうぢ}はいくら遣^やろう、御如才^{ごじよせえ}はごぜえますめえが、
 此処^{こゝ}から余程^{よほど}ありますから六百遣^やつて下^{くだ}せえ、もつと沢山^{たくさん}遣^やるか

ら氣を附けろよ、有難いッてんで……おい此方こつちを向いて聞きねえ
よ面白おもしろえ話だ、そうするとお爺さん、ピヨコ／＼担いで靈岸れいがん
島しままで往くと、鰻で飯を食うから駕籠おろを下せと云うから、旦那
大黒屋は疾とうに売切れて有りません、春は早く仕舞いやすという
のに、宜いから下せ、ヘーッてんで下すと、その侍が鰻屋へ這入へえ
ると、此の通り売切れ申候という札が出してあります、存じて居お
る、貴様の所の鰻は宜いから態々わざ／＼来たのを、己に食わせんと云
う事はあるめえ、手前てまえの家になければ外の鰻屋から買つて来て割さ
いて焼いて出せ、望みだと云うと、侍でおつかねえもんだから大
黒屋の番頭がそれから奥へ通した、若衆は縁側へ廻れというから
縁側へ廻ると、彼家あすこの事だから井は出来ねえや、あれえのを焼い

て酒を一本ずつ出してよ、待たして気の毒だから待賃まちゝんを二分ずつ遣るつてえんだ、え、おいお爺さん、辻駕籠つじがろうに出てよ駕籠賃がろうぢが六百で祝儀が二分宛ずつツてえのは無ねえや、寅が目度めどてえ正月だという訳だ」

と一口飲み

「もう少し好い酒を売れば宜いいに、少し悪くなつたな」とまた飲みました。

五

安「お爺とつさん、そうするとね、其処へ一本差した海鼠襟なまこえりの合羽

を着た侍が這入^{へえ}つて来てね鰻を食いながらコソ／＼話をして、その侍が先へ歸^{けえ}つちまつてから飯を食つてサ、若衆遣^{わけえし}れ、へえ畏^{かしこ}まりましたツてんで、ヒヨロ／＼担いで永代橋^{えいたえ}を渡つて、仙台河岸の手前の佐賀町から河岸の方へ廻^いつて往くと、若衆駕籠^{おろ}を下せ、大黒屋の床の間の側^{わき}の棚へ紙入を忘れて来た、金は沢山^{たんと}じゃア無^ねえが、書^{かきもの}物が大切^{だいじ}だから取つて来いよ貴様、へえツてんで此方^{こつち}は取りに歸^{けえ}つて、これ／＼というと、若衆飛んだ云い掛つたことを云うな、有ればちゃんと取つて置くよと云うから、そう仰^{ほか}しやるが外^{ほか}のお客と間違やアしませんか、売切れ申候という札を出して置く処へ無理に上つたのだから、他にお客はねえ馬鹿野郎、そう御免ねえ、初手から小言をいわれに歸つたようなものだ、佐賀

町河岸へ歸つて見るとお前^{めえ}、その侍が長いのを抜きやアがつて棒組の寅の野郎をポカールと斬りやアがつて、川ん中へポンと投^{ほう}り込んだから、フウというわけだ」

爺「フウーンそれはとんだ事だね」

安「飛んだにも跳ねたにも、己^{おら}ア転がつちやツた、え、おいお爺^{とつ}

さん、初めツから怖^{こえ}え侍ならば油断をしねえが、やさしい声で若

衆や氣を附けて遣つて呉れツて、鰻屋で一本酩^つけて二分の祝儀だ、

畏りましたと云うと、金は宜^いいが書附^{でえじ}が大事だ、棚へ上げて来た

から取つて来いよ、へえツてんでお前^{めえ}往つて、これくというと

大黒屋^{でえこくや}では飛んでもねえ事をいう、大黒屋の名前^{なめえ}に障るから、

そんな物が有れば取つて置く、何んだ、へえと云つて仕方がねえ

からピヨコく歸^{けえ}つて来て、佐賀町から河岸へ廻^{まわ}つて往くと、お
いお爺^{じい}さん、その侍が鼻の先へ長いのを引っこ抜いて、ポカリと
寅の野郎を斬^きつて、川の中へ投^{ほう}り込んだから己あウンと云つて這
ツちまつたよ」

爺「怖^{こえ}かつたらうねえ」

安「それを云うんだ、怖^{こえ}え時と寒い時は酒でなければ凌^{しの}げねえか
ら幾度も飲んで来たんだ、思^{おも}え出しても身の毛立つようだ、最^{はな}初^{はな}
から胡散^{うさん}な侍だと思えば氣を附けるが、やさしく若衆や砂打場^{すなうちば}

……じゃアねえ、ナニ木場まで遣^{おまんま}つてくれ、御飯は食^くわせるよ、

へえ有難うござえやすツてんで、二分ずつの祝儀だからうめえと
思つてると、大黒屋^{でえんくや}へ紙入を忘れて来て、金は宜^いいが書附^でが大

切だえじと仰しやるから、帰けえつて来てそう云うと、お前めえ冗談えいだんいうな、
 へえと小言を云われに来たようなもんだ、詰つらねえと思つてヒョ
 ロ／＼帰つて、仙台海岸へ廻ると、おい其の侍がス／＼と長いの
 を鼻の先へ」

爺「それはもう度々たび／＼聞いたよ」

安「嘘を吐つきねえ、これからさきを知つてるか」

爺「さきは存じません」

安「それ見ろ、ポンと寅を川ほん中へ投ほうり込んだ時にやア、己おらあフ
 ーツつて這なげツちまつた、あの長えいえ永代橋えいてえを四よつン這べえに這つて向う
 まで渡つて、箱崎の鐵爺てつさんの屋や台店てみせへ飛とび込んで、一杯べえ／＼
 と云つてグ／＼と引掛ひっかけたが、錢がねえんだが馴染なじの顔だからね、

これくの災難せえなんに逢つて布団の間へ財布ええだを忘れて来て、取りに

往く事が出来ねえから明日あしたの晩まで貸しておくれというと、安さ

ん何時でも宜いいつてえから安心して飲んで、酔つて見ると気が強

くならア、何んでえべらぼうさむれえ籠棒おめえだめ侍さむれえが何んでえという訳だ、外へ出て

酒が醒めるとまた思おもえだ出して怖くなるからまた飲みくして、丁

度五度たび目だ」

爺「さぞ怖かつたろうね」

安「だからよ、それを云うんだ、酒を飲めば凌しのがアさ」

爺「そうだろうね」

という話を此方こちらで聞いていた仙太郎が重三郎に向い、

仙「えゝ重さん、妙な事があるもんだね、刀は出るぜ、おいわけえ若

衆しゅ
「

安「へえこれは何うもおやかましゅうござえやす」

仙「今聞けば飛んだ災難せえなんだったね、おゝ初々はつくしく飛んだひどいめに逢ったね」

安「へえひどいめに逢いやした、寅の野郎は川ん中へ投ほうり込まれて慙かええそう然でござえやす、嬬かアが泣くだろうと思ふと慙然でね」

仙「うん、併しかしお前めえが斬られ無ねえのがめつけもんだ」

安「へえ命の助かつただけが此方こちの儲けもんでござえやす」

仙「その侍は初はじめツから頭巾を冠かぶつてたかえ」

安「えゝ冠かんつていやした」

仙「そうか」

と云いながらいくらか金を紙へ包んで前へ差出し、

仙「これは誠に少ねえんだが縁起直しに上げるから一杯遣つておくれ」

安「これは誠に有難うござえやす、宅のお爺さん、此処においてなさる親方さんは何処の親方さんか知らねえが、わっちのような者に金を呉れるてえのは何だか危険だ」

仙「ハ、ハ、なに危険なことはねえ、大丈夫だよ、若え衆己は伊皿子台町にいる荷足の仙太だよ」

安「え、仙太親方だえ、こりやどうもお見それ申しやした、道理で一両呉れたと思つた、御免なすつて下せえやし、私は初音屋にいる安てえ者ですが、此の土地にいて親方を知らねえと云うのは

本当に外聞げえぶんの悪わるりいくれえのもので、吉原でも日本橋でも何処の川通りだつて、荷足の仙太と云やア随分名代なでえの無鉄……十二誠にその剛きつい人だと云つて誰でもお前めえさんは知つてやす、いつか五十軒で喧嘩けんかの時に、お前さんが仰向あおのけに寝て、サア殺せと仰しやツた時は誰も殴ぶてなかつたとね、仕事師手合でええが五十人許ばかり手鍵てがねを持つて来たが、打ぶてなかつたくれえだから組くみええ合あひあひの者が皆みんななそう云つて居やす、あのくれえな無法……十二誠に氣丈きぢやうな人だつてね、これはどうも誠に有難ありがたうござえやす」

仙「時に少し聞きたいが、今の侍さむれえの容なり貌かたちは何ういうのだえ」

安「袴はア穿はいて、大でえしやう小こを差して、羽織えりを着て、頭巾かぶとを冠かぶつてたから顔は分りやせん」

仙「成程頭巾を冠つてちやア顔は見えめえ」

安「だが私は縁側へ腰をかけて居たが、侍が鰻を喰う時にやア頭

巾を取つて喰いやした」

仙「違えねえ、些とは覚えてるか」

安「ちつと処じや有りやせん、あの侍の面は死んでも忘れねえ」

仙「こいつアどうも有難え……いゝ事がある、兎も角今夜は己

の処え来て泊んねえな」

安「親方の処えかえ」

仙「少し話があるんだ、御馳走するぜ、頼みてえ事も有るから一

緒に往つてくんねえな」

安「私などは宅の無えものだから、へえ有難うござえやす、じゃ

アどうか願えやす^{ねげ}」

仙「お爺さん^{とつ}、此の若え衆^{わけしゅ}さんの勘定も一緒に取つてくんな……

なに、つりはいらねえよ」

と是从から仙太郎が駕籠屋の安と重三郎の二人を連れて我家^{わがや}へ立^た帰^{ちかえ}りました。此方^{こちら}は岡本政七は翌朝早く重三郎を捜しに出ます

と、万年の橋詰に袴印籠脇差と羽織が脱ぎ捨て、あり帯が欄干に縛り附けて有りますから、これは大方重三郎が、大切なお刀を取られ、言訳なくして身を投げて死んだに相違有るまい、なさけない事である、死んだ記^{しるし}に衣類を脱ぎ捨て帯を縛り附けて置いたものだろうと、旧来奉公していた者ゆえ、主人始め家内も娘も皆心配致し、涙をこぼして捜しましたが、何うしても大切のお刀ゆえ

何うしたら宜かろうと氣を揉んで居りました。すると翌六日の夕^ゆ方に、^{うかた}稲垣小左衛門という粟田口國綱のお係りの役人が、年頭のお歸りがけと見えて、^{あさがみしも}麻上下の上へどつしりとした脊割羽織を召し、細身の大小を差して、若党草履取をつれて岡本政七の宅へ参り

「頼もう」

「どなたさま……稲垣さま」

と云うので驚いて廻り縁から奥の座敷へ通し、茶煙草盆を出し、政七も出て参り下座^{しもぎ}に坐り、慇懃^{いんぎん}に両手を突き、

政「へえ新年御目出度う存じます、旧冬はまた何かと段々お引廻しでございまして、お屋敷の方を事無^のうお勤めを致しましたのも、

ひとえ

偏に旦那さまのお蔭さまと蔭ながら申暮して居りました、当年もまた相変らずお願い申します」

きゆうろう

小「はい新年で誠に目出度い、旧臘はまた相変らず歳暮を自宅の下しもの者までへ心附けくられて、誠に有難い、また相かわらず重三郎を其の方の代としての年頭で、年玉ねんぎよくの品々かたじを忝けのうござる」

政「何う致しまして……え、まアくお天気も続いて宜しく、夜に入いつては寒いようございますが、先ずまア誠に善よい春でございます」

小「はい左様で」

と云っている処へ出てまいりましたはお雪という政七の妹いもとむ

娘^{すめ}でございます。正月の事ゆえこつてりと化粧^{おしまい}が出来、結構な着物を着て居りますから猶^{なおさら}更美しく見えます。尤^{もつと}も近辺でも評判の娘で、しとやかに遠山台^{とおやまだい}を持ってまいりまして、小左衛門の前へすえて、挨拶をいたします。

小「ハ、ア政七、これが其方^{そち}の妹か、ウーン成程^い美い器量だ、慥^{たし}か本郷辺の紀伊國屋という質両替屋とかへ縁附ける約束になつて居^おるとかいう事を、ちらりと番頭から聞いたが、嫁入盛りだの：：はいお目出度う……就^{つい}てはソノ火急な事であつて嘸^さぞ困つたらうが、昨日^{きのう}番頭が國綱のお刀を持って歸られたらうな」

政「へえ」

小「二十日正月までに拵^{こしら}える事に相成つたが、彼^かの國綱は存じて

居おるであらうが、鬼丸同作であると云うは、北條のもとめによつて國綱山城やましろうの栗田口より相州山そうしゅうの内に来りきた、時頼ときよりの為に鍛きたえたる鬼丸、其の時に二一口ふたふり打つたるを、一腰ひとこしが鬼丸にて、一腰が今御当家にある國綱なれば、どうか鬼丸作りに致せとの仰せなれば、至急の事には相成るまいのう、政七」

政「へえ、成程先達せんだつて集しゅうこ古十種と申す書物で見ましたが、一端たんかき入れを致して其の上を栗色の革にて包みまして、柄はかば糸にて巻き、目貫は金壺笠きんつぼがさに五三の桐でございまして、鰐袋もやはり栗色革、裏は浅桐絹あさぎりぎぬの切きれをつけ、紫紐は一尺九寸でございましてと存じます」

小「成程其の道とは申しながら詳しく存じて居いるのう、それに付

今一度取寄せる様にとの仰せゆえ至急取りに参つたが、是へ出してくりやれ」

政「へえ」

と云いましたが、たちまち忽にかおいろ面色がまっさお真青になり、おど／＼口も
きかれません様子。

小「何う致した政七」

政「へえ……」

小「イヤサ、早く是へ出してくれよ」

政「へ……」

小「コレ政七、昨夜重三郎はお刀を脊せお負つて歸つたか」

政「サ……左様でございます」

小「それで安心致した、それなれば早く是へ持つて参れ」

政「へい、何ともハヤ申上げようもございせんが、重三郎は余りお屠蘇を沢山に頂戴致しまして、前後も分りませんように酩酊致しましたが、お屋敷に居るうちは気が張つて居りましたから、御刀は丁稚にも持たさずに自分が脊負つて参りましたが、途中から酔いが出て頓と歩かれませんようになり、漸く佐賀町の河岸まで参ると正体なくなりまして、地びたへ坐つて仕舞い動きませんので、小者がこもの駈けて来て知らせましたから、私が直ぐにわたくし駈付けましたが、重三郎の行方は知れませんが、其傍に怪しい侍が拔身を提げて立つて居りましたを見て、小僧は驚き提灯を投り出して逃げ出しますから、私も驚き、共に逃げ帰りましたが、今朝程

万年橋の上に重三郎の衣類脇差印籠などが取捨て、ございまして、行方が知れませんか、重三郎は大切な御刀を取られて申し訳なく、万年から入水じゅすいしたものと見えます、誠に相済みません事で」

小「これは怪けしからん、これ政七、余よの品とは違い、当家伝来の御宝剣ごほうけんを失つて只相済みませんでは置かれんぞ」

政「へえ、誠にどうか致そうと存じまして、種々しゆ／＼心配致して居りまするので、此の上ともまた何どの様な詮議も致しまして、お刀を見出して、お屋敷へ持参致す心得でございますからどうか切せめて一ひとつ月もお日延ひのべが出来れば願いたいものでございます」

小「ウン：それは紛失したもので有るから日延を願つて見まいものでもないが、一月经つうちに其の國綱よが出れば宜よいが、若し出

ん時は何う致す」

政「へえ」

小「必らず出るといふ目途あてはあるまい、慥たしかに認めた処はないのだらう」

政「へえ、確しつかりした認めはございません」

小「何うも当惑致したなア……いや是は私わしが悪い、この稻垣ゆが行きとゞ届きとゞかなかったのだ」

政「いえ、何う致しまして左様でございません」

小「いや左様でない、禁酒致しおる重三郎に、祝しゆくしゆ酒とは云い

ながら屠蘇を勧めたは私わしが悪かった、又酔つておる者に大切な物ものを持もたして歸し、殊やちゆうに夜中やちゆうなり、何うも私あやまりが過あやまりだ、重三郎はお刀

を失い申訳なき為め万年橋から入水したと上へ届かみとどけをした処が……

重三郎は如何にも氣の毒な事だ……飛んだ災難であつたが、屋敷からまた其の方に何の様な御難題が掛つて来まいものでもない、それで済めば宜よいが、私は係ちゆうり中の事ゆえ何の様なお咎めがあるか、切腹仰せ付けられるか、お手討になるか、癪癖しやくへきの強い殿様だから軽くいっても追放仰せ付けられるには相違ない……これは斯う致そう、兎も角も屋敷へ歸つて私から家老までへ斯様に申し入れよう、稻垣小左衛門小屋に於て賊が忍び入つて紛失したと、私いちにん一人の越度おちどにして、貴様や重三郎へ迷惑の掛らない事にしよう、何の道しくじる稻垣、致し方はない、私が家事不取締不埒至極という厳しい御沙汰ごさたを受けて切腹仰せ付けられるも知れないが、そ

れより外に致し方はない、誠に困ったが^{よんどころ}扨ないから宜しい、其の趣^{むき}に届けるから、屋敷から何んな問合せがあつても、お刀はまだ^{こちら}此方へお下げにはならんと云い張れ、そうせんとまた宅^{うち}に障るばかりでなく、親の代から年来の出入も差止められたら難儀をするだろうから、左様心得ろ」

と云い渡され、政七は氣の毒が一杯にて漸く顔を上げ、政「貴方さまお一人へ御迷惑をかけましては済みません」
小「掛けても致し方がない、それまでの事だ、マア宜^よい、年来馴染であつたが、これがもう手前^{てまい}の顔の見納めになるかも知れん：どうも仕方がないから直ぐに帰りましょう」

と心ある侍ゆえ少しも荒い小言も云わず、覺悟を極^{きわ}めて屋敷へ

歸りまして、是からお届けになるといふ、一寸^{ちよつと}一息吐きます。

六

引続きます、粟田口國綱の事からして主人の難儀になると思い、入水致して相果てようとした重三郎を仙太郎が助け、昇夫^{かごや}の安吉を連れまして宅へ歸り、其の晩二人を泊めました、仙太郎の女房^{かじ}お梶には何事だか頓と分りません。翌朝^{よくあさ}になりますと、昇夫の安さんは知らん処^{ところ}へ泊つてきまりが悪いから早く起き、寢衣^{ねまき}のまゝで水を汲んだり表を掃いたり、掃除の手伝を致して居ります。梶「ちよいとあにさん、昨宵^{ゆうべ}泊った人は何^なに」

仙「あれか、一人は深川の万年町の刀屋の番頭さんだ」

梶「あの、もう一人の裸体はだかで働いてる人は何に」

仙「あれは辻駕籠の安という者だ」

梶「あの人は水を汲んだり板の間を拭いたり、キョト／＼間の悪
 そうな顔をして働いてるよ……申し安さんとか、もう宜いいから足
 を洗つて此方こつちへお上んなさいなねえ」

仙「おい安さん此方へ来ねえ」

と云われ、安吉はおず／＼上つて参りましたが、窮屈きうくつそうに頭
 ばかり撫でながら、

安「こりやア誠にどうも姐あねさんでござえやすか、碌々御挨拶ごええさつも
 致しやせんで、へえ昨夜ゆうべは喰くえ酔よつてやしたから、何う云うわけ

で此方^{こちら}へ泊ったか分りやせん、目が醒めて見るときまりが悪くてね、へえ何か乱暴でもやりやアしねえかと心配^{しんぺえ}でござえやす」
梶「なにも済まない事は有りません、甲斐／＼しく骨惜みをしないで宜く働いておくれで、お気の毒だから良人^{うち}のに聞いてた処^{ところ}で、まアお休みなさいよ」

安「へえ有難うございやす」

仙「番頭^{ばんつ}さん、重助^{じゅうすけ}さん……じやアねえ重三郎さんかえ、此^こ方^{うち}へおいでよく」

重「へえ」

と立つて参り、仙太郎の前へ坐る。

仙「お梶、此の人がソノ刀屋の番頭^{ばんつ}さんの重さんと云うのだ」

梶「おやそうかい、お初にお目にかゝります、昨夜^{ゆうべ}おいでなすつて碌々御挨拶を致しませんで、何^なにもお構い申しません、何んだか酷^{ひど}く鬱^{ふさ}いで、隅^{ひっこ}の方へ引込んで考えてばかり居なさるが、何ういう訳で」

仙「これには種々^{いろいろ}深い訳のある事だ、重さんマア心配^{しんぺえ}しずに此方^{こちら}へおいでよ」

重「へい、昨夜^{ゆうべ}は出ましてまだ碌々御挨拶も致しません、此の度^{たび}はまた何ともお礼の申そうようはございませんが、親方のお言葉に甘えて飛^{とん}だ御厄介に相成り、誠に有難う存じます」

仙「そんなに丁寧にしちやアいけねえ、ぞんぜえ者^{もん}だから……安兄^い此処^{こけ}え来ねえ、此の人がソノ、万年町の岡本という刀屋^ばの番

頭^{んづ}さんで此の芝のお出入り屋敷へ……重さん何とかいう屋敷だつ
け、ウン金森さ、其の屋敷へ年始に往つた処が、歸^{けえ}りにお誂^{あつら}えの
刀^さが下^{さが}つたのだ、それが先祖から伝わるどころの滅法に好^いい物な
んだ……すると、此の人は酒嗜^{さけず}きで、酒を禁^たされてる処へ無理に
屠蘇を勧められて、一升^{ばか}許りなぐつたのだ、屠蘇だつて沢山飲^{たんと}め
ば酔うからね、酷く酔つちまつて、佐賀町川岸で動けねえ処を怪
しい侍にその刀をふんだくられちまつて、宅^{うち}へ歸^{けえ}る事も出来ず、
主人や親に濟まず、お屋敷へも言訳が無^ねえからつて、万年橋の欄
干へ帶を掛けて首を縊^くろうとする処を、己^{おめ}が思^{おも}え掛けなく助けて
船へ入れ、お連れ申して來たのだ」
安「そりやア初^{はつ}々しく飛んだ御災難^{ごせえなん}でお氣の毒様な」

仙「安さん其の刀を盗んだ侍は、昨夜のう己も佐賀町河岸で見たが、お前がめえソノ新橋から乗せたという頭巾を冠った侍だ」

安「えゝ、それは驚きやしたねえどうも、ソノ寅の野郎をポカリと斬ったのも其の侍だが、侍と聞くと身の毛がよだつようだ、フーン成程」

仙「己も番頭ばんつさんを助けて何うしたら好よかろうと云うと、その取られた刀が出なければ何の道言訳がねえから死ぬと云うので、己も困ったが、一旦助けたからにやア何うかして其の刀の所在ありかを詮議をして、刀を此の人へ戻して遣り、万年町の店たなへ歸して遣りたいたので、段々其の刀の事を聞いて見れば、大層名高なだけえものだから、何処どこへ売つても直じきに知れちまい、世の中に少すくえものだから、当分

質に置くことも、売ることも外へ預けることも出来ねえ品で、預けたところが直に足が附くから、己の思うには当分は自分の差料にするより外に仕様がねえ、そこでその侍の形恰好は己が知ってるが、安さん面ア知ってるだろうな」

安「知ってるぐれえじゃア有りやせん、酔ってゝも忘れやせん」

仙「お前が^{めえ}見知人よ、^{みしりにん}姿形は己が知ってるし、刀の目利は此の

番頭さんが自分でなくしたのだから知ってるから三人で人ざかし

い処を歩いて、お前は侍の面を知ってるんだから、あの侍だと教

えてくれゝば、己は咬り^{かぶ}ついても差してる刀をふんだくるつもり

だ、もし長えの^{なげ}を引^{ひっ}こ抜きやアがれば、自身番へ引摺^{ひきず}つて往く、

また頭巾を冠^こつてやアがれば、此方^{こつち}から突^{つき}当^{あた}つて、なんでえ太^{ふて}

え奴だと喧嘩を吹っ掛けて、其の侍と喰い合つても刀をふんどく
 って番頭さんに渡して遣れば、後で死に合うとも何うしても宜い
 のだから、番頭さんもいなせな拵えでゴテ／＼をきめて、鼻ツ冠
 りで人ざかしい処へ刀の詮議に歩くが好い、安さんは日に幾らに
 なるか知らねえが、日当は己が払うから、駕籠を休んで己と一
 緒に刀の詮議に往つてくんねえな」

安「こりやア驚いた、そいつは御免なせえ、いけやせん」

仙「いけねえッてお前が喧嘩アするんじやアねえ、己がするのだ」

安「ですがね親方の乱暴……ナニ強いのは知ってますが、侍に此
 方から突当るんだから親方怪我アしやすぜ」

仙「大丈夫だよ、性来不死身だから斬られても大丈夫だよ」

安「ですがね私は不死身じやアねえから」

仙「教おせえてさえくれりやアお前は逃めえげてても好いいんだ」

安「そう旨く逃げられりやア好いが、昨夜ゆうべで覚おえが有びりやす、悔つくりして、どんと腰が抜けちまつて、あの長ながえ永代橋ええてえを這い続けに這つて逃げたくれえだからね」

仙「己が斯う遣つて力を入れるのは、この人の命が助かる許りじやアねえ、主人や屋敷の役人まで皆みんな都合が宜くなる事だ、己だつて見ず知らずのもんだ、みんな人の為だぜいやだと云えば了簡りょうかんが有るぞ」

安「なに出掛けますく」

と仕方がないから請うけあ合いました。番頭重三郎は氣の毒に思いま

すから、

重「申し親方、何卒^{どうぞ}そればかりは勘忍して下さい」

と云つたが聞きません。女房も心配だから小声で、

梶「ちよいとく何ういう訳なんだえ」

仙「なにイもつと大きな声して云え」

梶「お前まア宜く考えて御覧よ、お父^{とつ}さんが死ぬ時に何と云つた

え、短慮功をなさずと云われて、彼^あれからはお前も懲りて喧嘩の

けの字もしないように成つたが、人の為と云つたツて今聞けば侍

へ此方^{こつち}から突当つて喧嘩アするとお云いだが、そんな事をしては

死んだお父さんの位牌に済むまい」

仙「生意気なことをいうな、己が酔興でするんじゃアねえ、此の

人の命が助かる人の為にするんだ」

重「どうぞ親方姐さん^{ねえ}だッて御心配でございますから御尤もで」

仙「そんな事はいけねえ、云い出しちやア聞かねえ」

と何うしても聞かず、仕方が無いから重三郎も安吉も仙太郎の跡に従^ついて歩きましたが、重三郎は着つけない襦^{どてら}袍を着、股引を穿^はき、手拭を鼻ツ冠りにして仙太郎の跡から従いて歩きますが、

心配な事で、なれども更に似た侍も見当らず、空しく尋ねて歩いて居りました。お話二つになりました、栗田口國綱の刀紛^{ふんじつ}失致

しましてから重三郎の行方知れず、主人も心配致して居りまする処へ稻垣小左衛門が参りましたが、重三郎の罪を身に引受け、別に厳しゆう咎めもなく屋敷へ歸られました事で、実に岡本政七方

では一通りの心配ではございません。また此の重三郎の親父は梨子売を致す重助と申す者で、川崎在の羽根田村に身貧に暮して居りまするが、去年の暮から年の故か致して寒氣に中る、疝氣が起つたと見えまして寝て居ります。丁度正月の七草の事でございませ、独身者ゆえ看病人も有りませんが、近所の人が来ては看病をしてくれますが、万事行届かん勝でございませ、なれども田舎氣質のものは親切でございませゆえ、村方の者が代る／＼来ては世話をいたしてくれます。

重「申しお婆アさん、もう宜いから歸つておくんなせえ、もう大えげえ概で宜いよ」

婆「なに心配しねえでも宜い、私ア歸つてまた後から金右衛門しんぺえ

どんとこの婆アさまが来ると云ったが、お前も老る年じやアあるし、大切にでえじしなけんばなんねえからね」

重「はい有難う、こう遣つて代りく御親切にマア皆様が来ちやア、やれこれ云つておくんなさるので、はい、誠に有難うござえます、私も定命わし じようみようより余程よつほど生き延びて居りますから、もう死んでも惜しくねえ身体ですが、只た一人の忤たつがマア堅えかてもんでござえまして、万年町のお店たなへ奉公に遣つて、永く勤めて居ります、来年れえねん ねんは年が明けるから、店を出して下さると御主人さまが仰しやるから、そればかりたのし楽しみにねお婆さん、私も重え梨子おもを担かついで其の日を送りますが、ナニまだ死ぬ了簡もねえけれど、斯うやって年イ老とつて煩らうとねえ心こころぼせ細えが、定命より十五年も

生延びてるから、何時死んでも好いいいようなものゝ、若しもの事があつて死に目に逢わねえと忤あへが後で愚痴おめイ出ようかと思えますのさ、イヤハヤもういけませんかね、ちよつくらお暇ひまを戴きに與よ吉どんを頼んで遣つたが、まだ歸けらねえが、不断とは違い正月はお忙しいから、忤にお暇を下されば好いが、下さるめえとは思うが、あゝ云う行届いた旦那さまゆえ、親の病氣と云つて遣つたんだからお暇を下さるかも知れねえのさ」

婆「お前めえんとこの息子どんはおとなしくつて仕合せしやわだが、おらの宅うちの新太しんたの野郎なんざア、ハア放蕩どらべえぶつて、川崎しゆくべえ往つてハア三日も四日も宅へ歸らねえで困るが、お前とこん処の息子どんは本当にやさしげで仕合せだよ」

重「ハア誠におとなしくして居ります、去年の暮などは忙しい中を態々来てくれて、私に小遣を一両呉れましたが、それも皆な御主人さまのお蔭だから、御主人さまの御恩を忘れねえで奉公を大切にしろと云いつけて遣りましたよ、もう使は帰りそうなものだ」

婆「いまに帰るべえ」

と話をして居る処へ歸つて来たのは、此の村の人で、年齢二十二三になる男で、尻を端折り、寒さをも厭わずスタく歸つて参り

男「爺イさま案じて居さしツたろう、大きに遅くなつただアよ、店へ往った処が重さんは一昨日の晩出たきり歸らねえてえ、何処

え往ったか知んねえかと聞いて見たが、何処え往ったかいまがに
 知んねえから、方々捜し廻つてゐるが、解らねえから今日宅のお内
 儀さまが川崎の大師様へお参りながら此方へ寄るツてつたから、
 いまに來れば分るだろう」

重「はい大きに有難う、誠に遠ツ処に御苦労さま、婆アさま腹ア
 空つたろう、何もないがお飯ア喰つて往くが宜い」

婆「己ア歸るからお前大切に申しなせえよ」

重「お婆アさん誠に有難う、大きに御苦労さま、癒るとお礼をし
 ますよ」

婆「なにそんな事を心配しなえでも宜うがアす、また後に來る
 だろう」

と出て行^ゆきました。

重「親切に宜くまア毎^{めえにち}日く来ておくんなさる、有難いことだ、

それに付けて重三郎が出たぎり帰^{けえ}らねえと云うのは、道楽でも始

めやしねえか、そんな奴ではねえが、なにしろお内儀さんが入ら

つしやるくれえでは、先さまでも能^{よく}々案じなさる事が有つて相

談に入らつしやるんだろうが、何ういう失^{しくじり}策をしたか知らん、

併^{しか}しおいでなすつても己^{あんべえ}が塩梅^{わり}が悪いから、お茶も上げる事は

出来ねえから、水気は抜けてるが、へえしでもむいて上げよう」

と云いながらよう／＼床から這い下りてへえしという困い梨の

這入った籠をそばへ引寄せる途端に表へ下りたのは、其の頃の山

駕籠でございます。駕籠の脇に連添う一人の老女は、お高祖頭巾^{こそずきん}

を冠り、ふツくりと綿の這入りし深川鼠三ツ紋の羽織に、藍あいの子
 もち縞りようづまの小袖の両り 襟まを高く取つて長襦袢を出し、其の頃ゆえ
 麻裏草履を結ゆわい附けに致しまして、鼠甲斐絹ねずみがいきの女脚半おんなきやはんをかけ
 る世の中で、当たゞいま今ならば新橋の停車場すてえしよんからピーと云えば直じきに
 川崎まで往いかれますが、其の頃は誠に不都合な世の中で、川崎ま
 で往ゆくの、女の足では一晚泊りでございます。小僧さんが風呂
 敷包みを脊負くたびれあしつて草臥足あとで後から参りますと、駕籠から出たの
 は娘でございます。これもお高祖頭巾を冠り縞縮緬ひつかのはでやかな
 小袖に、上には寒さ防よけに是も綿入羽織を引掛ひつかけて居ります。
 母「お前何うした、草臥れやしないかい」

娘「いゝえ、お母つかさんこそお草臥れでございますよう、あなたは

お寒かろうと存じまして、お代り申しましよう云つても、お代りなさらないで、歩いて入つしやいましたから」

母「いえ、わたしは歩くから寒くはないが、お前は駕籠の中だからさぞ寒かろう」

と云いながら後^{うしろ}を振かえり、

母「常吉や重助の宅は此処^{うち}かえ」

小「へえ私^{わたくし}は一遍お使いに参りましたから存じて居りますが、此処でございます、誠に汚ない宅で」

母「これ、そんな事を云うもんじやないよ、御免なさい、重助さんの宅は此方^{こちら}かえ」

重「はい、どうぞ此方^{こちら}へ、お跡は私^{わし}が閉めますから、お閉め

なさらなくても宜しゅうございます、戸がガタピシ致しますから、さア此方こつちへどうぞ、マア宜くこんな汚い処へ入らして下さいます、おや／＼お嬢さんも御一緒にござえますか、どうぞ此方こつちへ、お／＼小僧さんもか、どうか其処へ腰をお掛けなすつて、さア／＼此方こつちへ」

と上座かみざへ据え、慇懃いんぎんに両手を突き、

重「まことに御無沙汰を致しましてござえます、私わたくしもたいした事でもござえませんが、去年の暮の押詰りに寒さを引込みひっこまして、少し疝氣おこが発つて腰が痠りますので、商売しょうばいにも出られませんで引込んで居りますので、春はお忙しかろうと存じますが、塩あんべ梅えの悪いわりので彼あれに逢いたいと存じまして、重三郎を少しの間お

暇を願いに遣りました処、一昨日^{おととい}出たぎり帰らねえとの御沙汰で
悔り致しました、ヒヨツとして道樂でも始めてお店を明けるよう
な事が有りますりやア私^{わし}が合点致しません、何だつて十二の時か
ら大恩を受けた御主人に御苦勞をかけるような事が有りますりや
ア、私^{わし}は只ア置かねえと、そう申して居りましたので、おやまだ
御挨拶も致しませんで、まず明けましてお目出度う存じます、旧
冬は何^{なにかと}角有難う存じます、私^{わし}もまア一寸^{ちよつと}ねお歳暮^{せえぼ}に上ろうと
存じて居りますうちに煩い付きまして、毎年二十八日に上るんで
ございますが、お歳暮にも御年頭にも出られません、礼が欠けま
すと何だか気になります、折角お出でなすつてもお茶も上げられ
ませんような訳で」

母「いえもう構っておくれでない、お前も案じて居るだろうが、お前の処から人が来たので、政七も心配してね、どうぞ往って話をしなければならぬが、人頼みの口上ではわからない事、他の者は出されないと云うので、私が来たのだが、重三郎は一昨日の晩出たぎり帰らないのは何うした事かと思つて、私も心配して諸方を尋ねたが、居ないのだが、重三郎は主人の代に毎年芝の金森様のお屋敷へ年始に往くのだが、一昨日も其のお屋敷へ往くのもお誂えのお刀を下拵えをして御覧に入れたのが、またお下げになつたのを、其のお刀を持ったなり帰らないから、忤も心配してゐると、此の常吉が遅く歸つて来て、小僧の云うには、お屠蘇を戴き過して動けないように酔つて仕舞い、常吉の手に合わないか

ら、仕方なしに重三郎を佐賀町河岸へ置いたなりに宅へ知せに來たと云うから、政七も驚いて駈けて往くと、其処に重三郎は居なくつて、怪しい侍が頭巾を冠つて刀を抜いて立つて居たから、驚いて逃げ歸つたような訳で、すると翌朝万年橋の上に重三郎の袴や帶脇差と印籠が捨てゝ有つたから、重三郎はその侍に大切な御刀を取られ、言い訳なさに万年橋へ目標を残して身を投げて死んだろうかと云うのは、此方の鑑定だよ」

重「へえ、あの野郎……あの野郎、誠に申もうしわけ訳もございません、何んとうも飛んだ事になりました……重三郎の死骸は何処へ上りましたか」

七

母「死骸はまだ知れないから、屹度身きつとを投げて死んだと極きまった訳ではないけれども、何処を捜しても行方の知れない処を見れば、多分身を投げたろうという鑒定だが、お前が聞いたら嘸恟さざつくりするだろうと思うと、誠に云うのもお気の毒だけれども、云わない事は分らないが、お係りのお役人さまも其のお刀ゆえに御切腹になるかも知れない程の事、また私の方へも何どんな難題がかゝつて来るか知れないから、重三じゅうざが死んでも申し訳の立つ訳ではないのだから、実に宅うちは転ひつくり覆かえるような騒ぎで、それに丁度政七も重三郎も厄年だから、川崎の大師さまへ参つて護摩をあげて厄除やくよけ

をし、どうぞ一刻も早く重三の行方の知れるようにお願い申そう
と思つて、私が娘を連れて大師さまへお参りをし、お籤みくじを戴きな
がら来て、お前に知らせる訳なんだよ」

重「はい／＼そんな事とは些ちつとも存じませんで、お店もお忙が
しかろうけれども、私も老年わたしとしよりのことだから、ポツクリ死ぬよう
な事が有りますと、あの野郎が後で死目しにめに会わなかつたと愚痴で
も出ちやアならねえと思ひまして、虫が知らせたのか急に会いた
くなりしましたから、お忙がしい処とは存じながら、お暇を取りに
使いを頼んで遣りましたので、お内儀かみさん毎度申しまする通り、
彼あれが四才よっつの時に母親おふくろが亡なくになりましたが、乳呑ちのみ盛りでございま
すから、私わたくしが梨を両方の籠へ入れるのを、一方の籠の梨を少し減へら

しまして、それへ彼奴あいつを載せ、悴と梨とを私わたくしがこう担かついで、乳を
 貰いながら商売を致して、何うやら斯うやら十二の年齢としまで丹誠
 して、お店へ奉公に遣りましても、種いろく々御丹誠下さいましたか
 ら、段々わたしと私などより物も覚え、来年は暖簾のれんを分けてやると仰し
 やつたと申しますから、私わたくしもそれを樂たのみに毎日重い梨を担いで歩
 き、六十の坂を越しながら斯うやつてわく／＼して居りまするの
 は、仮令たと何んな死ぬ程の事が有つても、これ／＼の訳で死な／＼け
 ればならないと一ひと言ぐらい相談に参つても宜いいのでございます、
 親を残して先立ちます其の上、御主人様へ御心配をかけ、自分は
 死んでも追付おツかないような事をして、姿の見えないような事を致
 しましたは、誠に親不孝な奴で、皆さまへも何ともハヤ申そうよ

うのない不忠でございまして相済みません、今朝も七草粥を祝おうと存じますとピシリと箸が折れましたゆえ氣にかけて居りますと、隣の婆アさんが箸は木で拵えたものだから、折れることも有ろうと申して、祝し直してくれましたが、矢張それが前表やっぱり ぜんぴようで虫が知らせたのでございましょう」

内「私も小さい時分ちいから丹誠して、忤と同じように生い立ったものゆえ、何んな事どが有ってもお内儀さん何うしたら宜かろうと云うのも、私に云い難い事にくは雪に云いさえすれば相談になるものを、併ししか彼はあれお酒をたべるとどうも御酒ごしゆの上が悪いが、不斷は猫のようなおとなしい男だから、思案に余つて軽はずみな事でもしたかと思うと可愛相だから、私も娘も実に心配して居るのだよ」

重「はいく^{わたくし}私は他に子はございせんから、若し彼の^あ野郎が身でも投げて死んでしまえば定命より十五年も生き延びた私故、直ぐに身でも投げるか首でも縊^くつて死ぬより外に仕方はございせん」

内「あれサ、そんな事を云つては困るよ、重三は死んだか生きたか分らない内に、お前が軽はずみな事でもした^{あと}後へ、ひよつくり重三が帰つて来て御覧、それこそ却^{かえ}つて嘆きを掛けるようなものだよ、時節を待つておいで、私も出入の者に頼んで川筋を捜さして見るから、余り心配して身体に障つちやアいけないよ」

重「はいく、自分の申す事ばかり申しまして済みません、旦那様へお目に懸つてお詫びごと致しませんが、あなたさまから宜

しく仰しやって下さいまし」

内「私も永く話をして居たいが、気が急^せくし、まだ是から川崎の大師さまへお参りに往^いくのが遅くなるから帰りましょう、遅くなつたら新田屋へ泊^{にったや}つて帰ろうと思います、お前身体を大^{だいじ}切におしよ、重三の事も案じずにおいで、出入の者へ頼^{めん}んで置いたから、多分死ぬような事も有るまいと思うよ、大方面^{めんぱく}目ないので何処かへ身を匿^{かく}して居るかも知れないよ」

雪「重三が帰つてさえ来れば私もお母さんと共々にお兄^{あに}いさまの方は願つてお詫^わびごとをして上げるから、余り氣を揉まないでおいでよ」

重「はい誠に有難う存じます、実に何ともお詫の申^{よう}そう様もござ

いません、何うぞあなた……左様でございますか、お歸りで、誠に何もお愛想もございませんで」

と云いながら梨の籠を引よせて、^{ひき}

重「これでも剥^むいて上げましょうと存じましたが、私^{わたくし}のような汚い手で剥くのは何でございますから、小僧さん是をね、お土産にお持ちなすって下さいませんか」

内「おゝゝ有難う、折角だからお貰い申します、沢山は要らないがお珍らしいから少し貰つて参りましょう」

重「かこいゆえ味はわるうございましょうが、素性^{すじ}の宜^よいのでございますから、小僧さんお前さんは重うございましょうが、持つて往つて下さいまし、お前さんにも二個^{ふたつ}上げますから」

小「これは有難う、歩くと喉が渇くから袂たもとへ入れて咬かじりながら往きます、この風呂敷は大きいから大丈夫、宜うございます」
内「じゃアお前氣を付けておいで、駕籠やさん、どうぞお頼み申しますよ」

雪「お母さま少しお代り遊ばせな」

母「私は歩きたいから歩いて往ゆくが、おまえ寒くはないかえ、海う端みばただから風がピュー／＼吹くから、宜いいかえ」

と云いながら重助に向い、

母「左様なら、じゃアお前どうぞ今云った通り身体を大だい切じにしなければならないよ」

重「はい有難う存じます、どうぞ旦那さまへ宜しく仰しやって下

さいまし、お嬢さま御機嫌宜しゅう、若い衆さん^{しゅ}氣を附けて下さい、小僧さん御苦労さま」

小「へい、お辞儀をしようとして屈む^{こむ}と梨が転がり出しますから頭を下げませんが、ちゃんと心の内でお辞儀をして居ります」

内「そんな事を云うじゃアないよ」

と云いながら出て行くのを、重助は上り端^{あがはな}まで這い出して見送

る。昇夫^{かこや}はトツトと急いで参る。母親と小僧は後^{あと}から心を附けて、

すたくくと羽根田の弁天の方へ参りますると駕籠を見失いました。

小「駕籠が見えなくなりましたよ」

内「見えなくなる訳はないが何処へ往つたろう」

小「あの昇夫はいけない奴だと思ひます、全体宅^{うち}から連れて来れ

ば宜かつたんですが大森から乗ったもんですからいけないんです、
悪口計りばかきいて居ましたよ、皆みんな一緒に駕籠へ乗ってくれ、ば宜
いに、女や小僧の足と附合つて一緒に歩くんだから本当に担にくぎ難
くツていけねえ、それも祝儀でも沢山呉れ、ば宜いが呉れねえツ
て忌いやな奴です、人の悪そうな奴でしたよ」
母「宜いから急ぎなよ、羽根田の弁天さまの武蔵屋むさしやに居るに違
いから、先へ立つて急いで往いきなよ」
小「へい宜しゅうございます」

と小僧は梨を脊負つたなり駈けて参ります。突当りは海で、
一方は磯いそ馴なれ松まつの林の堂、手前に武蔵屋と云うちよつと小料理
を致す家が有ります。正月は大師さまへのお参りは有りません

から客を致しませんので、表はピタリ障子が閉たつて居りまする、
処へ小僧が参り、

小「御免なさい、真まっぴら平御免下さい」

女房「はい蛤を上げますかえ」

小「なに、あの、駕籠へ乗った嬢さんが此方こつちへ来やアしませんか」

女房「今においてなさいましょうからマアお掛けなせえましょ、
蛤を上げますかえ」

小「蛤などは何うでも宜いいが、お高祖頭巾を冠かぶつて羽織を着たお
嬢さんが来やアしないか」

女房「まアだおいでなせえませんが、まア明けて一服お吸いなせ
えましょ、蛤を上げますかえ」

小「このお内儀さんは蛤とつに取附とつかれて居るか知ら」

母「此処へ来ないたつて一筋道じゃアないか」

小「だからへんてこらいな昇夫だと云うのです、お嬢様さんを何処どこかへ連れて往いきアしませんか」

母「まさか道を間違える事も有るまい」

と云いながらスツと中へ這入り、

母「お茶を一杯おくれ」

女房「蛤を上げますかえ」

小「私わたくしが来ると蛤々ツてえますが、可笑おかしな内儀さんだ」

母「蛤も御酒もようございます、何も喫たべたくはないが、私は駈駈けて来たので恐ろしく草臥れたよ、したが大森の山本で誂誂えてく

れたのだから、まさかに間違いは有るまいが、草臥足ゆえお茶でも呑んで待つて居よう、今に来るだろう」

と云つてると、表はピツタリ障子が閉たつて居りまするが、障子越きこに聞える一節切ひとよぎりで、只今は流行はやらんですが、其の頃は大層流行致しましたもので、既に日光様のお吹きなさいましたのをまむちと申し、里見義弘さとみよしひろの吹きましたるを嵐山と名付け、一休禪師の所持を紫と申し、文屋康秀ぶんやのやすひでの持ちましたる一節切を山風と申します、其の頃は大きいに流行りましたが、田舎に参りまして一節切を吹くのは稀で、其の音古雅ねにして、上手な人が吹きますと修行者じゃとは思われませんような音色でございます。

八

母「これ常吉や、あの修行者に私は手の内を上げましようよ」

女房「通つてお呉んなせえよ、銭は出ないよ」

母「いえ私が上げますから」

と云いながらお捻ひねりを拵こしらえて小僧に渡す、小僧はこれを持って

参り、障子を明けると鼠無地の道みちゆきぶり行振なりのようなものを着て、下

は木綿つむぎか紬つむぎか分りませんが、矢張やっぱり鼠無地の小袖でございます、

端はしより折はしよりを高く取つて木剣ぼくけん作つくの小脇差ふしを差し、二十四節ふしの深編

笠がさを冠かぶり、合切がつさい囊ぶくろを斜はすに掛け、鼠の脚半に白足袋に草鞋で、

腰こしに大きな包つみを巻まき附つけて居ります、極く人柄よの好ない服なり装なりの拵なりえ、

品格のよろしい修行者でございます。

母「何うぞ其処から上げておくれ」

小「へえ、お修行を上げますよ」

とお捻りを手に渡すと、修行者は手に報謝ほうしやを受けながら、笠

の内から暫く覗いて居りましたが、お捻りを懷に入れて編笠を脱ぎ、右手めてに提げながらズツと中へ這入つて来たのを見て驚きまし

たというは、此の人は金森家で四百五十石頂戴致した稻垣小左衛門の嫡子小三郎こさぶろうと云うもので、とつて二十三歳、色白くして鼻

筋通り、口元の締つた、眼のきりツとした立派な人ですが、服装なりが變つて居りますから岡本の内儀は肝を潰して、

内「誠に思い掛けない、何うして、斯ういう処でお目にかゝろう

とは存じませんでした、何うもお見掛け申したとは思いましたが、貴方さまとは気が付きませんでした」

小「私^{わし}もおまえが此処に居ようとは思わなかった、一昨日^{おととい}重三が

お屋敷へ参り、災難とは云いながら誠にお気の毒な事に相成つた

から、早速右の次第^{かみ}を上へお届けをした処が、家事不取締り以て

の外と云う厳しい御沙汰^{ごさた}で、父親^{おやじ}は百日の間謹慎^{つゝしみ}を仰付けられ、

百日間に國綱のお刀の出ん時には父は切腹仰付けられるか、追放

仰付けられるか知れん、それゆえに重役渡邊^{わたなべ}外記^{げき}と相談のうえ、

実は少々心当りの事も有つて、美濃の群^{ぐん}上^{じょう}へお刀を捜しに参

るのだが、私は常にこの羽根田の弁天を信心致すからこれへ参つ

て、刀詮議のため今晚は此の弁天堂へ通夜^{つや}をして、祈念を致す心

得で参つたが、これへ来ると図らずお前に逢つたが、誠に思ひがけないことで」

内「どうも重三郎の不調法からあなた方さまへとんだ御苦勞を掛けまして、立派な御方さまが修行者のお服装に成つて遠国へ往かッしやる事になりましたのも、皆な彼が不調法からでございませ、私も実は重三郎の親が此の羽根田に梨売をして居りますから、それへ重三郎のことを知らせる心得で、政七も厄年でございませう、ら、厄除に川崎の大師へ参詣ながら参りましたのでございませうが、娘を駕籠へ乗せて連れて参りましたが、昇夫が何処へ担いで参りましたか見失いましたので、今に参ろうかと存じまして此処に待受けて居りますので」

小「ふーむ、娘を乗せた駕籠を、羽根田から川崎へ渡るわたしぐち 渡 口

より北に当る梨畑の下で一寸見掛けたが、お前の娘の乗った山
駕籠には、上に百合形更紗ゆりがたさらさの派出な模様の風呂敷包はでが結ゆわい附けて
は無かったか、駕籠の中には頭巾を冠った婦人が一人居おる様子で
あったが、顔は分らなかった」

内「あれまア、それでございます、渡の方へ参りましたか」

小僧「だから彼はあれいけないと云うので、危けんのん険な奴ですよ、強ねだり

請言ごとばかり云ってましたから、お嬢さんが勾かどわか引されるといけ
ませんぜ」

小「お前は川崎の大師へ参詣して宿屋は何処へ泊る積りだ」

内「はい、新田屋でございます」

小「それでは新田屋の方から名主へ掛り、手を以て尋ねれば知れん事も有るまい、私も又見当ることが有ったら新田屋まで送り届けるから急いで往くが宜い」

内「はい、有難う存じます、種々お話もしとうございますが、娘のことも心に掛りますから御免を蒙りまする、常吉や、さア急いで往きな」

常吉「こんな時に梨なぞをくれるから重たくつて駄られやアしません」

と云いながら二人とも一生懸命に駄けて参りました。するうちに日は段々と暮れかゝつて参りますると、田舎の人は頑固でございますから、

女房「お氣の毒でござえますが、困りますから外へ出て往つておくんなせえましよ」

小「大きにお邪魔を致した大分だいぶん早く暮れて来ましたな、宜しい／＼今出ますよ、決してお邪魔は致しません」

と云いながら其処を立ち出で弁天堂へ参りまして、包みをおろ下し、賽錢を上げ、頻しきりに心の内に弁天を祈念して、何卒粟田口國綱なにとぞの刀一刻も早く手に入りまして、親父の百日間の謹しみの速すみかに免ゆれるように、弁才天女の御利益を以て粟田口國綱の行方の分るように守らせたびたまえ。と頻りに弁天を念じて居ります内に、日はトツプリと暮れ切りました。あゝ今夜は此の弁天堂へ通夜をして、夜が明けたれば出立しようと思得て居ると、どう／＼ツと

松ヶ枝に中あたりまする風音かざおと、どぷりく〜という春の海では有りま
すけれども、岸へ打付ける海音うみおと高く、時はまだ若春わかばるのことで、
人ツ子一人通りません。すると裏手の松林の中で、

「ヒー人殺し」

という金切声、何うも女の声のようだが、人殺しと聞いては捨
てゝ置かれんことだと云うので、荷物を其処へ置いて木剣作りの
小脇差を帯さしたなりで、つかく〜と出て来て見ると、文身ほりものだら
けのでツぷりと肥ふとった奴が、腰の処へ襦袢ゆうはん様なものを巻き付け、
一人は痩せこけては居るが骨太な奴と二人で、一人の娘を松の根
株へ押え付け、

甲「娘ねえさん泣いても騒いでも仕様はねえ、此の浜には船一艘ぺい繋い

で居ようじやなし、人ツ子一人通りやアしねえ、なにを泣くのだ、
ぐずぐずしやアがると殺してしまうぞ、さ命が惜くば己つちのい
う事を聞け」

乙「こゝの名物□□を賞翫しようか、ギヤア／＼泣いても仕様が
ねえ」

と云いながら一人が娘の□□□□り、既に□□めにかゝる様
子を見て、小三郎は驚き、いきなり飛かゝつて、娘の上に乗し掛
つてゐる奴の禪の結び目と領首を取捕まえて後の方へ投ると、
松の樹へ打附けられ、脊筋が痛いからくの字なりになつて尻餅を
搗き、腰を撫つて居ります。一人が

「おや」

と見る所を草鞋穿わらしばきの足を上げてドンと腮あごを蹴ったから

「アッ」

と云いさま後うしろへひツくりかえる。

乙「こん畜生ちきしょう、やい何処どこから出やアがツた、ヤア安やす、起おきろよ、

やい、手前てめえ何処から出やアがツた此ん畜生」

小「不届至極の奴だ、軟弱かよわい娘を斯様な淋さみしい処へ連れて参り、

辱めはづかしようと致かどす勾引わかしだな、許し難い奴なれども修行の身の上だか

ら何事も神仏に免じて許して遣る、殺しても宜よい奴だが其の儘許

して遣るから、さつさと往ゆけ」

甲「おや此ん畜生、生意気な事を云やアがる、出し抜けに出やア

がッて何なんだろう」

乙「先刻さつき羽根田の商人あきんどや家の前めえで笛を吹いてた乞食だ、生意気な

此の野郎殴れ」

と原文はらぶんに三島安みしまやすという東海道喰い詰めいきづめの奴で、息杖いきづえを取

って打って掛ったが、打たれるような人じゃア有りません、真影

流おくぎの奥儀きわを極めた小三郎なれば、少しも騒がず左右から打込んで

来る息杖の下を潜くぐりながら、木剣作りの小脇差を引抜いて刀背みねう打

ちに一人の肩口をしたゝかに打つ、打たれて一人は斬られたかと

心得、ドツと前へのめるようにして逃出す、これを見ると一人は

驚いて息杖ほうを投なり出し、同じく跡からパラ／＼と逃げ出す。

小「不埒至極な奴だ、これ女中さぞ嘸驚さぞいたろう」

娘「はい何方どちらのお方様か存じませんが、危あやうい処をお助けください

まして誠に有難う存じます」

小「お前のお母^{つか}さんは川崎の新田屋に参^{まゐ}つて居^おるから、心配なく私^{わし}と一緒に往^ゆきなさい、私は怪しい者ではない、私は金森家の侍で、親父はお前の宅へ往^ゆつてお前の親御とは馴染の事だから心配なく、まあ／＼一緒に往^ゆきなさい、私が新田屋まで送り届けて上げよう」

と是から小三郎がお雪を新田屋へ送り届けると、母も小僧も大きに悦び、

母「思い掛けないことでお助け下さいまして、お礼の申そうようはございませんから、お餞別代りに聊^{いさぐ}かではございますが」

と金子を差出したが、小三郎は金子を受けませんで、

小「何うか私が国から歸るまで丈夫で居なさい、私は直に立ちますゆえ、此処から早く三人共に歸るように」

と申し残して出て往く。翌日に相成ると早々母は娘のお雪を連れて万年町の宅へ歸りました。これから稻垣小左衛門は百日経つてもお刀が出ません処からお暇が出ると云う、稻垣小左衛門浪々のお話でございします。

お話二つに分れて、松葉屋に抱えになりました鋏鍛冶金重の娘お富は、まだ目見え中でございますが、目見え中と云うものは主人が内所に置いて様子を見ます。

主「何うも女は美しいが歩きつきが悪いな、ちと屈む癖があるから反らせるが宜い、お前烟草を人に付けて出すのに、それでは色気

がない、斯うすると宜い」

と教えて貰う。種々^{いろく}主人が様子を見て、親族得心の上で印形を致しますのですが、其の頃の証文というものは何うしても損の
 いかないような手堅いもので、証文が極^きまると二階の大きい花魁^{おいら}のお世話になると云う、大きい花魁と云うのは其の家のお職^{しよく}
 とか二枚目とかいう立派な仲^{なか}の町張^{ちやうば}りの花魁が、若いおいらん
 を突出^{つきだ}しますので、抑^{そも}突出しの初めからという文句が有りますか
 ら、大きい花魁が万事突出し女郎の支度をして遣るんだそうで、
 夜具布団^{しかけ}から襦^{あたま}飾のものから、新造^{しんぞう}禿の支度まで皆その大
 きい花魁が致します。主人は一両でも出しません。主人と云うも
 のは徳なもので。若^{わかみどり}緑^{りよく}という二枚目の花魁がお富の世話を致

しますが、誠に親切もので、お富は時々内所へ来て小さくなつて居ります。愈々いよく証文が極つて、此の三月の宵節句と節句の二日の内に突出して、五町ちようを廻らなければならんで心配致して居ります。処へ縁と云うものは妙なもので、彼の紀伊國屋の伊之助が髪結の長次を連れて、八重花やえはなと呼ぶ花魁のところへ浮うかれに参りました。

新造「若旦那お風呂に這入んなまし」

と云うので長次と一緒に下の廊下を通ると、内所の暗い処にぼんやりして居たお富がふいと見ると、伊之助ゆえ飛立つように思いました。おぼこゆえぐずぐずして居るのを長次が見附け、
長「もしく若旦那く」

伊「えゝ」

長「あの暗い処にいる娘は鋏鍛冶金重という上手な爺さんの娘ですが、親が死んで石塔料の為に自分から此家へ駈込んで身を売つたと云うことです」

伊「美^よい器量だのう」

長「余程美^いい娘です。何かお前さんに物云いたそうに此方^{こつち}をジロ

く見てモジツカして居ますが、お前さんに余程惚れてますぜ、

なに本当の事さ、私^{わっち}を追かけて来て鋏を一挺呉れて、何うか若旦那

に宜くお詫をツてんで、どうも余程^{よっぽど}惚れてますよ、私が浮世

の義理に一寸^{ちよつと}逢つて来ますから、あのなに、花^{はな}の香^かさん、若旦那

をお連れ申しておくれ」

と云いながら長次はお富の傍へ遣つて参り、

長「お富さん」

富「おや親方、まア面目次第もございません、私は斯んな処へ這入りました」

長「面目ない処じやアない、皆なが誉めて居やす、錨床の鐵

が来て、あの娘さんのような感心なものは無え、親の為に自分か

ら駄込んで身を売るといふのは実に感心だ、世間には浮氣をして茲へ来るものは多いが、親の為に来る者は少いつてね、口の悪い

野郎だがお前さんには驚いて居やすよ」

富「有難うございます、あの今親方と一緒にでなすつたのは紀伊國屋の若旦那でございますか」

長「忘れねえネ、八重花という花魁と馴染んで遊びにおいでなす
つたんですが、若旦那の方では惚れも何もしないが花魁の方では
ポツと来ているくらいだが、若旦那は堅いから、ツンとしまつて
居て、時々私が合わっち口あいくちだもんだから、長次往いこうと仰しやつてお
供で来るけれども、何うかすると日暮れ方から来て戌刻前に帰よつめえ
る事もあるし、夜来れば翌朝よくあさは店を開けねえ内に帰けえらねえと大旦
那の首尾わりが悪いのだが、大番頭さんが粹な人で合図をしてくれる
から、斯うやつて時々来られるのださ」

富「親方私はあなたに少しお願いが有りますが叶えてくださいま
すか」

長「なにを私わっちに」

富「あのね、私は此の三月のお節句から何うしてもお女郎じょうろに成つてお客を取るようになるのでございます」

長「フン、へえ結構でござえやす」

九

富「どうも始めてお客を取る時が怖くつていけないから、私が始めて出ます時に……あのね……若旦那が……私を可愛相と思召おぼしめして……買つて下さる事が出来ましようか、貴方願つて下さいませんか」

長「紀伊國屋の大將をかえ、それはいけねえ、どうして嚴やかましい、

茶屋へでも知れた日にやア大騒ぎだ、それはいけねえ、私共わっちどもが登る処あがのチョン／＼格子なら、あのお多福と見立替みたてがえという事が出来るけれども、只玉ぎよくを二つ払えば宜いという訳にはいかねえから、それはいけねえ」

富「どうぞお願いですからそうして下さいな、私は本当に怖くていけませんから、後生ですから願つて見て下さいましな、其の代り私の身が立ちますと屹度きつとお礼をしますから」

長「お礼ツたつて、それは私わっちにはいけねえから、若旦那のお氣に入りの幫間たいこの正孝しょうこうに談はなしをして見ますから、待つておいでなさい」

と慌あわてゝ立上り柱へ頭をコツリ、

長「あゝ痛い何うも」

と座敷へ参り、

長「大きに遅くなりました」

伊「強氣ごうぎに長いな、馴染の女とたかいぜ」

長「お前さんのお蔭で大黒柱へ才さいづち槌頭あたまを打附ぶつつけやした」

と云いながら伊之助の耳元へ口を寄せ、

長「大変な訳です、素人の時分からあなたに岡惚おかぼれで、此の三月の節句から仲の町へ出ると云うんで」

番新「あら長次はん、何んだねえ若旦那へ智慧工附けてさ、憎らしいよ、花魁が心持が悪いよ、大きな声で云いなましなね」

長「大きな声では云われんことだ、質店の若旦那だから」

と瞞ごまかしながらまた小声で、

長「後生お願いだから後あとで何どんな御馳走でもしますからってヤイ
ノくでしよう」

番新「なにを智慧工附けるんだよ、長次はんこそくばなし話などをし
て」

と云つてる処へ 櫻川さくらがわ 正孝という幫間ほうかんが襖を明けて這入つて
参りました。

伊「いや師匠待つてたよ」

長「正孝さん遅いじゃアねえか」

正「これはどうも、へい、花魁御早く御上りなさいまして、前夜
は仲通りさんの相変らずの癖でしょう、大きいので続けて五杯遣

ったので大變に酔つちまつて、大きに失礼を致しました、そろ／＼何か取掛りやしようか」

長「なに師匠一寸此方へおいでよ」

正「若旦那此の間此の親方が、旦那遊びをするつてんで、安尾張か稲弁へ往こうというのですが、可笑い何んだツて、長次さんの踊を始めて見ました、変な形の踊りでしたが、あのぼつてりしてえるのは余程親方に初会惚れですぜ」

長「そんな事は宜いから此方へ来ねえ」

と云われ正孝は長次の口元へ耳を差附け、

正「え……なに……何んだか小声でさっぱり分りません……くすぐったいね、他聞^{はづか}を憚る儀ですと……ウン成程……へえくそれ

はいけません……へい成程……フン……それはいけませんや、何うしたつて是れはどうもいけません、お取持をした事が知れた日にや私が直に茶屋をしくじり、二階を止められるぐらいは仕方がないが、そんな事をすればどうしたつて正孝の首が三つ有つても足りないから、是はどうもいけません」

と極ごく小さな声で云うと、

番新「花魁見なましよ、長次はんがまた正孝はんを捕つかまえてコソく話をしてえるよ、横着ものだよ」

正「いえなに長次さんが正孝に岡惚と来てえるんで、正孝此方こつちへ来いつてんで、こう傍そばへもたれ掛り、幫間たいこと耳こすりをしたいつてんで」

と云い紛らし、また長次に向い低声こゝろえにて、

「八重花花魁が此の月末にはお目出度めでたくスーツとお身請になりますから、花魁が素人に成つちまつて、後あとへ下のがニユーツと出る処つきだしを突出の初日からなんすれば、何も障りがなくつて宜しい、其の時にはそれはまた心得て居やす」

番「あれ見なまし、じれつたいよ、何時までもコソ／＼話をしてさ、正孝はん傍へ往いきなますな」

正「いえ此方が親方に岡惚てるんで、こう親方の膝へ手を突いて見たいんで」

と瞞かして其の場は済まして帰りましたが、成程此の月末になると八重花は身請になりましたから、お富は若草わかぐさと改名して、

よくげつ

翌月の宵節句から出ましたが、突出しの夜から伊之助はお富の若草を揚げましたが、初会惚れ処ではないのでございます、素人の時分から思い染めている伊之助でありますから真実に致しますこと一通りでない。仲の町の花魁の見識で、お客に烟草をつけて遣るなどということは余程よつぽど馴染にならなければ出来ませんが、初りはしまから伊之助の足袋の洗濯までもしようと云う真実ゆえ、伊之助も悪にくからず思い、足を近く来ますので、此の事が仲の町にぱつと致しました。若草さんは外のお客に出ない花魁、まるで紀伊國屋の伊之助さんのお内儀かみさんのようだ、御新造ごしんぞうだという噂うさが立ちましたから、別に買いに来る客も有りません、稀たまにあつても座敷切りで、お客へは出ないという書附を伊之助と取合つた仲でござ

います事がぱつと致しますと、芸妓げいしや幫間たいこに仕着しきせも出さなければならず、総羽織そうばおりを出すと云うので、廓さとの金には詰るが習い、伊之助も漸だん／＼うち家の方も不首尾になり、金に手支てづかえて参りました。すると九月になり、節句前の事でお父とつさんの耳へ這入ったから、固い人ゆえ中々承知致しません、何んでも勘当をしなければ許いいな嫁ずけの万年町の岡本へ対して済まないから、久離きゆうり切つて勘当をするというので、番頭の安兵衛は粹な人ゆえ、兎に角私わたくしに預けて下さいまし、当分懲こらしめの為に二階住居ずまいをなさればそれで宜しい、私わたしが見張つていて外へ出さんことに致しますと云う事になりましたが、伊之助は番頭に向い、

伊「どうぞお願いだから、もう一遍遣つておくれ、これっ切に往い

かないから昼遊びだけ許しておくれ、黙って往かないで居ては少し義理が悪い事がある、紀伊國屋の伊之助と云やア仲の町でも知られた顔だから店のひけるまでには屹度帰って来るが、後生だから昼遊びだけ遣ってくれろ」

と頼むので、番頭の安兵衛が幾らか金を工夫して、

安「これだけ上げますが、其の代り店のひける前に帰って入つしやらないと、もう私は決してお詫びわたくしごとを致しません、御勘当に成つても知りませんよ」

伊「宜いとも、屹度帰って来る」

と是から金を懷中して髮結の長次を誘い、遊びに参りましたが、若草は勤めうちの中で懷妊して五月目いつつきめでござりましたが、是れは滅

多に無い事で、余程よっぽど惚れなければ身重になる事はございますまい。若草は素人臭く懷妊したとも云いいかね兼て居ります。伊之助は別れの遊びでございますから、どうも賑やかにはいきません、何を見ても可笑しく無いから早く切上げ、伊之助と若草は屏風の中うちへ這入りましたが、伊之助はぼんやりして居ります。

若「申し若旦那、伊のはん」

伊「えゝ」

若「どうしてもこれつきりしか来られないの」

伊「そうサ三百七十両という大穴を明けた処七十両だけは安兵衛が償つて呉れたが、あとの三百両だけの始末の出来る間、二階住ず居まいをして居て、流れの質や両替の方でどうか工夫をして、穴を埋

めるようにして上げますと安兵衛が親切に云つてくれたから、親父の方の首尾はおつ着いたが、今日は番頭に頼んで何んでもかんでもひけ前には屹度帰るからと云つて、漸々ようく暇を貰つて来たくらいだから、もう三年ばかりは何うしても来る事は出来ないのです」

若「おまはん茲こゝで金が出来て、お父さんとの首尾さえ附けば、今までの通り主ぬしが来られるような事になりんすか、そうなら私わちきがお金を才覚しようじやア有りまへんか」

伊「その金は何うして出来るんだえ」

若「外ほかに出来る目途あてもないけれども、仲の町の井桁伊勢屋いげたいせやから来るお侍の、青髭あおひげの生えた色の白い丈せいの高いお客は、来てく来抜くが、わちきは厭いやーでなりまへんから、碌々気休め一つ云い

まへんが、あの客を取留めれば三百両とりとや四百両みツつの才覚は出来ますから、そうしてお金を拵え、三百両みツつだけ主に上げるから、身の立つようにして呉んなまし、主の来られないものを無理に来てくれろと云うと、却かえつて主の身に障りんしょうから、月に三度ずつは屹度逢いに来てくんなまし、茶屋まで来て顔だけ見せて呉んなまし」

と云われ、何と思つたか伊之助は急に気色けしきを変えました。

伊「此方こつちだつて月に一遍か二遍忍んで逢いに来たいが、来られるか来られないか知れないから、その井桁伊勢屋から来る色の白い美しい男の客をお取りな」

若「主の身の立つ事だし、月に三度ずつも逢われる事なら、その

お客を取留めて見ようじゃア有りまへんか」

伊「取留めるとも取留めないとも御勝手ごかつてにおしな、私も紀伊國屋

の伊之助だ、お前に深く買い馴染んで、持物のようになつてるお前が、外の客を取つて、それから金を引出して私の身を立てる様

な見つともないことは出来ないが、そのお客を取りたいならお取りな、是迄も他のお客は取らないと云つておいたつて、内々ないく取

つてたか何だか分るものか、お取りな、何うせ女郎の千枚起請と
いう譬たとえの通りで、屏風一重中ひとえで云つた事は、皆反故同様だ」
みんな

とあら／＼しくいう伊之助の顔を若草は怨めしそうに見て涙声
になり、

若「あら伊のはん私わちきもたゞならぬ身の上に成つていますから、月

に一遍ずつでも主の顔を見るのを苦界くがいのうちの楽たのしみにしているの
ぎますから、年に一度でもようございますから、顔でも見せてお
くんなましな」

伊「顔を見せ度くつても三年ばかりはもう来られないのだ、今日
も無理に来たくらいなのだから、そんな事を云われちやア心持が
宜くないじゃアねえか、末は夫婦と仮にも誓紙まで取り交した仲
だのに、そう云う了簡では仕様がなから、私はもう是ぎり逢わ
ねえとして帰けえるから、お前は其のお客を取るが宜いい、善いいお客だ
からお取りよ、私が馬鹿だから是まで誑だまされてたんだ、帰けえるから
羽織を出しておくれ」

若「あゝいう事を云いなます、おまはんが帰るつたつて帰しまへ

んよ」

伊「帰けえさねえつて帰けえらなければならぬのだよ」

若「帰るんなら私わちきの身みじょう上きを極めてつから帰んなまし」

伊「お前の身上こつちどころか此方の身体が極らねえのだ、二階住居ずまいになるか勘当をされるか分らねえのだから、お前は勝手に其の客をお取りな、仲の町の花魁どが何んなお客を取ろうが、每晚替る枕だもの、お客を取ったつて此方で何んとも云えない訳だから仕方はないが、苟かりそめにも書いた物を私に渡して置きながら、それを反故にして……反故にされても何んともいうことは出来ないから、あの客を取るが宜いい、結構だ、子供が出来たというのも誰の子だか分りやアしない、疾とうからあの客を取つてゐるのかも知れやアしな

い、私は帰るよ」

と云い放ち立ち上る。若草は泣きながら、

若「申し若浪^{わかなみ}はん、若旦那がお帰りだと云いますよ」

番新「あい何うしたんだね」

と屏風をあけて、

番新「何うしたの、帰るの、お戯^{ふざ}けなますな、坐^まんなまし」

伊「坐^まれませんよ」

番新「そんなことを云わずに寐^ねて往^いきなましよ、花魁何を腹ア立たしたの」

若「あの井桁伊勢屋の客衆^{しゅ}の事を若旦那に話したら腹を立て、これぎり来ないと云いなますから悲しくつてなりまへん」

番新「そう、若旦那それは斯ういう訳なんです、花魁がおまはんの事を心配して泣いて騒いでいなますが、他の座敷の花魁とは違い、おまはんの胤^{たね}まで出来て、他のお客へは出ないから、主人の首尾も悪いが、これまで随分主人の為にも成つてるけれども、どうも極りが悪いから、それにまたおまはんの身の上が、金でお詫が出来るなら、何うかして拵^{なじん}えて上げたいが、馴染^{なじん}で来るお客は無し、困つたものと心配して居なますから、主の為なら仕方がないから井桁伊勢屋から来る客をお取留めなましと、私が花魁に勧めたのぎますのサ、前から取つてゐるの何んのつて、そういう心の花魁か花魁でないか大概分りそうなものございますね」

伊「合^{あいづち}槌^{づち}を打つて旨く云つてゐる、花魁と番頭新造は極つて居る

ぜ」

十

番新「あゝいう事を云うんだもの、本当におまはんは花魁殺しだよ、時々おまはんは花魁を打^ぶつて帰る事があるが、他の花魁なら只は置きまへんが、座敷の花魁ばかりは些^{ちっ}とも逆らわずに泣倒れて、打たれながらも嬉しがつてゝ、おまはんが歸つた後^{あと}で何時でも癩^{しやく}を起し、わちきが介抱するんざいますが、五日か六日も経つとおまはんが来ると癩が治まるんですが、今度は三年も来られないとお云いなますなら、三年の間癩が治りまへんと、世話アする

のは私^{わちき}一人、辛うぎます、素人の嬢さん見たような花魁に世話ば

かり焼かして苦勞ばかりさせて、本当に悪^{にく}らしいよ、床へ這入つて緩^{ゆつく}りと寐^ね物語りをして、相談ずくにしていきなましよ」

伊「いやだよ帰^{けえ}るよ」

番新「仕様がな^いね、あの、長次はんを呼んで来なよ、あの娘^こや、何んだつて今ツから居^い睡^{ねむ}りをしているんだよ、いけねえ餓鬼だよ、長次はんを見て来て呉^きんなましよ、喜勢^{きせがわ}川はんの座敷に居なますよ」

禿「あい、長次はんくくく」

長「おいく何んだ、どうしたの、えゝ申し若旦那何んだつてお帰^{かえ}んなさる」

伊「お前は遊んでおいでよ」

長「お前さんが帰るなら私も一緒に帰りやすが、亥刻までに帰れば

宜いんでしょう、何うなすつたのです」

伊「何うなすつたッてお前は遊んで往きなよ、喜勢川は真物だから泊つて往きねえ」

長「真物も何もありやアしません、あなた何をそんなに腹ア立つたの」

伊「何んでも宜い、己は帰るよ」

長「若旦那そう癪癪を起しちやアいけねえ、若浪さん、なにを……ソレお氣に入りの正孝さんと呼んで来なよ」

番新「あい、あの娘や、ちよいと正孝はんを呼んで来てくんなま

しよ」

と正孝を呼びに遣ると、他の座敷に居りましたから直に飛んで参り、ピヨコくしながら、

正「若浪さん何ういう訳で……フーン、それはいけません、若旦那先ずトロリとお寝みなさい」

伊「トロリも何もいらぬや」

正「何ういうお腹立か知りやせんが、私は誠にお歸し申し度くな

い、実はな、あれが何時もの通りまた十日か五日目においでにな

つてお顔が見られるなら何んですが、三年も来ないと仰しやると

此方は島流しにでも逢つたような心持ですから、お歸し申したく

ない、花魁も泣いて入らつしやるから、ちよいとおよつて入らつ

しやい、花魁の心を安めてからお帰りとなさい」

伊「何んでえ、仲のたいこもち幫間だから花魁のひいき鼻肩をしねえな「幫間ドラ

を打たして陣を引き」と云う川柳の通りで、己が勘当にでもされたらば唾も引掛けやしめえ」

正「是は恐入りやす、貴方が御勘当になれば私はあなたをベロ／

＼甜なめますよ、あなたが御勘当になれば揚屋町の裏辺あがりの小粋な

処へ世しよたい帯をお持たせ申して、私が仕送りをして御不自由はおさ

せ申しませんで、万事お世話を致しやしよう」

伊「己は帰る、己の足で己の宅うちへ帰るに何も無理に引止める訳は

有るめえ」

正「お引止め申す訳では有りませんがあの通り花魁が泣いて入ら

つしやるから」

番新「申し若旦那をお歸し申すと聞かないよ」

正「若旦那が歸る／＼と仰しやるのは何う云う訳なんです」

番新「ナニ井桁伊勢屋のお客の事からさ」

正「これはどうも、これは恐入った、若旦那それでは貴方まるで花魁を苛める^{いじ}ようなもので、花魁がお可愛相です、あのお客に花魁が惚れるのなんてえことがありますものか、彼奴^{あいつ}は何処^{あいつ}ともなしに女に嫌われるように生れ附いてるんでしよう、女除^よけのお守りでも持つてるのか、変に色が白くって、じゞむさくて妙でげす、ハ、それはあなたが無理でげしよう、そんな事を仰しやるようではまだお遊びがお若い」

と云われ、伊之助は勃むツとしていきなり扇で正孝の頭をピシャリ。

正「ア、痛い」

伊「どうせ己は遊びは知らないから、馬鹿にされて斯んな目に逢ったのだ、帰けえるツたら帰る」

と止められると猶なお帰るといふが見得の場所の習いで、ドン／＼と梯子はしごを駈おけ下る、若草は本間の方へ泣き倒れる。番頭新造は泣きながら跡から追いかける。正孝も長次も続いて参ります。

番新「藤助とうすけどん、お願いだから若旦那の履物はきものを出すと聴かないよ」

伊「早く履物を出せというのに」

若者「へい」

番新「出すときかねえよ」

伊「出しねえというに」

と無理やりに履物をひツたくつて表へ飛び出し、無闇に駈出し、
大門^{おおもん}を出る。跡から続いて正孝と長次が追いかけて、

長「若旦那く」

正「これはどうも恐入った、大変にお飯^{まんま}を喰^たべ過ぎて居るから駈
けると横^{よこッぽら}腹が張つて堪らない」

伊之助はズン／＼土手の方へ参る。両人はドシ／＼追掛^{おいか}けて田
町へ下りずに先の方へ無闇に駈出しましたから、

正「若旦那何処へ往^いくのです」

伊「何んだッて一緒にくツついて来たんだよ」

正「でもあなた、花魁が前からあの侍を取留めて居るならお断りは致しませんが、客にして居るだろうとお疑りでありましょうが、あの花魁に限って決してそんな事の無いというのは正孝が知って居ります」

伊「惚けのろをいうようだが互に書附まで取とり交かわして、私は決して他の客へは出ないから交つきあ際いでも他へ登あつてくれるなど云うから、己も他へは登ったことはありやアしない、互に斯う云う書附まで取とり替かわせて置きながら、他の客を取りたいと云うから、勝手に取れと云うのだ」

正「花魁が何んで彼あなお客に惚れましよう、私は大嫌い、あの屁

つぴり侍の屁ツチヨロな、彼の^あくらいいやなお客は有りません、あの屁つぴり侍」

と云つてる後に頭巾を冠つてどっしりした羽織を着、大小を落し差しにした立派なお侍がいきなり正孝の袖を取り、

侍「屁つ放り^び侍とは何んだ」

正「オヤ、これはどうも、イエ誠に恐入りました、御免遊ばせ」

侍「コレ屁つ放り侍とは何んだ」

正「イエ殿様、貴方の事を申したのではございません、他に^{わき}屁ツ

チヨロの様な人が有りますから、貴方が後に入っしやる事とも知らず、つい申しましたが、お侍さまで入っしやるから貴方の事を

申したと思^{おぼしめ}召ししようが、決して左様ではございませんので」

侍「イヤ、己のことを云わんにしろ武士は相見互いだ、貴様は吉原町のたいこもち幫間じやアないか、客の機嫌きづま氣棲を取つて、祝儀を戴き、其の日を送る幫間たる身の上でありながら、何んだ屁つぴり侍とは、不埒な奴だ」

正「どうぞ御勘弁遊ばして」

侍「幫間の分際で武士にあつこう悪口を申す不届奴ふとどきやつ、勘弁相成らん、打ぶッ放ばなしちまう」

と云われ正孝はまつさお真青に成つて謝つて居りますから、伊之助も心配し長次も驚いて居りました。

伊「おい長次や、お前ちよつと詫ごとをしてやんなよ、正孝が可愛相だから」

長「ですがね、連だつれと云つて私も一緒わっちにやられると詰らねえから」
伊「それだから往来の通りがゝりの積りで詫に這入るが宜いじや
ねえか」

長「おおごと大事ですね、あなたが出て来たから、こんな事になります」
と云いながら遣つて参り、

長「へーく」

侍「何んだ手前は」

長「へえ、わっち私はホンの往来の通りがゝりの者でござえやすが、へえ、何か此の者が殿様に対して不調法を申し上げて、御立腹を受
けまして驚き入りました、見兼て仲へ這入りましたわけがら訳柄でござ
えやすが、へえ、どうか御勘弁を願いたいもので」

侍「ナニ往来通りがゝりのもので連でないと申すが、兩人で悪口して居たのを存じて居る、兩人ともに捨置かれん手打ちにするから参れ」

と云われ二人ともかたまつてしまい、口も利けません。すると日が暮れてまだ間がない頃でございますから、追々人が出て参り、^{たちま}忽ち黒山のようにになりました。

甲「何んですく」

乙「何だか侍がたいこもち幫間を斬ると云つてゐるんです」

甲「何を不調法したんです」

乙「何でも幫間がソノ何ですね、お客さまに屁工放ひつ掛けたとか云うのが始まりで」

甲「へえお侍に屁を放つ掛けたんですとえ、酷いひどいぞんざいな事をしたもんですね、おならをお侍に放つ掛けたんですか」

丙「いえ然そうじや有りません、お侍さんの方でおならを致したので」

乙「へえ」

丙「幫間は口が悪いもんですから屁放り侍と云ったので、侍が後あとへ歸つて来て、何だ出もの腫れものだ、したら何うした、屁放り侍とは何だと斯ういうのが喧嘩はじまの初りで」

甲「理不尽な、自分でして置きながら何も斬るほどのことはない、たかがおならじやア有りませんか、酷い奴もあるもんですねえ」
丁「ナニ然うじやアない、もと居た奉公人だそうで、あの幫間が

旧時^{もと}あの侍の処に奉公した仲^{ちゆうげん}間で、それが何か持逃げをして

プイと居無くなつてたのが、幫間に成つて居るから、捨置かれん、
何故^{なぜ}己の事を蔭で悪くいうと怒^{おこ}つてるので」

戊「然うじやアないそうで、酷い事をするもので」

甲「何でげす、何したんです」

戊「ナニあの侍の物を取りに掛つたので、幫間の振^{ふり}で掏摸^{すり}をした
んで」

甲「そう此方^{こつち}へ押しちやアいけませんよ」

巳「何でげすく、^{ひつくりか}転覆えしたのかえ、もう燃え出したかえ」

庚「何です」

巳「鍋焼^{なべやき}餛飩^{うどん}が荷^{おろ}を下し始めた処で転覆えしたと云うから」

辛「もう生れましたかね」

壬「何だえ」

辛「何だか乞食が産をしてるツていうことを聞きました」

と何だか解らずに「ごた／＼」して居りまする処へ、通りかゝつ

たのは、昇夫かごやの安吉と重三郎を連れて荷足の仙太郎が刀の詮議に

土手へかゝつて参ると、人立ひとたちが有りますから、仙太郎も立止り

覗いて見て、

仙「安、安」

安「へえ」

仙「あの侍は仙台河岸せんでえがしの侍に似てえるようだが、何うだろう」

安「へえ……あれじゃアありますめえ」

仙「誰を見ても怖がつて彼じやアねえく」と云やアがる……何うしたんですエ……幫間が……、成程、悪口を利いたんで……安、己があのだに喧嘩ア吹ツかけて、あの頭巾をふんだくるから、汝遠くで面ア見てえて、仙台川岸の侍だったら、大きな声で其奴だアと呶鳴れ、そうしたら己が咬り附くから、重さん、しツかりしなくツちやアいけねえぜ」

と云い捨てゝ、

仙「え御免ねえく」

とおおせい
と多勢の人を掻き分け侍の傍へ摺り寄り、

仙「えお侍、訳は知りませんがこれは仲の幫間で、一人は通り掛りの者だ、弱え町人を捕めえて御詫を云わなくツても宜かろう、

エお侍」

侍「汝^{われ}は何だ、何をいう」

仙「私^{わっち}は通りがゝりのものだが、見兼たから仲^{なけ}へ這入^{へえ}ったのだ、

弱^{よえ}え町人を斬るの殴^はるのと仰しやるが、弱えものを助けるのが本

当のお侍だ」

侍「なにをいう、怪^けしからん奴だ、汝^{てまえ}は此の者の詫に這入^{てまえ}ったの

か、何に這入^{あつこう}ったのだ、此の者どもは悪^{あつこう}口を申して無礼を働い

た故、捨置かれんから手打にするんだ、汝は何だ」

仙「エ、色里へ来て塗^{ぬり}箸^{ばし}見たような物を一本半分差して、斬る

の殴るのと威張^{どうつ}つて、此の頃道哲^{おいはぎ}へ来て追剥^{てめえ}をするのは手前

かも知れねえ」

侍「此奴棄置かれん事を申す」

仙「棄置かれんなら己を斬れ、サア抜け」

と云いながら後を見返り、

仙「オー重さん抜くぜ、安や宜いか」

侍「イヤ余程白痴けた奴だ、強いて斬られたいというならば斬つて遣る」

仙「サア斬れく」

侍「宜しい、望みに任して斬つて遣る、命がないから左様心得ろ」

仙「サア抜けく」

と身体を摺り附ける。

侍「無礼至極な奴だ」

仙「汝うぬの方が余つ程無礼だ、己ちゆうにんが仲人ちゆうにんに這入ったのに頭巾を冠ええさつつて、挨拶ええさつをするつてえ事が有るか、頭巾を取れヤイ、面ア出して見せろヤイ」

侍「其ほうの方は棄置かれんが兩人は助けて遣る」

と突き離され、長次正孝の兩人は悦び、実に竜たつの口くちを免のがれたよ
うな心地にて、

正「有難うぞんじます、何処のお方か存じませんが、この御恩は決して忘れません」

と二人は厚く礼を云い、伊之助を引ひつぱつて連往つれゆきます。伊之助も怖いから三人で漸だん／＼々々逃げて、また大門を這入つて松葉屋へ登あがりました。それなら出て来なければ宜いいに。あとに仙太郎は侍

の傍^{そば}へ摺り寄つて来ました。

侍「望みに任して斬つて遣るから覚悟をしろ」

仙「サア斬れく」

侍「此^{こいつ}奴棄置かれん」

と云いながら刀の柄へ手をかけました。是から刀を抜くという
詮議の処でございます。

十一

さて引続きのお話は寛保三年九月二十日の晩に、吉原土手で荷
足の仙太郎が頭巾目深^{まぶか}の怪しの侍に出逢いまして、どうも仙台河

岸で見た侍に似て居るからと云うので、無法に喧嘩をしかけたが、
たとい人の為でも、侍に喧嘩を仕掛けて刀の詮議をしようと云う
のは実に剛胆な事でございます。左様な男達おとこだてという様な馬鹿
らしい人は近年ひら開けてなくなりました。今侍は刀の柄へ手を掛け
て抜きにかゝりましたが、仙太郎の身構えが如何にも氣象な奴で
ございますから、心の中うちにて此奴中々尋常たゞの奴ではない、少し何
か心得て居る奴おであろう、殊ことに胆力の据わった者、生じいな事を
して耻を搔かいてはならんと、心有る侍と見えまして、

侍「イヤ町人免ゆるしてくれ、これは私が悪わるかった、成程お前のいう
通り吉原土手の色里へ参つて長い物を差して、斬るの殴はるのと云
つたは、酒興しゅきようの上とは云いながら大きに私が悪わるかった、其の

方の云う処は至極^{もつとも}尤だ、此の通り手を下げて詫るから免してくれ」

仙「ナニ免さねえ、手前^{てめえ}抜くと云ったからサア抜け、武士に二言

は有るめえ、抜くと云ったら抜かずにやア居られめえから、サア

抜け」

侍「私が悪い^{わし}から何うか免してくれ、酔が醒^さめて見れば白刃^{しらば}を振^{ふる}

って町人を嚇^{おど}かし、土地を騒がしたは私が悪いから謝まる」

仙「いやだ、抜くといったら抜きねえナ、エオイ、武士に二言は

有るめえ、ナニ免してくれと膝まで手を下げて詫るといふなら、

コレ頭巾を冠^{かぶ}って謝まるものもねえもんだ、本当に詫^{わびごと}言をする

んなら頭巾を取って詫びなせえ、頭巾を取れ」

と頭巾くと云われるだけに彼の侍も無氣味^{ぶきみ}になったと見えた

か、大声にて、

侍「免せ」

と云いながら袖を打つぶ払つてばら雪踏せったを脱ぎ捨て、跣足はだしの儘駆け出す。

仙「此の侍」

と云いながら追掛おっかけて往くと、野次馬が大勢居りますから、

野「あの侍逃あとがすな」

と後からバラ／＼付いて参ります、侍は土手下へ駆け下りましたが何処を何うしたか見失いました。仙太郎は大門を這入り、仲の町から京町揚屋町と段々探しましたが、残念ながら見失なつてしまいました、何でも出るに違いない、吉原に這入ったからに

や、女郎屋じようろやへ登あがつたろうから、明日あすの朝は大門を出るに違いねえと、五十軒の武蔵屋へ泊つて侍の出るのを附けて居りましたが、取逃がしたか見失なつたか知れませんか、仙太郎は空しく立歸りました。伊之助は其の晩また松葉屋へ登あがりましたが、一旦喧嘩をして出た跡ゆえ、向むこうでも容易には歸しませんから遅くなり、遂に大引おおびけ過ぎまで居りましたから、伊之助不図氣が附き、伊「サア遅くなつた、店が引けるまでには屹度歸る、そんならと云つて来たんだから」

と長次と二人とも慌てゝ外へ出ました。

伊「ア、飛とんだ事をした、店の引ける前に帰ると云つたのに、斯んなに遅く今時分歸つたら、番頭が腹を立てて、親父に此の事を告

げれば勘当になるかも知れない、それとも今夜の内に帰るか、と首尾をして置いてくれたか、何にしてももう仕方がないから、堀へでも往つて駕籠へでも乗つて帰ろうか、何うしようか」

長「番頭さんの方は余り遅くなりましたが、何しろ駕籠へでも乗つていらつしやいな、先刻^{さつき}あなたは腹を立てたからいけねえんです、侍の事で詰らねえちん／＼などを起したから、斯んなに遅くなつて仕様が有りやアしません、あんな侍などに何んで花魁が惚れる訳は有りやアしませんや」

伊「己もまさか惚れる氣遣^{きづけえ}は有るめえと思うが、これツ切り来られねえもんだから、ツイちん／＼を起して、無理な事を云つたのよ」

長「そんなら駈出さなければ宜うござえやすに、私も一遍見やしたが、忌^{いや}な侍で、本当にあんな馬鹿侍は有りやアしません」

という^{うしろ}と、後で

「馬鹿侍とは何んだ」

と云われ、二人は恟^{びつく}りして道^{どうてつ}哲の方へ無闇に逃出しましたが、

跡から侍が追掛^{おっか}けてまいるので、己^{おの}が足音か跡から追掛けて来る

侍の足音か分りませんが、何だか傍へ来たような心持がいたしま

すから、急いで道哲を駈下りる時に、運の尽きか髪結長次が転ん

だが、伊之助は跡へ歸つて助けることは出来ないから無闇に逃げ

て往^ゆくと、後^{うしろ}の方でバタリ、キヤーと悲鳴を上げましたから、若^も

しや長次は斬られやアしないかと思いましたが、あとへは歸られ

ませんから、一生懸命に堀まで来て、竹屋の家を叩き起して、侍に追いかけられたから泊めてくれろという、内儀かみさんがそれは飛んだ事でございます、御心配なしにお泊んなさいと云うので、其の晩は泊つて、翌朝よくあさ小船で帰りましたが、本郷の宅では大騒ぎで、翌朝になると髮結の長次が斬殺きりころされて居るというので、女房が紀伊國屋へ泣声で参り、

「若旦那のお供をして参りましたから斯様な目に逢いましたので、御検死沙汰から何や角かや貧乏の中で仕様が有りませんから、私は死ぬより外ほかに仕様が有りません」

とキヤア／＼狂氣きちがいのようになって騒ぐゆえ、捨置かれんから、お店から多分の金子を出して長次の死骸を引き取り、葬式とむらいまで

出して遣るような事でございますから、世間に対して伊之助を捨置くわけには参りませんゆえ、久離きつて勘当するというのは、番頭の安兵衛が宥めて、

「只た一人の若旦那ゆえ、私が氣を付けて外へお出でなさらないように致しましょう、またお母さまも御心配な事でしようから、懲らしめの為に当分のうち窮命なさるように、私が万事計らしましょう」

と云つて堀切村に別荘がございますから、伊兵衛という固い番頭を付けて、伊之助を堀切の別荘に押込めて置きました、今まで遊んだ子息さんが押込められて、頑固な番頭さんが附いて居るのでございますから、只吉原の事ばかり案じて、若草は何うし

て居るか、九月が腹帯おびだと云ったから、来年の二月は臨月うみづきだが、首尾よ好く赤ん坊が産れるか、まだ己の此処に押込められてる事は知るまい、切めて手紙でも遣りたいと硯すずりを引寄せ、筆を取り上げふみ文を書こうとすると、

伊兵衛「若旦那、何をなさるのです」

伊「そんな怖い顔をしなくつても宜いいじゃアないか、私が悪ければこそ斯さんな淋さみしい処に来て、小さくなつてるので、余あんまり徒然とぜんだから発句ほくくでも詠やろうと思つてちよいと筆を取つたのだよ」

伊兵衛「そんなら宜うございますが、吉原へ文でも贈る思召おぼしめしかと思ひまして、心配いたしました、あなたお句が出来ましたら拝見致しましょう」

伊「止ましようよ」

伊兵衛「若旦那どちらへいらつしやる」

伊「何処へ往くつたつて些と庭でも歩かないと毒だらうじやアないか」

伊兵衛「御一緒に参りましょう、生垣が低うございますから、^{また}跨いで逃出してもなさると私^{わたくし}がしくじりますから……若旦那何処へいらつしやる」

伊「あんまり退屈だから本でも出しに蔵へ往くのだよ」

伊兵衛「お蔵へ御一緒に参りましょう」

と世の中のことを知らない人間だから、何を見ても分らんで仕様がありません。芝居の櫓^{やぐら}を見て烟突^{けむだし}と間違えるような人で。

伊兵衛「若旦那どちらへいらつしやる」

伊「便所へ往くのだよ」

伊兵衛「御一緒に参りましょう」

と便所まで附いて行くといふようなわけで、伊之助は段々鬱々致しまして、これが病氣の原因に相成り、どツと寝付くよう

な事になつても、看病人が有りませんから手当が行届きません

事で、幾ら可愛い息子でも懲しめのために押込めて置くのですから、お母さんにも看病は出来ません、何うしたら宜かろうと心配をすると、番頭の安兵衛が、

「好い事が有ります、幸い万年町の刀屋のお嬢さんを若旦那の枕元へ呼んで、看病をおさせ申せば、若い同士ゆえ手がさわり足が

さわりして、若しそう云う事になりますれば、吉原のことも遂に去るもの日々に疎く、忘れるような事になりました。早く御新造をお持たせ申すが宜うございます、万事私にお任せなさい」とこれから安兵衛が万年町へ参り、政七に面会し、伊之助は病気のところ看病人が無いので困りますから、嬢さまを貸して下さいと云えば、政七も義理でございますから、お連れなさいというのでこれから娘が来て看病をいたしました。

十二

お雪の看病は真の看病で、手当の行届きますこと一通りであ

りません。一体看病というものは婦人に限りますな、どうも男で
はいけません。看病婦と申して、どうも婦人の方が手当りが宜し
い、男の骨太の手で抱き上げられると痛い、婦人の嫺しなやかなむ
ツくりした手や何かですと余程心持が宜いと云います。殊ことに許いいな
ずけ嫁の嬢さんで、年齢としは十八でございまして、別嬪べっぴんではあるし、
たと譬えにもいう通り饑ひもじい時のまずい物なしで、お腹はらの空すいた時に
おいしい物が来たようなもので、若旦那がめしあがる事に成った
が、素もとより許嫁だから誰たれ憚からずめしあがっても、何も仔細は有り
ません。漸だん／＼々病氣なも癒なおり、遂にこのお嬢さまがぼてれんと成
りましたが、吉原の若草は九月くがつ帯おびと云う時に別れたぎり、嬢さ
んが来て翌よくげつ月身重になりましたから、兩人ふたりながら身重に成りま

したが、自然と吉原の方は忘れがちになるような事で。若草は左様なこととは知らず、伊之助の音信たよりのないは春木町の二階住居すまいに成ったことか、切せめて髪結の長次さんでもよこしてくれゝば宜いいに、世間の事を知らん花魁でございますから、伊之助の事を思い細る内に、漸々病氣になりますと、松葉屋の主人は粹すいな人ゆえ、主「花魁決して心配おしでない、氣から病が出るといふがお前の病氣は氣から出たのだが、来年の二月は屹きつと癒るから心配しずさんや山谷の別荘に往ゆつて緩ゆつくり養生をするが宜いい、若浪や（番新の名）詰らないものを食い合あわして、身体に障るような事ではならいよ、喰たべ物に氣を附けて遣たんな、輕かはずみな事をしてはいけいないよ、伊之さんの顔を潰つぶすような事はしないから、安心して養生を

しな」

と云うは墮胎藥などを飲んで身体に中るあたような事が有つてはならんから、産み落した暁には伊之助さんの方へ小児こどもを渡して、お前の身の立つようにしてやると云わぬばかりの謎で、若草、若浪も嬉しく思いましたから、その儘山谷の別荘に参りまして、養生をして居ります。とフト耳に這入つたのは、堀切の別荘に伊之助さんが押込められて窮命して居ると聞きましたから、お可愛そかえうだと思いましたが、吉原の者を頼んで遣つては、却かえつて若旦那の身の為に成るまいから、誰が宜かろうというと、若浪が「私の考えでは矢切村やきりむらの叔母さんを遣んなまし、叔母さんを遣んなますと、あゝいう堅氣の叔母さんが往いくんですから、先方むこうで

も訝しく思わないで、却つて事が解りましたよう」

と是从から急に手紙を書いて下しもふさ総しもの下矢切村へ出し、どうか伊之助さんの方へ談はなしを附けてくれろと云うので、早速矢切の叔母さんが出て往ゆきました。これが間違いの始めで、解る人ならば相談の埒が明きますが、分らん人で、お釈迦さまから渡わたしを越えると直すぐに向うが下矢切村でございますけれども、江戸へとは十六の時に来た切ぎりで、浅草の観音さまを其の時初めて拜んだという人で、供に附いて来た男は、鋏鍛冶金重の宅に居た恭太郎という馬鹿な奴で、先方むこうは奉公中一晩でもお店を明けたことのない頑固かたくねな番頭さんがちゃんと扣ひかえて居りまする所へ掛合いに参つたのでございますから、余程面倒で、

叔母「恭太や、少し其^そ処^けえ待ちて居ろよ、はい御免なせえましよ、紀伊國屋の伊之助さんの別荘は此方^{こちら}でござえますか」

伊兵衛「はい入らっしゃいまし、何方^{どちら}さまから入らっしゃいました」

叔母「はい私は下総の矢切から参^{めえ}りましたが、伊之助さんがの別荘は此方^{こちら}でござえますか、あの矢切村のおしという婆^{めえ}アが参つたとそう仰しやつて下せえまし」

伊兵衛「左様でございますか、下総の矢切などという処には別に御懇意なお方はないわけで」

しの「マア御免なせえまし」

と上へあがり振^{ふり}反^{かえ}つて、

しの「恭太や、其^そ処^けえ腰イかけて待ちて居ろよ……能^よく天氣イ続きます」

伊兵衛「手前は紀伊國屋 宗^{そうじゅうろう}十郎の手代伊兵衛と申すもので、若主人伊之助は昨年より少々不首尾なことがありまして、只今まで斯^さ様に淋^{しみ}しい処に押込められて窮命に成つて居りますから、誰^ど方^{なた}がおいででも若主人にはお逢わせ申しません、手前が預つてる事でございますから、斯様な次第で有ると一々私^{わたくし}に仰せ聞けられますれば、また私から若主人へ申し聞けますから、私がお取次を致しましょう」

しの「左様でござえますか、始めましてお目にかゝります、私^{わたくし}は矢切村のおしのと云うやくぎ婆アでござえますが、幾久しくお心

安く願ねげえます」

伊兵衛「ハイ、お茶を持って出で、へー何なに御用で」

しの「私わたくしは吉原の松葉屋の若草の真実の叔母でござえますよ」

伊兵衛「へえ、これは飛とんだ事で、花魁の叔母さんが何しにおいで

なさいました」

しの「ハイ私わしも暫おとずれく音信も致しません、また参めえりもしませんが、

此の夏の植付うえつけ頃ごろに一度其の話の事に就つて参めえりまして、伊之助さ

んがにもお目に懸かつたこともござえますが、此度こんだア手紙が来て、

叔母さん、ちよつくら来てくンろ、相談ぶちてえ事が有ると云う

から、参めえつて見た処が、若草は吉原には居ねえで、松葉屋の寮と

かいうのが山谷にござえまして、其処え這入つて、塩梅あんべえが悪く

つて打ッ転がつて寝て居るでござえますから、私も魂消たまげて塩梅が
悪いわりかと尋ねますと、叔母さん面目ねえが勤めの中で赤子ねっこが出で
来かしたよと云うから、私も魂消たまげて、何うして赤子を出で来かしたかと
尋ねると、伊之助さんと夫婦約束をして、他ほかのお客へは出ねえか
ら、素人同様の身体ゆえ赤子が出で来きたが、主人の慈悲なまじけで養生しろ
つてえから、こようやってるが、来年の二月は臨うみづき月だアけれども、
子を生んだ暁にやア伊之さんは赤ん坊の父親ていおやだから引取つて貰わ
なければならねえのだが、伊之さんも堀切の寮で窮命してえると
いうから、私も案じられて、焦こがれて塩梅が悪くなつたくれえだが、
他の者を使つけえには遣とれねえが、叔母さんは堅気だから往つて貰もれえ
てえが、伊之さんの処ところへ往つて、子供を引取つてくれるか、私の

方で里へ遣るか、他へくれようかという処は、伊之助さんがお目に懸らねえば分らねえこんだし、それが極きまらぬ内は産む事も出来ねえし、伊之助さんの様子も案じられるから、塩梅が悪くはねえかと尋ねながら、相談をぶつて来てくんろツて頼まれて参めえつたのでござえますから、どうか伊之助さんに逢もわしてお貰もらえ申し度たいもので」

伊兵衛「それは怪けしからん事で、何うもお前さんの様な物の理合りあいの解らん御方おかたは有りません、若主人は全くその若草花魁のために斯んな淋しい処に窮命して居る身の上ですから、その花魁は若主人のためには敵かたきです、悪魔でございます、その何うも花魁が身重に成ツたつて、毎晩替る枕の勤めの身でありながら、きつと伊之

助の子と定きまつた事がありますまい、貴方は此方こちらを大家たいけと心得て入らしたか知りませんが、今の伊之助も前まえ々の身の上ではありません、只今にも勘当をされる次第に成つて居りますから、息子株では有りません、今にも追出されゝば乞食になるかも知れませんか、こゝへ何百兩とかいう金を出して、斯う云う事にしようと言うことには、只今の身の上では三文も出来ません、へえ何う致しましてへえ、只今では伊之助も後悔致して、吉原のよの字も若草のわの字も忌いやだと申してへえ、驚ろいて居りますへえ、何う致しましてへえ、何うぞお帰りなさつてへえ」

しの「いえ私わしは無理に金を貰もらえに來た訳じゃねえから金はいらねえが、他ほかのお客には出ねえ若草だから、伊之助さんの児こと定きまつ

てるが、産み落した暁にお前の方で育てる事が出来なければ己^{おら}方^{えか}で里に遣つても大くするが、それともお前の方で引取るとも、金を附けて他^{わき}へくれて父^{てい}なし児^こにするのは不便^{ふびん}だが、伊之助さんがの為にならねえなら、仕方がねえから、その金も己^{おれ}の方で出すが、その相談だから伊之助さんに逢わなければ相談が出来ねえのでござえます」

伊兵衛「それが解らんじや有りませんか、どうか他^{わき}へ遣つて呉^きれろ、里に遣つてくれろと伊之助の言葉が掛れば伊之助の児^こと定^{きま}りましょう、伊之助が春木町に居た時分に、お前さん一人に惚れてるとか何とかいう欺^{だま}しに乗り、それが為に斯ういう窮命をして居りますのに、そんな強請^{ゆすり}騙^{かた}り見たような、へ：変な事を云つても

三文も出来ませんへえ、手前が此処に居りますのは、吉原から左様な事を申してくるかと思つて、それが為に附け置かれる身の上ですへえ、何う致しまして、只た今お帰りなすつて」

と云われおしのは少しく気色けしきを変え、

しの「何んだツて、強請騙りとは何んだえ、己おら矢切村でハア小

っぱたけ

ひとつ

畠はたけの一段も持つてるものが、堀切くんだりまで強請騙りには

めえ

参りませんよ、そんな人情の解らねえ事をいつでも駄目だ、伊之助さんのことを心配しんぺえして、塩梅あんべえは悪くはねえかと、若草は瘦

わずら

こけて煩わづらつてるくれえ伊之助さんのことを思つてるのに、伊之助

さんは若草のわの字も吉原のよの字も忌いやだといえた義理じゃあん

めえ、慥たしかに夫婦約束の書附まで取替わせた間柄だから、何も無

理に金を貰いに來たわけじゃねえよ、お前さまのような人には何を云つても話が解らねえから、伊之助さんがに逢わなけりやア私^{わし}は歸りませんよ」

伊兵衛「オヤ、此の狸婆アぐず／＼いとうと表へ突出^{つきだ}すぞ」

しの「さア突き出せ、このけつめど野郎」

伊兵衛「なにを云やアがる」

と訳の解らんものは仕様がありません。おしの婆さんを表へ突き出そうとすると、供に來たのは馬鹿の恭太郎ゆえ、いきなり草履下駄を脱いで、

恭「此の野郎見ろ」

と番頭の頭を殴^うつ、番頭も怒^{おこ}り出し、無茶苦茶に胸倉を取つて

表へ二人を突出し、ポンと掛かき金をかけてしまう。叔母は地べたへ転ころがり、

しの「ア、若草は斯んな事とは知らないで、伊之助のことを思つて病ほうみ耄ほうけてるが、伊之助は吉原のよの字も若草のわの字も忌いやに成つたような不人情な心だから、自分が逢わないで物の解らねえ奉公人を出して、己を外へ突出しやアがつて、斯きんな疵きずまで出来でかしやアがつて」

と口惜くやしなみだ涙に泣き沈む。

恭「叔母さんお泣きでないよ、今己が柿を買つて遣るから」

しの「なにをいう此の馬鹿野郎」

と立上り、杖について漸く若草のもとへ帰り、右の一ぶしじゅう伍一什

を煩らつてゐる若草に話すと、そんなら伊之助さんの心がかわりはしないかと思ひ詰め、カツと逆^の上^ぼせて熱い涙をこぼし、身を震わして騒ぐのを見て、

番新「花魁間違いだよ、伊之はんはそんな方ではないが、あゝいう人だから奉公人任せにして置くから、訳の解らない奴が出て何か云つたんでしよう、腹も立ちましようが叔母さん間違ひざますよ、お前さんが其^{そんな}様にいうと猶々花魁の病氣に障ります、花魁今云つた通り伊之助はんは決してそんな人ではありません」

と云い宥^{なだ}め、叔母には小遣を持たして歸しました。跡で若草は弥^{いよく}々伊之助の事が心配になり、クヨ／＼思うから、漸^{だん／＼}々と御飯^{ごはん}も食べられないようになりました、永煩いの処へ食が止つた

ゆえ若草は次第に痩せ衰え、ホンと云う息遣いが悪うございまして、泣いてばかり居ります。若浪も心配して種々いろくな事を云つて慰めるけれども聞入れません。間違いの出来ます時にはいけないもので、たいこもち幫間の正孝が若草の処へ見舞に往ゆこうと云うので、ちよつと紅更紗べにさらさの風呂敷に二葉屋ふたばやの菓子折を包んだのを提げて山谷橋へかゝりました。

十三

其の時此方こちらから来たのは表徳ひようとくと云う人で、表具屋の徳兵衛とくべえさんというのですが、誰たれいうとなく表徳とくと呼び、たいこもち幫間でもな

いのに幫間の真似をして、世間の人にはひろく交際が有る、有名な人は皆知つて居る、此の間芝居見物のときなりこまや成駒屋の部屋で鰻飯を喰つて昼寝をして来たなどと嘘ばかり吐ついてる人で、酷ひどく酒に酔い、向むからヒョロ／＼やつてまいり、正孝を見て、

徳「イヤ大師匠おおし、よう」

と言葉をかけられ、正孝は誰だツけ、顔は二三度見たが名が分らねえと考えるながらも、

正「相変らず大景氣おおけいきで」

徳「師匠誠に暫らく、お忘れかえ」

正「イヤどうも忘れる処どころじゃアねえが、誰だツけ、強氣ごうぎと不器用だからチヨイと胴忘れをしたが、お前の名前は」

徳「イヤお忘れかえ、表徳だアね」

正「ウン表徳さんよ、^{ちげ}違えねえ、相変らず、何処へ」

表「今日は五名^{にん}ばかりで善四郎^{ぜんしろう}さんへお飯^{まんま}ア喰いに往かねえか

というから、有^{ありがて}難えツてんで往つて見ると、一杯に塞^{ふさ}がつて、

上も下もいけねえと云うので、是れから上手^{うわて}へ往こうというのだ

が、腹が空^へつて堪らんから、ちよいと底を入れようというので重

箱へ往つて、^{なます}鯰で飯を喰ったが、あとの連中は上手へ往つて、柳^や

橋^{なぎばし}のおちよと千吉^{せんきち}を呼んで浮れる訳だが、表徳は御免^{ごうむ}を被

り廊^{なな}へ往つてチョン／＼格子か何かで自腹遊びをする積りで御免

を被つて師匠に逢おうと思つてると、此処で出^{でつくわ}会すなんざア不

思議でしよう」

正「今日は強氣ごうぎと野暮に（折を上げて）アノそれ売出しの若草花魁の病氣見舞に往くゆのです」

徳「師匠一緒に往いこうじゃア有りませんか」

正「君は若草花魁を知ってるのかえ」

徳「存じませんよ」

正「知らなけりやア往つても無駄だぜ」

徳「ナニネ、お客のお供をして二階でも通る時に花魁から表徳さんとも声をかけられ、ば強氣と私もわっち こけん沽券が宜しいじや有りませんか、だから師匠が往いくなら後あとから従ついて往つてサ、師匠から聞きましたきましたが花魁は御病氣だそうで、お大切だいじになせえツてナことを云よえば宜いんでしよう、是非御一緒に」

と云うので正孝も荷になります。が仕方がありませんから、

正「そんならば連れて往くが神妙にしくつちやアいけねえぜ」

徳「宜しい心得た」

正「さア此処だ、へえ御免なさい」

寮番男「おやおいでなさい、お上りナ」

正「新助どん誠に御無沙汰を致しました、実は桐生きりゆうへ往ゆきました、一昨日おととい帰りまして、新八松屋で聞いて驚きました。が……これは詰らないものです。がお土産に」

と差出すを男が受取り、

男「少し待っておいで」

と云い捨て、奥へ這入る。と間もなく番頭新造の若浪が出て参

りまして、

番「おや能く来なましたネ、上んなましよ」

正「佐羽^{さば}さんに誘われて慾張り^{かた／＼} 旁々 桐生へ往^ゆきましたが、一^お

昨日^{と、い}歸つて松新で聞きますと、花魁が御病氣で山谷のお寮^{いら}に在つしやるといふ事ですから、早速お見舞いに出ましたので」

番「やつぱり一件の事だから仕方がないの、九月の一件から段々と病氣になツちまつて、本当に可愛相に、他の花魁と違って素人も同じ事だから、一時^{いちじ}に思い詰るのは尤もだが、氣の晴れることは些^ちツともないんぎますよ、まア正孝はん上んなましよ、彼^{あすこ}処に立つてゐる人は何」

正「あれは途中でヒヨイと逢つたんですが、大変な奴なんで、ズ

ボウな酷い奴で、先方から慣々しく一緒に連れてツて呉れろというからお前花魁を知ってるのかえと云うと、お目には懸らないが、ちよいとお目に懸って置くと、廊下でお目に懸っても沽券が宜いッてんで無理に従いて来たんで」

番「宜うございますよ、淋しい処だから呼びなましよ」

正「中々大変な奴で、御病気の処なぞへ呼ぶ奴じや有りやせん、変なやつなんで、表具屋徳兵衛とかいうので、表徳というんだそうで」

番「宜うございますよ、此方へ上んなまし、ちよいとヒョットコさん、おや御免なまし表徳さん這入んなましよ」

徳「へえ御免なさい、誠にどうも、今山谷橋で大師匠に逢って聞

いてすっかり驚いちまつて、只アーツと云つて鬱ふさいじまつて、小さくなつて師匠あとの後から従いて来るくらいな事で花魁の御様子を伺うかい、お脈を拝見したいというわけで」

正「そんな大きな声をしてはいけないよ、花魁は鬱ふさぐ病だから、チト神妙にして、少し待つておいで」

徳「好いい屏風だネ、金地に牡丹の花があつて、赤い尾を振り舞してるのは猩しょう々／＼でげすかえ」

正「ナンノ石しやつき橋しょうだよ、え御免なさいまし」

番「此方こつちへ這入んなまし、花魁正孝はんが来たの、そこへ這入んなましよ」

というので、通つて見ると、病間いりかわは入側か附わきの八畳の広間で、

花月床かげつどこに成つて居ります。前に褥とこを取り、桐の胴丸形がたの火鉢へ
切炭きりずみを埋いけ、其の上に利休形の鉄瓶がかゝつて、チン／＼と湯
が沸たぎつて居ります。十一月の事で寒いから二つの布団の上に小
蒲団を敷き、藤掛鼠ふじかけねずみの室着へやぎの上へ縫ぬいもようの搔卷袍かいまきどてらを羽
織り、寒くなると夜着よぎをかける手当が有ります。床には抱ほう一
上しょうにん人の横物よこものはとりまして、不動さまに道どうりよう了りようさまと塩竈しおがま
さまのお輻ふくと掛け替り、傍そばに諸方から見舞に來た菓子折が積んで
有りまするが、蒸菓子の方は悪くなるから先へ手を附け、干菓子
の方は下積したづみに残つて居ります。其の他道了さまのお丸薬に帝
釈さまのお水が有りまする、此方こちらの唐木からきの違ちが棚いだなには、一切煎
茶の器械が乗つて居りまして、人が來ると茶盆が出る、古染ふるそめつけ附

の茶碗古薩摩こさつまの急須に銀瓶が出る、二ツ組の菓子器には蒸菓子と
 干菓子が入つてありますという、万事手当が届いて居ります。
 若草は藤掛色の室着を羽織り、山繭やまゝゆの長襦袢に、鶉ときいろ色のしご
 きを乳の下から、巾広にして身重の腹を締めて居ります。髪は
 乱れたのを結び直して、また毀れたこわので鬢びんの毛が一杯に顔から襟
 に掛つて居りますが、美人の煩つてるのは酷く美よいもので、色
 の青い上に少し黄ばみがあります、身重になりますと、いやアに
 生白くなりますもので、黒檀柄こくたんえの火箸を一膳火鉢の中へ突入
 れて之を杖に額を当てゝ、只伊之助の事ばかりくよく〜と思ひ続
 け、泣いてばかり居ります。

番「花魁アノ正孝はんが来なましたよ、松新で花魁の病氣のこと

を聞いて、好^{すき}なものを持って来なましたから起直^{ちつ}つて、些と氣の紛れるようにしなましよ、花魁お起きなましよ、そう遣^はつて居ると火氣が顔へ當^あつて逆^{のぼ}せ上るから顔を上げなましよ涙で灰がかたまるぎますよ、正孝はん此^{こつち}方へ這入^こんなましよ」

正「へえ花魁誠に御無沙汰を致しやした、斯んなにお悪くはないと思いましたが、大層お悪い御様子で、時々お起きなすつて、斯う遣^はつて坐^まつて入^いらつしやるのですか」

番「しようなないの、おまはんは知るまいが、本当に腹の立つ事があつて花魁の病氣も重^{おも}るだろうと思ふ事があるの、あのね此の間田舎の叔母さんと呼んで向^むへ遣^はつた処^{ところ}が、突^つ転^{ころ}ばして返し、吉原のよの字も若草のわの字も忌^{いや}だと云つたとかいふ事を、叔母

さんは正直だもんだから其の通り花魁に話したから、それから些ちつともお飯まんまがいけないの」

正「若旦那の堀切に入らつしやる事を些とも知りませんでしたがおと、い一昨日帰つて間もなく桐半きりはんで聞いたくらいの訳で、お見舞に往ゆきたいと思つてますが、そんな奴が這入つてゝ詰らねえ事を云うから困るんです、尾に尾を付け、輪に輪をかけて事を大きくするようなもので」

番「花魁、正孝はんが面白い人を連れて来なましたよ、ヒョットコさんとか何とか云うお酒に酔つてゝ面白いことを云うの、正孝はん呼びなましよ」

正「あれは此処へ入れる人間じゃございません、花魁の御様子を

見まする所では中々入れられませんかから止しましょう」

番「這入んなましよ、アノ、チヨイと表徳さん這入んなましよ」

徳「へいこれはどうも、御免を蒙ります、これは始めまして表徳

で、只モウお酒が好きだから、表徳^{ひようとくたいしゆ}大酒のお開帳が始まりま

したくらいのもので、花魁の御病氣の御様子聞いて……お医者

さまをと仰しやれば、私は余程名医を知つて居りますから、佐藤

先生でも橋本先生でも淺田先生でも、直^{すぐ}に往つて来いと仰しやれ

ば、ヘーツてんで直に先生の手を持つて引張^{ひっぱ}つて参ります……こ

れは驚きました、これは大変な御病氣で」

正「神妙にしてくれなくツちやアいけねえぜ、御様子が是れだか
ら」

徳「これはちよつと驚きました、両国の花火で船と川ばかりで」

正「詰らねえ洒落を云つてはいけねえ、若旦那は堀切へ押込めにおなりでも、お宅^{うち}がお宅だから何うかなりそうなものですよ」

徳「堀切へ押込められたという若旦那は、紀伊國屋の若旦那かえ」

正「イヨ是れは感心^{きみ}く^きだ、公は紀伊國屋の若旦那のことを知つてるのは感心だ」

徳「師匠、エお前は知つてるのかえなど、云われるくらい強氣^{ごうぎ}と

詰らねえものはないがネ、私も紀伊國屋の若旦那を知つてるところ

じやアない、紀伊國屋は幫間^{たいこもち}の方ではないが、経師屋^{きようじや}の方で

お出入だ、あの十畳の広間は、表徳当月の二十八日までに天井を

凸凹^{むら}なしに遣つてくれ、へえ、宜しい心得たというので遣つたが、

あのくらいな若旦那は沢山ない、男が美くつて厭味が無くつて、
身丈せいかつこう恰好よが好くつて、衣服なりが本筋で、持物が本筋で、声が美くつ
て、一中節ちゅうぶしが出来るといふのだから女はベタ惚れ、うっかり外を
歩くと女が打突ぶつつかつて来て女の瘤こぶが七つも一緒に出来るといふく
らいの若旦那だが、済すまして、其様そんなに安く売る身体じゃアねえと云
つてゐるくらいのもので」

正「実に若旦那の事を知つてゐるのは感心だね」

徳「あのくらいな若旦那を押込めたのは解らねえので、併しかしお父
さんは固いから大切だいじにしてゐる処へ、芸者だか何んだか知らないが
惚れた奴が出来て、其処そこへスタくコラくを始めたゆえに堀切
へ押込められた処が、心持がわるいもんだから塩梅が悪くなり、

看病人は誰が宜かろうというと、深川の刀屋のお嬢さんは許嫁だからと云うので、これが看病人に来た」

正「イヤこれは何うも驚いた、饒舌家おしゃべりだから直じきにすつば抜きをして困る、大変なものを連れて来た、表徳さん下がろう」

徳「花魁かれいに聞かし度たいねえ、若旦那の飯の喰くいツ振ぶりが氣に入つちまつた、鰈のお肴か何かの時は其の許嫁のお嬢さんが綺麗に骨を取つて肉みをむしつて、若旦那私がむしつて上げますと云つて、丁寧にむしつて出すのを、甘えうめくと喰うくらいの事じゃねえ、余あんまり仲が好過よすぎてネ、遂々とうとう赤ん坊が出来た」

正「おや大変くお出でよく」

と無闇に外へ連れ出し、

正「恐入ったネ表徳さん、主は困るじやア無えか、主は伊之さんの事を知って居ながら花魁の事を知らずかえ、伊之さんと花魁とは夫婦同様の仲で、勤めの中で伊之さんの胤うちを宿してるのに、伊之助さんから何とも音信おとずれが無いので、花魁は煩たねってるのだ、公酷きみいネ、許嫁のお内儀かみさんが来て居るばかりではなく、御飯おまんまの喰ッ振から赤ん坊の出来たなどは余り手酷いじゃないか」

徳「これは恐れ入った、そういうことは知らずに云ツちまったが、これは驚いた、もう一遍往って云い直して来ようか」

正「猶悪い」

とよう／＼二人が表へ出た跡で、若草は事の間違いより伊之助を怨み、伊之助のところへ若草の怨霊が出ますというお話でござ

いますが、一寸ちよつとと息吐いて申し上げます。

十四

幫間たいこもちの正孝と表徳が歸つた跡で、若草は伊之助が許嫁の女房を
 呼んで、我物顔わがものがおたのしに楽しんで居る、それゆえ叔母さんが往つた時に
 も、自分が出て逢おうでもなく、不待遇ぶあしちをしたうえ、叔母さん
 の胸倉を取つて表へ突出し、疵まで附けて歸すような不実な人と
 も知らず、生涯身をまかせようと力に頼んだは私の過りあやま、主人に
 も朋輩にも義理の悪いようになったは、皆みんなな私が思い違いである
 が、そればかりでなく、七月ななつきになる胤たねまで妊やどしたは情ない、何

うしたら宜かろうと、胸に迫つて只身がこうブル／＼と顫ふるほど口惜しかったと見えます。若浪は真実に介抱を致します。番頭新造というものは只今ではございませんが、前には有りましたもので、この若浪は花魁の為に身を粉に砕いて心配を致します真実なものでございます。

番「申し花魁、おまはん今あの話を聞いて嘸口惜しかろう、あの正孝も正孝だよ、くだらない奴を連れて来てサ、いけ騒々しいベラ／＼喋べって、彼様な奴を連れて来たからいけねえのだ、悪らしいよ、花魁ばかりでなく私も本当に腹が立ったの、能く考えで見なまし、これまで伊之はんの事で気を揉んでいるのも知らないで、許嫁の女房を自分の傍へ引寄せているということを聞けば、

誰だッて腹の立つのは尤ももつとぎます、私もしみじみ腹が立ったから、花魁伊之はんのことをフツツリ諦めてしまいなまし、伊之はんの事を諦めて、胸にさえ思う事がなければ、おまはんの病氣は癒なおるとお医師いしやさま様がそう云ったじゃア有りまへんか、兎も角も身二つに成ツちまつて、病氣も癒り、元のように仲の町へ出てサ、おまはん善い人を取留とりとめて立派なお客に身請をされて、あんぽつにでも乗り、黒鴨くろかもを連れて紀伊國屋の前を是見これみよがしに通つてやんなまし、本当に口惜しいんですが、おまはんのようにそうクヨクヨしてえると身体に障るばかりじゃないよ、たゞの身体じゃアないから、確しつかりしておくんなましよ、花魁、何うしたの、しつかりおしよ……花魁……花魁」

と云われ若草は苦しい様子で、

若「あいよ、私は本当に馬鹿に成つたの、能く素人は女郎じやうろはお

客を誑だますなど、私も素人の時分には云つたけれども、私ばかり

はお客に欺だまされて、主人にも朋輩にも済まない義理になり、其の

うえ斯んな身重に成つて、今更何うする事も出来ない身の上に成

つた者を振棄ふりすて、許嫁のお内儀かみはんを自分の傍へ呼んで置き、

私の方へは文一本遣よこさずに、そのお内儀はんと楽たのんでいる伊之は

んの心がしみ／＼怨めしい、私は考えれば考えるほど口惜しゆ

うぎます、伊之はんに欺されたのが口惜しゆうぎますよ」

番「ア、そうとも、本当に可愛相ぎますよ、本当におまはんは口

惜しかろう、だが彼様あんな人は諦めておくんなましよ、確しつかりしな

ましよ、おまはんも親族みより兄弟もなし、私わちきも親族兄弟がないから、
 お互に素人に成つたらば姉きようだい妹いもになろうと、おまはんがいいな
 ました時には嬉しいと思つていたんぎますよ、済まないがおま
 はんを妹いもとのように力に思つてゐるのだから、伊之はんの事さえ諦めて
 おくんなはれば、おまはんの病氣も癒るのだよ、身体が達者にな
 らないと身二つになる事が出来まへんよ、お願いぎますから確か
 りしておくんなまし……花魁何うぞしなんしたかえ……花魁、花
 魁」

若「あい……思えばく不実な……怨めしいは伊之助はん」

と四辺あたりを見れば腹の立つは、伊之助と若草の比翼紋の附いた物
 ばかり、湯呑から烟管の彫ほりから烟草入から、傍そばにころげて有る塗ぬ

りまくら

枕の金蔴きんまきえ絵の比翼紋を見て、

若「ア、此の比翼散しも徒どもら事になつたか、怨めしい、それほど

不実の人とは知らず、勤つとめの中一夜でも外ほかの客へは交かわさぬ枕」

としけ／＼枕の紋を視詰めて居ましたが、火鉢の中へ黒檀こくたん

柄えの火箸を突つ込み是を杖にして居た故、力が這入こつて火の中へ

這入り、真赤まっかに焼けて居おる火箸を取つて、

若「おのれ伊之助さん、譬たとえ許嫁の女房でもおめく添わして置

こうか、怨めしいのは伊之助はん」

と塗枕の比翼紋の、男の紋の方へ火箸をあて、ジーツと力に任

せて突ツ通すと、プーと烟けむが顔へかゝりました。若草は鬢びんはつ髪を

逆立て、片膝を立て、怨めしそうに堀切の方を延のび上あがつて見詰め

た時の凄^いこと、実に生^{いき}ながらの幽霊でございます。

番「申し花魁、確^{しつ}かりしなましよ花魁……何うしなましたの、確かりしなましよ花魁、そんな姿になつて氣でも狂つたら何うしますえ、しツかりして呉^{おんたけさん}んなましよ花魁……エ、あの娘^こや、何うしたんだねえ、御嶽山のお水を持つておいでよ、なにをグズくしてゐるんだよ、今ツから居寝^{いねむ}りなんぞしやアがつて、花魁、しツかりしなましよ、サこれを呑んで氣を附けなけりやいけまへんよ花魁」

若「あいく」

若浪は若草を抱き上げ、湯呑を口に宛^あてがうとゴツクリと一口水を飲み、フーくという息遣いでございます。暫くして、

若「若浪はん、私は伊之さんのことは、今日からフツツリと思ひ諦めたから、サバ／＼したんぎますよ、今夜はとけ／＼と寝られようかと思うんぎますから、少し脊中を撫さすつてくんなまし」
番「宜うぎます、少し落着いて寝てくんなましよ、落着くとおまはんの病氣もなおるんぎます」

若「じゃア枕つに着いて横に成りましょう」

番「然そうしなまし、私わちきが附ついてるから大丈夫ぎます」

と慰めながら若浪が頻しきりに撫なつて居りまする内に、次第／＼に若草はスヤ／＼と疲れて寝る様子ゆえ、伊之さんの事を諦めて能よく寝てくんなますかと若浪も心嬉しく、看病疲れにグツスリと寝附くと、真夜中に若草そつと起上つて匿かくしてある手箱の中から取出

したは、親鋏鍛冶金重が鍛えたる、小刀には大きいが短刀には少し
 小きき、金重と銘の打った合口で、金重の歿みまかるときに、女の嗜たしな
 みだから、これを形見にとて譲られた合口を持ったなり、褥とこをい
 ざり出て、そつと音のしないように雨戸を明け、室着へやぎの儘で裾すそを
 敷いたなりで、そろ／＼と飛石とびいしづた伝いに、敷松葉しきまつばの一ぱいに敷
 詰めて有る横庭に下りると、余り大きくは有りませんが、葉のこ
 づんだ赤松が一本有りまする処まで参り、ホツと漸く息を吐ついて、
 鉢前のゴロタ石を拾つて左の松ヶ枝に合口を宛あてがい、片手には石
 を持ち、

若くちおし「口惜い伊之助はん、人に怨みが有るものか無いものか、今に
 思い知らせる、覚えて居なまし」

と云いながら打附うちつけると、若草は病に疲れて居りますから其の儘コロ／＼と敷松葉の上に転がったが、また松ヶ枝に掴つかまって漸く起き上り、石を持ってまた打うちつけて伊之助を呪いのる、精神の恐ろしいことには、伊之助は瞬またゝまく間に左の足が痛んで来るといふ怪談の処は後あとに致して、此処でお話が二つに分れて、稻垣小左衛門は百日経つても國綱の一刀の行方が知れず、手掛りが頓とんとないので、家事不取締り、不埒至極の至りで有ると云うので、追放仰せ附けられ、致し方がないから旧来居りまする家来は残いとまらず暇を出し、諸道具は知る者の処へ預けたり、要いらん物は皆売払いました。すると丈助しょうすけと申す新参ではございますが忠義な家来が有りました、

丈「私は貴方のお傍は離れません、若旦那のお帰りまではお傍にお付き申します、何うぞお連れ下さいまし」

小「連れて往きたいが何処へも往く処がない」

丈「私の在所は葛飾の真間の根本ゆえ、明家が有りましようから往かつしやいまし」

小「私は商いを仕様とも、日雇取をいたしましても、あなた御ひとりだけはお過し申します」

というのでこれから、入用の手荷物だけを船へ積んで、真間の根本へ参りますと、幸い明家が有りましたから、名主へ話をして店を借りましたが、其の頃は武家というのでお百姓は驚いて居りますと、鎗が来たり鎧櫃が来たりするから、近辺では大

したお方だと尊む^{とうと}ことで、小左衛門は金も沢山持つて居りましたろうが、坐して食^{くら}えば山も空^{むな}しの喩^{たと}えでございますから、何か食い続きの出来るようなことは有るまいかと云うと、丈助が私が商いをいたしましょう、少し店^{みせ}を直せば宜うございますと、是から大工を呼んで来て模様替の造作をして、商売の出来るように致しました、この丈助は男でありながら煮炊^{にたき}をしたり、すゝぎ洗濯までいたします。夜は御老体ゆえに腰^{こし}などを撫^{さす}つて上げるといふ、実に忠義一筋なことでございます。商売を致しますところが、勝手を心得ませんが、稻垣小左衛門は重役のことで困^{かた}らん方ゆえ、丈助や商いをするなれば高く売つてはならんぞ、廉^{やす}う売れ、そうすれば買う者も助^{こちら}かり此方も益になるのだ、何でも身体に骨を折

つて施しと心得て廉う売れと言付かり、滅法安く売るので、諸方へ知れて方々から買いに参ります。市川新田、八幡、船

橋、国分村、小松川、松戸辺から買いに来ます。大した繁

昌で、田舎の店では種々な物を売ります、酒、醤油、味噌、飴

菓子、草履、草鞋、何となく売ります、末には丈助は朝から晩

まで手廻らないように売れますと、近辺の商人が売れなくな

つて困るところから、寄合を附けました。

甲「帳元さん、マア何ういう考えか知んねえが、先方へ往つて話

いしたところが、元侍だから駄目だよ、商売などはしたくはねえが、

食い続きが出来ねえからするんだ、安く売ったツて、なにもお前

等の方で咎める理合はあんめえてエいつて掛合に往つたつて駄

目だハア」

乙「お侍さむれえでも仮令たとえ百姓でも理合りええに於て二つはねえ、おらツちが商しようべえ

売うをするツて、えらア田地でんじイ持つてるものはねえから、世間並に売れば宜いいに、法外ほうげいに安く売るもんだから、己おらの方が暇になるのだから、何も商売しょうべいを止めるじやアねえが、仲間入をして帳元並みに売つて貰もれえてえといつたら解ろうに」

甲「それを云つたがだめだよ、安く売つたつて己おらを咎める理合りええは有んめえ、何で咎めるかサア返答ぶて、斯う云う、己さむれえア元侍だ、百姓風情が兎や角こう咎めだてをすれば打斬ぶちきつてしまふと脅かすだア」

丙「だからよ商売あきねえを止めるじやねえが、仲間入をして世間並に売

つて貰^{もれ}えてえて云うに、打斬^{ぶちき}るてえ理^{りええ}合は有んめえ」

甲「此処でそんなに呶^{がな}鳴つても先^{むこう}方まで聞えねえ、作^{さくえもん}右衛門どん、

お前^{めえ}さんは年寄では有るし、月番だから先方へ往つて言^{ことやわら}柔か

に話をぶツて来て貰^{もれ}えてえが、往つて来ておくんなせえな」

作「先^{せんぼう}方へ往つて話をするんだがネ、元^{さむれえ}は侍だが食い方に困るか

ら商^{しょうべえ}売をするツて、それを咎^{とが}める理^{りええ}合は有ンめえと云う処を

押して、此^{こつち}方で兎や角^こういえば殺されると云うんだ」

と評議の永い事滅多に押^{おつ}附きません。作右衛門は頼まれたから

仕方なく遣つて参りました。

作「ハイ御免なせえ」

丈「入つしやいまし、何を上げますナ」

作「買物買いに来たのじや有りませんが、少し旦那様にお目に懸
つて、お談し申してえ事が有つてめえりました」

丈「なる程、何方どちらのお方で」

作「ハイ当村で酒渡世を致します作右衛門と申すものでござえま
す」

丈「左様でございますか、旦那さま村方のお方がおいでござい
ます」

小「そうか、さアく此方こつちへ御遠慮なく」

作「先ず天気イ続きます」

小「ハイ私は新参もので、当所不慣ゆえ何かと又村の衆には御厄
介になります事もございましょう、幾久しゅう御別懇に願います、

只今では改名していながきやこすけ稲垣屋小助と申す、慣れない商売をいたしま

するもの、何かとまたお指図を願います」

作「ハイ今こんにち日ひ出ましたのは他ほかの訳でもございせんが、ソノマ

アお前めえさま様はお侍さむれえのことで商売あきねえのことは御存じも有りますめえが、

江戸しようばいの商売と違ちがえまして、田舎では商あきんど人の仲間に帳元と云うも

のが立つて居りやして、その帳元へ寄よりええ合あひをして、何処どこに市が有

ろうとも十じゅうや夜やが有ろうとも、皆帳元の方から、何どの品物は幾ら

に売れと云う割わりええ合あひを持って出る訳で、帳元へ這入らねえと商あきねえは

出来ねえ訳でござえますが、それを御存じねえから、成なるたけ廉やすく

売こるので、遠くから買こいに来るようになったので、村方こあきなの小商

売いをするものに田地をえら持つてゐるものは有りませんから、お

らア方へ買^けえに來ねえで誠にハア食^い方にも困るような訳でござ
えますから、何うかマア商^{あきんど}人並に仲間入りをして、其の上で何
うか帳元並に売^{もれ}つて御貫え申せば宜^いいので、帳元が立つて居りま
すから、私^{わし}と一緒に直^{すぐ}においでなすつて、商^{あきんど}人の仲間入りを願^{ねげ}
えてえで、帳元總^{そうでえ}代に作右衛門が出てめえりました訳で、どう
か何分御聞き濟みを下されば、誠にハア皆も悦ぶことでござえま
す」

十五

小「至極御尤もなことで、イヤモウそれで御座いましょうが、と

んと手前てまい商いのことは知りません、家来がやると申すので始めま
 したのだけでも、廉やすう売るのを咎めるのは些ちと訝おかしいように心
 得ます、私が物を廉く売ると申して無闇に廉く売るのは有りま
 せん、多分に買い出すと廉くなる上に、多分の利を見ずに廉う売
 るので、諸方より多人たにんず数買いに来るから、骨は折れますが、斯う
 いたせば買うものも益になれば、私も益になります次第、それを
 悪いとおツしやれば、それは商人あきんどの仲間入もしたいが、ちと致
 しにくい、何故なぜと申すに、商人の仲間入を致しては何うも私わしが古
 主しゅへ帰参の妨げになります、今にもお召返しになれば鞍置馬くらおきうま
 に跨またがり、槍を立て歩く身のうえ、然しかるに食い方に困つて十夜や
 祭の縁日なぞに出て、香具渡世こうぐの仲間入を致したといわれては、

何うも同役の者に聞えても恥はずるわけなれば、仲間入の儀は平ひらにお断りを申します、あなたも安く売るときつと売れますよ、高く売れば品は沢山たんと出ない、たまひとつく一か二つ出ればそれで沢山たくさん儲けて沈おちつ着いて在いらっしゃるが、私わたしどもはガチきつとくして安く売って、利を数で見えて居りまする、あなたの方でも安く売れば屹度きつと売れますから安くお売りなさい、だが仲間入の処は平にお断り申す、何うぞ帳元へ宜しく」

作「ハア駄目だア」

と仕方がないから立帰つてこの由よしを話すと、皆みんなな腹を立て、これは捨置かれん、何うしたら宜かろうと云うと、国分村に萩はぎわ原らつかね束たけという浪人が居りまして、貸かしきん金の催促方なぞに頼まれ

て掛合に往ゆきまして、長柄ながつかへ手を掛け、威おどかして金を取つて参

りますから、調法ゆえ百姓が頼みますので、萩原さんを頼んで掛合に遣ろうと云うところから多分の鼻薬を遣つかわしたので、

東「宜しい、武家と申してお百姓を威かし不法な事を申す、手前てまい掛合つて仕儀に依つては、素首すこうべを打ち落して見せる」

と是从萩原東が真赤まっかに酔つて、耳のあたりまで真黒まっくろに頬ほ

髭げの生えている顔がん色しよくは、赤狗あかいぬが胡麻汁を喰つたようでござ

います。盤台ばんだい面の汚い齒の大きな男で、朴齒ほうばの下駄はを穿き、

脊割せわり羽織ばおりを着て、褌ひだの崩れた馬乗袴うまのりばかまをはき、無反むぞりの大刀を

差して遣つて参り、

東「御免下さい」

丈「入らっしゃいまし、何を上げますな」

東「買物かいもの買ではない、御主人へ会いに来た、国分の萩原束と申すものである、宜しく」

丈「旦那さま、国分の萩原束とかいう浪人ものがお目に懸りたいと申して、真赤な顔をして、袴を穿いて、長いのを差して、居合抜き見たような方が参りました」

小「此方こちらへお通し申せ」

というので丈助は出て参り、

丈「此方へお通りなさい」

東「御免を蒙る」

小「さアどうぞこれへく、好ようこそのおいで、手前てまいは稻垣屋小

助と申す小商売を致すもの、此の後とも御鼻屑に御用向を仰せ聞
けられますように」

東「ヤア是は始めまして、手前は国分に居る萩原東という浪人の
身の上で、其の日の食い方に困る、それが為に実は御繁昌な商
人へ無心に参るので、あなたは夫として御繁昌で、実に何うもお
忙がしい事で、それゆえ御無心に参つたのだが、何うか浪人の身
の上を憐れ不便と思召してお恵みを願いたい、お聞済み下さい」
小「ハ、ハ、左様でございますか、併し何う致しまして、人さま
へお恵み処では有りません、自分の食い方に困るところから漸く
小商売を致しますくらいで、自分の腮が干上りますくらいの訳ゆ
え、外の又御繁昌なお商人へ往つてお頼みが宜しい」

東「イヤ是非とも願ひ度たいネ、何処の店でも店開き当日には先方から手てまいかた前方へ頼みに参り、間違ひでも有つてはならんからと、店番をして呉れろと云つて、拙者は何処へも頼まれて往ゆく、と申して酒が貰いたいという訳ではないが、貴公は村方の帳元へ一言はなしの談もなく、勝手次第に窃ぬすんで来るか知らねえが、方外ほうがいの廉やすう売りをするので、村方あきゆうどの商人一同迷惑を致して居おるくらいだから、是非とも願う、お思召ぼしめしを下さい」

小「左様なら心持で宜しいか」

東「宜しい」

小「これ丈助」

丈「へえ」

小「錢ぜに策の中から錢を三文持つて来い」

丈「へえ」

と持つて来ましたのを態わざとからかいに小左衛門は東の前へならべて、

小「甚だ輕少ではござるが、ホンの心ばかりで」

といわれ萩原東は怒氣面おもてに現われて、

東「此奴こいつ愚弄致すな、此の方も武士でござる、イヤサ拙者を三文や四文の錢を貰いに参った乞食と心得て居おるか、宿無じゃア有るめえし、三文計りの錢を出すとは無礼至極な奴だ」

小「でござるから只今承わったので、心持で宜よいと仰しやツたから、私の上げたい心持は三文で、モウ五文とは進あげられん心持で、

それゆえに多分のことは出来んと前々からお掛合申したところ、心持で宜いと仰しやつたから出したが、それが悪くば其の余はな
りません」

東「黙れ、これ手前はてまい銭ぜにかね金を無心に参つたのではないが、村方

の商あきんど人が難渋を致す処から再度掛合に参つても侍を権にかい、

土民輩ばらあなどと侮つて不法な挨拶をして帰すので、村方の商あきゆうど人が難渋致

すによつて、拙者に掛合つてくれろと申して参つたから出たのだ

が、今こんにち日あきゆうどから商人の仲間入をして帳元並に売ればよし、左もな

くば三文出して束を乞食扱いにしたから容赦は致さんぞ、拙者も

武士だ、免ゆるさんぞ、浪人しても萩原東大小を質には入れん」

と云いながら眼を怒らし肩を張り、長刀を引附ける。

小「ハ、ハ、ハ、それじゃア何んですかね、侍は浪人を致すと皆
 大小を質に入れて、お前さんばかり質に入れんと云うので、貴方
 は鼻高々と然^そう云われるか知らんが、手前も元は侍、今は浪人し
 て斯^かく零落の身に成つても大小は未だ質入れは致しません、幾^{いくぶ}
 口^りもございます、先祖伝来の品もござる、御覧に入れましよう
 か、鎧^{よろい}櫃^{びつ}も有る、鎗も是に懸り居ります、傍^{かたわ}らにはこの通り
 種子ヶ嶋の鉄砲に玉込もして有る、狼藉者が来てゴタ／＼致す
 時は、止むを得ずブツ払う積りで、火縄を附ければ直^{すぐ}に射てるこ
 とに成つて居る、それが如何^{どう}致した」

と束の胸先^{ねらい}へ狙^{ねらい}を附けましたから驚いて、

束「暫くお待ち下さいまし、手前喰^{てまいたべ}酔^よつてまいりまして、兎や角、

御無礼を申し上げ、お氣に障ったかも知れませんが、其の段は幾重にもお詫をいたしますが、暫くお待ち下さい、何ういう機みで玉が出まいものでもない」

小「いえく狼藉者が参つて兎や角申せば、この引金をガチリと押せば玉がパチンと出て、貴方の鳩尾辺へ中るように……」

東「マアく暫く、何ういう機みで玉が出まいものでもない、拙者喰酔つて参り御無礼を致した段は幾重にもお詫び申すからお氣に支えられせんように危いと申すに」

小「左様なら拙者が心ばかりの三文を持って往つて下さるか」

東「へえ頂戴致しますく、有難いことで、何れまた出ます、鉄砲は危ない、怪我という事がありますから」

と萩原束は真青まつさおになつて歸りました。

小「丈助何方どっちの方へ歸つたの」

丈「国分村の方へ歸つて往ゆきましたが、馬鹿な奴ですナ」

小「村方の商あきんど人に頼まれて来たんだの、悪い奴だ」

丈「来た時には真赤な顔をして来ましたが、歸る時には真青になつて歸りました、逃げて歸る時には刀の長いのは見つともないので」

小「馬鹿な奴を玉込もしない鉄砲でおどして遣つた」

と此の事は稻垣小左衛門が勝つて笑つて居りましたが、さて物は負けて置きたいもので、これが稻垣小左衛門の災難の始まりで、遂に命を落す程の事になるという、仇あだうち討こぐちの端緒でございます。

十六

さて引続いてお聞に入れました松葉屋の若草は、伊之助を咀^{のろ}い
まして、庭の松の樹^きへ小刀を打ち付けるといふ処まで弁じました
が、この小刀には金重と銘が打ってございます。これは若草の
親の作で、女の身^{みだしな}嗜^{さくもの}みだと云つて、小刀には余程大きい、合口
には些^ちつと小さいが作^{さくもの}物でございます。是を形見として娘お富
へ呉れましたのを打ち付けたので、先^{せん}達も福地先生から承^{せん}わりま
した^{たいほうりよう}が、大^{たい}宝^{ほう}令^{りよう}とか申しまして、文武^{もんぶ}天皇さま時分に法則も
立ちまして、切^{きれもの}物^{たとえ}は仮令^{たとえ}鋏でも小刀でも刀でも、我^{わが}銘^{めい}を打つ事
に致せといふ処の法令で、是だけは、只今^{だん}漸^{／＼}々世の中が開け

まして、外国の法に成りましたけれども今に残り居りまするのは、
 鍔でも、ちよつと十錢ぐらいのさすが小刀のようなものでも銘が打つて
 ございます、二千年も昔からいくせ幾世將軍の代る度たびに法則は變りました
 が、こればかり今に残り居おるといふのは誠に妙なことでござい
 ます。此の若草が松ヶ枝に金重の銘のある小刀を打付け、精神を
 凝こらして呪いました、丁度廿一日目の満願の日に當つて、伊之助
 の足の左の親指が痛み始めてまいりましたが、酷ひどく痛み出し、堪こら
 え兼かねます程でちよございます。親父も一人息子の事だから心配致し彼あ
 方ちよ此方から名医を頼んで来て見せましたが、其の頃はまだ医術も
 開けません時分ゆえ頓と分りません、是も敢あえて若草が松の木へ小
 刀を打ち付け、伊之助の足を呪つたためでもございますまいが、

或^{ある}お方は理が有ると仰しやいました、樹^きと云うものは逆さまに立
つて居るもので、根の方が頭で、梢^{こずえ}の方が足だと云いましたが、
そうかも知れませんが、根の方で水^{すい}氣^きを吸い揚げ、漸々手足へ登る
ように枝葉の繁りますので、人間も口で物を喰い、胃でこなし、
滋養分は血液に化して手足へ循環致すと同じことで、相^{そう}という字
は木篇に目の字を書きますが、坐相^{ざそう}寝相^{ねそう}など、いいまして、相の
字は木へ目を附けた心だといいます、御婦人の寝相が能くなく
つてはいけません、男の坐相の宜^よいのは立派なもので、お立派な
方が坐ると、ウンと両膝を開き、下腹を突き出し、腰を据えてい
らっしゃいますから、山が揺^ゆり出して来たよう、押^おても突いて
も動かんように見えます、誠にお立派なもので、私^{わたくし}どものよう

に膝を重ねて坐り、ヒヨイと触つても仰向あおもむけにひっくりかえるような危い形は余り好く有りません、又御婦人の寝相は至つて大切なもので、お嫁に入らしつてもお寝相が悪いために追い出される事が有りますから、夏なつむき向むきなぞは寝相を能くしないといけません。悪くするとお母さんつかからお前枕を頭へ結い付けて置きな、足を結しばつてお寝なぞとお小言が出ますが、これは誠に感心致しませんが、これで、伊之助は何ういう訳だか左の足が痛み出しましたが、これは若草が松の枝へ小刀を打ち付けたのが感じましたものか、また、然そういう病が発する時節になったのかも知れませんが、一通りならん痛みでございますゆえ、名医が来て段々みこれを診ると、脱疽だっそという病で、其の頃脱疽の治療などは長崎へ往ゆかなければ見るこ

とは出来んそうで。

医「先ず是はどうも極難症で、脱疽に相違ない、至極の難症にして多く鬼籍に入るを免れずと医書に有る、鬼籍というのは過去帳のことで、仏さまの過去帳につくを免れずと云うのは死ぬより他に仕方は無いが、最初の内早く切断法を施せば全治を万一に見ることが出来よう」

と、種々いろいろむずかしい講釈が有りましたが、切るのは否いやだから、神信心を致したり伺うかゞいを立てたり、種々な事を致しますと、
どこ
何処で伺を立て、御鬭判断みくじをして貰つても死霊と生いきりよう霊との
祟りだと云われて見れば、神経だから家うちじゆう中が心配致し、事によつたら吉原の花魁が怨んでは居ないか、遊女というものは能く

人を祈るなどというから、祈ったのではないかと大番頭の安兵衛、伊兵衛始め一同心配して居ります事が、チラリと耳に這入りましたから主人も気にし始めると、トロリとすると夢に見る。また伊兵衛という番頭は若草の叔母を突出つぎだしたので、一層心の中で怖うちこわがつて居りますと、二階から毛が落ちて来たから手に取上げて見ると、ねば／＼と血が附いて居たなどというは、女中が室へやから下へ落したのかも知れませんが、然うなると、する事為す事怪しいことばかりでございます、翌年の二月になつても何うしても伊之助の足は切らんければならんと云うので、御名医が恐ろしく能く切れる刃物を持つて参り、御親類立合でなければならんと云うのですが、当たゞいま今などは切るのは造作もございけません。順天堂の佐さ

とうすゝむ

藤進先生は切るのは御名人でいらつしやいます、先達せんだつて私わたくしが

お宅へ上りました時に、鼻を高くして貰いたいと云うお方が来ま
したから、無理なことを仰しやると思つて見て居りますと、高く
成つたから不思議で、何うなさるかと思うと、額の肉を殺そいで鼻
へ附けて、段々高くしたんですが、飴細工みたやうで、少し腫できも
物が痛いのと云うと、フと斬つて、イヤ癒なおつたろうと云うのです

が、自由自在な事でございます。なれども昔は開けませんから苦
しんで居りまする、今親類立合と云うので、仕方がないからお父とつ
さんも出て来るやうなことに成りまして、皆心配して居りまする
と、吉原の櫻川正孝というほうかん幫間は親切な男ゆえ、菓子折を持つて、
其の頃のことだから小舟で見舞に堀切の別荘へ来ましたが、
幫たいこ

間^{もち} なぞというと、極^{ごく}堅^{うち}氣^きの宅^{うち}では嫌^{きら}う者^{もの}ゆえ、正孝は来は来たが、昇^{あが}つて宜^いいか悪^{わる}いか知^しれませんか、窃^そつと覗^{のぞ}いて見ると、頑^{かたくな}固^こな番頭^{ばんとう}の伊兵衛^{いべゑ}さんが上^うり口^{くち}の次^{つぎ}の間^まに坐^まつて居^ゐりますから、こわ／＼に門^{かど}の中^{うち}へ這^は入り、

正「へえ御免^{ごめん}、御免^{ごめん}下さいまし」

伊兵衛「ハイおいでなさい」

正「えゝ本郷^{ほんきやう}の春木^{はるき}町の、えゝ紀伊^{きい}國屋^{くにや}の伊之助^{いのすけ}さまの、えゝ御別^{ごべつ}荘^{しやう}は慥^{たし}か、えゝ、此方^{こちら}でございますか」

伊兵衛「へえ紀伊^{きい}國屋^{くにや}の別^{べつ}荘^{しやう}は此方^{こちら}でございますが、あなたは何方^{どち}から入^いらつしやいました」

正「へえ私^{わたくし}は、へ……廓^{なかつ}の幫間^{ぼうかん}でございまして、櫻川^{おうせん}正孝^{しやうかう}と申し

まするもので、若旦那様には種々御蟲屑を戴きましたから、疾うにお見舞に上りませんければなりませんのでございますが、斯ういう身の上でございますから遠慮致しまして、是まで伺いませんでしたが、大分お悪い御様子だと承りましたから、一寸御病間で、お顔だけでも拝見して帰りたいと存じまして参りました、これは誠に詰らないものではございますが、旦那様はお嗜で入らっしゃいますから、少々ばかりですが、ホンのお見舞のしるしまでに」

伊兵衛「ハア左様ですか、これは何うも、お名前は何んと仰しやいますえ」

正「廓の幫間で櫻川正孝と申します」

伊兵衛「少々お待ち下さい」

と伊兵衛が折を持って病間へ参ります。嫁のお雪が十畳の広間を往ったり来たりして不動さまへお百度をあげて居りますと、其の内だけ伊之助はトロく寝ねむられますから、寂しんとして居る処へ伊兵衛が参り、

伊兵衛「若旦那様おやすみでございますか、若旦那さま、若旦那さま」

伊「あいく、あゝ今少し寝付いた処なのに、大おおきな声をして起しちゃア厭いやだよ」

伊兵衛「何だか吉原から法印さまが入らっしゃいまして、御祈祷をして上げたいと仰しやいます」

伊「法印さまなぞを呼んじやア厭だよ、枕元でガチャ／＼お加持をするので、尚お逆せ上つて痛くつていけねえから止してくんな」

伊兵衛「何だかお見舞の印にお供物を少々計りだが、有難いのだから差上げると申しました」

伊「吉原から法印さまの来るつてえのは変だの、坊さんかえ、総髪かえ」

伊兵衛「いえ、それがどんずり奴なので」

伊「何んと云うお名だえ」

伊兵衛「正孝院さまとか云いました」

伊「ハ、ア分つた、お前は世の中のことを知らない人間だの、それは吉原の幫間たいこもちの正孝が来たのじやアねえかえ、幫間たいこもちの事は幫ほうか

間んというぜ」

伊兵衛「へい左様でございますか、一寸ちよつと往つて聞いて見ましよう」

と云いながら出て参り、

伊兵衛「へえ只今ツイお名前を伺いそくありませんでしたが、あなたは法印さまでいらつしやいますか」

正「へえくこれは何うも恐れ入りやしたネ、法印さまと間違えられたのは始めてゞ、尤も法螺を吹くから法印の形は少し有りませんが、私は櫻川正孝と申しますわたくしるたいこもち幫間でございます」

伊兵衛「へえ道理で、そんな事を仰しやいました、まアお上りなさいまし」

正「御免下さいまし」

伊兵衛「さア此方こつちへ」

と案内して廊下伝いに病間へ連れて参りまして、

伊兵衛「申し若旦那、正孝院という御方が入らっしゃいました」

伊「此方へお這入りく」

正「これは何うも大変にお悪いんでげすナ、其の後は誠ごに御無沙

汰を致しました、一寸ちよつとお見舞に上りたいと存じながら、斯うい

う身の上でございますもんですから遠慮をするだけ御無沙汰にな

りましたが、今日こんにちはお顔だけ拝見して、御病氣の御様子を伺う

心底で出しました」

伊「正孝能く来てくれた、たいこもち幫間も多い中で来てくれたのはお前ば

かりだ、己も足を切ると云う訳だが、皆道楽みんなをして親に苦勞させ
 た罰ばちだと思つてゐるがネ、能く来てくれた、緩り遊んで往ゆきねえ」
 正「御足おみあしを切るといふのは強氣ごうきといけませんから、切らずに御
 全快になるような事をお話し申したいんですが」
 と傍かたわらに人の居るを憚はづかる様子を眼で知らせました。

十七

伊「伊兵衛や彼方あつちへ往つてお茶でも入れて菓子あしの好いいのを貰つた
 のがあるから、あの甘味で茶の佳いいのを持つて来てくんナ、用が
 有れば呼ぶから……ピッタリ襖たてを閉めて行つておくれ……師匠、

もつと傍^{そば}へ寄りな」

と云われ、正孝は前へ摺寄り、伊之助の足の腫^{はれあが}上りし様子を見て、

正「これはどうも大変な色に御脚^{おみあし}が腫れましたね」

と云いながら四辺^{あたり}を見まわし、小声になりました、

正「時に若旦那お話を致しますが是れは御脚を切るにやア及びませんぜ、若旦那、あなたは松葉屋の花魁がおなくなりになったことを御存じないのでしよう」

伊「えゝ……若草が死んだかえ」

正「ホラ／＼御存じない、それだから知らないことぐらい仕様の無いものは無い、知らずに居ればボヤ／＼もえ出しますからね、

何ういう行間ゆきまちが違いか知りませんが、花魁はあなたのお胤たねを宿し
 てゝも、あなたが此方こちらへ御窮命になりましたから、日文ひづみやぶみ矢文を送
 りたくつても、そうもありません処から、花魁がくよくよく思い詰
 め、お塩梅あんばいが悪くなりました、てもなく恋煩いで、あなたの処へ
 人をよこしたくつても無闇のものを出されないから、堅氣の田舎
 ものが宜かろうと云うので、下総の矢切村にいる花魁の叔母さん
 を寄越しました、堅い叔母さんですが、全体若浪さんの思い付が
 悪いんで、その田舎の叔母さんを此方へよこしたのが間違いの種
 で、叔母さんが談はなしを付けにまいると、此方の奉公人が出て、強談ゆすり
 に来たとか云つて、御門の外へ投ほうり出したので、顔を摺剥すりむき、叔
 母さんが大變に怒おこつて花魁に焚き付けたのが始まりで、する事な

す事がみんなへまに成るもので、私が花魁わたくしの病氣見舞に往く積りゆで出掛けると、途中で表徳に出ツくわし何んでも一緒に連れて往つて呉れるというから、荷にして山谷の御寮へ往くと、其奴そいつが詰らない出語でがたりをしやアがつて、伊之助さんはお内儀さんを持つて、赤さんまで出来たなぞと喋つたもんですから、花魁が貴方を怨み出し、夫婦仲好く楽しんで居るから、それで手紙も寄越さないのだな、余あんまりな不実な人だ、口惜くやしいと口へ出しちやア云わないが、腹うちの中で火の燃える様に思つてる中に、この二月臨うみづき月の時なぞは、一通りならねえ口惜がりようで、矢切村の叔母さんが花魁の枕元に坐つて居て、紀伊國屋の伊之助のお蔭で斯んなになったのだから、死んだら屹度きつと取殺せよ、己も祈り殺すぞよというと、花

魁はそれでも貴方を取殺そうと思つてゐる処へ、叔母さんにけしかけられたもんですから、むつくりと病褥とこの上へ起き直り、利かない身体で膝へ手を突いて、此方こつちを睨にらんだときの顔つきというものは、若浪さんが然そういいましたが、恐ろしい顔をしましたつてネ、叔母さん永い眼で視ておいでなさい、屹度私は伊之助さんを取殺すよというと、叔母さんが取殺せよ、取殺すよ、取殺せよと掛合にいうのだから恐ろしいじやありませんか、其の儘にお前さん花魁が引附ひきつかゝる時にオギヤアと産れたのは貴方のお胤で、可愛い男の児こだったと云いますが苦しみの中で産れた赤子ねえさんだから育つわけはありません、二声ふたこえばかり泣くとそれつ切り息が絶えたので、花魁はそれを見ると直すぐに血が上あがつておめで

たく成つちまつたんですが、その死んだ花魁に死んだ赤子ねさんを
抱かせて、早桶はやおけへ入れる時には、実に目も当てられない始末で、
叔母さんが紀伊國屋を絶やさないで置くものかと云つて、船で其
の早桶を持つて田舎へ歸つたといいますが、それからというもの
は氣味が悪いので、あの美しい花魁のお座敷が明いてゝも誰もいや
がつて這入らないと云うは、花魁が床の間の処にチャンと坐つて
るんで、私も此の間座敷を勤めて遅く廊下を通ると、こんな大き
な顔が出たから、驚いて尻餅ぽけを搗つきながら、能く見たら台屋だいやが大
台を持つて歸つて往くのをお化ばけと間違えたのですが、一切そいう
ものが見えるようなわけで、余程怖よつぽどいんですが、そういう訳
ですから、私の考えますには、貴方足などを切るより、何でも其

の田舎の叔母さんの機嫌をスツカリ取っちゃまって、重々済みませ
 ん、どうか堪忍しておくんなさいって、叔母さんを此方こつちへ抱き込
 み、親類に成っちゃまって、お前の云うことは何んでも聞く、頬ほッペ
 辺たでも甜なめさせるから堪忍してくれろと縋すがり附いて、機嫌を取
 って、花魁の御法事御供養をなさい、お金はかゝりますが、仕様
 が有りません、藤沢寺とうたくじの遊行上人ゆぎようしやうにんか祐天ゆうてん和尚おしょうでも弘こう
 法大師うだいしでも有難い坊さんを大勢頼んで来て、大法事か何かして、
 花魁が成仏得とくだつ脱さえすれば、貴方の御病氣は癒るんですぜ、こ
 の事を早くお知らせ申すのは知ってますが、鈍どんずり剃やつこ奴がピヨコ
 〱参るのも何んとか思われるだろうと御遠慮をして居るくらい
 苦しいことは有りません」

伊「そうかえ、実に有難う、然う云えば師匠夢ともなく現うつともなく、この月始まりから若草が私の傍わしそばへ来て、黙もくつて夜中に坐まつてゐるが、その時は私の足が痛い事は酷ひどいよ」

正「これは御免を蒙ります、話を聞くとぞツとします、早く帰りましょう、船で来ましたから」

伊「まあ宜いいじゃアないか、日が暮れたからお飯まんまでも喰たべて往いきねえな」

正「まあ御免を蒙りましょう、本当に驚おどろきましたナ、叔母さんが掛合かけあに来たときに、突つ倒ころばして帰かえすような、頑固かたくななものを飼かつて置くから、貴方の御病氣を引出したんで、貴方にも似合にあわねえ、其そん様な奉公人を置いてはいけませんよ」

伊「その番頭は今取次に出た伊兵衛というものだ」

正「道理で私わたくしを法印と間違えました、これは突つきとば飛としましょう、

彼あの様子では、あんな奴をなぜ飼って置くのです、早く追い出しておしまいなさいまし」

など云つてるところへ伊兵衛が出て参りましたから、正孝は驚きながら、

正「これは入らつしやいまし」

伊兵衛「誠に遠方の処わざく態々お訪ね下され御真実なことで、私わたくしは

伊兵衛と申しますものでございますが、只今お次で残らず御様子を伺いました」

正「これはどうも大變私わたくしは直いにお暇とまをいたしましょう……ナニそ

れはソノ何んで、ほんちよう本町の伊兵衛さんと同じ名が不思議ですな」

と間が悪いからごまかしてピヨコ／＼帰りましたが、伊兵衛も怖いから大番頭の安兵衛とも相談して、早く花魁の御法事御供養をしようと云うので、これから伊兵衛安兵衛の二人は、下総の下矢切村の若草の叔母の家をうち尋ねてまいりまして、此処だと思い、と見ると生垣が有りまして、はいりぐち這入口に大きな榎が有り、土間も小広うございます。安兵衛が生垣の外からこわ／＼怖々覗いて見ると、金重の弟子の恭太郎という馬鹿な奴があがはな上り端に腰を掛けて、足をブラ／＼やって遊んで居ります。奥に叔母のおしのが居ります。安「伊兵衛どん、お前少し其処そこに待っておいで、お前が不調法をしたんだから、私が中へ這入って、一通りわび詫ごとを云ってからお

前を連れて往くから」

と云い捨てゝ中へ這入り、

安「御免下さいまし」

恭「何だえ」

安「えゝ若草さんという花魁の叔母さんのお宅は当方ですか」

恭「おいらの叔母さんは彼処あそこに居るよ」

安「イエ松葉屋の若草花魁の叔母さんのお宅は当方ですか」

恭「おいらの叔母さんは彼処に居るつてえに」

しの「恭太郎や何んだよ」

恭「何んだか知らねえが、おいらの叔母さんだよ」

しの「どなたか知りませんが、馬鹿野郎で取次一つ出来ねえもん

ですが、何か御用が有らば此方へ這入っておくんなせえましよ」
安「左様なら御免なさい」

と怖々安兵衛が上り端へ手を突いて見ますと、叔母さんは夜な
く祈ると見えまして、祈り勞れたか小鼻も落ち、眼も窪み、頬
肉も殺いで取ったように落ちてしまい、胡麻塩まじりの髪が領の
ところへ纏い附きまして、^{まと}瘦せた手を膝へ突き、息遣いが悪く、
ハツくくと云いながら、

しの「さア此方へお上んなさいまし私は少し塩梅が悪くつてネ、
其処まで立つて往くも苦艱でござえますから、何うかあんた此方
へ這入っておくんなせえましよ」

安「ハイ」

と中へ這入り、丁寧に辞儀して、

安「あなたが松葉屋の花魁若草さんの叔母さんで入らつしやいますか」

しの「はい私が若草の叔母でござえますが、あんたは何処どこから」
安「へい手前は本郷春木町の紀伊國屋宗十郎の手代安兵衛と申します、主人の悴伊之助の事に就いて、今日こんにちわざく御当家様へ出ましたわけで」

というより叔母は氣色けしきを変え、

しの「何だと、本郷春木町の紀伊國屋の番頭が己おら宅うちへ何しに來た」

安「これまでとんと花魁のおかくなりしました事を存じません、

と申すは、若主人伊之助が放蕩致しました事について、堅気な家でございますから奉公人の示しにもなりませんし、本家や親類の前へ対しても捨置かれんと申して、堅い氣象の主人でございいますから、悴を堀切の別荘へ押込めて、窮命させて置きましたので、花魁の方へ手紙一本上げる事も出来ないわけで、すると昨年しゆもつの十一月から伊之助が業病ごうびように取附かれまして、その足へ腫物しゅもつが出来まして、どうも痛んで堪こえられないばかりでなく、放棄うつつちやつて置くと漸々だん／＼腹の中まで腐れ込むと医者いやくが申しますで、種々いろ／＼と加持祈祷も致しましたが、どうも思うように全快致しませんから、愈々いよく不具かたわになるまでの事と諦めまして明日あしたは切る、明後日あさつては切ると医者の方はいい延べて置きました」

十八

安「昨日^{きのう}吉原町の幫間^{たいこもち}がまいりまして、だん／＼の話の末全く
 花魁^{おもう}の念^そで然ういうことになったのだから、足を切るには及ばな
 い、叔母さんに詫^わかして、花魁の御法事御供養をして上げた
 ら宜^{よろ}かろうと、真実に教えてくれましたゆえ、伊之助も其の時始
 めて花魁のおかぐれになったことを聞いたので驚^{おどろ}きました、私^{わたくし}は
 些^{ちつ}とも存^{ぞん}じませんわけで、花魁は御懷妊^{おほ}になつておいでなすつた
 という事でしたが、私が存^{ぞん}じて居^おれば何うにでも成^なりましたもの
 を、そんなことは心得^{こころえ}ませんで、堀切の別荘を預^{あづか}りまして居^おります

伊兵衛と申すものが、叔母さんのおいでの際に何か不調法を致しましたそうですから、さぞ／＼御立腹でございましょうが、一
図に伊之助を守って居りまして、他の者ほかがまいっても若主人へは
逢わせんようと、大主人おおしゆじんから云いつけてございますので、訳の
解らん人間ゆえ、一図に主人大事と思ひ詰めましたところから、
叔母さんに怪けしからん御無礼なことを致しましたという事です、
どうか一つ御立腹でもございましょうが、幾重にも私がなり代り
ましてお詫をいたします、あなたのお心持も解け、花魁の御法事
御供養をいたしますれば、伊之助の病氣も癒りますわけゆえ、実
は伊之助が参るべきですが、何分駕籠でもまいられんくらい、そ
れがため私が出ましたが、どうか御勘弁をねがいたいもんで、私

がなり代つてお詫を申し上げますから」

しの「なにお詫をするつて、今になつて魂消たまげてそんなことをいつ

て来てもだめだよ、若草は勤めの中でも他のお客へ出て肌を触ふら

ねえ、汝工家の伊之助を亭主われうちと思つて、夫婦約束の書付まで取替

わせた仲だから、伊之助が押込められたてえことを聞いて、ハア

気の毒なことだと思つて心配しんぺえぶつてだん／＼塩梅が悪くなり、

殊ことに勤めの中で赤子ねっこまで出来でかして居るだから、己おれも可愛相だと

思つて掛合かけあひに往いけば、ムシヤクリ出しやアがツて、己の身体へ

傷までつけて帰けえすような事をしたアだもの、若草だつても此の怨

みを霽はらさずに置くものか、若もし此の儘に死ねば三日経たねえうち

に伊之助を取殺すと云つて死んだから、伊之助は足ぐれえ腐れま

しようよ、足どころじゃアねえ今に頭迄腐れますべえよ、気味ア
宜いだよ、おれも今に見ろ、伊之助の宅^{うち}へ草を生やさずには置か
ねえと思つてゐるくれえだから、若草の念^{おも}いでも其のくれえのこと
は有りましたようよ、今更死んだ者の心の解けようも機嫌の直りよ
うもねえから、とやかく云わずに早く^{けえ}帰れ」

安「どうも重々御尤もでございますが、何うか其処を一つ幾重に
もお詫をいたしまして、叔母さんのお身の上がお便りのないお方
ならば、伊之助の方から何^どの様^{よう}にもお手当を致します、引取られ
るのが否^{いや}と仰しやるのならば、田舎でいらつしやツても、月々の
ものでも差上げて、叔母さんを伊之助のお母^{つか}さん同様に御孝行を
つくしたいと申しまして、へえ」

しの「駄目だよ、伊之助から何を貰ったって快く口へ這入るかえ、
今になって兎や角そんなことを云つて来やアがつても駄目だ、サ
ツサと帰れ、^{かえ}今に取り殺して遣るから、其の時になつて魂消るな、
兎や角云えば汝も^{われ}只は置かねえぞ、早く帰らねえと此の薪割を叩
き附けるぞ」

安「いえ何うぞ御勘弁を願います……困りましたナ、御立腹は御
尤でございますが、^{わたくし}私も子供の^{つかい}使じやアなし、主人の代りにまい
りまして、御立腹が解けませんで、へえ然うでございますかと
云つて此の儘は帰られませんか、^せ切めて花魁のお墓参りでもい
たし、お花でも手^{たむ}向けて帰りませんでは、私の参りましたかどが
立ちませんから、御立腹でもございましょうが、花魁のお寺さま

だけ教えて下さるわけにはまいりませんか」

しの「伊之助の手から線香一本手向けて貰つても、若草は嬉しくは受けめえが、お前は^{めえ}何^{なん}にも知らねえで使に來たんだから、^{われ}汝^わがには氣の毒だから、寺の名前^{なまえ}だけ教^{おせ}えてくれる、中矢切の^{ほうせん}法泉寺^じといいやす」

安「へい／＼有難うございます」

と慄^{ふる}えながら外へ出て参りまして、伊兵衛に向い、

安「おい伊兵衛どん、お前が往^いかなくつて本当に宜^いかつた」

伊兵衛「どんな様子でした」

安「実に驚いた、アー怖い、田舎^{かたぎ}氣質の叔母さんが思い詰めて祈つてゐるに違いない、実に怖い顔だったよ、不思議だネ、何うも何

処で見ても死しりよう靈いきりようと生靈いの祟りだという処あたは中あたつてゐるじやア
ねえか、私わたしを突出つきだしやアがツてつて恐ろしく怒おこつて、私わたしに薪割わしを
打ぶツつけるといったが、お前まへが這入れはいれば大變だいへんだつた」

と話しながら往ゆく後うしろから、だしぬけに、

侍「ヤイ、これヤイ」

伊兵衛「ヘイ、真ま平つ御免びら下さいまし」

侍「不埒なん至極なんの奴だ、何と心得なんる、エー江戸市中とは違ちがうぞ、かゝ
る田舎たんぼなかの反圍はんゐ中なかで侍さむらいに突当つる奴やつが有あるかえ」

伊兵衛「へえ、うツかり此方こちらを向むいて話わをして居ゐりましたもので
すからツイ……何うも誠に相濟あひまみません、何うぞ御勘弁ごかんべんを願ねがいま
す」

侍「勘弁相成らん、侍たるものへ突当つて」

安「旦那さま御立腹でございましょうが、私の連でございませう、わたくしつれ

二人で怖い話をして、此方こつちを向いて参りましたゆえ、つい旦那さ

まに突当りましたか知りませんが、どうか御勘弁を願います」

侍「イヤ勘弁まか罷りならん」

と云いながら二人の胸倉を取り、

侍「サア兩人とも己と一緒に矢切山へ往ゆけ、斯う押おさえたら雷が鳴

つても放さん、暫く人を斬らんが、丁度幸あらみい新刀が手に入いったか

ら試して遣るから、己と一緒に矢切山へ往ゆけ、兩人ともに首を打ぶ

ちおと
落してやる」

と云われ、二人はワナ／＼慄ふるえて居りますと、此の時矢切の渡わ

場たしばへ舟を繋つけて上ありましたのは荷足の仙太でございます。人の

うわさには金森家の浪人が八州のお捕とり方かたを斬き払つって、矢切山

へ隠れたという噂を聞いて、刀の詮議の手掛りにもなろうかと、

仙太郎が重三郎と昇夫かづやの安吉とを船に載せて、矢切の渡わた口しぐちへ

船を繋ついで、三人上へ上り、

仙「何だえあれは、喧嘩かえ、お百姓さん何だえ」

村の百姓「何だか知んねえが、侍さむらいが町人を打ぶつ斬るてえだよ、あ

の二人は成田参めえりかも知んねえが、通りがかりに侍へ往ゆき当った

とかいので、侍が腹ア立って、侍に往き当たるてえことはねえ、

兩人とも打つ斬るから矢切山へ歩あゆベツてえんだが、可愛相でがん

すネ」

仙「乱暴な奴だな、あの侍はさむらい何だえわけえしゅ若衆」

甲「あれは国分村の萩原束という浪人もので、方々の人を打つ斬るくッてえやアがッておど嚇かしたり、何処の料理屋へ往つても、銭なしで酒をクン呑んじまッてから、国分の束を知らねえかと威張るおつかねえ人だよ」

仙「然うかえ、安ヤイ、あの侍はさむれえつら顔ア出してやアがるが、あんな奴では有るめえ」

安「エー、まるで變つて居やす」

仙「新身あらみの刀を試すといつて居やアがるから、ヒヨツとして彼様あんな奴が持つて居めえもんでもねえから、己が一番あの侍さむれえのところへ飛び込み、殴り付けて、あの刀をふんだくるから、重さん逃げ

てはいけねえよ、いっぞや日外の怪しい侍の手下かも知れねえ」

重「親方まるで違いますからお止しなさい、怪我でもなさるとい
けませんか」

仙「ナニ大丈夫だ、でえじょうぶエ御免ねえ、ヤイ侍、さむれえ大概にしろ、殴るぞ、

ヤイ」

侍「何だ手前は」てまい

仙「己は通りがりのものだが、弱い町人を掴めえて嚇しやアが
ツて、なげ長えのを振り廻わし、斬るの殴るのツて、ヤイ此の侍、さむれえなぐ殴
り付けるぞ」

侍「イヤこれは何うも怪しからん奴だ、侍たるものに向つて無礼
を働くと、この兩人と共に手前も手討にいたすぞ」てまい

仙「ナニ生意気な事をいうと殴り付けるぞ」

侍「オヤ此こいつ奴無礼至極ゆる免し難い」

仙「免し難ければサア己を斬れ、其の新身の刀を引ツこ抜けさむらい侍」

侍「斬らんでウヌ、兩人は免して遣るから往ゆけ」

と突つき放はなされて、安兵衛も伊兵衛も悦びまして、栗林の間へ逃

げ込みましたが、吉原土手で仙太郎に逢った侍は心有るものゆえ、

振ぶッ払はらつて逃げましたが、国分の束は心がないから、いきなり引

ッこ抜くが早い、仙太郎は少しく起き倒流とうりゅうを習つて居りますか

ら、飛び込んで侍の足柄すくを撈ほうつて投げ出すと、バタリと仰向けに

倒れる上へ乗しかゝりましたので、萩原束は組み敷かれ、苦しそ

うな声で、

東「御免を蒙る」

仙「黙れ、ウン」

東「これは痛い、御免……ア、痛い、参った」

仙「こんなものを振り廻わしやアがッて、重さん逃げちやアいけねえ、何処へ往ったんだ、安ヤイ」

安「オーイ」

仙「あんな処ところに居やアがる」

といううち、安吉も出て参り、

「親方しツかりなせえ、わツちが居るから大丈夫だでえじょうぶ」

仙「重さん物は試しだ、これを見ねえ」

と東の刀を投り出すを受取り見て、

重「これは蹈めません、鈍^{なまくら}刀で、稍^{ようや}く一兩二分ぐらいなものでございます」

仙「こんなものを差しやアがッて、斬るの殴^はるのッておどしやアがッて畜^{ちきしよう}生め、此の村には己の親類があるから、向後暴^{こうご}すときかねえぞ、てめえの面^{つら}を見覚えのために印を附けて置こう、刺^ほりもの青をして置いて遣るから然う思え、重さん、矢立を差してるな
ら此処へ出しねえ……斯う十文字にして、汝^{てめえ}の根性は曲つて
からまた……斯う三角なものを刺^ほつて置いて遣る」

東「これは御免を蒙る、御丁寧な御挨拶で」

仙「これで宜^いいからサツサと往^いけ」

と突放されて、侍はホウ／＼の体^{てい}で逃げて往^ゆく。これから仙太

郎は重三郎を連れて矢切山へ乗込み、刀の詮議をいたすという、
 一寸^{ちよつと}一息致しましょう。

十九

偕^{さて}も稻垣小左衛門は、家来の丈助と共に葛飾の真間の根本へ参りまして、荒物渡世をいたして居ります内に、其の年も相果て、翌年の二月になりますと、真間の藤梅も散り、桃や桜がそろ／＼咲き初め^そましたが、小左衛門はとんと外出を致しませんで、奥にばかり引籠り、うつ／＼致して居りますので、家来の丈助も心配でございますから、

丈「もし旦那さまく」

小「あい」

丈「あなたはお野掛けがお嗜すきでいらつしやいましたが、此の程はさつぱり野歩きもなさいます、河岸端べちへもいらつしやいませんが、些ちと御保養を遊ばしては如何いかゞでございます、あなたのお案じも私わたくしは能く存じて居りまするが、さつぱり若旦那さまの方からお音信たよりがございません、昨年さねから引続き満まる一年の余よになりまするのに、お手紙一つまいりませんから、お案じは御尤と存じますけれども、屹度きつと若旦那さまからの御書面は芝のお上屋敷へ届いて居るに違いありますまい、大旦那様はまだお屋敷に居らつしやると思つていらつしやるに違いありませんから、渡邊さまの処に御書面

が滞^{とど}つて居ましようと考えますが、私もお上屋敷へは参られませ
んけれども、買出ししかた／＼江戸へ参り、お出入の八百屋にで
も頼んで、渡邊さまへ御手紙が届いて居りましたらば戴いてまい
りましようと思ひますが、あなた余^{あんま}りくよくくと若旦那様の事を
お案じ遊ばして、御病氣にでもお成りなさいますと、実に私は心
配でございますから、何うか貴方些と御保養遊ばしてお氣の散じ
ますようになすつて、お身体を養つて下さいますのが何よりでござ
います、今日^{こんにち}是からお野掛けは如何で、私がお供を致します
から」

小「あいゝ、丈助誠に忝^{かたじ}けない、旧来居つた家来共も皆暇^{いとま}を取
つて別れゝになれば、私^{わし}が此処^{こゝ}に居ることを知つて居るものも

有ろうけれども、一人も訪ねてくれる者も無いに引替え、手前は
新参でありながら、主しゅうじゅう従じゅう苦楽を共にして、斯様な処に来て、
商いの買出しから、殊に男の手で濯すすぎ洗濯までもしてくるので
有難い、手前がいなければ小左衛門は実に困るのだ、誠に忝かたじけな
い、家来とは思わない、今予わしは家来に助けられて居いるが、時来きたつ
て失った國綱のお刀がお屋敷へ返るような事になれば、手前には
何どの様ようにも此の恩返しをせんければならんノウ」
丈「ア、旦那さま、勿体ないことを仰しやいます、何う致しまし
て、私わたくしは旦那さまの御高恩を戴いて居りますから、身体で出来
まする事なれば、何の様な事でも致しまして、旦那さまお一人だ
けの事は御苦勞を掛けません心得で居りまするが、若旦那さまは

御氣象が御氣象でいらつしやいますから、お煩いは有るまいとは思いますが、何分お案じ申し上げますゆえ、旦那さまは猶なおさら更御心配でいらつしやいましょうと存じます」

小「あい、忤も慣れぬ旅をしたのだが、あの氣象だから山に掛るとも峠を越そうとも、何の様な者が出て、是まで丹誠して置いたゆえ、武芸は一通り心得居おれば、五人や八人狼藉者が討つて掛つても驚くような腕前ではないが、忤の留守中に追放を仰せ付けられたから、斯様な片田舎住居すまいをして居いる事を、忤も知らずに居おるかと思うと、こゝが親子の情で、雨に付け風に付け案じられて、今頃は何処おに居るか、こう云う雪の降る時には何処の宿屋で冬ふゆご籠もりをして居おることか、それとも難所なんじよを越えて雪中に病でも求

めなければ宜よいがと存じて心配するが、お前にまで心配させてはならんから、今日きょうは氣を変えてブラ／＼と八幡やわたの八幡宮はちまんぐうへでも参詣致そうか」

丈「へい、それが宜しゅうございましょう、左様なれば彼あのお蔭かげ絵のお瓢箪へ、宜よいお酒が参りましたが、高くって売りにくうございますから、あのお酒を入れて参りましょう、多量たんとは召上りませんわたくしが、私はお下物かざぎし拵こしらえをいたしましょう」

小「それじゃア兎も角野掛ののかけの支度しどをしておくれ」

丈「へえ畏かしこまりました」

とこれから丈助が種々いろくの物を拵こしらえまして、小左衛門は野掛装し束ようぞくになり、丈助を連れて八幡の八幡宮へ参詣をして、ブラ／

\市川^{いちかわしんでん}新田^{しんでん}を帰り路^{みち}になりましたが、菜の花が盛りでござい
 ます、彼の市川^あ新田^あの出外^{ではず}れの処^{ところ}に弘法寺^{こうぼうじ}と深彫^{ふかぼり}のある一^{ひとつ}の
 石塚^{いしづか}が建つており、あれから右へ曲ると真間の道で、左右が入江
 になっており、江には片葉の芦が生えて居りますが、あれは何
 処にも生えて有ります。其処に真間の継橋^{つぎばし}という名高い橋が
 ありますが、立派かと思うと、板と板と両方から継合^{つぎあわ}せたから
 継橋^{つぎばし}というのだそうで、何^{なん}にも面白く有りません。東の方は手児^{てこ}
 名^なの社^{やしろ}、その後^{うしろ}は瓶^{かめ}の井^いより水が流れ、これより石坂を登ると、
 弘法寺の堂の前に二葉の紅葉^{もみじ}、秋の頃は誠に景色の好^よい処でござ
 います。小左衛門は丈助を連れて入江に付いて一筋道^{はっぴ}をやつて来
 ると、今船から上つたというような姿で、人足^{はつぴ}が法被^{はつぴ}を腰に巻き

附け、小太い竹の息杖を突き、どうなか 胴中を細引で縛った長持を二人で担かつぎ、文身ほりものといつても能よい文かざりではございませぬ、紺の木綿糸を嚙んで吐き附けた様な筋彫すじぼりで、後あとからギシ／＼やつて参りまするから、細路ほそみちゆえ二人が避よける、人足がよろけるとたんに丈助の持つて居た蒔絵のしてある瓢ふくべへ、長持の棒ばなが当りましたから堪りませぬ、瓢は碎けて酒がこぼれる。すると丈助は屋敷に居りました見識あきんどが商人になつても失せませぬから横柄に、丈「ヤイ人足待て、怪けしからん奴だ、旦那さまに相済まん、一番結構なお瓢箪へ長持を打ぶつ付けやアがッて、毀こわしちまつて、不埒至極の奴だ、氣を付けて歩け」

人足「ナニ、安おろヤイ下せ、生意氣なことを云うな、汝てめえツちは酒

を喰^{くら}つてヒヨロ／＼踰^{よろ}けて歩くから悪いんだ、其の瓢箪が百両百貫するもんか知らねえが、手前^{てめえ}が打^うつ付けて置きやアがツて何を云やアがる」

と云いながら打^うち掛^かる。

小「これは怪しからん、乱暴なことを申す、余程酷^{ひど}い奴だ、粗忽^{そそう}だから物を毀すも宜しいが、自分で不調法をして置きながら打^うつてかゝるといふ事が有るか、不埒な人足だ、以後たしなめ、此の度^{たび}は免^{ゆる}すからサツサと往^ゆけ」

人足「ナニ―この老爺^{じい}殿^い打^うつてしまえ」

と原文に三嶋安という東海道喰い詰^わめの悪党^{わる}ですからきゝません、いきなり息杖^おを押^おつ取り、左右からブーンと風をまいて打^うつ

て掛る、

小「おのれ」

と云いさま後へ飛^{うしろ}び退^{さが}りながら細身の刀を引抜き、刀脊^{みねうち}打^{うち}に原文の肩をドンと打ちましたが、腕が冴えておりますから余程^{こた}応えたと見えまして、アツと云つて転^{ころが}りながら横道へバラ／＼と逃げ

安「この野郎」

と打つてかゝる処を、ひツ払^{はら}つて腕を打つ、打たれて三嶋安は斬られたと心得、キヤツと云いさま同じく細道へ逃げ込んでしま

うのを、追ひ掛けもせず跡を見送りながら、
小「悪い奴だからチト懲^{こら}してやらんといかん」

丈「不埒至極の奴でございます」

小「それは御用の長持ではないか、会符えふでも立って居おるか」

丈「酷ひどい奴でございます、私わたくしは虫が知らせましたので、このお瓢

箆あんまは余り宜いいから持つて出まいと存じましたが、本当にいけない

事をいたしました、継ぎ合すことは出来すまいか」

小「粉に欠けたものが何うなるものか、捨て、置けく」

丈「デモ勿体なのうございますから……」

小「何故大地ぢびたを甜なめる、汚ならしい、塵ごみでも這入こつてるといかな

いから止せ……御用の会符でも立たって居おるか見ろ」

と云いながら長持そでばの傍へ寄ると、長持の中でヒーと女の泣声なみが

いたします様子。

小「丈助」

丈「へい」

小「長持の中で婦人の泣声がいたすようだが、あんな悪い奴らだから、事に寄ったら女でも勾かどわか引して担いで来たかも知れんぜ」
丈「なんとも云えませんが、へい……この蔦の葉の処が、大きく欠けましたんですから、是だけ何うかしたら直りそうなもので」
小「瓢箪はもう大概にしろ、仕方がないワ、早く此の縄を解いて見ろ」

丈「へえ」

と是从から丈助が縄を解き、蓋を明けて見ると、長持の中には一人の娘が縛られて、さるぐつわ猿轡さるぐつわと申して口の中へ何か小さいきれ片布を

押込み、其の上を手拭にて堅く結り、島田鬘はガツクリと横に曲り、涙が伝わつて襦袢の半襟が濡れて居ります。着物は黄八丈の唐もろこし手の結構な小袖に、紫むらさき縹じゆす子に朱の紋縮緬の腹合せの帯でございますが、日暮方ゆえ暗くつてはツきり様子は解りませんけれども、誠に上品な器量の宜しい娘でございます。

小「私は通りがりのものだが何も心配せんでも宜しい、礼は後あとでも宜しい……ナニ勾かどわか引ひされたと……成程こういう娘を勾引するような奴だもの、人の物を毀して無闇に打つてかゝる処どころじゃアない……何しても娘むすめ子怪我が無くつて宜かった、丈助長持は其処へ捨て放しにして置いて宜しい」

と是から娘を連れて宅へ帰り、行灯あんどうを点けて娘の様子を能く

見ると、年齢十八九にもなりましょうか、品の好い、おんもりとした世にも稀な美人でございます。

二十

小「いえもう其様そんなにお礼を仰しやらんでも宜しい、先ずマアお怪我がなくて宜よつた、御両親は嘸さぞ御心配をなすつたでしょう……ナニ江戸から勾かど引わかされたとえ」

娘「はい、わたくしあさくさはらまち私は浅草田原町のものでございます」

小「うむ、浅草の田原町で」

娘「この下総の矢切村に私わたくしの乳母が居りますとのことゆえ、そ

れを尋ねてまいります道で、帝釈さまの手前の土手のところに駕籠屋が居りまして、しきりに乗れ〜と勧めますので、供の老爺おやじが申しますするには、足も疲れたろうし、まだ道も余程有るから乗ったが宜かろうと申しまするゆえ、私も彼のあのような悪い者とも存じませず、家来の老爺も並の駕籠屋と存じまして、うっかり乗りましたのでございますが、駕籠の方は早いものでございますから、供の老爺が幾ら駄けても追附かれんように昇夫かこやが急ぎますので、私も駕籠の中で心配致して、供の老爺が来るまで少し待っておくれと申ししましても、聞き入れませず急ぎまして、私を森の中へ担ぎ込み、予て企かねんだものたくと見えまして、森の中に長持がございまして、その蓋を取って私を高手たかて小手こてに縛いましめて中へ入れられま

したが、其の時は殺されることかと存じて居りますと、それから私を船へ乗せる様子は長持の中でも存じて居りましたが、^{うつゝ}現のような心持で参りましたのでございましたが、貴方さまのお助けで、思い掛けなく危^{あやう}い処を免^{のが}れまして、誠に有難う存じまする」

小「それはく、御家来が嘸案じて居^おられるでしょう、お前さんはお器量^よが宜いから悪い奴らが企んで、左様な事をしたのであるう、どうも誠にお前さんはお人柄で、御尊父様も嘸案じて居られますしょうから、私^{わし}が送り届けて上げるから宜しいが、御尊父は何^{ごしやうばい}御商法をなさる、何うも人柄の好^よい嬢さんだ」

娘「はい、親父は町道場を出して、剣術の指南を致しますもので

「ございまする」

小「フン劍客^{けんかく}先生かえ、道理でお人柄が好いと思いました、私^{わし}

も嗜^{すき}の道だから随分懇意なものも有りますが、何流でござるか」

娘「はい、一刀流でございまする」

小「今流行だからね、一刀流の名高いお方には随分知る人も有りまするが、失礼ながら親御の尊名は何と仰しやるな」

娘「はい、石川藤左衛門^{いしかわとうざえもん}と申しまする」

と云われて小左衛門は驚き、

小「エ、石川藤左衛門……ウー左様ならお前は其の娘のみゑかえ」

みゑ「はい貴方は何うして私^{わたくし}の名を御存じでいらつしやいます」

小「是は何うも実に不思議だ、忝小三郎と許嫁^{いいなずけ}の約束を致し

た嫁とも知らずに助けたが、石川のみゑかえ、これ丈助、石川のみゑじやと……エ、モウ瓢箪はよいにして置け、かね予て話した忤の許嫁の娘であるぞ」

丈「それはお目出度い事でございました」

みゑ「はい、誠に思い掛けない事でお嬉しゅう存じます」

小「それは実にはか図らざる事であつたが、まアく宜かつた、わし私は稲垣小左衛門だよ」

みゑ「あれまア伯父さま、貴方さまをお尋ね申して、芝のお屋敷へ参りました処が、御浪人なすつたとの事で、方々お尋ね申しましたよ」

小「左様か、わし私も御尊父をお尋ね申したいと心には思つて居たが、

只上州鳥川の辺に住むとのみ聞いて、確とした処を存ぜ

んことゆえ御無沙汰に相成つたが、私も不図した事でお暇には成

つたものゝ、お前は少い時分から小三郎に許嫁をしたもの故、お

とつさま

父様が浪人しても、忤の方へお前を貰おうと、其の相談もした

いと思つて居つたが、江戸においでの際は知らなかつた……ナニ

浅草の田原町へ町道場を出して……彼の、フン、あのくらいの腕

前の人は当今余り無いテ、私も今では見らるゝ通り斯様な荒物渡

世をして、何うやら斯うやら其の日を送る身の上と成りました、

栄枯盛衰は浮世の習いとはいいいながら、実に変り果てたるわけだ

て、御尊父は御壮健かえ、誠に壮健な方だが、相変らずお酒も飲

るかえ……ナニ泣くか、何うした、其様に泣かんでも宜い、何う

した、何か間違でも有ったか」

みゑ「はい、昨年十一月三日の暮れ方でございます、王子の権現さまから帰り掛けに、お父さまは何者とも知れず、日暮ヶ岡にて鉄砲で撃殺うちころされました」

小「エ、……イヤそれは何うも……ウン遺恨だネ……ウン尋常に遣つたら中々五人や八人掛つたつて討たれる様な石川氏ではないが、飛道具では何うも致し方が無い、併しかし卑怯至極な奴だ、何でも夫それは知つて居おる奴に遺恨を受けたものだね、併しお前は幼年の折にお母さまがおかくれに成つてしまい、親一人子一人の石川氏が然そういう事に成つては誰たれを力に致すか」

みゑ「はい伯父さまも御存じでございますが、旧ふるく居ります

勇助ゆうすけと申す老爺おやじが、たとえお父さまがおかくれに成つても、
 稲垣さまと許嫁のお約束になつて居りまするから、お連れ申すと
 申しまして、芝のお屋敷へ参つて伺いますと、伯父さまも旦那さ
 まも御浪人なすつたとの事ゆえ、何う致そうかと存じて泣き明し
 て居りますると、勇助が氣を取直してくれまして、そう心配しな
 い方が宜しい、この矢切村にしのと申しまして私わたくしに乳をくれまし
 た婆ばが居りまするから、その乳母を便たよつて参りまする道で災難に
 遇あいました、思い掛けなく伯父さまにお目通りをいたしました
 は、全く親父が草葉の蔭から守ってくれましたのでございましょ
 う」

小「至極左様、大きにそうかも知れない、併し心配するな、私わしは

殿様から預り中に、御家御伝来のお刀を紛失致し、それがために忤は少し心当りがあつて美濃へまいった、尤も手掛りが無ければ、何時帰るか知れんと云つて出たが、今に音信は無いけれども、遠からず帰国致そうが、そうすれば小三郎のためにも舅の仇たる患者を尋ね探して、必ずお前の怨みも石川氏の怨みも晴させる、私の眼の黒い内は力になるから心配せずにおいで、丈助御馳走は兎も角、早々百姓を頼んでナ、これの家来の勇助がウロ／＼探して居るだらうからな、早速近辺のものを頼んで、手分をして勇助の行方を探させろ」

というので方々探しましたが、一向知れません。五日の間頓と手掛りがございません。すると五日目の日暮方にお百姓が一人這

入つて参り、

百「御免なせえまし」

丈「イヤ―清助さんおいでなさい」

百「此間鴻の台を見たいという話だからお寺へ頼んだ処が、何

んだか浪人者が山へ匿ねたとか云うんで、八州さまが調べに来て

八ヶましいので、知んねえものは入れねえだが、おらが納所へ

頼んでネ、真間の根本にいるお侍さんで、商えをして居る、固え

大丈夫の人が山を見てえと云うんだがと頼むと、そんだら連れ

て来うと斯ういうわけで己ハア先方へ頼んで置いたから、私イ案

内して連れて往くべえと思つて来たアだ」

丈「それは有難う存じます、今仕事をしまったのかえ」

百「只^{たつ}た今野^{のら}辺仕事をしまつて来たばかりだ」

丈「旦那さま、予^{かね}てお頼みの清助さんが参りまして、総^{そう}寧^{ねい}寺^じさまへ頼んで案内をして上げようと申して来ましたが、これから貴方いらつしやいませんか」

小「それは何うも御親切な事で誠に有難う存じます、私^{わし}も壮年の折に一度見たこともあつたが、実に絶景の処で、何うかもう一度見たいと思つていたが、それは誠に有難い、丈助お前それじゃア留守を頼むよ」

丈「私^{わたくし}は此の土地に生れながら灯台^{もと}下暗しで鴻の台はとんと存じませんから、何うか御同道を願います」

小「左様か、それでは、みゑ、お前は留守居をして、若し買^{かい}物^{もの}

買^{かい}が来たら、今日は余儀ないことで他出致しました、御用向が
 ございますならば明日願^{みょうにち}いますといつて……宜^いいか」

とはから瓢箪に酒を入れ、残菜入^{ざんさいいれ}に有^{ありあわ}合せのものを詰め、
 身支度をいたし、清助という百姓の案内で、少し遅くなりました
 けれども真間の根本をなだれ上^{あが}りに上^{あが}つて参ると、総寧寺の大^{だい}門^{もん}
 までは幅広の道で、左右は大松^{おおまつ}の並樹^{なみき}にして、枝を交えて

薄暗きところを三町ばかりまいりますと、突当りが大門でござ
 います、只今はまるで様子が違いました、其の頃は黒塗の大^お
 格子^{おごうし}の大門の欄間は箔置^{はくおき}にて、安国山^{あんこくざん}と筆太に彫りたる額
 が掛^かつております、向^{むか}つて左の方に葦酒^{くにしゅさんもん}不許^{ふしよ}入山門^{をゆるさず}と
 した戒壇石^{かいだんせき}が建^たつて居ります。大門を這入ると、半丁ばかり

は樹木は繁茂致して、昼さえ暗く、突当りに中門ちゅうもんがございま

するが、白塗りにて竜宮の様な妙な形の中門で、右の方はお台所から庫裏くりつなに繋つており、正面は本堂で、曹洞派そうどうはの禪林ぜんりんで、安

国山総寧寺と云つては名高い禪寺でございます。

百姓「玄堂さんく、此間こねえだ頼んで置いた根本の荒物屋の老爺じい

さまを連れて来たから、玄堂さん案内あんねえして上げておくんなせえ」

玄「イヤ勝手に這入つて往きゆなさい」

百「案内あんねえは出来ねえかえ」

玄「案内あんないは出来ねえ」

百「わしらも時々枯枝を取りに来て道イ知ってるから、私わしが案内あんねえ内えをしますべえ、サア参りめえましょう」

小「何うか願います」

と是从からだん／＼山手へ附いて参ります。

小「若い時分に一度見たことは忘れんもんだ、これは太鼓塚……
 これは夜啼^{よなきいし}石とて里見在城の折に夜な／＼泣いて吉凶^{きつぎよ}を告げ
 たという夜啼石だ、これは要害の空濠^{からほり}で、裏手の処は桜ヶ陣と
 申して、里見在城の折には搦^{からめて}手で在^あったという、何うも実に好^よ
 い景色の処だ」

と云いながらだん／＼山手へ附いてまいりますと、鐘ヶ淵
 という処に出ます。

小「才、見覚えがある、これはその鐘ヶ淵といい、これは鐘掛の
 松と申して、里見在城の折にはこれへ陣鐘を吊して打鳴したとい

う、其の時北條が攻め入って松を斬落したので、陣鐘が此の淵へ沈んでしまい、今に此処に其の陣鐘が沈没致して水中に存して居るそうで、黄門光圀卿が毛綱でこれを引揚げようとしたが揚らなかつたという、鐘ヶ淵と唱える処だ、或は豊島刑部左衛門秀鏡の陣鐘にして、船橋の慈雲寺の鐘なりともいう」

丈「へい成程」

小「此処が大見堂たいけんどうという二代の上様が大いに見るといふ額を掛けられた処である、御府内一目に見ゆる処と仰しやつた故、摺すりび火打うちで煙草を吞む事はやかましい場所じゃ」

丈「へえ、誠にお精くわしいことで、実に好い景色でございますナ、何だか鴻の鳥が巢を喰ったから鴻の台と申すとかいう事を聞きま

したが、本当でございましょうか」

小「いや、是は国府の台で、千葉之介ちばのすけつねたね常胤こくふ舎弟ろうたねみち國府五郎胤道の

城跡であると申すを、此の国府の台をなまりつた訛なまりつた伝えて鴻の台と申す

のだろうが、慥たしか永祿の七年きのえね甲子きのえねの正月七日八日の戦いは激し

かったという、向う葛西領の敵手は北條氏むこう綱氏ほうじようじつなうじやす父子が陣

を取り、此方こつちは里見安房守義弘さとみあわのかみよしひろ、太田新六郎康資おおたしん、同苗ろうやすもとおなじく

美濃守資正みののかみすけまさ入道にゆうどう三樂齋らくさいなど頗るすこぶ処ところのものが籠城おをして居る、

其の頃は鉄砲が流行はやらんから矢戦であつたが、此方こちらは遂に矢種が

尽きたゆえ矢切村と申す、其の時に鴻の鳥が浅瀬を渡つたという、

これは虚うそか実ほんとか分らんが、川幅は広いけれども鴻の渡るを見て北

條の軍勢が浅瀬を渡つて、桜ヶ陣いちどきより一時に取詰めた処から、かゝ

る名城も忽ちにして落城したというが、時節だのう、其の日は恰ちようど今日こんにちの如く夕暮で、入日いりひの落るを見て北條が歌を詠じたと云う……えゝ何とか云った……才……「敵は打つ心間まゝなる鴻の台夕日なが詠めしかつ浦の里」と詠んだと申すて」

丈「へえ成程、お精しいことではいらつしやいますな、誠に好い景色の処でございますな」

百「おらアはア時々木を切りに来るが、斯んなハア詰らねえ処を何だつて江戸者は銭イ遣つかつて見に来て、焚火イなどして酒工くん飲んで帰けえる人なんぞが有るけれど、考かんげえると可笑しいだよ」

小「酒といえは瓢箪を持って来たろう、一杯めしあがれな」

百「私わしは酒大嗜でえすきで」

小「お嗜すきなら沢山たんとめしあがれ」

百「お前さまが此方こつちへ越してから荒物屋を始めたが、酒でも干物でも廉やすいんで大評判おおだよ、調法だつてよ、仕入が皆江戸物もんを買つて来るだから好いいでや、此間こねえだの干魚ひものなざア大層てえそううまかつたが、チト甘過るだ、己おらア方では口のツン曲るようでなければ喰つたよ
うな心持イしねえんだ、あんたの処とこの酒は宜うがんすねえ……こ
れはお酌有難うござえやす、へえ私わしは酒大嗜でござえやす」
小「沢山召上たくさんつて下さい、丈助モツト大きな物へ入れて来れば宜い
いに」

丈「貴方は沢山召上りませんし、それに三合入と申しますが、こ
のお瓢箪は中々這入るもので、大丈夫四合は這入りましょう、清

助さん、これを摘んでみなさいよ」

清「はい、これは何うも、何んだえ日光唐辛かえ」
につこうとうがらし

丈「ナニ伽羅蔭で、まア上つて御覧じろ」
きやらぶき ごろう

清「……これは塩ッ辛くつて宜うがंस、貴方の処に一節切とい
あんた とこひとふしぎり

う看板が掛つてゐるから買つて見ようと思つてゐるのだが、あれは鮎

のスキミだらうね」

小「ハ、アあれは一節切ひとよぎりという笛の名でな、私は少しばかり指さ
しだりゆう

田流の笛を吹くから、ひよツとしてまた心有る人が習いに来よ

うかと思つて看板を出して置くのサ」

清「イヤ笛なら駄目だ、村のもんにも上手が有るよ、上の又
かみ また

七郎ろうなどが、鎌倉から小点しょうてんから段々と大間おおまへぶツ込んで往く

とこなぞは実に魂消たもんだぜ」

小「私わしのは馬鹿ばか嚙ばやしの笛とは違ちがうのでな」

丈「旦那様一曲お調べ遊ばしましては如何でございます」

小「何んぞ遣あづろうかの、吾妻獅子あづましのような長いものはいかんが、

夕空の曲でも調べようかの」

丈「へい何うか願ねがいます」

小「今日は丁度霞立こうちつてゐるから、水面を見ながら、向うは葛西領、

此方こつちは山風の一節切、これは文屋ぶんやの康秀やすひでが吹いた笛で、先せん殿との

飛騨守さまへ笛を御教授申したところから拝領した品だが、私わしは

何処ゆへ往くにも首へ掛けて放さんが、昔鴻の台の城主里見安房守

の吹いた笛は嵐山と申す、今此の方が此処で山風の笛を吹くとい

うは誠に妙だナ、面白い、昔乗じようそう宗という一節切の名人が有つて、谷に臨んで吹いたらば、猿が笛の音を聞ねきにまいったというが、殿さまへ御指南を致すとき水に向つて吹くと誠に好よい音色が致す、久々で忘れたために一曲調べましょうか」

と云いながら笛を取り出し構えましたが、小左衛門は松の根方へ足を掛け、歌口を沾しめして吹き出しましたが、その音色は尺八よりは一際静きわかで、殊に名人の吹くこと故に、心ないお百姓まで心しんに耳を澄まして自ら頭おのずかしらを下げて聞くことになると、夕霞は深く立って、とんと景色は見えませんが、穏おだやかな好い日でございませ、新利根川の流ながれに響いて何とも云われん能よい心になり、興きように入いって頻しきりに夕空の曲を調べて居りますと、大見堂の後うしろよりソツ

と出でたる侍は、黒い頭巾をまぶか目深にかぶ冠り、ドツシリした無紋の羽織着流しで、四分一ぶいちごしら拵えの大小を落し差しにいたし、つか／＼と小左衛門の後へ忍び足でまいり、興に入つて笛を吹いて居る稲垣小左衛門の腰のあたりをドンと出しぬけ抜に突くと、小左衛門は不意を打たれたから堪りません、逆さかトンボウを打つて鐘ヶ淵へドブーンと陥はまりましたが、落ちながらも剣術の上手な人ゆえ油断が有りません、グルリと体を捻ひねり、彼の侍の頭巾の上から髻もとぎりをムツと捕とらえて放さぬゆえ、其の機はずみに頭巾の紐が切れましたが、切れなければ俱ともに引摺り込まれる処を、彼の侍は誠に運の好いい奴でございます。松の根方へ片手を掛けて身を引く途端に落ちて往ゆく様子を見ると、小左衛門は左の手に一節切を持ち、右の手に頭巾

を持ったなりモンドリを打つて高嶺たかねから市川の流へドブリと落入りましたから、丈助も百姓もびつく悔りしてかたまつてしまい、彼の侍の様子を見ることが出来ません。暫くして丈助が怖々ながら首を上げて様子を見ると、頭巾が取れたから顔はあり／＼と見えます。とし年齢三十五六にして色白く、鼻筋通り、口元の締つた眉毛の濃い、青髭の生えた大髻おおたぶさで、二十日も剃らない月代頭さかやきあたまでございます。漸く起上つて膝に付いた泥を払い、大小の抜けかゝつたのを揺ゆり上げ、松の根株へ片足を掛け、小左衛門が落入ったかとおろしましたが、夕霞が深く立つてはツきり見分みわかりませんから、彼の侍が鐘ヶ淵の水面を覗き込む、途端に安国山総寧寺の夕勤めの鐘の音ねが、微かにコーン／＼と聞えました。この侍は何者か、

一寸^{ちよつと}一息つきまして申し上げます。

二十一

彼の稲垣小左衛門を突落した侍は、金^{かな}森^{もり}兵部^{ひょうぶ}少輔^{しょうぶ}の家来で、百六十石頂戴致しました大野惣兵衛^{おおのそうべえ}と云うものでございますが、幼年の折から何うも心掛けが善くないため、遂にお屋敷をお暇^{いしま}になりました。斯^かく追放仰付けられたのも、稲垣小左衛門が殿さまへ申し上げたことがあるに依つて、己がお暇^{あぐ}になったと、飽^あまでも稲垣を怨んで居ります。これを遺恨に只今稲垣を鐘ヶ淵から突落しましたが、小左衛門の死骸が市川へ落入ったか落入ら

ないか夕霞が深く立って、頓と分りませんから、膝に付いた泥を払いながら跡へ退ると、百姓が慄え上つてブル／＼して居りますを見て、

侍「これ、これ」

百「ハイ真^{まっぴら}平御免なせえ」

侍「其の方は先程からそれに居ったか」

百「ハイ先刻^{さつき}から此処に居りました、真平御免なせえまし、ハイ」

侍「イヤ何うもしやせん、少々遺恨有つて斯く致したことであるが、必ず此の事を口外致すな」

百「ハイ口外致しません」

侍「コレ／＼一寸^{ちよつ}と此処へ来い」

百「ハイく」

とブルく慄えながらまいる。

侍「其の方は泳ぎを存じて居るか」

百「ハイ、ここ此の村で生立ちましたから、少けえ時分から新利

根川へ這入^{へえ}つちやア泳ぎましたから、泳ぎは知^ちつて居やす」

侍「左様か、もう少し傍^{そば}へ来い、少し申し聞けることが有るから」

百「ハイ」

と何心なく侍の傍へ寄るや否や、侍が腰を捻^{あばら}つて抜き討ちに百姓の肋^{あばら}へ深く斬り込む。百姓はキヤーと悲鳴を上げる間もなくドソ^{そっか}と足下に掛けたから、百姓もモンドリを打ってドブンと落入りました様子を見て、懷から小菊を取出し、大刀の血^{のり}を拭^{ぬぐ}つて鐘ヶ

淵へ投げ込み、ピタリと錨鳴りをさせて鞘に収め、悠々と安国山の大門を出て往ゆきまするから、家来の丈助も跡からそつと見え隠れに大門を出て左へ切れ、細道の処まで附けて参り、

丈「申し／＼大野さんえ、旦那エ、旦那」

大「オ、丈助、早速の伝言で首尾好く往った」

丈「へえ宜よい塩梅でございます、あなた國綱の刀を佩さしておいでなせますか」

大「シー、他たへ預けることも出来ん程の名刀で有るから困つて居たが、丁度拵えが合つて居たゆえ、斯かくの如く差さ料りょうにして居るから、他へ知れる氣遣いはない、大丈夫だ」

丈「旦那さま、石川の娘は中々伶俐りこうでしつかりして居りますから、

容易にお手に入れることは出来ませんぜ、併し私しかわっちが何うか工夫を
 して見ますが、腕うでずくで抱いて寝ようとすれば、舌を噛み切つて
 死んでしまうくらい小三郎に情を立て居ますから、私が甘く工うま
 夫をし、旦那のお手に入れるようにしますが、其の時にはしツか
 り御褒美をおくんなせえ」

大「宜しい、これはホンの心ばかりだが、褒美の印だ、取つて置
 け」

と幾らか金子を紙に包んで丈助に渡す。

丈「へい、今は褒美も何も入りません、小左衛門さえ死んでし
 まえば、彼処あそこのものは縁の下あすこの蜘蛛の巣まで皆みんなな私の物だ、石川
 の娘の極りが附けば、またお前さんの処ところへ御沙汰ごさたを致しますぜ」

大「何分頼む、骨を折ってくれ」

丈「へい大丈夫でござえます、当季何処においでなせえます」

大「手前てめえの方の事の極りが付くまで、国分の萩原東の処おに居る心底だ」

丈「彼奴は喰くらい酔ッてばかり居てお喋りだから、うツかりした事は云えませんよ、へい左様なら」

と兩人別れましたが、悪い奴は悪い奴で、此の丈助は大野と共ぐ謀るになり、表に忠義と見せかけて小左衛門を鴻の台へ引出す手筈をいたしたので、かゝる悪人とも知らず、忠義なもの的心得て目を掛けたが過あやまりで、情ないかな稻垣小左衛門は四十九歳を一期いちごとして、一節切と頭巾とを持ったなり落入りました。只今は川岸

の土が崩れて余程平坦たいらになりましたが、其の頃は削りなせる断崖がけで、松しょうはく 柏かしらの根株へ頭を打付け、脳を破つて血に染つたなり落ると、下を通りかゝつたは荷足船で、彼の仙太郎等三人が松戸へ刀の詮議に往つたが、手掛りがなく空しく歸つて参る船の胴中へ、小左衛門の死骸がドンと落ちましたから、重三郎も安吉も肝を潰して、

安「ヤア大変だく」

仙「何んだ、立つて騒ぎやアがつて」

安「だってサ血だらけな老爺おじいさんが降つて来たからサ老爺さんの降るような天気じゃアねえのに」

仙「ナニ馬鹿なことをいう……オ、く、鴻の台から落おっこちたんだ

ナ、喧嘩をしたか遺恨か知らねえが、老爺さんを酷いことをしやアがる、組打ちでもしたか相手の奴の冠り物をしつかり握つて居るが、指を折らなけりやア中々取れねえくれえ一生懸命に押えて居るが、妙な真黒まつくろの頭巾だなア、相手は侍さむれえか知ら、訝おかしな物を持つてゐる、笛か知ら、重さんお前は知つてゐるだろう、これは何だえ」

重「これは一節切と申しますが……才、是れはお屋敷へ出たとき拝領の山風と云う一節切だと仰しやつて、御自慢で二三度お見せなすつた笛だが」

と云いながら死骸をよく見て肝を潰し、

重「ウー稻垣の旦那さま」

と死骸に取^{とり}縊^{すが}りました。

仙「オイ重さん何うしたんだ」

重「エ、親方、これは稻垣小左衛門さまと仰しやって、金森さまの御重役で、國綱のお係りのお役人でございますが、其の刀の爲にお咎めを受けて、御浪人なすつたと云うことは微かに聞きました。が、何処にいらつしやることか御様子も知らずに居りました……誰が旦那さまを殺しましたか」

仙「フーム……それは何^{なん}にしても飛^{とん}だ事だった……お前この頭巾に見覚えが有るか、誰のだからるか」

重「誰のだからりませんが見覚えは有ります、お屋敷の御重役がお揃いに、あの芝口^きの紀^{ぜん}の善^{ぜん}という袋物屋^{あつら}へ誂^{こしら}えてお拵^{こしら}えに成つ

た頭巾でございます、御覧なさい、此処に印が押して有るのは見

んもん

聞の時に大勢が同じような頭巾だから解らなくなるといけない
と云うので、裏に白羽二重しろはぶたえのきれを縫いつけて、それへ各々めいめいの

朱印を附けて有るのですが、誰たれのだから分りません」

仙「能く見ねえ、誰たれのだから分りそうなものだナ」

重「私が見ちや分りませんが、これは此の小左衛門さまの御子息
の小三郎さまという方が御覧なさるか、また御重役方に聞きます
れば分ります」

仙「フン、何なんにしても死骸の遣り場に困ったな」

安「これが親方わっちと私ばかりだと、係り合あいになるといけねえから投
り込んでしまう処だが、重三さんが乗っていたので死骸の分ると

いうのが不思議です……ア、また向へ一人落ちて来ました、今日は滅法界に人の降る日だ」

仙「ハ、ア此の鴻の台は上矢切だ、此辺に悪い奴が匿れて居るのかも知れねえ、何か手係りになる事も有ろうから、船を市川口へ繫けよう」

というのを重三郎と安吉が止めましたが聞きませんで、詮議に山へ上りましたが、何の手係りもなく空しく帰る事になりましたが、小左衛門の死骸の遣り場がないから船へ乗せて、仙太郎が伊皿子台町の宅へ帰って参りましたが、屋敷へ知らせて好いか悪いか知れませんが、と云つて何時まで斯う遣つても置かれないと云うので、直ぐに白金台町の高野寺へ頼み、仙太郎の縁類の積

りにして葬式も立派に致しましたから、小左衛門の死骸のことは誰にも知れんわけでございます。お話二つに分れまして、丈助は空涙を零しながら根本の宅へ帰って参りますと、おみゑは案じて居りまする。門口から、

丈「嬢さま只今帰りました、申し工嬢さま只今帰りました」

みゑ「あい、明きますよ」

と云いながら紙燭を点けて土間へ下りてまいり、直に戸を明け、

みゑ「お父さまもお帰りになりましたか」

丈「はい」

と座敷へ上り、

丈「お嬢さま、何とも何うも申し上げようはございません、さぞ無あなたさまもお驚きだろうと存じますけれども、申し上げんことはお解りにはなりますまいが、旦那さまは鴻の台の鐘ヶ淵から何者とも知れず突き落されて、川の中へ落入りました」

みゑ「えゝ……それはまア何うした訳で」

と次第を聞くと、丈助がなまぞらを遣つかつて瞞ごまかしました。倭ねいべ

弁は甘くして蜜の如しという譬たとえの通りで、誠しやかに遣るのは

丈助の得手でございますから、おぼこ氣きのおみゑは真実まことの事と思
い、

みゑ「ア、情ない、お父さまは去年の十一月、何者とも知らず鉄砲に撃たれ、非業の死を遂げ、稻垣さまのお宅へ参ると間もなく、

舅しゅうとうご 御さまも亦斯ういう非業な死をなさるとは何たる事か、私

のような因果なものは世にあるまい何うしたら宜かろう」

と声を惜しまず泣伏しますから、丈助は腹の中でしめたと思いました
ましたが、表面うわべは真実しんじつそうに、

丈わし「私も御当家へ奉公致し、及ばずながら忠義一図に勤めて居り、

こんにち

今日もお供をして参りながら、旦那様が斯ういう事になりましたし

ては、実に何んとも申訳がございせんから、その悪わるざむらい侍の跡

を追いかけてましたが、侍は桜ヶ陣の繁みへ逃げ込み、遂に影を見

失いどうもお嬢さまに顔向けが出来ませんから、一思いに腹を切

つて死のうかと存じましたれども、私の死ぬのは厭いといせんが、

あなたが入らしてまだ五六日しか経たないのに、旦那さまの死

骸が知れなく成った其の上に、私が腹を切つて死にますれば、何の為に帰らんかと、西も東も御存じのないあなたゆえ、嘸お困りだろうと存じますと、私は死ぬにも死に切れませんから、兎も角若旦那さまも程無うお帰りでしょうから、若旦那の仰せに任せて、手前は主人の供をしながら、当の仇を見遁すとは怪しからん奴だから腹を切れと仰しやるか、手討にすると仰しやるか知れませんが、何と仰しやつてもそれまでと覚悟を致して、惜しくもない命を生延びて帰りましたが、私を悪いと思召しますなれば直に斬つて下さいまし」

と空涙を零して巧く遣りました。

みゑ「今更外に力と頼む人が無いから、若旦那のお帰りまで待つ

ておくれ、何にもお前の不調法というでも有るまい、皆前世の因縁事だろうから待つておくれ」

と死を止めるを幸いに丈助も其の晩は寝んでしまい、翌日に成りますと、おみゑが不図考え、山を越すと矢切村だが、大方家来の勇助が乳母の処を使つて往つて居るかも知れないから、連れて往つて呉れと云うので、是から丈助が供をして上矢切、中矢切、下矢切と段々山を下りてまいりますと、這入口の榎の有る家を見て、

みゑ「此処だよ」

丈「此処があなたの乳母の家ですか、思いがけない事でございませう、此処は私の生れました家でございますが、私は若い時分か

ら道楽を致しましたので、父親おやじも母親おふくろも田舎氣質かたぎの固いものでございますから、久きゆう離切りきつて勘当され、今では生れた家でも足あ踏しづみをする事が出来ませんので、私の母親は屋敷奉公をして来たという話を聞いて居りましたが、私は此家わたしこゝへは這入れません」

みゑ「あらまア丁度宜いじやアないか、お前が乳母の子なら縁えん繋ながりの処へ奉公して、忠義に固く勤めたというので、舅御さまもお悦び遊ばしてお話の有ったから、私が乳母に詫ことをして上げるから決して心配せずにおいでよ」

丈「へえ、それは有難うございますが、中々に固くつて寄せ附けますまい、わるく固うございますから」

みゑ「私が詫をして上げると云うに、宜いいからおいでよ」

と中へ這入り、

みゑ「お前少し其処に待っておいで……ハイ御免よ、私に乳をくれたおしのの宅は此方かえ、乳母の家は此方かえ」

恭「私の叔母さんの家は此処だよ……叔母さん何だか綺麗な女が来て、私に乳をくれて……お前大きな形をして乳を呑むと味噌ツ齒になつちまうよ」

しの「誰方だか知りませんが、どうぞ此方へ這入ってお呉んなせえまし、塩梅が悪いから立つて往けねえでがんす」

と云うから、おみゑはずツと上へ昇り、

みゑ「何うもまア見違えるように、お前年を取ったねえ、私だよ」
しの「はい、何うも眼悪くつて日暮方ははつきり見えませんが、

誰方でがんすかえ」

みゑ「石川のみゑだよ」

しの「おやマア何とまア見違え申しやすように大くおなんなすつてマア、何処においでなせえましたかえ、五六日前に勇助どんが己ア家へ駈込んで来ましてネ、お嬢さまは此方へ来ねえかと云うから、イヤ来ねえと云うと、それはえれえことに成つた、駕籠へ嬢さまを乗せたら何処かへ担いで往ツちまつて解らねえんだ、ハテ何うしたら宜かろうと云うから、随分道も能くねえが、悪い駕籠屋が嬢さまは器量好いだから勾引しやアしねえかと云つたら、勇助どんが男泣に泣くてやゝ、魂消てハア斯う遣つては居られねえつて駈け出すから、マア待ちなせえと、名主どんも有る村だ

から、名主どんへ届けて、お役人さまの手を借りてお探しなせえ
つて、それから毎日めえにち松戸流山ながれやまから小金ツ原こがねばらまで探しちやア
帰けえつて来て、知んねえつては泣くだよ、私もハア心配わしして神信心
して居やしたが、何処に、エ……あれまア真間の根本といえは山
を越せば直ぐだよ、知んねえと云うのはどう云うわけだか……おゝ
自分の申す事ばかり申してまだ御挨拶ごええさつも致しませんで、先ず御
機嫌好ようござえます、誠に御無沙汰ばかりに成りました、私もハ
ア段々年は老とるし、旦那さまは御浪人なすつて上州の方へ往いかし
つたとべえで、お宅うちが知んねえもんだからお尋ね申す事も出来ね
えんでがんですが、あんたには乳を上げたから何だか我子わがこの様に思
われて、定めて大えかくおんなすつたろう、何うなすつたろうと云

つてネ、お案じ申す事がござえますが、ハア見違みちがえるようにおな
んなすつてね、まア能く尋ねて下せえました」

二十二

みゑ「私は親類みより便りの無い身に成つたのよ」

しの「そうだつてね、お父さまは鉄砲で撃ぶツ殺されたつて、何と
ハア魂消た訳でがんすな、お便り少ねえ嬢さまゆえ、嘸さぞかな哀しかん
べえと勇助どんと話しいして居やしたが、実にお氣の毒なわけで、
何とも申そうようは有りません、あんな好よいお方さまをね：あ
んたさま、今まで真間の何処においでなせえました」

みゑ「私が勾かどわか引されて殺されようとする処を、私の少ちいさいうち

に許嫁に成つて居る、稻垣小三郎様のお父さまの稻垣小左衛門さまというお方が、御浪人なすつていらしつて、そのお方に助けられて御厄介になつて居ると、また其の小左衛門さまというお方が、昨日悪者のために鐘ヶ淵から突き落されてしまい、段々死骸を探きのうしたが今に知れないの」

しの「ホイヤ、マア、何とマアたまげますナ、情ねえまア、あんたさまは何とハア御運の悪いわりお方だかえ、併しかし今に勇助どんが帰けえつて来たら飛とびツ返るけえように悦びましょう、私わしも附いて居やすから御心配ごしんぱえなさらねえでいらつしやいましよ、何うかお供があらばこつちへお入れなせえましよ」

みゑ「乳母^{ばあ}や、アノお前に逢うのが間が悪いと云つて這入り兼て、表に立つて居るのだが、何うか私に免じて逢つてやつておくれでないか」

しの「はい、誰^{どなた}方かハア知んねえが、お這入んなせえましょ、お嬢さまのお詫なら何^どんな人でも免^{ゆる}さねえばなんねえから、まア這入んなせえましょ」

と云われて丈助はきまり悪^{わる}る氣^げにオズ／＼しながら這入つて参り、

丈「御免なさい」

と云いながら腰に差して居た脇差を抜いて傍^{そば}に置き、慇懃^{いんぎん}に

両手を突き、

丈「誠にお目にかゝれた義理じゃアございませんが、お嬢さまが詫ことをして遣ると仰しやるので、面目ない顔を拭つて参りました、へエ丈助でございます」

しの「アレ此の野郎……この野郎、汝^{うぬ}、何うして此^こ処^けえ来た、お嬢さま、あんた何うして此の野郎を連れて入らつしやいました、此の野郎、汝、何んだと、面目なくつてお目にかゝられた義理じやねえと、義理や人情ということ^{われ}を汝^{たづね}工知つてるか、此の畜生野郎め、うぬ、お嬢さま是れは私には只^{ただ}一人の忤^{とが}でございますが、若い時分から道楽べえぶツて仕様がねえので、あんた、父^{とつ}さまが心^{しん}配^{ぱい}して塩梅^{あんばい}が悪く成つたのは此の野郎が二十四の時^{とき}でござえます、婆^ばアや枕元^{まくらもと}へ来^こうよと云いますから、何だえ老^{じい}爺^いさまとい

うと、悴の丈助は逆も汝がの力にはなんねえ駄目な奴だから、己
 ア死ぬと汝工困るべえと思つて金工二十両貯えて置いたから、此
 れでちツとベエ、田地イ買つて己死んでも葬式などを立派にしね
 えでも宜いから、汝工食い方に困らねえようにするが宜工と、後
 の事を遺言しやすから、私イ泣き入つて居る中に、能く寝り就い
 てしまいやすと、この野郎が裏から這入つて立聞いしてえたも
 んと見えて、這入つて来やアがつて、その金工引攫つて逃げ出
 す音に目工覺して、後姿を見れば此の野郎でがんすから、魂消て
 口い明いたつきり、おツ閉ることが出来やしなかつた、すると老
 爺さまが怒つて早く名主どんのお帳へ付けろ、親の首い縄ア掛け
 る餓鬼だと云つて久離切つて勘当してしまふと、父さまが口惜し

がつて、只た一人の忤だアが、己ア別に悪い事もしねえのに、何うしてあんなやくざな餓鬼が出来たか、もう縁側の端ッ辺へも寄付けてはなんねえと云いやしたが、お嬢様が連れて来たアだから逢うだけ逢つて遣るから、サツサと出て往け」

丈「へイ、何とも言訳の申そうようはございません、孝行のした
い時分に親はなしという比喩たとえの通り、私が御勘当に成りましてか
ら、お父さまはおかくれに成つたと聞き、一人のお母さまゆえお
目にかゝりたいと思つて居りましたが、私が改心を致さなければ
お詫ことは出来ないから、屋敷奉公をして身を立てようと思いま
して、金森家の御重役稻垣さまへ奉公致し、真鍮巻でも二本差し、
奉公大事に勤めて居りますと、旦那さまには御運悪く御浪人な

すつて、実は此処へお伴れ申したいのですが、お母さまの前へ対
 し此方へ足^{こつち}を踏み込むことが出来ないので、真間の根本へ来て居
 りましたが、商売の買出しから、旦那さまの漱^すぎ洗濯まで丹誠し
 て、御介抱申し上げて居りましたゆえ、丈助や、手前^{てまい}のお蔭で己
 は助かる、再び屋敷へ帰参することも有れば、屹^{きつと}度侍に取立^{やりた}つて
 遣ると仰しやつて入らつしやる事は、お嬢さまも御存じでござい
 ますが、昨日私^{きのう}がお供をして鴻の台へ参りましたところ、何者と
 も知れず旦那さまは鐘ヶ淵へ突落され、其の儘死骸は知れず、お
 嬢さまが乳母を便りたいと仰しやるからお供をして来て見れば、
 私の実家ゆえ、這入りかねて居りますと、詫^わかして遣ると
 仰しやいますから上りましたので、お目にかゝれた義理じゃアご

ございませんが、真に善人に成りましたことは、お嬢さまが御存じでございますが、何うかこれで御勘弁なすつて下されば、これから心を入れ替えて、お側に居て孝行を尽したいと思ひまする」

みゑ「舅御さまも、丈助を家来とは思われんくらいと仰しやるほど辛抱人に成つた事は、私が請合^{うけあ}うから、何うか堪忍してやつておくれ」

しの「はい、汝^{われ}は本当に辛抱人に成つたかえ、何んとマア魂消たな年は取ろうもんで、汝はもう幾^{いくつ}歳に成る」

と指折かぞえて、

しの「今年はもう三十一に成つたえ、マアどうもネ本当に殿さまが家来とは思わねえと云うくれえの辛抱人に成つたか、おいまア

他の者が詫ほかことをしたつて勘弁は出来ねえんだが、御主人の嬢さまのお詫ことだから、父さまの位牌いへえへも詫ことをしてやり、名主殿どんご処のお帳も消すようなことにしようが……そう云えば尤もつともらしくなつたナ、肩巾でかが大きく成つてや、少し様子が死んだ父さまに似て居る、立つて見ろや、少し坐つて見ろ、一廻り廻れや」

という／＼なことを云いまして、親だから直すぐに騙だまされました。その内勇助も歸つて来ましたから、丈助は得意の倭ねい弁べんを以て、是からお前さんと共に忠義を尽しましょう、若旦那さまがお歸りになりましたらば、石川さまと旦那さまの讐かたきを探して仇あだを報いませう、及ばずながらお互に若旦那とお嬢さまへお力ちから添ぞえをして、若旦那のお屋敷へ御歸参の叶うように心掛けようではござい

ませんかと云うと、勇助は正直な人ゆえコロリと瞞だまされて、丈助という人は真実な者と思つて居ります内に、二日程経ちますと、東海道藤沢から稲垣小三郎より父小左衛門へ宛てた書面が届きましたゆえ、披ひらいて見れば、藤沢の煙草屋に逗留かたしているが、刀の手掛りが有ったから段々探すと、去る豪農の方に刀のある事が分つたれど、これを手に入れるには金子が二百両なければならぬから何うか早々金子二百両だけ丈助に持たして届けて下さるやうに、三日程遅れると手に這入りませんという意味の手紙でございました。

急な事ゆえ只今と違い、二百両という大金の才覚は容易に出来ませんから、丈助も心配して、

丈「己に女房があれば、夜鷹に売つても金の才覚をしようものゝ
ゝあゝ二百両という大金を才覚のしようは無し、このお刀が手に
這入らなければ若旦那は生涯埋れ木にお成りなさるゆえ、此処で
取損なうは残念なことだ」

と誠しやかに申します。これはおみゑが小三郎の手筋を知りま
せんから、窃かに大野惣兵衛と謀しあわせ、小三郎からの書面を
拵こしらえて送りましたので、勇助は馬鹿正直の人ゆえ大層氣を揉み、
母も心配致しましたが、金の工面が出来ない。するとおみゑが、

みゑ「何うか私を売つて其の身の代しろとやらでお刀を取戻し、お金を才覚して若旦那へお手渡しをして、其のお刀が手に入るはいようにしてあげて下さい、併しかし女子がそういう処へ身を沈めては、亡なられたお父さまには濟まないが、良人おとのためになる事なれば左のみお叱りもあるまい、のう勇助」

と涙ながらに私の身を廓くるわへ売つてくれろと頼みに、

勇「ハイ、私わたくしが附いて居りながら左様の事をおさせ申しては、御両親さまのお位牌に対して私が濟みませんが、旦那さまのためには替えられません、左様なら手前が田原町に居りました時に、裏に居た女衞ぜげんのこいち小市という男を存じて居りましたから、これへ参はなつて談をいたして見ましょう」

と是から勇助が出掛けて参り話をする、丁度山口屋で女子が
 欲しいというので、それに小市はおみゑの形恰好は精しく存じて
 居りますから、直に承引き、先方でも二つ返詞だろうが、金は
 幾ら入るのだと聞くから、二百両入るといふと、兎も角お連れな
 さいというので、勇助は立帰り、此の話をして、是れからおみゑ
 は乳母のおしのにも暇乞をして駕籠に乗り、泣の涙で別れを
 告げ、丈助勇助が附添いまして、江戸の田原町の小市の手から山
 口屋へ参つて話をいたしまして、玉を見せると、品といい器量と
 いい、起居振舞裾捌き、物の云い様まで一つも点の打ち処の
 ない、天然備わった美人で、山口屋の主人もお侍のお嬢さまが夫
 のために自分から身を売りたいという心に惚れて、宜うがす、そ

ういう訳なら判代^{はんだい}や金利を引かず、手取二百両に成るように致しましうと、親類得心の上で相談が付き、証文を致し、二百両の金子を丈助に渡し、

みゑ「若旦那小三郎さまにお目に懸つたらば能くお伝言^{ことづけ}をしておくれ」

と手紙を認めて^{したう}小三郎に送る、其の文面にもお刀をお手に入れるために、済まない事とは知りながら、お断りも致さず、^{わたくし}私は自儘^まに泥水に身を沈めましたが、一旦斯様な処へ這入りました身の上ゆえ、たとえ年が明けてもお側に参ることは出来すまいけれども、親族^{みより}便りのない身の上を不便^{ふびん}と思召し、お小間使いなりとも、^{ごはんたき}御飯焚なりとも厭^{いと}いませんから、年季が明けた暁はお目を

掛けて下さいまし、殊に父藤左衛門を討った仇は何者か存じませ
んが、相手は侍に相違ないと存じますから、とても女子おなごの細腕で
仇を討つことは出来ませんから、何うぞお助太刀下さるようには
のみ頼み入るといふ処の、細かい手紙でございます。これへ金
子を添えて渡すを受取り外へ出ましたが、勇助は氣拔がしたよう
に成りまして、丈助と二人で葛西の柴又の帝釈うしろの後の土手へ掛り、
四丁ばかり参つて、なだれに下りると下矢切わたしの渡でございますが、
田舎の渡しは滅多に渡る人が無いから、夜よに入いつては陰々として
居ります。勇助は氣拔のしたようになり、

勇「丈助さん、イヤ何うも私は何んだか手の内の玉を取られたと
云うのは此の事かと思うよ、お少ちいさい時分からお守をしただけに

別れが辛うございました」

丈「然そうだろうね、オイ船頭さん船を矢切へ遣つておくれな、船

頭さん」

百「船頭は居ましねえよ」

勇「居なくつちやア困るな」

百「イヤ丈助さん」

丈「イヤ、これは喜きよ代松さん、船頭は何処へ往つただな」

喜「船頭は曲まがり金かねへ馬鹿囃子の稽古に往つただアよ」

丈「それは困つたが、お前船を漕ぐ事が出来るかえ」

喜「対岸むこうへ往くぐらいは知つてるだが、一人で往くのも勿も体てね

えと思つて人の来るのを待つていた処だ、丁度宜いからお乗んな

せえな」

丈「じゃア勇助さん乗ろう」

と是从から船に乗ると、百姓が繫繩もやいを解ほどいて棹さおを揚あげて、上手うわての方へ押出し、艫ろくい杭しめを沾しめしてだんくんと漕こぎ初めたが、田舎の渡船ぐらい氣の永いものは有りません。

喜「宜よい塩梅あんべえに天氣イ能く続くね」

丈「お前は何時とまでも若いね」

喜「モウ年を老とちまつて仕様がねえだ、若わえ時分に一緒に松戸ひくちの樋ひの口へ通う時分にやア一晚でも女郎買じやろうけえをしねえと氣が済まねえで、一度などは雨が降った時に簑みのを着て往った事が有ったが、まるで門訴もんそでもするような姿で、お女郎買に往ったツけが、若え

時分というものは仕様がねえもんだね、今じゃアお前の^{めえ}婆さんが悦んでるぜ、倅は固く成つて私が^{わし}仕合せ^{しやわ}だつて、無え^ねもんとした倅が^{けえ}帰つて来て儲かりましたつてよ、正直な婆さまだからね」

丈「ハア、若工^{わけ}時分には散々お母に^{ふくろ}苦勞をさせました：勇助さん此の水を御覧なさい、能く澄んでるでしょう、透^{すきとお}通つて底が見えるぐらいなのに、旦那さまのお死骸が何処を探しても知れねえというのは不思議で、其の癖出なくつても宜^いい百姓の清助の死骸ばかり揚^{あが}つたから、私は何うも何んだか水を見ると心持が悪くなりますよ」

勇「然^そうだろうね、成程澄んでるね」

丈「ア、あんな大きな鯉が泳いでる」

勇「ドレ何処に」

とうっかり水を見る油断を見済し、後から丈助が勇助の腰をドント打って川の中へ突落す。勇助は

「アッ」

と云いながら水中へ落入りおちいました。一刀流の剣術遣いふるの家に旧く勤め免許をも取った腕前ゆえ、討合では敵わんが邪魔になるのは此の勇助、泳ぎを知って居るかとつくりと聞くと泳ぎは徳利の仮こわい声でブク／＼だというから、何んでも水で殺すよりほかに仕方が無いと決心して、矢切の渡場わたしばで喜代松という船頭と共謀ぐもになつてゐるとも知らず、迂濶乗うっかりつた勇助を、川中でドブリを極めたのでございます。

喜「エー、うめえな、斯う云う事でなければ錢儲けはねえな」

丈「早く急いで漕ぎねえ」

と向^{むこうぎし}岸へ急ぎますと、勇助は泳ぎを知らん^{どころ}処では有りませ

ん至つて上手で、^{ぬきで}拔手を切つて泳ぎながら、

勇「己を欺いて水中へ落し入れやアがツて、此の大悪人め、船を返せく」

と追掛けてまいるのを見て、船頭の喜代松は真^{まっさお}青に成り、

喜「泳ぎを知らねえ^{てえへん}処か……これは大^{あが}変だ、上つて来りやア殺

されるかも知んねえ、お前^{めえ}能く聞いてから遣れば宜かつたのに」

丈「こん畜生、ナニ^{うぬ}汝助けて置くものか」

といううち勇助は遂に船まで泳ぎ附^{こべり}け舷へ手を掛けて船を上^{あが}ろ

うとしましたが、上つてまいれば忽ちたちまに勇助のために斬殺きりころされますので、丈助が錆さびた一刀を引抜き、勇助の頭脳あたまへ割附わりつける。

「アツ」

と云いさま手を放し沈みましたが、船底を潜くぐつてまた此方こちらの舷へ手を掛け上りに掛るから、今は丈助も死物狂いでございますゆえ、喜代松の持つて居た水棹みさおを取つて勇助の面部を望み、ピューと殴る。其の内船は漸々ようくむこうがし向河岸へ着きました。が、勇助はまた泳ぎ付き、舷へ手を掛け、船の中へ飛上ろうとする処を、喜代松に水棹を以て横に払われ、バタリと倒れたが、また丈助を狙つて上つて参りまする処を、丈助が狙い打うちに切きりつけ、たゞみかけて禿はげたる頭の脳髓のうずいを力に任せて割附ける。

勇「アツ……ア、おのれ丈助、能くも己を欺いて斯^かる処へ突^{つき}入れ
たな」

と云いながら死物狂に成つて上^のる処を、水棹で払われ、また続
いて斬り掛けました事ゆえ、勇助も年が年なり、数ヶ所^{すかしよ}の手傷に
身^{しんたい}体自由ならず、其の儘船の中へ転^{ころが}り込み、身を震わし、それ
なりに成る、上^のへ乗しかゝり無茶苦茶に止^{とど}めを差しました。折か
ら朧^{おぼろづき}月夜ゆえ向河岸まで能く見えます。

丈「オヤ喜代松、気が利かねえじやアねえか、サツサと手伝つて
殴れば宜^いいのに、茫^{ぼんやり}然して居やアがつて間拔だなア」

喜「己だつてハア魂消た、泳ぎを知んねえどこじやアねえ、あの
くれえ泳ぐものは此の村にも沢山^{たんと}ねえ程上手だから、上^{あが}つて来れ

ばお前めえも己も打ぶつ斬られると思つたら、魂消ちまつて棹を取ることも何も知んねえだよ」

丈「えゝ、大きな声で喋るな、此の血だらけの死骸は他に仕方がねえから、河中へ漕こぎ出して深ふか水かんどへ沈めにかけるより仕様は有るめえが、何か重い物を身からだ体に巻附けたいと思うが、あの団子だんごを売る葎よしず簀ず張はりの処ところに力ちから持もちをする石が有るから、縄も一緒に探して持つて来きや」

喜「えゝホウ、実におツかねえたつて何うすべえかと思つてたよ」丈「愚図々々喋らねえでも宜いいから早くあがれよ」

喜「おゝ」

と喜代松が岸へ上りますと、先程から此の葎よしず簀ず張はりの処ところにノソリ

と立つて居たのは金重の弟子の恭太郎という馬鹿な男で、と見て

喜代松は恟^{びつく}り致し、

喜「誰だ、エ、誰だ、そこに居るは誰だ」

恭「おいらだよ」

喜「丈助どん／＼」

丈「えゝ」

喜「おめえら宅^{うち}の恭太兄^{あすこ}いが彼処に立つてるだアよ」

丈「ナニ恭太が、何うして来やアがったか知ら、恭太」

恭「えゝ」

丈「手^{てめえ}前何うして此処へ来た」

恭「^{おい}己^おらはあの草団子を喰いてえと思つて叔母^{おあし}さんに銭^{おあし}を貰つた

から買^{かい}に来たら、日が暮れて夜はねえツてえから塩煎餅買^{さつき}つて、先刻から喰いながら此処に立つてたのよ」

丈「手前^{てめえ}何か見やアしねえか、此の伯父さんと己と種^{いろく}々船の中で訳が有ったんだが、手前そんな事は氣が附くめえのう、何も見たんじやアなかうなア」

恭「何だか己^{おら}知らねえけど、勇助さんという老爺^{おじい}さんを殺した事は知ってる」

丈「馬鹿だつて油断はならねえなア」

喜「だから己が云わねえこツちやアねえ」

二十四

安「御免下さい……御免下さい」

しの「はい誰方どなた」

安「御免下さい」

と上り端あがはなに両手を突き丁寧に辞儀をいたし、

安「先達せんだつて一寸ちよつとおたずね申しましたが、春木町の紀伊國屋の

手代安兵衛でございまする」

しの「おゝ然そうだっけや、誠にお見それ申しましたよマア、構わ

ず此方こつちへお上んなせえましよ」

と云われても前に怖氣おしけが附いて居りますから、怖々こわ／＼台所

口から上つてまいり、

安「先達は御立腹が解けませんで私は何ういたそうかと存じました処、お寺さまのお名前だけ承わりましたから、直に法泉寺さまへまいりまして、私が主人の代に御法事をいたしましたが、それで仏さまの御立腹が解けましたか解けませんか存じませんけれども、主人の心だけの御法事御供養をいたしました事は、定めてお聞及びでもございましょうが、何うかこれで一つ御勘弁を願いたいのでございまする」

しの「はい、村の者が江戸の大尽だか知んねえけど、豪えもんだ、田舎には沢山ねえ法事だつけって、村の若えもんや子供を招ばって餅い撒えたり、銭い撒えたりして、坊さまを夥多呼んで、大した法事だつて、それから二度めに法事いした時には、中山の

お上しやうにん人さまを招ばつて御祈禱をしたてえから、紀伊國屋でも

魂消て若草の法事いするような心に成つたかえと思えば、私わしも少

しは胸が晴れやしたよ」

安「誠に有難うございます、就つきましては段々と伊之助の足も痛

みますので、お医者が何んでも足を切らんければ癒なほらんと申しま

するゆえ、主人も心配致しておりますが、男のことゆえ大主人おお

は諦めましても、只ただた一人の忤たつの事ゆえ、母親が諦めませんで、

叔母さんのお心持が解け、怨みが晴れなけりやア仏さまの怨みの

晴れようはないわけだと申しまするので、ヘイ、何うか一つ叔母

さまのお怨みをお晴し下されば誠に有難いことゆえ、実は叔母さ

まが私わたくしの方へでも入らしつて、病人に会つて下さるようなお思おしめ

召しになれば、病氣も全快致しましょうかと存じまして、続いて

お詫わことに出ましたのでございますが、御勘弁に相成りまするならば何うか一つ願ねがいたいもので」

しの「ナニ、そんなに謝あやまらなくつても宜ええよ、先達はお前めえさんに

えれえ事を云いいましたが、若草は私わしのためには一人の姪めいで、実は

私の兄あにきは鋏鍛冶をして江戸の湯島に居ゐやしたが、離はなれてるから私

も近いしく往いきもしねえけど、其の兄の一人娘で、死ぬ時に私へ

遺言わかれして、汝の娘にしろつてえから、私も彼あれにかゝつて、死し水みにみず

を取とつて貰もらうべえと思おもつてる只ただ一人の若草に、あゝ云いう死しに様よう

をさせたは伊之助ゆえと思おもうから、私も煮えるように肝かんが焦いれて

なんねえだが、お前めえさんから段々の話で私わたしいだけは勘弁かんべんもしよう

けんど、死んだ若草は勤めの中で伊之助さんより他に男はねえと思え^{おも}詰め、夫婦約束の書付まで取交せ、末は必ず斯うというわけになつてたのに、伊之助が無沙汰で女^{にようば}房を持つて、其の上手紙一本よこさねえで、吉原のよの字も、若草のわの字も厭だというやうな不人情な心なら、己が死ねば三日経たねえ内に伊之助を取殺すつて、身を振^{ふる}つて口惜しがつたよ、その苦しい中で伊之助さんの胤^{たね}の赤子^{ね、っこ}を産んだが、そういう中で産れた赤子だから育つわけはねえから、二^{ふた}声^{こえ}三声泣いて直ぐにおツ死^ちんでしまった、それを見ると若草は血が上^{あが}つておツ死んだから、死んだ若草に死んだ赤ン坊を抱かして早桶へ入れて、此の矢切村へ持つて来るまでと云うものは、私がハア船の中へぶツ転が^{くやし}つて泣くほど口惜か

つたから、実は私も祈りましたが、おまえの方で法事供養をしてくれえに思わば、私は勘弁もしようが、若草は成仏が出来めえから、若草に詫いするならば他に仕様は無えが、若草の浮ぶようにして遣つてくんない」

安「へ、何ういうことに致しましたらば浮ぶようになりましょう」
 しの「夫婦約束を反古ほごにして、起請きしょうというのは己おら知んねえが、熊野の権現さまへ誓ちけえを立てると烏ウ三羽死ぬとかいう話を聞いているが、それだから死んだ若草を生きて居る心で、伊之助さんと若草の位牌いへえと婚礼して、若草に沙汰なしで持った嫁子よめっこを離縁してくんないせえまし、影も形もねえけんども、口惜くやしいと云う執念は残つてゐるだから、私わしから若草の執念を晴らすようにしべえから、若

草の位牌と婚礼の盃をしてくれたらば、私も勘弁をしましょうよ」
安「ハイ、お位牌と婚礼を致しますかナ……成程、如何にも御尤
さまでございますから、何うか工風くふうを致しましょう、兎に角、主
人へ話して見ましょう」

しの「兎に角と仰しやつても、また何時あなたがおいでなせえま
すか知んねえから、私わしは今でも宜いいんでがんすが……」

安「それは誠に恐れ入ります、斯ういう事は早い方が宜しい、実
は明日あすか明後日あさって是非とも足を切らなけりやアならなくなつて居り
まする事ゆえ……左様ならば直すぐにおいでを願ひましょう」

と是から田舎氣質かたぎの律義な婆アゆえ、若草の位牌を脊負しよつて安
兵衛の跡に従ついて堀切の別荘へ参りました。安兵衛は直に宅うちへ連

れ込もうかと思いましたが、お雪の兄の岡本政七が来て居りますので、極りが悪いから、おしのを隣の家へ預けて置き、安兵衛だけ這入りました。

主人「おや／＼安兵衛御苦労、明日のういよく先生が伊之助の足を切るんだが、親類立合でなければ切らんと云うので、傍で見るのは厭だけれども、仕方がないから船で出掛けて来たが、お前若草のお墓参りにでも往ったのか」

安「へえ、先達てあなたも彼ア云う怖い夢を御覧なさり、また何処で伺つても、御園を取つても死霊と生霊という処は怖いように中つてますナ」

主人「本当に怖いようだ」

安「^{わたくし}私は現に其の婆さんの怖い姿を見た上に、薪割を^{ぶっ}打付けると
まで立腹したんですが、その婆さんを一目見たので祈つてゐる事が
解りましたよ、婆さんの怨みも死んだ花魁の恨みも晴れさえすれ
ば、若旦那の御病氣は御全快になりましうと思ひ、^{おみあし}御足を切
らぬようにと種々^{いろく}考えまして、怖々ながら^{こんにち}今日婆さんの処へ
まいりますと、先達ての大した法事の様子も婆さんの耳に這入
つて居りまして、大きに心もちが解けた様子ゆえ、段々と話を致
しました処が、己は勘弁もするが、死んだ若草の怨みは晴れない
から、若草が生きている積りで位牌と婚礼をして貰いたい、それ
から若草花魁と若旦那とは夫婦約束の書付まで取交せた仲だのに、
書付を反故にし、若草に無沙汰で他より嫁を貰ったのが立腹で死

んだのだから、其の嫁を離縁してしまつて、花魁の位牌と杯さかずきをして
 くれたらば、若草が成仏するだろう、私の怨わしも晴うられるといふの
 ですが、是は田舎氣質の婆さんだから屹度きつと晴れるかも知れません
 よ、お呪まじない咀くさえ利きますから、実はその婆さんを一緒に連れて
 まいりました処、万年町さんが来て居らつしやいますから隣の彌や
 兵衛へえさんの宅たくへ婆さんを預けて置きました、御嫁子およめごを離縁なす
 つて、お実家さとへお歸しになりますれば、若旦那の御足おみあしを切らず
 とも御全快になりましようと思ひますが、如何いかゞでしよう」

と云うと、主人宗十郎は氣色けしきを変えて怒おこりまして、

主「コウ、安兵衛どん、お前は何歳いくつにおなりだ、え、何歳になる
 よ」

安「へえ、わたくし私は四十五歳」

主「ふぎけなさんナ、おまえは十露盤そろばんを取ったり帳面を扱ったり
させれば一いっかど廉の人間だけれども、人を馬鹿にするも程が有るじ
やないか、位牌と婚礼をしろって馬鹿くしい、そんな事を真まに
受けて此処まで連れて来る奴もねえもんだ、そんな事はいかねえ
から矢切の婆さんを帰してくんなよ」

安「へえ……どうもそれが帰すと云うわけにはまいりません」

主人「なにが参りません、安兵衛どん能く考えて見な、万年町のお雪は子供の時分から私の方へ嫁に貰う約束をして置いたものだ、それを忤こが自分の勝手に女郎と夫婦約束をしたのだから、お雪の方で怨いんで宜い筋だ、殊に去年の秋から来て居て、彼の通あり親切

に悴の看病をするのは何うだえ、まだ年もいかにのにしおものだち塩物断
 をしたり、断食だんじきをして座敷の内でお百度を踏んで祈念を凝こらす貞て
いしん信の心を、神さまも守つて下さるかして、あれがお百度をあげ
 る内は伊之助がトロく寝られるという、あんな結構な嫁を何なにと
 咎がも無いのに離縁して、影も形も無い位牌と婚礼をするような
 馬鹿々々しいことを、婆さんに云われたとて、真に受けて歸つて
 来るとは余程よつぽど間拔な男だ、なりませんから歸してくんなさい」
 安「重々御尤もでございますけれども、先達て貴方も夢を御覧な
 すつたでしょう」
 主人「酷ひどく疲れた時にやア夢を見ます、怖いと思うから夢などを
 見るのだ、なりませんよ」

安「只今に成つて婆さんに歸つてくれろと申しますと何んなにど

怒るおこか知れませんが、私の喉笛のどぶえへ喰い付きそうな権幕ですから」

主人「婆さんに喰い殺されてしまいなさいよ」

安「これはどうも……私も悪氣わるぎで致しましたわけではありません、

ねえお母さまふくろ」

母「申し旦那え、安兵衛だつて悪氣でお婆さんを連れて来たので
はありません、先達のお伺うかいもあゝいう事に出たし、斯うじやない

かと私も思つて居りますくらいですし、禁厭まじないも有りますから、

義理をいえば貴方の云う事は御尤もでございまするが、禁厭同様

の積りで験ためしに雪の処を仮に離縁として、禁厭に遣つて御覧なさ

いませんか」

主人「お前までが然ういう老耄もうろうしたことを云いなすつては困るよ、それだからお前が皆みんなな彼様あんなな道楽者にしたのだ、チビく私に隠して遊びの金までお前が遣はなんなすつたのだ」

母「何なんぞというとなあなたは私の所せ為いに成なりますが、当人が病身だと云つて、十九の時にあなたが彼あれを連れて往らして、あなたが芸者を買つたと云うじやア有りませんか、あなたが若い時分のお馴染の、柳ばしのお糸という婆ア芸者を呼んだじやア有りませんか」

主人「そんなことを今云わないでも宜いいから、矢切の婆さんを帰しなよ、そうして斯んな詰らん事でお雪を離縁する事が出来るかえ、私の悴の病気が癒いしたいからお雪を離縁して、位牌と婚礼さ

せるなんてえ馬鹿くしい事が、あにき好い年をして己の口から万年町の兄に云えますか、私には云えない、本当に馬鹿な話だから、サツサと帰しなよ」

安「へい驚きましたな、帰れと云うのが一番怖いので伊兵衛お前然う云つておくれな」

伊「わたくし私には云えません、何ういたしまして、わたし私が叔母さんを突つころばしたんですからな」

主人「ぐずく云つてずに早く帰してしまいなよ、誰でも宜いいから早くそう云いなと云うに」

安「誰だツて……困りましたな」

と皆心配致して居りまする処へ、襖を明けて這入つて参りまし

たは岡本政七でございます。

二十五

政「お父さん^{とつ}、誠に御無沙汰を致しました」

主人「おや／＼これは毎度また遠い処を御親切にお見舞なすつて下さり、誠に有難う存じまする、追々陽気になりましたな、船でおいでではあろうが、遠い処ゆえ中々容易なことでは有りません、毎度また結構なお土産を有難うございまする、何んだかとうとう足を切ると云うので、厭々ながら出て参りました、私は血など出るのを見るのは大嫌いだが、仕方無しに出て参りました」

政「飛んだ御難病で嘸御心配な事でございましょう、少々お父さまにお願いがございします、私のためには只た一人の可愛い妹でございしますから、伊之助さんのような人に添わして置く気は有りませんから、是までの御縁と思召しまして、今の内ならば何でもなりますから、何うぞ御離縁を願います」

主人「へえ……それは何んで離縁をしろと仰しやいます」

政「何うも伊之助さんに添わして置くわけにはいかないのだ」

主人「それは何の御立腹で」

政「何の立腹もありませんが、足を切ってしまう不具の亭主を妹に持たして置くのが厭でございしますから、何うか満足の間人を亭主に持たせたいのです」

主人「これは怪しからんことを仰しやる、それはお前さん余りな事を仰しやりますじやアございませんか、お雪は私の処へ遣してしまえば、其の家を家とするが女の道で、左様じやアありませんか、最早貰つてしまえば私の娘だ、たとえ兄さんでもお前さんの勝手に離縁は出来まい、また私の方でもお雪に離縁が出せるか出せないか考えて御覧じろ、出せないじやア有りませんか」

政「出せないと仰しやつたつて私は嫁に遣したんじやア有りません、只伊之助さんの看病に遣したんです、不具の亭主などを持たしては置かれません」

主人「そんな事を云つたつて世界の人に不具は有りませんか、夫婦に成つてから亭主が腕を折るとか足を挫くとか、眼が潰れると

かする度たびに夫婦別れを致しますかえ、私は出しませんよ」

政「出すも出さんも有りませんよ、わたくし私は連れて参ります、媒なこうど介人

は有りますが、まだ結納の取替とりかわせも婚礼も致しません、只許嫁

の誼よしみで病氣中看病に遣しただけです、合せ物は離れ物だから私

は上げる氣は有りません、是でも私は万年町の名前人なまえにんだから、

私がならんと云えば破縁になるので、当人が何と申そうとも私は

上げられません」

主人「イエ私は出しません」

安「まあ／＼宜うございます、旦那さま、まあお静かになさいま

し」

政「わたくし私は何処までも連れてまいります」

主人「イエ何うしても私は出しません」
わたくし

安「旦那まアあなたは彼方へ、あちら万年町さん、どうも主人は彼の通
りな昔氣質の人物ゆえ、かたぎ無一国な事を申しまして、誠に相済み
ませんが、どうか一つこの処だけを……」

政「此処の処だけでも何も有りませんびっこ跛足の亭主などを妹に持たし
ては置かれませんが、本当にお前さんの処へ縁付けて置くと、親類
中に祝儀不祝儀の有った時に、ピョコ／＼跛足を引かれて来られ
ちやア、わたくし私が困りますよ」

主人「べらぼう篋棒な……然ういう了簡なら猶出せません」
そ

政「そんなこと言ッたつて斯んな処には置かれませんよ」

安「まア／＼彼方へ」

とお父さんが居ては面倒ゆえ宥め透して船へ乗せ、本郷春木町へ帰しました。そこが女親は甘いものでございますから、

母「安兵衛や、お父さんが義理立をするは宜いが、只た一人の倅を不具にしても嫁が出されないと腹を立つも義理でございまいしよ
かたわうが、倅が死んでも嫁は出せないとお云いだが、倅が死んで嫁が入りますか、本当に、併し私は伊之助に勧めても去状さりじようを書かせようと思つてゐる処へ先方で連れて帰ると云うのは幸いだ」

と母親は伊之助の枕元へ参りまして段々説得致しますと、伊之助は去状で此の苦痛のが免れるなら、百本でも書きたいくらいでございますゆえ、そんならばと云うので三行半ゆえ訳は有りませ
みくだりはんんから、サラ／＼と書いて安兵衛の手に渡すを受取り、政七の居

る座敷へ出てまいりました。

安「万年町さん、エ、仰せの通り若主人伊之助に御離縁状を書かせて持つて参りました」

と差出すを受取り、

政「お父さんが出さないと云つても伊之助さんさえ離縁状を書いて下されば、それで宜しい」

安「いえ、何うか是はソノ当人の病氣が全快致しますまでのホンのおまじない同様の訳でございますから、当人の病氣が全快致しました上は、又何の様どうようにもお話を附けます事ゆえ、何うか御立腹なく願います、実は当人も出す氣のないところを無理に勧めて書かせましたのですが、是は只仮にホンのモウ反故同様のもので」

政「何をいうのだ安兵衛さん、お前も立派な人じゃア有りませんか、離縁状を取らなければ他^{わき}へ妹を縁^{かたづ}付けることが出来ませんか
ら貰う離縁状、反故には出来ません、冗談云つちやアいけません
よ、お前さんの方では病氣^{なほ}の癒^{なほ}るまでとか、おまじないの為とか
思召^{こころ}しましょうが、当方では真面目に取りりますから左様^{そう}思召し下
さいまし……雪や、雪、一寸^{ちよつと}お出で」

雪「はい」

と広間で不動さまへお百度を踏んで居りましたが、先程からの
様子を薄々^{あに}聞いて居りましたから、涙ぐんで出てまいり。

雪「お兄^{あに}いさま、お呼びなさいましたか」

政「はいお出で……安兵衛さん妹の道具は後から取りに遣します、

船が待つて居りますから直に此の衣服で連れて帰ります……雪、伊之さんの処から離縁状が出ましたから直に宅へ帰りましょう、其の衣服でおいで、着物を着替るのも面倒だから」

雪「はい……私は何で御離縁になりました」

政「何だつて離縁状が出たのだ」

雪「何の咎で私は出されますのでございます」

政「何の咎もないが伊之さんの氣に入らんから出したのだろう」

雪「お氣に入らんと仰しやつても、私は是まで御看病をいたし、

今になつて御離縁をされますような覚えはございませんのに、御離縁になりますというは何ういうわけでございますか、悪い廉が

ございますならば幾重にもお詫を致しましょうから、貴方からも

若旦那さまへお詫をなすつて下さいまし」

政「詫ごと何もいらない、もう離縁状を取ツちまったから仕方が有りませんよ、去られた家には片時も居られるわけのものでは有りませんから、一緒においでなさい」

雪「イエ、^{わたくし}私は参りませんよ」

政「そんな事を云つては困りますよ、あんな不具^{かたわ}の亭主を持たしちやア置かれません」

雪「大きなお世話でございます、不具でも何んでも私^{わたくし}の亭主でございます、あなたのお世話には成りません、来年は必ず全快致しますよ」

政「そんな事を云つては兄^{あに}さんが困りますよ」

雪「あなたのお困りなさるのはあなたの御勝手次第で、御離縁をお取り遊ばすなら何故一応私に話をなさいません」

政「それは重々私が悪いけれどもね、種々世間の義理というところが有りますから、さアおいでよ、不具の亭主などを持たして置かれますか」

雪「私は参りません」

政「そんな事を云つては困りますよ」

雪「困ると仰しやっても、あなた私が当家へ参りまする時に何と御意遊ばしました、お前は伊之さんのようなあんな善い立派な亭主を持つて誠に仕合せだ、伊之さんは男も美し、才氣の有る人ゆえ、それだけの働きが有るから、他に妾ぐるいをなさるまいもの

でもないが、たとい何んな事が有つても悵りんき氣をして離れるような事があれば、二度と再び顔を見ない、紀伊國屋の家を出れば兄きよう妹だいではないとあなたが御意遊ばしたことが有りまするし、それに女は縁付かたづいてまいりました家を家とするが女の道だと仰しやつたお言葉を守つて、私は御看病をして居りまするものを、悪い廉も無いのに去られるわけは有りません、もし悪い廉がございますなら幾重にもお詫をいたしますから、どうか其の御離縁状を若旦那にお返しなすつて下さいまし」

政「書付を返すというわけにはまいりません、もう取ツちまつたんだから」

雪「あなたが御勝手にお取んなすつたので、お父さまとつも私わたくしを出す

思召はない御様子なのを、あなたが無理に喧嘩仕掛をして書付をお取んなすった事を私は薄々存じて居りまする」

政「安兵衛さん、彼方^{あっち}へ往つて下さいよ、お前さんが其処に居ちやアいけません……お前が此処に居ると伊之さんの病氣が癒らんのだよ」

雪「いえ、^{わたくし}私は一生懸命で不動様へ御願掛^{ごがんかけ}をして居りますから御全快になりますよ」

政「ナニお前さえ此処を出てしまえば、伊之さんの病氣は癒ると云うのだよ」

雪「いえ、^{わたくし}私は死んでも此家^{こゝ}は出ません」

政「困りますねえ、お前は今まで兄さん^{にい}の言葉を背いたことはな

いじやアないか、第一私の恥にもなり、お母^{つか}さんも心配なすつて入つしやるから、伊之さんばかりが男じや有りません、立派な処へまた縁^{えんづ}附けるから一緒に往つてくれないと私が困りますよ」

雪「参りませんよ」

政「何故そうだ」

雪「今まではあなたのお言葉を背いた事は有りませんが、今度に限^{わたくし}つて私は背きます、出て行^ゆけと仰しやるのは御無理でござい
すから」

政「困るじやア有りませんか」

雪「困ると仰しやつても私^{わたくし}はもう七月^{ななつき}に成りますもの」

政「それは知ってるよ、知つてゝ云うんだから、兄さんが重々無

理だが、能く考えて御覧、お前が此家こゝに居ると伊之さんの病気が癒らないから、お前を出しちまつて、死んだ花魁の位牌と祝言さかずきの真似事するとか、婚礼の真似事をすれば癒ると云う事なのだよ、けれどもお父さまは義理が堅いから、仮令たとひ伊之助は死んでも嫁の離縁は決して出来ないと云うのだから、お前が何処までも剛情を張つて、これなりで居れば、お前は宜かろうが、伊之助さんの病気が癒らないで足を切ったら何うする、お前もそれ程大事な亭主の病気が全快しないのではいけませんまい、お前の悪くないことは私も知つて居る、寝る目も眠らずに看病をして居るくらいのもので出て往つてくれると頼むのは、実に悪い、私わたくしが悪い、けれども、何うしてもおまえを連れて帰らなければならぬ私の義理わたしに成つ

て居るのだよ、お父さまが悴は死んでも出さないと仰しやるから
つて、私はおまえを置いては往ゆかれませんか、私のいう事を聞
いてくれなければ、宜うございます、兄さんは帰りがけに船の中
から河の中へ飛び込んでしまいます、それでも宜よいかえ、往つて
おくれよ、お前は離縁状を取つて去られても貞心な立派な嫁だ、
私も困るから往つておくんなさい」

雪「はい……まいます、まいます」

と涙ながらに漸やっと申しますと、政七は態わざと大声で

政「不具の亭主を持たしちやア置かれないから、サツサとお往いで
よ……番頭さんく」

安「へえ何うも何とも何うも誠にお気の毒さまな訳でございます

が、種々茲いろいろこゝに何うもソノ変なことがございますので、實にお嬢さまへは何ともお氣の毒さまな訳で相済みませんが、ホンの当分おまじないを致しまする間まと思召しを願います」

雪「どうぞアノお母さまにそう仰しやって下さいまし、痛む方のおみあし御足おみあしへ斯う枕を取外とりはずす時には、何うも男の手では痛いから、女が宜いけれども慣れない中うちは痛いと仰しやって、私わたくしにばかり仰せ附けでございますが、私が居りません後のちは、恐れ入りますけれども、今晚からお母さまにどうぞ私に代つてお柔らかに枕の取替をなすつて下さるようにお言伝ことづてを願います、まだ種々申したい事も有りますけれども、哀しくて胸がふさがり、何も申すことが出来ませんから、何うぞそれだけ仰しやって下さいまし」

安「何うも変なことになって居りますのでございまして、何ともどうもハヤ」

政「馬鹿／＼」しい、早くおいでなさい、離縁を取ってしまえば其の亭主の足がおつぺしよれようとも構うものか」

と態と暴々あら／＼しいことを云うのも此処よんどころの義理を思うからで、腹の中では不便ふびんとは思いましたが、抛よんなく政七は妹の手を引いて出てまいる。後あとへ入れ違つて矢切の婆さまが這入つて来るという、これから位牌と婚礼でございます。

二十六

さて此の度のお嘸たひは位牌はなしと婚礼を致す処でございます。位牌と婚礼を致しました者は天下に二人で、其の頃の紀伊國屋の息子と若草という遊女の位牌と婚礼致し、近くは澤村田之助さわむらのすけが芸者の位牌と婚礼致しましたが、おかしな訳でございます。今田舎氣質かたぎの婆さまが正直に若草の位牌を脊負しよつて這入つてまいりました。安「さア何卒どうぞ叔母さん此方こちらへお這入りなさい、御遠慮なしにずッとお這入りなさいまし、エ、お内儀かみさんえ、矢切村の叔母さんがおいででございます」

内「おや、さア何卒此方へ……お初にお目にかゝります、私わたくしは伊之助の母でございます、此の度はまた忤が年の往いきません故何かと行届ゆきとどかん勝で、安兵衛が、私に打明けて話を致しますれば、

こ
斯んな事にも成りますまいものを、皆みんななお前が行届かないからだ
つて小言を申して居りました、それにあなたも御立腹なさり、花
魁も伊之助の胤たねまで孕やどして苦勞をなすつたという事です、それ
程までに悴を思っておくんなすつたは、御商売柄には似合わない
真実なお人だつてね、私どもが知つて居りますれば、何なんの一人や
二人の妾を置く人は世間に幾らも御座いますから、どうでも成つ
たものを、誠に惜しいことをしたつてね、後悔致しましたが、今
更仕方がございません、けれども、それがために斯んな病氣に成
りましたのですから、あなたの心も解けて御得心の上入らしつて
下すつたのでしようから、私も大きに安堵致しました、何うか幾
久しく、これから伊之助の真実の叔母さんにお成んなすつて下

されば、伊之助も又あなたのお力に成りまする心得でござい
 ますから、幾久しゅう願います」

しの「これはお初にお目にかゝります、私は矢切の婆アでござい
 ます、今度^{こんたび}は又飛んだ行^{ゆきちげ}違えから伊之助さんがえれえ病^{やめえ}にな

つたと云うは、私どもで怨^{おめ}んであるという訳なんで、何とはア諦^{わり}め
 の悪い婆アだと思^{おも}えなさるか知りましねえけんども、若草も実は

伊之助さんの事でいろ／＼辛苦尽して、勤めの中での病み煩い、

私も若^{わか}え時分にア随分苦勞をしたでござえます、がそれも得心の

上なんでがんすから愍^{かわえそう}然げだと思^{おも}召^{おほしめ}してね、影も形も無^なえ若草

と婚礼しろつてえのは無理な訳でござえますが、それに今承りま

すれば咎^{とが}も報^{むくい}も無え嫁ツ子さんが離縁になつて兄さんが小言をい

いながら船へ伴れ込むと、嫁さんが私わしのような詰らん身の上は無
えつて、泣きながら船へ這入へえるのを見て、何んとハアお気の毒な
わけだアと思つて、私イお隣で泣いていましたが、死んだ若草に
意見の仕様も諦めさせ様も無えから、形も無えものを生きて居る
心持で婚礼でもして下すつたら、若草も成仏して、伊之助さんの
病やめえなも癒なろうかと存じまして、私が参めえつた訳でござえますから、何
分にも何うか婚礼の真似事だけをネ番頭さん」

安なり「ヘイ宜しゅうございますが、御内儀おかみさん、若旦那様も御病氣
の服装なりでも何んでしようから、一寸御紋付物か何かのお支度を
成さしましては如何いかゞです」

内「あれの物は一通り此方こつちの土蔵に来て居るから出して着せまし

よう」

と黒斜子の五所紋くろなゝこ いつところもんの上へ行儀霰ぎようぎあられの上下かみしもを着け、病やみほう耄みほうけて居る伊之助を、褥とこへ寄掛りを拵こしらえて、それなりズルく座敷へ曳摺ひきずり出しますと、

伊之助「もし叔母さんおいでなさい、誠に私わたくしは行届かない事から、叔母さんにまで御立腹をかけて何とも申訳が有りません、みんな私わたしが悪いんですから、何うか私わたしの業病の癒るようにお前さん守っておくんなさい」

しの「はい……えらく瘦せたね、誠にお前様を見ると私わたしは思おもえ出でしますが、若草もお前様の児こまで出来でかして何うも案じるとも案じねえとも、昼夜お前様の事をいいく泣明しておッ死ちんだアから、

かわえそう

愍然だと思つて婚礼をして遣つてお呉んなせえ、ね番頭さん」

安「へー左様で何でも早い方が宜しゅうございます、伊兵衛や灯あ火かりを持つて来きねえ、お料理や何かの支度は出来たかえ」

伊兵衛「湯葉の大きいのがございませんでお平ひらが出来ません」

安「お前何を誂あつらえたんだ」

伊兵衛「何をつてお料理を拵えますんです、お精進にて」

安「精進じゃアない、御婚礼だから蛤のお吸物に尾頭おかしらつきでなければ出されません」

伊兵衛「でもお位牌との婚礼ゆえ残らず御精進にいたしました」

安「生きて在いらっしゃるつもりでするんだから、本当の婚礼の式でなければいけません、尾頭つきに何かお芽出度いものでなければ

ば成りません」

しの「いえ何でも宜うがす、無駄だから、それに位牌いへえを戴いッける机を一脚ひとつ」

安「ハイかしこまく畏りました、伊兵衛や机を一つ持って来てくんナ」
伊「へい」

と机に花立や線香を持って来ました、

しの「いえナニ花立や線香は要りません」

安「生きていらつしやる積りだから、そんな物を持って来ないでも宜いいに」

と是から婆さんが机の上に位牌を飾る、其の内にお料理も出ました。

しの「さア何うぞ番頭さん、あなたが盃を若草から先へ酌いで遣つておくんなせえまし」

安「へえ此のお盃はお机の上へ載せますか、斯様なことは初めてでございますから何うも勝手が分りません、これへ酌ぎますか」

しの「はい」

安「宜しゆうございます」

と机の上へ据置いた若草の位牌の前へ盃を置き、なみく酒を酌ぎました。

しの「ア、宜うございます、これ若草汝は伊之助さんより他に男はねえと思へ詰めて夫婦約束までしたが、お互えに物の間違えから兎まで出来して、汝え先へ死んだが、今じゃ伊之助さんも汝

がに済まねえといつてな、義理いある嫁まで離縁して改めて汝と盃いするツてえが、此の煩つてる身体で嫁ツ子を出せば何のくれえ不自由だか知んねえのに、離縁して汝と盃いするツてえから汝も是から伊之助さんを、影身かげみに附添うて、何うともして伊之助さんを守らねばなんねえぞ、これで汝の思う心も届き伊之助さんと盃いすれば斯んな嬉しい事は有るめえ、己も嬉しいから汝飲んで伊之助さんがに献さすだアよ若草」

と田舎氣質かたぎの婆さまが、さもく位牌の前ところに若草が、病やみほう 耄けた姿でこう首を伸べ、片膝を立て、其の上へ手を載せて生きて居るように云うので、伊兵衛も安兵衛も前々から種々いろく怖い事ばかり引続いて有りますのですから、ぞツと総毛立ちました。

伊兵衛「南無阿弥陀仏く」

安「何だ御婚礼に念仏をいう奴が有るものか」

と云つてると、不思議な事には誰も机の傍へ寄りもしないのに、位牌の前に据えた盃がひっくりかえり、酒が溢れてポタ／＼滴りました。

安「お盃がひっくりかえつて、お酒が溢れたのは御意に適わんのではございますまいか」

しの「ナニ若草が飲んだで御座えましょう、飲んだら汝え直に伊之助さんがに献すだアよ」

安「へえ召上つたのでございますか」

しの「あなた盃を取つて献^あげて下せえな」

安「私^{わたくし}には何うも取りにくうございます」

と云うは怖いからで、叔母が取つて伊之助に献^さし、

しの「酌^ついで進^あげて下せえよ」

というので安兵衛が酌^{しやく}をする、伊之助は痛む方の足を出し盃を口元まで持つて参りますと、不思議な事には軒端^{のきば}から一陣の風がドツと吹き入りますと、今まで点^ついて居ました灯火^{あかり}が一時に消えましたから、伊之助もぞツとするほど身の毛立って、思わず持つて居ました盃をバタリと取落すと、痛む方の足へ酒が掛りました、其の染^{しみ}る事というものは一通りなりませんから、

伊「ア、痛い」

と思わず発した声にまた驚き、

伊兵衛「南無阿弥陀仏く」

安「また念仏を始めた、灯ひが消えたから早く灯火あかりを持って来な」

伊兵衛「へえ」

と怖々出て往ったが慌てゝおりますから、火打を出してカチノうちつけ漸ようやく灯火を点けてまいり、座敷の燭台へ移しました。するうちに始まりは大層染みたように思いましたが暫く過ぎると前より少しは痛みが去ったようでございます。

伊之助「実に不思議な事だ、大きに凌しのぎよくなった……兎に角今晚はお泊んなさい、芽出度く祝すから」

というのですが、芽出度いとは云い難にくいわけで、すると其の晩は伊之助の足の痛みが大きに軽くなりましたが、枕元には婆アも

看病人も附いて居ります。これは只今申しますと神経病とでもいうのでしようが、あり／＼と若草が伊之助の枕元に坐つて居りまして、伊之助の腰のもとへ来ては細い手を出し、伊之助の腰を撫摩なでさすり致しまする姿を見た者が三人有ったといひますが、

只今斯様なお話を致しますると嘘おもむのようで。これから段々伊之助の足の痛みも一日増しに快方に赴おもむきました処へ、又上手なお医者が来て診察をして此の薬をお用いなさいと云うので、だん／＼全快して参りましたから、叔母には多分の手当をして上げようと申しましたが、堅くつて中々受けませんので無理やりに持たして田舎へ歸し、時々泊り掛がけに遊びに来て下さいと親類同様にして歸したから、此方こちらの納まりは附きましたが、詰らんのは岡本の妹娘

のお雪で、咎も無いのに離縁をされ、くよく／＼して親の傍に居り、近処へも出ることが出来んというは、七月ななつきのお腹なかで去られたは何か悪い事でもして来たんじやアないかと、世間の口を思い計りて湯に往くゆことも出来ませんから、兄が宅うちへ湯を立てゝ入れるよいっそうな事にして居りましたが、歳のゆかん娘むすめ氣に思い違いを致し、一層いっそう尼にでも成ろうと心を決し不図家出を致しましたが、向島のしらひげ白髭そばの傍そばに蟠ばんりゅうけん竜軒けんという尼寺がございます、是こゝへ駈み込んで参りましたが、其の頃道心堅固の尼が居りまして、名を美惠みゑ比丘尼と申して、年とし齡は五十四でございましたというが、まだ水々して居りまして、一寸ちよつと見ると四十一二ぐらいで御座います、誠に若く見えます。木綿ではございますが、鼠の着物に鼠こしの腰衣ころも

を着け、氣力の有りそうなお比丘尼でございます。大層お弟子も在りあまするが皆因縁の悪い者ばかり弟子に成りますのですから、満足まんぞくの者は一人も居りません、唾お頑かなつんぼあるい聾あう或は悪い病を受けて鼻の障子が無くなつて、云うことが解らなくつて、足が歩く度たびにヒヨコ／＼跛足びつこを引いて、時々転んだりするようなくざものばかり居りまするが、門番は無いから門を這入り、こわ／＼台所口へ這入った頃は、もう日がトツプリと暮れました。奥の方では看かん經きんを致すものもあり、本堂でお經を上げて居るものもありまして、種々いろく働いて居りまする。

二十七

雪「御免なさいまし……御免なさいまし」

尼「はい、何方どちらからおいでだ」

雪「私わたくしは誠に因縁の悪い身の上の者でございますから、尼に成りたいと存じまして、態々わざく参りましたもので、何うか尼様へお願いなすつて、お弟子になすつて下さるように、何うかあなたからお願い遊ばして下さいませんか」

尼「何方のお人じゃえ」

雪「深川の方の者でございます」

尼「そうですか」

と云いながら奥の方を振向き、

尼「思行^{しこう}さん、妙^{みょう}桂^{けい}さん、アノ一寸^{ちよつと}和尚^{さん}様に告げてお呉れな、深川の方の娘さんじゃそうだが、十八九に成る方で、因縁が悪いからお弟子になり、剃髪して尼に成りたいと云つておいでだから、一寸和尚様に告げてお呉れえ」

妙「フアイ」

と鼻の障子の無くなつた尼が和尚の居間へ参り、

妙「お師匠^{ひひょう}はん何んひやか深川^{ふかかわ}辺^{へん}の者やとひゆうて、十八^{ひゆうは}ツ^つふ九になる娘で御座^{おは}えまふが、誠に因縁^{ひんねん}が悪いはら、尼に成り

たいと申ひて来まひたが、如何^{いか}致^{いた}まひよう」

美恵「おまえの云う事はちよつとも解りやせん」

と云いすて、暫らく手を膝に置き、眼を閉じて考えて居りまし

たが、

美恵「イヤ／＼その娘さんは因縁が悪うて尼には成られんから、お歸し、懷妊の身の上で有りながら尼に成つても無駄な話だ、身重の身体で尼に成られるものか、断つて歸しなさい」

と低い声で云うようだが美恵比丘尼の云うことはピーンと台所まで響き、お雪の耳を貫ぬくように聞えましたから、お雪は心のうちで、

雪「ア、恐れ入ったお智識様、成程私わたくしは身重の身体で尼に成ろうと思つたは迷いで有つた、ア、因縁の悪い身のうえ、一層いっそうの事一思いに身を投げて死ぬより他に仕方がない」

とおろ／＼泣きながら蟠竜軒を出て、向島の土手伝いに歸つて

参りますと、ポツリ／＼と雨が顔へ当ります。只今は八百松といやおまつ

う上等の料理屋が出来ましたが、其の時分あの辺は嬉しの森と云

いまして、樹木の生おいしげ茂りて薄うすくろ暗うございます。枕まくらばし橋へ

かゝると吾妻橋が一目に見えます。お雪は我家わがやの方かたを向き、

雪「お母つかさま、お兄あにい様、先立ちては済みませんけれども、私わたくしは

何どの顔下げて何う世間の人に顔が合わされましよう、伊之さんと

は迎とても添えない私わたしの不運、不孝者とお叱りもござりましようが、

不便ふびんの者と思おぼしめ召して下さいまし、南無阿弥陀仏／＼」

と口の中うちにて称しょう名みを唱え、枕橋の欄干へ手をかけて、ドブ

ンと身を跳おどらして飛込みにかゝると、後うしろに手拭はなつかふを鼻はな被かりにし

た男が立つて居りましたが、この様子を見るより早くお雪を抱止

め、

男「姉さん泡を喰ツちやアいけねえ、何だか様子が変だと思つた……これサ待ちねえというに……それは何うせ能々よくよくのことに違ちがえねえ、何だかわけは解らねえが、マア待ちねえというに、安やい」

安「へイ」

男「一寸此処へ来きねえ」

安「何でござえやす」

男「身投みなげだ」

安「エ、出ましたか、気味きびの悪い」

男「この娘ねえさんだ」

安「ウン、綺麗な娘さんだ」

雪「誠に相済みません」

男「娘さん、そう無闇に泣いてばかり居ちやア仕様がねえ、訳は
てえげえ

大概極つてる、亭主に嫌われて離縁され、世間へ顔向けが出来

ねえとか、内証ねえしよに情夫が出来て親に面目ねえんで死ぬのか知ら

ねえが、今の若さで親に先立さきだつて済む訳のものじゃアねえ」

安「本当にそうです、親兄弟おやきようでえに歎なげきをかけては済まねえ……

美しい女ですね」

男「私は斯わつちんな胡散うさんな形姿なりをしてえるから、怪しい奴だと思おう

が、私は伊皿子台町にいる船頭で、荷足の仙太郎という者です」

安「本当です、伊皿子の仙太郎親方という恐ろしい気象の親切な

お方だから大丈夫だ、平氣のへのへで居ねえ」

仙「何だ平氣のへのへてえなア兎も角も船の中へお伴れ申せ」

安「宜うござえやす」

仙「危ねえから娘さんの手を曳いて上げな」

安「^{わっち}私がかえ得心ずくで斯んな美しい娘さんの手を曳いたのは生れて初めてだ」

仙「何だ背中へ手を掛けるな、一生懸命でおいでなさるのに」

と云いながら、枕橋を渡つて、向うの枕橋を渡りにかゝると、

又土手ツぶちで首を縊^くろうとしている者が有りまするのを仙太郎が目早く見つけ、

仙「首縊りがあるぜ」

安「へエ、今夜は滅法界に人の死ぬ晩でげすナ」

仙太郎は首を縊ろうとする男の腰車を担ぎ抱止めて、能々見ると刀屋の番頭重三郎ゆえ恠り致し、二人を同伴して我家へ立歸りましたが、荷足の仙太郎の宅は伊皿子台町でございですが、只今もって残りおりまする豆腐屋がありますが、彼の家は草分だと申すことで、旧い家でございします。その豆腐屋の一軒置いて隣が仙太郎の宅で、好い家ではございせんが、表には荒い格子が嵌つて、台所には腰障子が嵌めてありまして、丸に仙太というのが角字でついて居ります。鬼の女房に鬼神の譬え、似たもの夫婦でございまして、仙太郎の女房お梶は誠に親切者でございしますから、可愛相な者があれば仙太に内証で助けて遣りました者も

多くあります。丁度申下刻なくつきがりに用を終しまつて湯に往ゆくといふので、
鳴海なるみの養老の単物ひとえものといへば体裁ていはいが宜いいが、二三度水に這入つ
たから大きに色が醒さめました、八反に黒繻子の腹合せと云つて
も、山が入いつて段々縫い縮めたから幅が狭く成つて居ります、
其の上にお召縮緬めしちりめんの小弁慶の半纏ひつかを引掛け、手拭ぬかぶくろ糠袋ぬかぶくろを持
つて豆腐屋の前を通りかゝると、六十の坂を五つ六つ越むしたかと
見える巡礼の老爺おやじが、汚れ果てた単物の上に負おいずる笈あしを掛け、雪卸
しの菅笠すげがさを冠かぶり、細竹の杖を突き、白い脚半も汚れて鼠色に成
つたのを掛け、草鞋はを穿はき、余程旅慣れた姿の汚ない姿で、三十
三番の内美濃うちみのの谷組たにぐみの御詠歌を唄うたつてまいりましたが、巡礼の
御詠歌を唄うたうは憐あわれなものでございます。すると向うからガフ

ーリく、朴齒ほうばの下駄を穿き、鉄骨の扇を手に持ち、麻の怪しい脊
 割羽織を着、無反むそりの大小を差し、何処で酒を飲んだか真赤まっかに成つ
 て、頬から腮あごへかけて一ぱいに髭の生えて居る恐ろしい怖い顔の
 侍が、ヨロくツと跟よろけてまいり、巡礼の老爺じいさんに突当つたか
 ら、老爺おやじが転ぶと侍が其の上を飛び越して向うの泥濘ぬかるみへ転がり
 ましたが、自分で突当つて置きながら怒おこりまして、巡礼を捕らえ
 続け打ちに殴ぶちましたから、禿頭へ傷が出来ましたが、侍は尚お
 足を揚げて老爺じいさんを蹴返しました、物見高いのは江戸の習いゆ
 え大勢人が立ちましたが、誰有つて止める人も有りませんから、
 仙太郎の女房が見兼て中へ這入り、威たけり狂っている侍に向い、
 かち「まア待つておくんなさいお腹も立ちましょうが」

侍「イ、ヤ勘弁相成らん、不埒至極の奴だ、往來の妨げをして、侍たる者の袴へコレ此の通り泥を附けて、拙者の折おりかゞみ屈くみを突いたから俯のめつたのだ、勘弁相成らんから八山やつやまへ参れ、斬殺ぶつばなして遣るから」

かぢ「然そうでも有りましょうが、斯んな老耄よぼれた老爺おやじを斬つたつて殴つたつて仕方がないじゃア有りませんか、それは重々悪いから此の通り私が謝まりまするから、どうぞ勘弁して下さい、斯んな者を斬つたつて、なにもお前さんのお手柄にも成りませんじゃア有りませんか、成り代つて私がお詫をしますから勘忍して下さいな」

侍「イヤ、了簡相成らん」

かぢ「お前さん何んですね、そんな事をいうと品川の女郎衆じょうろしゅが笑いますよ」

侍「へん何を笑う」

と云いながら思わずおかぢを見ると、歳は三十二三で小粋な女でございますから見惚みとれて、

侍「これは何うも、お前は感服だねえ、斯様に大層見物もいるが、誰も皆恐れ入けしきつて止めに這入るものが無いのに、女の身として聊いささか憶する気色けしきも無く、速すみかにこれへ出て挨拶をなさる御様子おやうしいい、御器量と云い実に感心した」

かぢ「感心も何も有りませんから私のいう事をきいて、私にまけて下さればお多福の鼻が高く成りますから、斯んなものにかから

わずに、早く品川へでも往らしつて、顔を見せて、あの娘を悦ば
してお上げなさいよ」

侍「イヤ何うも感服だね、様子の宜い御家内だ、宜しい全体勘弁
を致すわけじゃアないんだが、女の身として侍を恐れず、中へ這
入つて挨拶する胆力に感服いたしたから、宜しい勘弁致そうが、
お前にお世話に成つて是なりに別れるのも甚だ何うも私の氣が済
まんから何処へ往つて一杯遣ろう、エ、一寸一ぱい」

かぢ「いけませんよ、まア戴いたも同じことですから許して下さい
い」

侍「宜いじゃアないか、一寸何処かで一ぱい遣ろう、お手間は
取らせん少しの間」

かぢ「いけません、困りますもの、後生だから勘忍して下さい、私のようなお多福でも亭主ていしが有りますもの、お前さんのような粋なお侍と差さしでお酒なんかを飲むと、親指これが嫉妬やきもちを焼いて腹を立ちますよ、お前さんがもつと男が悪ければ宜いいけれども、余あんまり様子が宜いから迷わアね」

侍「一々どうも旨いねえ、そんならば御尊宅へ出よう、お宅で御亭主の前で御家内へ一いっこん献差上げたい、斯様々々のわけで御挨拶をして下すつたから、それなりお別れ申しては済まない、亭主のあるお身の上ということだから、左様なら御亭主の前で飲んだら宜かろうという訳でまいつたと申して、御亭主へも面会して、三人で一や緒に飲ろうじやないか」

かぢ「狭くつていけませんよ鼻が悶^{つか}えて這入られませんよ」

侍「イヤ是非ともお宅へ出よう、何うか先へ立つてつて下さい、お宅は何処だ」

かぢ「お宅だつていけないの、此の坂を下りてちよいと向うへ曲つて、また左へ曲つて、一廻り廻つて向うの横町に附いて往くと、菓子屋だの蕎麦屋だの種々^{いろん}なものがあるから、其の間を這入つて、突当りが手水場だから、其の傍の井戸へ附いて左へ曲つて、右へ往つて変な処^{とこ}をクル／＼廻つた角でございますのサ」

侍「些^{ちつ}とも分らん、篋棒な、それじゃア別れに致そう、左様なら、誠に御無礼」

とガラ／＼高下駄を引摺りながら往^ゆきますと、見物が馬鹿や

イ、助平侍などとからかうものが有ります。お梶は巡礼の老爺じいさんに向い、

かぢ「どうも酷ひどいめに逢つたの、可愛相に大層傷が附いたの」

巡礼「はい、御新造様有難うございます、あのお方が跟けて来て突当りましたから、私わたくしが前へ転ぶと、私の上を飛び越して転がつ

たのでございますのに、私を下駄で踏んだり蹴たりなさいました、

私は蹴られても踏まれても宜うございますが、負筈には三十三番のお札所を打ってまいりましたから、お札が這入って居りますゆえ、彼あの人の足でも曲らなければ宜いと存じますくらいです」

かぢ「足からも血が出るようだよ」

巡礼「突飛ばされた時に石へ膝を突つ掛かけましたので」

かぢ「おうく大層黒血が流れる、私の宅はツイ一軒隔いて隣だが、直に癒る宜い粉薬が他処から貰つて来てあるから宅へおいで」

と無理やりに連れてまいりまして、薬を取出し、老爺さんの膝に振かけて遣り、

かぢ「其の上を手拭で巻きな……そう手拭を引裂いてはいけない、幾らも有るから新しいのを遣るよ」

巡礼「はい有難う、御新造さま、誠に結構なお薬と見えて少し痛みが去りました」

かぢ「宜い薬だよ売り物には無いのだ、お前は芝の新網か橋本町辺から出るのかえ、何処かお前修行に出るところが有るだろう」

巡「いえ、わたくし私は世帯しよたいを持つて居りまして日々修行をいたす身の上では有りませんが、四国の八十八箇所、卅三番へもお札を打ちまして、漸く江戸へ歸つて参りましたが、何うか江戸の八十八箇所へもお札を打ちたいと存じ、方々廻り、此の白金の高野寺が打納めでございますから、お詣りをして此処へ来かかりましたところ、お侍に蹴られましたから弘法さまのお叱りではないかと、日々浮ぶ悪い心を思い直して心配して居りますが、誠に有難う存じまする」

かぢ「何処へ泊るのだえ」

巡「別に家うちもございせんから、お寺様のお台所だいどころへ寐ねかして戴いたり寺中じちゆうの観音かんおんさまのお堂のお縁端えんばたへ寐たりいたして、

何処と云つて定^{さだ}まつた家はありません」

かぢ「なにか因縁が悪いんだね、今夜は己^{おら}の家へ泊めてやろう、少し志す仏さまが有るから、お汁^{つけ}に野菜でお飯^{まんま}でも喰べな」

巡「いえ、何ういたしまして、斯^{むさ}んな穢^{おやし}い老爺を」

かぢ「あれサ、宜^いいから泊んなよ、おらん家^ちの亭主^{あにい}は慈悲^{なさけ}深い人だから何も氣遣するにやア及ばねえ、事に依ると単物^{なまけ}の一枚^{めえ}ぐれえくれるぜ、遠慮しねえが宜い、親方が帰つたら己^{おれ}が話をして遣るから」

巡「はい大きに有難う存じまする、助かります、お志とあれば頂戴致しましょう」

かぢ「その井戸で水を汲んで、足を洗つて此方^{こつち}へ上んな」

とはから上へ上げ、御馳走をしまして、

かぢ「それじやア疲労くたびれてるだろうから、あの二畳へ往つて木片こツぱを隅の方へ片付けて、薄縁うすべりを敷いてお寐ね」

とお老爺じいさんを寐かしましたが、お梶は貞女でございますから、亭主の帰らんうちは寐ません。そのうち段々よ夜が更けてまいりました。

二十八

仙「おいお梶」

かぢ「あい、寝やアしないよ、今明けるよ」

と戸を明け、

かぢ「あんまり遅いから何うしたかと案じて居たよ、安さん御苦労」

安「誠にお案じでございましょう、エ、よんどころ扨ない事があつて、へい」

かぢ「重さんは何うした」

安「宜いあんべえ塩梅に居たんで」

かぢ「何処に」

安「何処にたつて枕橋で首をく縊ろうとしてえたんで」

かぢ「あらまア何うも」

仙「這入つてから云え、立つてゝグズ／＼云わなくつても宜い、

重さん此方こつちへお這入りなせえ」

重「へい」

とオズ／＼這入りました。

かぢ「重さんまア何うしたんだねえ、私は亭主あにいに何んなに小言を云われたか知れやアしないよ、死んでしまうという置手紙が出たもんだから、死ぬ程のことなのに、様子の知れねえことが有るものかつて、私は本当に眼の球の飛び出るほど亭主に小言を云われたよ、そんな軽はずみな事をして」

仙「上りもしねえ内からぐず／＼云うな、まア上ろう、お嬢さん此方こつちへお這入んなせえ」

かぢ「おや／＼おいでなさい」

仙「お、この嬢さんは枕橋から身を投げて死のうと云うところをお

助け申したのだ」

かぢ「何処のお嬢さんです」

安「何処のお嬢さんたツて、親方が此のお嬢さんを助けて来たんです」

かぢ「あらまアどうも、親方が命いのちがけ賭で氣を揉んで、お前のた

めに騒いで居るのに、浮氣をして心中なぞをするのなんのつてサ」

仙「何をいうのだ、そうじゃアねえ、グズ／＼余計な事をいうな、

お嬢さんマア此方こちへお上りなさい、お梶此のお嬢さんは番頭ばんづさん

の御主人さまの、万年町の刀屋のお嬢さんなんだよ」

かぢ「それじゃア奉公をしているうちから深い中でいたのかえ」

仙「然そうじゃねえよ、いろ／＼深いわけがあつて身を投げようとす

る処を助けたんだ、妙じやアねえか、ふたり兩人を助けて船へ乗せると、
 互に顔を見合わせて、オヤ万年町のお嬢さんか、重三郎かという
 わけで、おつれ申して来たんだ、心中じやない別々なんだよ、緩ゆっ
 くり話をしなければ解らねえが、コウ重さんお前も不思議な縁で、
 去年の正月五日の晩万年橋の欄干で首を縊ろうとするとこを助け、
 恩にかけるんじやアねえが、宜いいかえ重さん、お屋敷へ刀が納ま
 れば宜いと思つて、目途あての無い事でもねえというのは、売る事も
 質に置く事も出来ねえから、当分はあさむれえの侍が差料にして居るに違ちげ
 えねえと思つて尋ねて居たが、盗んだ奴なりの形は己が知つてるし、
 顔つらア安さんが知つてるから直じきに知れるだろうと思つてたが、いま
 だに分らねえから、お前めえが何時までも己やッけえの厄介に成つてるのは

氣の毒だ、一層死んだら親方に難儀を掛けめえ、苦勞をさせめえ
と云つて死のうとするんだから、己に義理を立てる積りだろうが、
重さんが死んで仕舞えば万年町のお店たなへ何と云訳が出来よう、人
の奉公人を助けたら知らせないと云うことはねえから、無沙汰で
番頭ばんづつさんを引留めて置いた云訳に、お刀を探し出してお店へ往く
積りだったが、お前が死んでしまえば刀の目利めきをする者がねえ、
己にやア分らねえ、然そうじゃアねえか、こう段々遅れに遅れたん
だから、何うでも斯うでも刀を探し出さねえ内は万年町のお店へ
往く事が出来ねえんだから、仙太も苦しい身の上に成つたは、よ
もやにひかされたのだ、番頭さんも神信心をして一生懸命に成つ
てるから、何うか刀が出るだろうと思ふんだが、出ねえまでもお

前を連れてツて詫ことをしなけりやア己が押付かねえんだから、死ぬのは止めておくれ、そう泣いてたツていけねえ、氣を確りしねえ、男らしくもねえ」

重「はいはい、何とも申し訳はございません、これまで種々御苦勞を掛けた親方へ、何時までも御心配を掛けては相済みませんから、私さえ居ませんければ御迷惑も掛けまいかと思つて、ツイ心得違いをいたしましたが、どうぞ御勘弁を願います」

仙「侍へ喧嘩を吹ツ掛けるなんてえ氣違じみてるが、これも皆なお前のためだ、この嬢さんは他に何んとか云ツたつけ、そう／＼紀伊國屋という滅法に立派な家へ嫁付たのだが、其の若旦那とかいうのが滅法に美しい男なんで、他に情婦が有つて、其の情婦

が死んでしまつて怨んで祟つて何うとかして化物ばけものが出るとかい
うので、此のお嬢さんと夫婦に成つてれば、其の若旦那やめえの病が癒
らねえから、仕方なしにお離縁になつたが、大きな腹ア抱えて世
間に顔向けが出来ねえ、外聞げえぶんが悪くつて生きて居られねえツて、
枕橋から身を投げるとこを助けて、船へ乗ろうとすると、又重さ
んが首を縊ろうとしてえたから、また助けて船へ入れると、オヤ
お嬢さん、オヤ番頭かと云つて主しゅうじゅう従あ邂逅たなうというは妙な事では
ないか、そこで己の考えには、お嬢さんを万年町のお店へ送つて
つて上げて、実は番頭ばんつさんを去年助けたが、お刀が出たら〜と
思つて、今まで延のびく々に成つたため御沙汰しねえは重々済みませ
んが、番頭さんを連れて来ましたと、お嬢さんをお助け申した廉かど

で、番頭さんがお店へ帰れば方々手蔓も有つて、刀の詮議も仕やすかろうと思うから、御主人へ話を付けるまでは、死ぬの生きるのツて輕はずみな事をしちやア困るぜ」

と云つてゐる処へ、二畳の障子を明けて出て来たのは最前の巡礼の老爺じいさんでございますが、ものをも云わず重三郎の襟首を取つて引倒して脊中を打ちました。

仙「何だく」

かぢ「この老爺おやうさんは何うしたんだ、寢惚ねぼけたのかえ」

仙「何だ此れは」

かぢ「先刻さつき豆腐屋の前で侍さむらいに殴ぶたれていて、可愛相だから連れて来て泊めたんだが、何だよお前」

巡礼「はいはい、これは親方さんでございますか、まだ御挨拶もいたしませんで、此の者を手込てごめに致しまして誠に相済みません」

と暫く泣き沈み、涙を拭きまして、

巡「ヤイ、手前てめえ何うして此処に助かつてる、己は手前が此処に居ようとは知らずに居たが、へー親方、私わたくしはこの重三郎の親父で、

羽根田に居りました梨子売の重助と申すものでございます」

仙「エ、お前めえが重三じゅうざさんのお父とッさんかえ、何うも妙だなア」

重助「ヘイ、お嬢さま、後で御挨拶を致します、此のお嬢さまは御存じで居らっしゃいますが、去年の正月七草の日に、お嬢さんとお内儀かみさんが私の処わたくしへ入らっしゃいまして、重三郎は大切なお刀を取られてしまい、申し訳なさに万年橋から身を投げて死ん

だろう、死骸は知れないがとのお話で御座いますから**悔**り致しま
 した、私も他に子供もない**只**た一人の**悴**でございまして、来年の
 暖簾を分けて下さると云うのを**たの**しみに、年寄の身で重い梨子を担
 いで商売を致し、便りに思つて居ります**此**奴が、身を投げて死
 んだと聞いた時には、寧**い**そ一思いに死んでしまいたいと思いまし
 たが、まさかに死ぬにも死なれず、前世の約束ごと、思いました
 から、家**うち**を仕舞つておい**ず**る筈を掛け、**罪**滅**つみほろぼ**しのために西国三十
 三番の札所を廻りましたのは、ひよつと面目ないと思つて田舎に
 でも**かく**匿れて、喰うや喰わずに痩せ衰えて居はしないか、それと
 も**ふ**淵川へ身を投げて、**ご**りやくの御利益で海辺へ流れついて
 居やアしないかと思つて、観音さまへ無理な御願**ご**かんを掛けてよう／

〱と四国を廻つて、一年半ぶりで江戸へ歸つて来て、此処で待に
殺されるところ、此方こちらのお内儀さんに助けられ、此方こなたさまの御厄
介になつたわけだが、此処のお家いえに手前てめえが助かつて居るとは、実
に夢のようなことでございます、はい、今彼処あそこで聞いていれば、
親方さんが手前の命を助けて下さるのみならず、命賭けで刀の詮
議までして下さる御親切、それを無にして駄け出したということ
だが、手前のように死にたがる奴はねえ、そんな事をして此方こなたに
済むかえや伊」

仙「老爺おじいさん待ちねえ、お前めえの云うことは尤もだが、まア安心し
ねえ重三さんは去年の二月こツそり羽根田へお前を探しに往つた
ら、だしぬけに居なく成つたから、大方身でも投げて死んだらう、

海へでも飛び込んだかも知れないというので、親父が然ういうわけに成つちやア生きては居られねえつて騒ぐのを止めて置いたんだが、重三さんはお前を死んだと思い、お前は重三さんを死んだと思つたのが、互^{たげえ}にたすかつて、遇^あうてえくれえ目^{めで}出度え事はねえから、何も打^ぶつにやアあたらねえ、誠に妙なわけだ」

重助「はいく何ともハヤ御親切さまのお心掛け、お礼の申し上げようもございませんが、ツイ腹立ち紛れに手^{てこめ}込な事をいたしました、どうか御勘弁を願います」

仙「ナニ勘弁も何も入りやアしねえ」

安「親子とも助かつて、無事に遇うてえのは、こいつア妙だねえ、何だつて親子主^{しゅうじゅう}従^{しゅう}が死のうとして、枕橋でお爺^{おつ}さんが首を縊

ろうとしたり、お嬢さんが巡礼になったり、重さんが身を投げた
りして皆助みんなすかつたんだからね」

仙「何を間違つたことを云うのだ」

安「成程おんな同しようだから間違います」

仙「こりやアねエお爺とつさん、斯うしようじゃアねえか、丁度宜い

ことがある、此の詫ごとなんに万年町に往く時に……こいつア宜い、
何にしよう、老爺おじさんがお嬢さんを助けた積りで往きねえナ」

重助「どう致しまして嘘はいけません、四国を歩きます時なぞに
嘘を吐ついては旅は出来ません」

仙「四国とは違わアな、お前めえが枕橋を通りかかつて、お嬢さんを
助けたことにしよう、お前口がきかれねえなら己が喋るが、其の

廉で己の詫ごとをお老爺じいさんがするんだ、それから重さんの詫ごとをして元々通りに納まる事にしようじゃアねえか」

重助「何分宜しゆう願います」

仙「なにしても目出度めでえから一杯爛ぺえつけねえ、併しかし明日あしたの朝ではお

嬢さんが近所へ対して間わりが悪いだらうから、日暮までにお連れ申すという手紙を先方むこうへ出して置こう」

と仙太郎の慈悲なまけから図らざることで親子主従が無事に助かりま

したが、短夜みじかよゆえ忽たちまちに明けまして、翌朝よくあさ仙太郎が子分に手

紙を持たしてやり、嬢さまは私わたくしが屹度きつとお送り申しますからお迎

には及びません、私が参るまでお宅にお待ち下さいということ

書いて送り、日暮から所有ありものの船へ梨売重助とお雪を乗せて漕ぎ

出し、万年の河岸へ船を繫もやつて陸うえへ上あがり、

仙「此家こゝかの」

ゆき「何だか極りが悪いようで」

仙「嬢さんも老爺おじさんも少し待っておいで、工御免なせえ」

小僧「へエ、おいでなさい」

仙「今朝手紙を上げて置きました伊皿子台町いさらごでえまちの荷足の仙太郎とい

うもんで」

小「へエ」

仙「今朝手紙を出して置きやした伊皿子の仙太で」

小「へエ」

と云つてると、奥の方で主あるじの政七が、

政「常吉や何だえ」

常「へエ、何んだかアノ兎のベンタラコが今朝ほど手紙を上げた
つて」

政「そんなお名前が有るものか、エ、なに、今朝手紙……伊皿子の親分がいらしたのではないか」

と店頭^{みせさき}へ出て参り、

政「へエ、入らっしゃいまし、何方^{どちら}さまから」

仙「エ、お初にお目にかゝります、今朝手紙を上げた伊皿子の仙太郎でござえます」

政「これはくさアどうぞ此方^{こちら}へ、お言葉に従いましてお待ち申して居りました」

仙「少しお前さんに逢い難い^{にく}人が有るんですから、お嬢さんだけ

先へお這入んなさい」

政「さア何うぞ此方^{こちら}へ」

仙「そう御丁寧では却^{かえ}つて困ります、粗忽^{ぞんぜえ}もんでござえますか

ら、ヘイ、お初にお目にかゝります」

政「これは始めてお目通りを致します、予^{かね}て御高名のお噂は承わ

つて居りますが、初めまして、エ、此の度^{たび}はまた妹^{いもと}の事に就き

まして御真実に今朝ほど細々との御書面ゆえ、仰せに従いまして

迎いにも出しませんで、お足^{はこばせ}勞を受けて誠に恐れ入ります」

仙「そう左様^{しか}然らばで口をきかれると強氣^{げうぎ}と困るんですが、末永

く何分お心安く願^{ねげ}えます……え、お嬢さん此方^{こち}へお這入んなせえ、

お嬢さんはお連れ申しましたが、どうか小言を仰しやいませんように願えます、親御や御兄弟衆（べいきようでえしゆ）は思い過しをして小言を云うもんだが、また駄け出すようなことがあるといけませんよ」

政「御尤でございます」

二十九

仙「お嬢さん能く考えて御覧なさい、去られたつて、浮氣をしたの、悪い事（わり）をして追い出されたのでは有りません、云わば亭主のために出たので、些（ちつ）とも恥かしい事はない、殊（こと）に只の体じやアない、もう是れ七月（ななつき）という身重の身体でありながら、軽はずみな

事をしては、腹へ宿した胤たねは紀伊國屋の旦那の胤じやア有りませんか、お前さんは兎も角も腹の胤まで闇から闇へ遣つては去られた御亭主に済みますまい、何にも知らねえ私わっちの様なものゝいう事だから、生意気な野郎と思おぼしめ召しましょうが、どうかきいて下せえ、お嬢さん御得心でござえますか」

雪「はい、はい」

仙「じゃアお嬢さんも御得心ですから、何にもお小言は仰しやいませんように」

政「へエく仰せに従い何にも申しません、お母つかさんアノ仙太郎親方が」

母「おやくこれはどうもお初にお目にかゝります、此たびの度はま

た段々有難う存じまする、もう私は昨晚からマンジリとも寝はいたしませんで、心配致して居りますと、今朝程のお手紙でホツと致しましたが、近所の者は神隠しにでも逢つたのだろうかと申しましたが、まさかそんな事もあるまいが、何ういうわけで出たかと申して居りましたので、誠に有難う存じました……お前此方へお這入りよ、何ういうもんだ、私は何んなに心配したか知れないよ、あのくらい意見をしたのに、何も其様にくよく／＼思うわけは無いじゃアないか、私に相談もしないで黙つて駈け出して」

仙「お母さん、然う小言を仰しやつてはいけません」

母「イエ何にも申しません、誠に有難うございました」

仙「実はね此のお嬢さんを助けたのは私ではない、助けた人が他

に有るのです」

政「へエ誰方どなたさまで」

仙「オイ老爺おじいさん、重助さん此方こつちへお這入りよ」

重助「はいく」

と恐るく座敷へ這込はいこみ両手を突きまして、

重助「誠にハヤお目にかゝれた義理じゃございませんが、皆様お達者で誠にお嬉しゅう存じます」

政「オヤ羽根田の重三郎の父親おやじが来ましたよ、お母さん」

母「オヤ呆れますね、身を投げたとか海へ這入って死んだとかいう者が有ったが」

重助「へい、実は一年半ばかり四国西国廻りをいたしまして、漸ようや

く江戸へ歸つてまいり、思い掛ないことで仙太郎親方のお助けを蒙りましたので」

仙「ナニ後あとは己から種々いろいろお詫ことも申し上げるから宜い、お嬢さんが枕橋から身を投げようとするところへ、此の人が江戸へ歸り、通りかゝつてお嬢さんを助けたので」

重助「イエ然ういう訳じやございません」

仙「余計な事を云つちやアいけねえ、就きまして私わっちがお詫ことをしにやアならねえのは、全体重助さんに云つて貰うのだが、口が利けねえツていいいますから、私の詫ことを私が喋りますが、此方こちらの番頭ばんつさんは去年の正月五日の晩に、刀を取られて面目ねえつて、首を縊ろうとするとところを私が助けて、今まで匿かくまつて達者で居

ますので」

政「へえーお母さん重三郎が達者で居りますと」

母「フーム、重三^{じゅうざ}が達者でおりまするか」

仙「それに就きまして、刀せえ出ますればお詫ことが出来ると思

つて、私^{わっち}に少し心当りが有りますから、よもやに引かされて今ま

で延々^{のびく}になりましたが、だん／＼永くなればなるで、尚^{なお}お刀を

持つて来なければお前^{めえ}さんに顔を合わせる事が出来ねえと、一年

半も尋ねあぐんだが知れねえんだけれども、今まで人の奉公人を

無沙汰^{うち}で家へ引摺り込んで、匿^{かくま}つて置くは、訳の分らねえ奴と御

立腹でござえやしよう、重々私が行^{ゆきとゞ}届きません、誠に済まねえ

が、此の老爺^{じい}さんに免じて何うか御勘弁^{ねが}を願えます」

政「はい、何う致しまして」

重助「それに侍の姿も御存じで、手掛りが有るといので、侍に突当つて喧嘩をなすつて、刀を挽ぎ取つて詮議をなすつて、忤のために命賭の御苦勞をなすつて下さいましたとのことで」

政「それは誠に何うも恐れ入りました、有難う存じます」

仙「旦那え、妙な事が有ります、私が刀の詮議に市川の方へ往く

と、高嶺たかねから船の胴の間まへ落ちた死骸は、稻垣小左衛門さまとい

う人で、片手かたに一節切を握り、片手には黒羅紗の頭巾を持って

血まぶれに成つて落ちたので、重三郎さんが知つてたから私が引

取つて、白銀の高野寺へ葬つて、遺物かたみの頭巾と一節切は預かつて

あります」

と前の次第を細やかに話しますと、政七は大きに驚き、また親切を喜びまして頻りに感心致しました。其のうち酒肴が出てまいります。

政「親方何にも有りませんが、一口献げて兄弟同様の誼みを結びとうござりまする」

と酒が始まりましたが短夜のことでゆえ、大きに遅くなりました。

政「今晚は遅くなりましたからお泊んなさい」

仙「船を河岸へ繋けてありますからお暇を致しましょう」

政「でもございましょうが」

と無理に止められて、重助と一緒に店二階へ寝ましたが、人の

家は何うも寝附の悪いもので、モジツカして居ります内に、段々更け渡り、世界が寂しんといたし、聞えるものは河岸へ中あたる浪の音、微かすかに茶飯屋と夜蕎麦売よそばうりの声のみで、寂と更けますると小声で云つても聞えます。

男「神しん妙びようにしろ、ジタバタしたって仕方がねえ、汝てめえの家にア五百や六百ねえことはねえ、命が欲しけれア金を出せ」

という声が仙太郎の耳へ這入りましたから、これはてつきり下へ泥坊が這入ったな、こいつは大騒動だと思い、

仙「オイ老爺じいさん」

重助「ハア〜」

仙「オイ重助さん起きなよ」

重助「はいくこれは何うも、ツイとろくと疲れて寝ました、お早うござい」

仙「早くはねえ、まだ夜中だ、下へ泥坊が這入って、金を出さなけりやア叩ツ斬ると云つてるよ」

重助「へエ泥坊が何処から這入りました」

仙「何処から這入ったか分らねえが、慌てゝ騒ぐといけねえぜ、キヤアとかパアとかいうと斬られるから静かにして居ねえ」

と云いながら四辺^{あたり}を見ましたが、手頃の棒が有りませんから、

二三尺^{さんじやく}を締め直して梯子の上り端^{あがはな}まで来ると、上り端に六尺や

半棒木太刀などが掛つて居ります。能く商人^{あきんど}の家には有りまするが、何の役にも立ちません、煤^{すす}掃^{はき}の時に畳を叩くぐらいのも

ので、仙太郎はこれを見て半棒を下して片手に提げ、おろ拔足して、ぬきあしそツと梯子を下りて縁側伝いに来ると、障子が閉たつて居りまするが、泥坊が舌で穴を明けて覗いたと見えまして、小判なりに平ひらたく穴が明いておりますから、仙太郎が覗いて見ると、顔を包んだ侍が二人、一人は着流しでございまする、目深まぶかに冠かぶり物をして、きらく長ながもの刀を畳へ突立て。

賊「ジタバタしても役にやア立たねえ、金の有ることを知つて這入ったのだ、金エ出せく」

と云つてゐる奴は余程胆たんの据すわつた者の様子。

政「ハイく只今手元には有合せた金子は有りません、皆みんなな職しよくか方たへ渡しまして、手元には漸く四五十両しかございせんから、

何うか是で御勘弁を願います」

と慄^{ふる}えながら云うと、

賊「エ、虚言^{うそ}を吐^つけ、五十や六十の目腐れ金は入らねえ、其処に寝ているのは何んだ」

政「これは母でございます」

賊「島田鬻^{あたま}が見えるが美しい女^いのようだが何んだ」

政「これは私の妹^{わたくし}でございまする」

賊「抱いて寝ても宜かろう」

政「これは亭主のある身のうえ、殊に懷妊^{なうつき}して七月に成りまするもの、何うぞ御勘弁を願います」

賊「妊婦^{こもち}か、色氣^ねが無えナ」

乙賊「何うせ役にやア立たねえから、諦らめて、命が欲しけりや
 ア有^{ありがね}金残らずサッサと出して仕舞ったが宜かんべえ」

と一人の田舎者が与^{くみ}して居ります、仙太郎は覗いて見ると長い
 のを政七の眼前^{めさき}へ突き附けて居る奴は余程度胸の善^よさそうな奴で、
 後^{あと}へ下^{さが}つて居る二人の奴は提灯持と見えまして、手に持った刀の
 先がブル／＼震えて居りますから、此の度胸の据った侍から先へ
 殴ろうと思い、八角に削った半棒を持ち、五人力の力を極^{きわ}めて賊
 の車骨を狙つて打込みまするお話でございますが、一寸^{ちよつと}一息。

三十

仙太郎が岡本政七方へ泊りました晩に、強盜が三人押入りまして、強談をいたして居りますから、仙太郎が欄間に掛つてありました赤^{あかがし}檜の半棒を取つて、そつと忍んで、二階の梯子段を下り、縁側伝いに來て障子の外から覗いて見ますると、三人ともきら／＼する長いのを政七の鼻の先へ突き付け、頻^{しき}りと威^{おど}し文句を並べ掛合つて居りまするが、其の内に深く顔を包んで上座に居る奴^{かしら}が頭で、他^{あと}は手下と見えまするから、此^{こいつ}奴から先に片付けよういうので、仙太郎が五人力の力を半棒に込めて、ものをも云わず飛び込んで、突^{だしぬけ}然に腰の番^{つが}いをしたゝかに打ちますると、パタリと横に倒れました、すると一人の着流しの奴がバラリと身輕に庭へ飛んで下りて逃げ出しました。尤も泥坊は皆逃げ所を明けて

置くものだそうで、一人の田舎ツペえのおかしい言葉の泥坊は、提灯持と見えまして、この有様を見ると

「ワー」

と云いながら腰が抜けて動けなくなっていましたから、仙太郎が続け打ちに無闇に打ちますゆえ、政七はこれを見て驚きましたというのは仙太郎が助けに出たのを泥坊が一人殖ふえたのだと思ひ、ブルふるく慄ふるえて居りました。仙太郎は力に任せて二人の賊を続け打ちに打ぶつて居ります。

甲「アイタ： 御免蒙る、全く貧の盗みでござる、命ばかりはお助けを願う、どうぞお免ゆるしお助けを願う、全く貧の盗みで、御免ア、痛いく……貧の盗みで」

仙「嘘を吐け、こんな光る物を引ッこ抜いて、人を威かしやアが
ツて物^{ものどり}取をするからにやア人を叩ッ斬り兼ねえ奴だ、ふん縛つ
て突出^{つきだ}すから然^そう思つてろ：旦那何処もお怪我はありませんか」
政「ハイ／＼有難う存じまする、誰^{どなた}方かと思いましたが仙太郎親
方でございますか、実に私^{わたくし}は昨晚とけ／＼寝ませんから、今晚
はグッスリ寐ましたところへ、突^{だしぬけ}然^{ぬきみ}に抜刀で頬^ぶを打たれました
から、驚いて目を覚^{さま}して見ますると、あなた鼻の先へぎらぎら致
しまする刃物をつきつけられましたから、私^{わたくし}は口も何も利けませ
んような訳で」

仙「御尤でござえます、庭からでも這入ったんでしようが、本当
に油断も隙もなりやアしません、戸締りを能くして置かなくつち

やアいけませんぜ、一人逃げやアがツたが、此ん畜^{ちきしやう}生^{せい}ヤイ此
の野郎」

甲「御免なさい、真^{まっぴら}平御免なさい、抛^{よんどこ}ろなく頼まれて這入った
ので」

仙「抛^{ぬす}ろなく窃^す盗^{とう}に頼まれて這入^{へえ}る奴が有るか、ヤイ此ん畜
生、頭巾を取れ、よう、何処の奴だ、ヤイ侍^{さむれえ}、頭巾を取れ」

と云いながら、無理無体に泥坊の冠^{かぶ}つていた頭巾を引剥^{ひっぱ}ぐと、
面目ないから下を向いて居りまする。

仙「番頭さん、オイお願^{ねげ}えだが縄を持って来ておくなせえ、縛^{ふんじ}つ
ちまうから」

と番頭が細引を持って来るを受取り、二人ともグル／＼巻に縛

つて置いて、一人の奴の頭巾を取ると、ちよん髷頭の野郎で、おなじく下の方を向いて居りまする一人の侍は大結髪おおたぶさで、頭を上げず頻しきりと下ばかり向いて居りますから、

仙「ヤイ、名前なまえを云え、ヤイ名前を云わねえか、何処の野郎だか所を云えよ、ヤイ」

甲「浪人の身の上で、喰い方に困りまして、悪いこととは存じながら、ツイ心得違よこしまいをいたし、斯様な邪非道のことに相成りましたが、向後こうごは速すみかに善心に立返りますから、幾重にも御憐愍ごれんみんをもちましてお見遁みのがしを願います、苟いやしくも侍たるものが、何程零落したとて縄目にかゝりましては、先祖へ対し家名を汚けがし、此の上ない大罪だいざいでございますから、どうか幾重にもお助けを願います、

向後は速かに改心いたしますゆえ、何うぞお見遁しなすつて、お裏口からそつとお逃しなすつて下さいまし」

仙「誰が逃す奴が有るものか、容易に云わねえな此ん畜生、ヤイ、^{てめえ}手前はなんだ百姓だナ、此ん畜生、^{さむれえ}侍の風かなんかしやアがツて生意気な奴だ、ヤイ、此の大結髪の奴の名前を^{なめえ}手前云え、何」

乙「私は^{わし}ハア抛なく頼まれやして這^{へえ}入ったんだから、何うか御勘弁を願^{ねげ}えます」

仙「^{てめえ}手前は何うでも宜いが、此奴の名前を^{なめえ}云えよ、何処の奴だ、云わねえと打^たツ殺すぞ」

乙「へえナニ、申しますく、私は^{わし}下矢切村の渡^{わた}場^{しば}の船頭で喜代松と云うもんでござえます」

仙「ナニ渡場の船頭だ、そうか、シテ此さむれえの侍は何か矢張やっぱり手前の田舎か」

喜「へえ、それは国分村の人でござえやす」

仙「なめえ名前を云えよ、名前を云わねえかよ」

喜「どうぞ御勘弁ねげを願えやす」

仙「云わねえな、うぬ、云わねえと打たツ殺しちまうぞ」

喜「云いますく、萩原東もんという浪人者でござえやす」

仙「一人逃がして惜しい事をしたなア、お爺さん、おい爺さん、もう宜いから下りて来きねえよ、おい」

重助「へえく、家根へでも逃げ出しましょうか」

仙「もう宜いから下りて来なよ」

重助「何処から逃げますか」

仙「逃げるんじやアねえ、泥坊を生捕いけどったから下りて来ねえというんだ」

重助「誠に強いお方でございますな」

仙「泥坊を捕つかめえたから下りて来なよ」

重助「はいくゝ畏りました」

とブルく慄えながら二階から下りてまいり、

重助「旦那マアお怪我が無くってマアお目出度う存じます、わたくし私は何処から逃げようかと思つて居りました」

政「親方そう泥坊をぶん殴つて、なまじ慄いに殺しては却かえつて係り合になりますから、ふん縛つて突出つきだしたら宜しゅうございましょう」

仙「うん、ナニ国分村の萩原だと、聞いた様な名前なめえだな、此ん畜生ヤイ面つらア上げろヤイ」

と云いながら大結髪を握つかんでグイと頭を引上げると、盤ばん台面だいつらの眉毛の濃い鼻の下から耳へ掛けて一ぱいの髭で、何ういうことか額の処に十文字の小さい刺ほりもの青が有りまする。

仙「オヤ此の野郎見たような面だなア」

というと、侍は驚いて

束「これは何うも、誠にどうも、エ、再び御面会致そうとは心得ませんでした、何うかお助けを願う、重々恐入りました」

仙「此ん畜生：オ、違ちげえねえ、手前てめえは此の春矢切の渡場で町人を斬るの殴はるのツてつてる処ところへ、己おれが這入へえつて手前てめえを殴たたき倒し、向

後斯んな事をするに聴かねえツて、見覚えのために手前の額へ十文字の刺青ほりもんをして遣つたが、まだ悪事が止まねえナ此ん畜生め」
 東「誠にはや何とも恐れ入りました、再度尊公様にお目に懸ろうとは存じませんでした」

仙「此ん畜生、旦那此の春私わっちが重三じゆうざさんと安やすという駕籠かご舁かきを連れて、松戸へ刀の詮議に往つた時に出で会くわした侍さむらいなんで」

重助「お前さん了簡りやくかん違いでございますぞ、泥坊をなさるとは何たるお心得こころえ違いで、私は四国西国を歩いて来たが、四国には泥坊と云うものはございせんよ、お泥坊さんお聞きなさい、弘法さまの戒めで人に物を盗られても必ず旧もとの家いえへ帰ることになるという、持つて逃げてやつぱも矢張りやっぱ窃ぬすまれた家うちへ戻つて来るといふ、それが弘

法さまの御利益でごりやく」

仙「そんな事を盗ぬす賊とうに云ったって仕様がねえ、悪にく々しい顔つ
面らアしてえやがるナ」

重助「オ、この侍だ、親方昨日きのうお宅から一軒隔おいて隣の豆腐屋の
前で、私わたくしを下駄で踏んだ人はこの侍でございます」

仙「ヤイ此ん畜生、何故そんな事をしやアがった」

東「昨日は誠に失礼、あの折は喰たべ酔よって居たりまして、だんく
御無礼を申しました」

仙「此ん畜生ヤイ」

とまた拳を挙げて打ちました。

政「親方のお打ちぶなさいますのを私わたくしが見ておりまするのも心持が

悪うございますから、縄を掛けて、裏町に御用聞をする新吉しんきちという人が有りますから、早速人を遣つて知らせましょう」

仙「一人逃げた奴が有るが、其奴そいつの名前なまえを白状しろ」

束「それはどうぞ御勘弁を」

仙「何うせ素そツ首の飛ぶ身体じゃアねえか、云わねえと打たツ殺すぞ」

喜「あれは己おらア村の丈助というもんですが、此処うちな家は金も有り、家の様子を知ってるから大丈夫でえじやうぶだ、己あんねえが案内あんねえをするから来こう、汝われえ一緒に往つて沢山盗めば、余計に立ち前めえをくれべえというから、抛わしなく私は頼まれて参めえりやしたので」

仙「フーン……旦那丈助と云う奴にお心当りが有りますかえ」

政「親方、なんでございます、稻垣さまの家来に丈助という奴が有りまして、折々私どもへ使いに参りましたが、事に寄つたらば其奴が這入つたのかも知れません」

仙「其の畜生に違えねえ、ふん捕めえれば宜かつた、いめえましい事をしたな、ヤイ、丈助という奴は何処に居るか分らねえか、云えよ此の百姓、云わねえかよ」

喜「私が^{わし}ハア村の矢切に居たアだけんど、矢切に帰られねえ訳が有つて、些^{ちつ}とも帰らねえが、堀切の傍^{わき}の八ツ橋畠に知つてる人が有つて、其^そ処え寝泊りするてえ話だが、はツきり何処に居るか知ンねえだよ」

仙「そいつは手先を頼むも面倒だから私が^{わっち}踏^{ふんづ}捕めえて遣ろう：

…モウ寝られもしねえから起ちまつて、もう一遍お酒を戴こう」

と是から酒を飲んで居る内に夜が明けましたから、二人の泥坊は早々南のお役所へ突き出してしまい、仙太郎は船に乗って堀切の傍わきの八ツ橋畠へ遣つてまいり、だんく様子を聞きましたが、とんと手掛りが分りません。二人は日ならずお調べに相成りますと、束は是まで数度人を害したことも有り、又喜代松は矢切の渡場で丈助と申し合せ、勇助を殺したる事を残らず白状致しましたゆえ、二人ともに斬罪になりましたが、実に悪い事は出来ないもので、こゝで仙太郎が重三郎の詫ことをいたし、主人の処へ出這入の出来るようなことになりましたが政七の云うには、却つて私わたくしどもに居りまするよりは、親父も帰つて来た事ですから、親子

の者に世帯しよたいを持たして、通い番頭にしようというので、高橋たかばしを曲ると直にすぐ二軒目に明家がございまして、幸い造作も附いて有りますから、早速これを借りて、重三郎は日々万年町のお店たなへ通うことになりました。お話二つに分れまして、紀伊國屋伊之助でございします、追々病氣も全快いたしましたして、歩く方が心持が宜よいから、却って旅なぞをいたす方が病氣も早く癒るであろうと云うので、不動さまへお願がんがけ掛をしたことも有るから、お礼まいりかた／＼往って、帰路かえりに中矢切へ廻って、法泉寺へ往って、若草の追善供養の法事もし、序ついででに下矢切へ廻り、叔母にも会って来ようという積りで、これから吉原のお松という婆ア芸者と、幫た間いこもちの正孝と、清八せいという下男を連れて成田へ参詣に出掛けま

して、小和田こわだの原へかゝりました頃は、日の暮々でございます。

正「エ、旦那え、旦那え」

伊「さツさと歩かなくつちやアいけねえぜ、大變に遅くなつちまつたのに、お松にからかうも程が有るじやアねえか」

正「でげすがね、お松が若がつて、余程よつほど可笑しいんでさア、両り

倭ようづまを取つて白縮緬ふんどしの褌をピラツカせて、止せば宜いいのに鼠甲ねずみ

斐絹がいきの女脚絆を掛けて、白足袋に麻裏草履を結ゆわい附けにして、馬が来ると怖いよーツて駈け出すんですが、馬の方で怖がつてるんで、あのくらしいな化物は有りませんや、本当に面白いんで」

伊「そう彼女あいつにからかうなよ」

正「若がつてるんですから、婆アと言われるのを厭がつてるんで」

伊「今日は船橋の海老屋へ泊ろうか」

正「あなたは途中で買物を成すつたので、清八どんですか、大きな釜を提げて重たがつてますぜ」

伊「師匠、彼れはあ葎よしずつぱり簀張の茶見世に居た道具屋のハタ師が持つていたんだが、彼があれ真物ほんものなら強氣ごうきと儲かるぜ」

正「へえ、なんでございます」

伊「おいらの眼が届かねえか知らねえが、話には聞いてる、これがあしや蘆屋の姥うばぐち口の釜と云つて、織田信長から柴田が拝領したという釜なら、どんな事をして捨売りにしても五百両がものは有る、旨くいけば少なくとも何百両にはなるだろうと思うのだ」

正「へえ是はどうも恐れ入りやしたな、幾らで買いなすつたえ

……一両二分で買ったものが五百両になれば、これは大したこと
でございますねえ」

伊「真物でなくつても筋が宜い釜だから屹度儲かる積りだ」

三十一

正「旦那なんざ違いますね、一寸休んで煙草を喫んだり何か
為^してえる内に、お目が利いてるもんだから、此のくらないな掘出し
物をなさる事があるんですが、本当にこれが五百両になれば不動
様の御利益ですな、儲かったら釜の祝いと云つて仕着^{しきせ}をお出しな
さいな、羽織の紋や何かに釜はいけませんな可笑しい、釜屋堀^{かまやぼり}

*の六右衛門さんろくうえもんの家の仕着見うち しきせたようですが、浴衣ゆかたを染めて釜の模様……これも困りますが、何か釜の祝いと云つて……全体男ぜんていなか娼げまを買つて遊ぶのが宜いいんですが、何か面白い趣向がありましよ
う」

伊「何うかマア一つ大景気おおきな事をしたいから儲かれば宜い、氣を附けて往いきねえ」

と云つてるところへ舁夫かこやがまいり、

舁夫「どうせ船橋かえへ歸りですが、お廉やすく願ねえ度てえもんで、歸けりですから一杯いっぺえ飲めりやア宜いいで、歸けり駕籠でござえやすから、

お安く乗つておくんなせえ、まだ船橋まで余程よつぽど有りますぜ」

正「いけねえよ若わか衆いしゆさん、それは御免を蒙ろう、私わつしたちは皆みんな

足が達者で、後あとから来る婆さんの新造しんぞうなんざア足が達者で、馬と一緒に駆けて歩くくらいのものだ」

昇夫「御冗談仰しやらずに、お願いねげですから、ホンの飲代のみしろがあれば宜いんです、何うせ帰けえるんですからお安くやりやしよう」

正「成田へ来て駕籠へ乗るてえのは強氣ごうきといけねえ、本当ならお前めえたち達二人を駕籠へ乗せて、私等わつしたち二人で担ぎたいくらいのも

のだ」

昇夫「ウーン然そうか、担いで貰おう、担いでおくんねえ、船橋まで幾らで担いで往いくか知らねえが、担いでツて貰おう、サア担げ」
正「これは驚いた、コゝ何をいうんだよ」

昇「何をいうって、担ぎてえというから担げというのよ」

正「これは恐れ入った、うツかり洒落もいえねえナ」

昇「何うせおらツちア旅たび駕かごを担ぐものだ、洒落なんぞ知つてゐるものか、洒落は知らねえ」

正「若衆、そう突つかゝつて来られちやア困るぜ、吉原にも成田の講こう中じゅうが極くつてゝ、正しょう五九月には参詣さんぎに往いくのに、お前達も成

田街道で御飯おまんまア喰つてゐる人間じやアねえか、私わつしは吉原ほうかんの幫間ばいで、

旦那に途中のダレの無いようにお供をして来たんだから、ちよいと担かごうぐらいの洒落も云おうじやアねえか、それをとツこに取つて担かげなんぞと云うのは酷ひどいねえ」

昇てめ「汝てめえは幫間かごか何んだかおらツちは知らねえ、どうせ昇夫かごやだから洒落なんざア知るもんか、おらツち二人を乗つけて担かげよ、サ

ア担がれよう、ヤイ担げく」

正「これはどうも驚いたねえ」

伊「師匠、お前めえが悪いわり、重いものを持つてゐるもんだから足元を見るのだ、それに女おんなづれ連だからよ、駄洒落などを云うから宜くない、少しばかり鼻薬を遣んなよ」

正「へえ、幾らか遣りましょう、私が言い損そくなつたんですから、

こんち

今日は私が散財致して旦那に御迷惑は掛けませんが、誰だツて云うじやア有りませんか、当あたりまえ然の洒落で……サア若衆さん、私わっし

が悪かつた、ツイ言い損なつたのだがお前も氣ぜんの悪いわりところ、

こつち

此方も不動さまへお参りに往つたんだから、種々いろく不同が有るが、

めえ

お前どうか是で一杯飲んで機嫌を直しておくれ」

と幾らか紙に包んで差出すを見て、

昇「何を云うんだ、おらツちはぜにかね銭金を貰おうと云うんじやアねえ、てめ汝ツちが担ぐというから担げというのだ」

と云いながら拳を固めて正孝の頭をコツリ、正孝は頭を押えながら、

正「オヤこれは、拳骨はひどいね若衆さん、これで不足なら一緒に何処へでも出ようく」

伊「おいく何処へ往いこうツたつて小和田の原中じやアねえか」

正「だから若衆さん、私わっしが悪いから謝まつてるのに、いきなり拳骨はひどいじやアねえか」

と云うのも聞かず、原文に三島安という東海道喰詰わるの悪党ゆえ、

左右からつかくと進み寄り、物をも云わず一人が正孝の胸倉を取り、一人が伊之助の袖を押えたから、正孝も伊之助も真青まつさおに成る。芸者のお松も原中へペタリと坐つて仕舞い、清八は釜を持つたなり尻餅を搗ついてしまいました。二人の舁夫は、相手は女連れで金も有りそうだし、殊に高価たかねの貨物しろものを提げてるという事をチラリと聞いたから、間が宜くば暗い処へ引摺込み、残らず引ッ剥はぐうという護摩の灰の二人で、誠に悪い奴でございます。するといつの間にか後うしろに立つて居りました人の行装なりは、二十四節ふしの深編笠を冠り、鼠無地の着物に同じ色の道行振みちゆきぶりを着て、木剣作りの小脇差さを佩し、合切袋を肩に掛けて、余程旅慣れて居ると見え、汚ない脚半甲掛草鞋きやはんこうがけわらしでございます。この様子を見るとツカノ

へと出て来まして、正孝の胸倉を取つてゐる昇夫の利腕きうでを押えま
した、昇夫は痛いから手を放すと、

虚無僧「彼方あちらへ往いけ……御心配なさいますな……悪い奴だ、此の
方々は成田の道者どうしやではないか、手前てまいたちは成田街道で其の日を
送る駕籠昇かきの身の上で有りながら、道者へ対して無礼を云掛ける
とは免ゆるされん、捨置き難がたい奴なれど、修行の身の上なれば免して
遣わすから、サツサと往ゆけ」

甲昇「此ん畜生ちきしよう、何処から出やアがった、此ん畜生ヤイ、出
抜けに出やアがツて此ん畜生」

乙昇「此奴こいつは佐倉の町で笛を吹いてやアがった乞食だ、この原中
で旨うめえ仕事をしようという中へ這入へえつて邪魔アしやアがって、此

の野郎から殴つてしまえ」

と左右から小太い竹の息杖を押取おつとつて打つて掛りましたが、打たれるような人ではない、ヒラリと身を交かわしながら、木剣作りの小脇差を引抜き、原文の持つてる息杖を打ぶつ払い、踏ふん込みさまズーンと肩口から乳の下へ斬下げる。斬られて原文は其の儘バタリと斃たおれる。三島安は此の有様を見て、

安「オヤ此の野郎」

と云いながら息杖を持つて虚無僧の両足を払いますと、虚無僧はヒラリと飛上り、三島安の頭上から力に任せて切込めば、面部へかけて割付けられ、アツと云つて片膝突くところを胴腹へ深く斬り込みましたから、二人とも其処へ倒れる、虚無僧は其の上へ

片足かけて脊筋から肋へ深く突き通し、鰐元の血振いをしながら落着いて後へ退りました。^{あとさが}人を斬つて置きながら顔の色も変りませんのは余程胆の据つたもので、此の時に伊之助も正孝も危ういところは免れましたが、鼻の先でザクリ、バタリ、プーツと血^{ちけぶ}烟が立つたんですから慄えて居りました。

伊「師匠お礼を云いなよ、何方のお方か存じませんが危いところをお助け下さり、誠に有難う存じまする、師匠お礼を云いなよ」
正「何うも斯んな嬉しい時には何ともお礼の出る訳のもんじゃアございません、へイ、何方のお方様か存じませんが、誠に有難うございます、実に命の親で……どうか私はお助を願います」
虚「イエー、あなた方は何うも為やアしません、何しろ飛んだ御

災難で、御婦人連れですから、間が宜ければ追剥をしようと為掛しかけた悪い奴で」

正「全く追剥に相違有りません、私の胸倉わたくしを取りまして懷中へ手を入れて、胴巻が有るかと思つて探した様子と云い、泥坊に違ひ有りません」

虚「私は昨年わしの春彼奴等あいつらを羽根田の浜辺で一度見たことが有りませんが、一遍は助けて遣わしましたが、向後のために成りませんか」と心得斬つて捨てましたが、悪い奴ゆえ此の儘まいつても仔細ありません、屈とゞけにも及びますまい、却かえつて斬徳きりどくぐらいのものでしよう」

伊「後あとでお係り合になるといけませんから、金子は何程掛つても

宜しゅうございますから、お届け遊ばしては如何いかゞでございます、
私わたくしども剥がれますところをお助け下さいましたのでございますと
申し立て、決して御迷惑に相成らんよう、何どの様ように金子を遣つて
も厭いといは有りませんから」

虚「イヤ／＼斬徳で届けるには及びません、手が血染のりじみになりま
したが、悪いお手拭いが有りますなら戴きたい」

伊「ヘイ、正孝持つてるだろう」

正「ヘイこれに」

と差出すを受取り見て、

虚「斯んな結構なお手拭でなくツても宜しい」

伊「ナニ結構かまでも構やア致しません」

正孝は口の中^{うち}で、

「少々高い、エ、なに、アノ花会の手拭でございます」

彼の^か虚無僧は刀の血^{のり}を拭つて刃に障りはせんかと刃を見て鞘に納め、

虚「決して左様にお礼を仰しやるに及びませんが、少々御無心がございます」

伊「へえ、何んな事でも否^{いや}とは申しません」

虚「実は手前、遠国へ参つて居り、久々にて当地へ歸りました者で、少々心当りの者が有つて此の辺へ参り、成田へも参詣しましたが、此の辺に悪者が忍^おんで居るといふ噂^{うわさ}が有つて、八州の捕^{とり}方がまいって厳しい詮議^{せんぎ}が有るので、一人旅の者は何処の宿屋

でも泊めてくれませんので、誠に当惑を致します、就きましては手前は決して胡散うさんの者では有りませんが、姓名は仔細有つて申し兼るが、お連れ下さるまいか、何うかお連れの積りで合宿あいやどを願いたいので」

伊「へえ宜敷よろしゆうございまする、何んな事が有りまして、私わたくしは助けて戴きましたので、其のくらいの事はお安いことでございます、おまつや清八は何処へ往つちまツたか知ら、師匠皆んな見えなくなつたね」

正「おいお松さん、ア、原中へピッタリ坐つてまさア、オイ坐つてるだんじやアない、サツサと往いかないと斬徳さどくく」

と是から皆々みんな伴つれ立って船橋の佐渡屋さどやへ泊り、お湯に這入りま

してから伊之助は、

伊「師匠々々是へ来てしみ／＼」お礼をいいなよ、旦那さま誠に

有難う存じました、さぞ嘸お疲れでございました

正「今日のこんちのような有難いことは今までには無いので、この旦那さ

まには年来御贔屓に成りまして、羽織から着物帯煙草入駒下駄ま

で残らず拵えて戴いた時も随分嬉しかったが、その時より今度の

方が余程嬉しゅうございました、物を貰いたいつてたいこもちりえよつぽど幫間の了

ようけん

間きようは此のくらいのものでございますが、実に今日ばかりは何

んだか私はわたくしポツとしちまって、夢中で居りましたが、それではい

けねえと、一生懸命になつて歩いてまいりましたが、旦那さまが

笠を脱とつて、長いお刀へ手を掛けて、御立腹なすつた時には、私

も随分お武家方のお腹立にも出で会くわしますが、ちん／＼の御立腹とは違つて、お顔の色が變つたと思うと、鼻の先でぴか／＼サク／＼は驚きました、ヘイ、私は始めて人殺あれを見ました、ヌ／＼と

いうと血がブーツと吹き出しました」
虚「あのお話は御内々ごない／＼に」

正「ヘイ、ナ成程斬徳／＼ツてな事に成つてますから、うツかりは云えませんが、私の役わたくしは余あんまより宜い役じやアありません、芝居だとツツころばしで家橘かきつか我童がどう小團次こだんじどこの役で、今考かんえると面白いが、旦那は立役たちやくで、後うしろから出て笠かぶを脱とつて昇夫しょうふを投なり出して、笠を小脇こわきに抱えてカラーリと見得があれば、舞台で狂言でしても立役りやくが出ると宜い心持だから、親玉ア成田屋アと声を掛けたいが、

それが当人だから何のくらい嬉しいか知れませんか」

虚「あのお話は余りなさいませんように」

正「ヘイ／＼成る程斬徳／＼ツてえ事に一切なりますんで」

虚「御主人何うか別段に御酒ごしゅやお肴を沢山御馳走下すつてはいけません」

伊「何う致しまして、何にもお構い申しません、海老屋と違つて何にもありません」

虚「御主人あの床の間のお荷物の所に一節切が二管有りまするが、あれはあなたがお吹き遊ばすのか」

伊「いゝえ、これはホンの道具を些ちっとばかり掘出しものを致しました時に、込んで買いましたが、笛をお吹き遊ばして居らつしや

るようでございまするが、お入用いりようなら差上げても宜しゅうござ
います」

虚「少々拝見を願いまする、中々好よい笛のようで」

伊「へい」

と差出す二管の笛を手にとつて見ますと、一つは響ひびきと朱銘しゆめいで
出て居り、一つは初音と銀銘で出て居りますから驚きました。こ
の虚無僧は稻垣小左衛門の忤小三郎でございます。

三十二

稻垣小三郎は、これは私わしが父小左衛門から笛の稽古をする時に、

私が響を吹くと親父が初音を吹いて教えてくれた此の一節切、どうして此処に有ることかと驚きまして、

虚「これは何処の道具屋でお求めになりましたか、此の他に何か道具が出やア致しませんか」

伊「へえ、実は私は此の釜が掘出物の積りで釜を見込んで居りますんですが、笛はホンのお供で取りましたので」

と云うから其の釜を見ると又驚きました、というは、先せんとの殿飛騨守さまから拝領の蘆屋の釜ゆえ、是はどうも思い掛けないことと考え、

虚「これは実は私の家うちに有りました品でございますが、幾らでお求めに相成りましたか知らんが、私に取っては大切な道具でご

ざるが、お求め遊ばしたお直段ねだんを仰せ聞けられますれば、手前あたいから其の価を差上げますから、何うか手前へお譲ゆずりを願いたいものでございます」

伊「へえ、貴方様のお屋敷から出ました品で」

虚「手前は只今は修行者の身の上になり下り零落さがいたしました、これは親父が上かみより拝領したもので、替箱かえばこが有り、二重三重はこの函へ箱書付はこがきつけも附いて居たものが、どういう事で斯様なことになりましたか頓とんと分りませんけれども、右の次第ゆえ何うか手前へお譲りを願いたいもので」

正孝は傍そばから伊之助の袖を引き小声で、

正「旦那、旦那」

伊「えゝ何んだよ」

正「上げてお仕舞いなさい、私^{わたくし}どもの命を助けて下さったお礼に上げて下さいな、一両二分と思やアしませんぜ、五百両のお礼をする積りで上げて下さいよう」

伊「黙つて居なよ、余計な口を出さねえでも宜^いい……へい私^{わたくし}

共^{ども}は何も此の品でなければならぬと云う訳で求めたのでは有りませんし、お屋敷から出ましたお品なら命を助けて戴きましたお礼に何か差上げたいと思つて居りましたとこゆえ、そんな物で宜しければ残らず差上げたたく心得ます」

虚「イヤゝ高^{こうきん}金の物で有るからたゞ戴くわけはございません」

伊「代は申し上げること出来なほど実に安く買いましたゆえ」

正「旦那さま御心配は有りません屁の平気で……屁ということは
うツかり云うとしくじりますが、大丈夫ですから黙って貰つてお
置き遊ばせ」

伊「貴方の方では御大切ごなお品ゆえ何うか御心配なくお受け下さ
いまし」

虚「左様でござるか、それは誠に有難いことで、手前ことは只今
の身の上では仔細有つて姓名を明あかすわけには参りませんなれども、
御尊名を伺い置きまして、手前世に出ますれば御尊家ごそんかへお礼に出
たいから、どうか御尊名の処を仰せ聞けられるように、お宅は何
方ちちで」

伊「手前てまいは本郷春木町の、紀伊國屋宗十郎の忤伊之助と申します

る」

虚「本郷春木町の……ア、左様か」

とこれは出入町人岡本政七の妹娘と許嫁だとかいう話が有つたが、さては紀伊國屋の伊之助と云うものは此の男かと思いましたが、はすはにものは云いません。

虚「何れ世に出れば御尊家へお礼にいず罷り出る」

と約し其の晩は寝てしまい、翌朝よくあさは連立ちて出ましたが、伊

之助の連は八幡から横に折れて中矢切村の法泉寺へまいり、若草

の法事を致し、叔母にも会つて帰りました。此方こちらの虚無僧は釜を

提げて市川を越え、逆井さかさいを渡り、本所に出まして、二ツ目の橋

を渡り、深川の万年町へ参り、岡本政七に面会しようと云うので

万年町差して参ります。お話は戻りまして重三郎は仙太郎の世話で、高橋を曲ると直に二軒目の明家を借り、世帯しやたいを持ちまして昼は万年町の店へ通い、粟田口國綱の手掛りも有ろうかと、仲間の小道具屋を廻り、また深川八幡へ心願を掛けまして、頻りしきと刀の行方を詮索致して居りまするが、今に手掛りもございませんこととで、或日あるひ重助は少し買物が有つて出ましたが、ポツ／＼雨が降り出して来ましたから、番傘を差して横町から出て来ますると、降ふりが強く成りました。と見ると向うの家の軒下に修行者が立つて居りまする。自分も永らく四国西国巡礼して居りましたから、旅疲れの人を見ると、自分の旅で難儀をしたことを思い出すと見えまして、

重「申し御修行者さんく、お前さんは余程遠国を歩いて来たお方と思います、脚半の穿き^はようと云い草鞋の穿き振りと云い、余程旅で苦勞なすったお方でなくツちやア然^そう云うような身拵えの出来るわけのものじゃアないが、余程遠くを歩いたお方でしょう」

小「はい、九州辺を遍歴^{へめぐ}つて余程長旅を致し、久々にて御府内へ立歸つた身の上でございます」

重「そうでしょう、私^{わたくし}の宅はツイ此処を曲ると直^{じき}に二軒目でございますがねえ、幸い心ざす仏さまが有りまするが、あなた笛を吹いて修行をして居らっしゃるから、矢張^{やっぱり}虚無僧さんと同じような者ですかねえ」

小「まアくぼろんじの流れを汲みますもので」

重助「それじゃア此方^{こつち}へおいでなさい、何^{なん}にも有りませんが茶飯が出来ましたから、味噌汁^{おつけ}でも温め^{あつた}て御飯^{おまんま}を上げたいから。心ざす仏さまへ御回向なすつて下さいな」

小「お志しとあれば御免を蒙^{まか}つて罷^{まか}り出しましょう」

重助「あなた雨具は有りませんか」

小「イエ所持して居りまするが直^{じき}に晴れようかと存じまして見合せて居りますので」

重助「中々大降になりましょうよ、今時分の雨は降り出すと容易に止まないから、汚^うない家^{うち}ですが、まア此方^{こつち}へおいでなさい」

小「それは有難う存じます」

重助「矢^やつ張笛を吹いて御回向が出来るんでしようねえ虚無僧さ

ん」

小「はい、それは回向の曲、手向たむけの曲と云うのが有りますから、

笛で手向おたむけは出来まする」

重助「然うですつてねえ、私わたくしが旅を致しました時に、虚無僧さん

と合宿あいやどをしたことも有りまするが、其の虚無僧さんの話に邪じゃけ

慳いっごく一うち国なことをいう家で回向をする時は、笛で馬鹿野郎ヤイ

と吹いても知らないから、からかつて遣る事が有るてえましたが、
本当ですかね」

小「随分左様なことが無いでも有りません」

重助「然うでございましょうね」

と話しながら我家わがやの門口へ参り、

重助「さアお這入りなさい、四国ではねえ只泊めてくれるのに、

しゆぎようじや

修業者ごでも御へんどさんくと申して、主あるじが足を洗つてくれ

るが、誠に人気にんきの穩おだやかな国で、それと云うのも弘法さまが何百年

か昔にお戒め置きなすったからでしょうが、私わたくしは今日は四国の者

の積りで貴方の足を洗つて上げましょうか」

小「どう致しまして、それは恐れ入りまする、どうか盥たらひへ水を頂

戴して自分で洗う方が却かえつて勝手でございまする」

と是从から盥へ水を汲んで持つて来てくれましたから足を洗つて

奥へ通りまして、重助は仏壇へ灯ともしび明を点けて線香を立て、

重「さア此方こちらへ」

というので小三郎が仏壇の前へ坐る。

重「その真まんなか中に在るお位牌がなんですから、何うかそれへお手向を願います」

小「畏まりました」

重「御回向が済むと後で御膳を上げますよ」

小「誠にお志しの深いことで」

と云いながら懷から取出したのは昨夜ゆうべ図らず紀伊國屋の伊之助から貰った初音という一節切でございます。今唄口しめを濡して手向の曲を吹こうと思い、ふと仏壇を見ると、隅の方に立掛けて有るのは山風の一節切で、その傍そばに黒羅紗の頭巾が有ります、山風と蒔絵をした金銘とうみようが灯明ほかけの火影に映じ、金色がキラ／＼見えまするゆえ、小三郎は不思議に思いまして、

小「御主人く」

重「はいく」

小「このお仏間に一節切が立掛けてありまするが、これはあなたの御所持の品かな」

重助「おゝ成程お前さんも笛を吹くから直にお目じきが附きますな、

これは今日の仏さまの遺物かたみでございまする」

小「へい、遺物でございますか」

と云いながら手に取上げて見て恟びっくりいたしました。というの

は、先殿飛驒守公から父小左衛門が拝領したる品にて、常々肌身放さず秘蔵にいたし、何処へ往ゆくにも首へかけ懷へ入れて歩いたほどの物が、どうして此処に立掛けてある事かと訝いぶかしみながら、

小「御主人少々伺いますが、此の笛を所持したものの命日と被^{おつし}仰^やつて見ると、誠に思いがけないことでございまする、これは他に少ない品でござるが、何う云うわけで此方^{こなた}さまに有りまするか、とんと手前には分りませんが、この笛を所持いたして居りました人は何と申す人ですか」

重^{わたくし}「私どもには笛の事なぞはさつぱり分りませんが、何でもこれはやかましい物なんだそうで、殿さまから拝領した笛なんだとかいう事を私の忤は能く存じて居りますが、これを持って居たお方は、旧は金森様^{もと}というお大名のお重役で、稻垣小左衛門という方で、そのお方がお吹きなすつた笛だそうです」

小「フーム、その小左衛門は何処に居りまするか」

重助「その小左衛門さまと云うお方はね、この笛と其処に在る黒羅紗の頭巾を持ったなりでね、悪い奴にでも欺だまされて突き落されたものか、鴻の台の鐘ヶ淵から逆さかトンボウを打って血みどり血がいになってお落ちなすって、お亡くなりなすったので」

小「エ、小左衛門がなくなりましたか」

と云いさしさめ／＼と泣き沈みましたも道理で、親一人子一人の小三郎ゆえ、実父おやじの死去した事を聞き、堪こらえ兼ねて男泣きに泣き出し、涙が膝へハラ／＼と落ちまするのを重助が見て、

重助「お前さんお泣きなさいますね、失礼な事をお聞き申すようですが、あなたは稲垣小三郎さまと仰しやるお方では有りませんか」

と云われて驚き気を取直し、涙を拭って笑顔を造り、

小「いえ／＼手前は左様な者ではござらん、なれども手前も少々指田流の笛を吹きまするが、二と及ぶ者のない名高い稻垣小左衛門が左様の横死を致したかと同流の誼^{よし}みでござるゆえ誠に惜しい事をしたと思い、見^しず識^しらずの方なれども余り力が落ちましてツイ落涙をいたしました」

重助「いえお前さんお隠しなすつちやいけません、あなたが小三郎さまなら、貴方のお帰りを私^{わたくし}どもの忤はお待ち申して居ります、私どもの忤は万年町の岡本と申す小道具屋の手代で、重三郎と申しまするが不調法をいたしお屋敷の大切なお刀^{なく}を失したのでお係りの稻垣様が御浪人なすったばかりでなく、左様な死によ

をなさいましたのも皆みんなな私が不調法から起つた事と、日々そればかり申し暮して居りますが、私はその重三郎の親父で重助と申します者でございます」

小「ハイ……左様か、それは何うも思い掛けない、お前が重三の親御かえ」

重「それ御覧なさい、だからお隠しなすつてはいけませんと申しましたので」

小「実は斯様な修行者の身の上になつて居ながら、姓名を明かすは父の恥、故主こしゆうの恥と心得て明らさまに申さなかつたなれども、重三じゅうざの親父なら他言は致すまいが、実は手前が稻垣小三郎でござる」

重「はいくこれは何うもはや」

と云いながら、後の方へ身を摺すり下り、慇懃いんぎんに両手を突き、

重「誠にお初にお目にかゝりまするが、若旦那様がお帰りになつて此の事をお聞き遊ばしたら、嘸さぞお力落しだらうとお噂を申して居りました」

三十三

小「手前少々心当りがあつて、一年半ほど諸国を遍歴へめぐり、九州までまいったが、少しも刀の手掛りもなく、少々気になることが有つて、一先ひとまず江戸へ立歸つて、芝の上屋敷へまいって聞けば、親

父はお暇になったとの事、尤もそれ程のお咎めもあるまいと思い、旅先から再度書状も送ったが、父より更に一本の返事のないも道理、同役の者に聞いて見ると、昨年の春より父は葛飾の真間の根本に居るといふことゆえ、参つてだんく尋ねたが、とんと様子が分らず、歸つて来る途中にて図らずお前に呼入れられ、我親の位牌と知らず仏間に向つて回向を致し、思わず此の山風が眼に這入つたばかりで不思議に知れたる実父の横死、その命日に当り、此方へ呼入れられるとは実に父の引合せで、お前の家へ来るようなことになったのかも知れん、誠に女々しい奴と思し召すか知らんが、此の度ほど力の落ちたことはない、誠に残念な事をいたした」

と云いながらまたさめ／＼と泣沈む。

重助「へい／＼御尤もさまでございます……私わたくしどもの忤わづかしは貴方様の
 のことばかり申して、誠に情ないことをした、私わたくしがお刀さえ失なくさ
 なければ、チャンとしてお屋敷においでなさろうもの、私が不調
 法から斯んな非業の死に様ようをなすつたと申しましては、毎日仏さ
 まへお線香を上げる度に忤わづかしが泣くのでございますよ、去年の正月
 五日の晩にお刀を奪とられ、申し訳がないって万年橋で首を縊ろう
 とする処へ、通り掛ツたのは、伊皿子台町の荷足の仙太郎という
 誠に気丈な親方で、其のお人が助けて下さいまして、其の刀を取
 った侍の容なり恰好も見て居るし、それに見知にんり人も有るから何んのお
 手先を頼むには及ばん、己が探すと仰しやって、御親切に侍に

突当つて刀を挽ぎ取つて、人のために命賭でお刀の詮議をして下さいましたが、まだ知れませんが、けれどもその仙太郎親方のお蔭で重三郎も私も漸く万年町のお店へ出這入の出来るようなことになりましたが、不思議な事には、仙太郎親方と悴と一緒に松戸へお刀の詮議にまいりますと、船の胴の間へ落ちたのはお父様のお死骸でございましたが、御浪人なすつて入つしやるからお屋敷へ知らせる事も出来ませんから、何うしたら宜かろうと心配のうゑ、仙太郎親方が自分の伯父様の積りにして、白金の高野寺へお葬式なさいましたが、御門主が来て、どうも立派な御葬式で有つたという話でござります、随分お屋敷の御葬式でも、あれには敵うまいという程で、立派な御供養がありました、仙

太郎親方も貴方にお目にかゝりたいと其の事計り申してゝすが、誠に御親切なお方さまじやア有りませんか」

小「はい、親どもの死骸を引取つて葬式まで出して下さるとは実に恐れ入った事で、何うかお目にかゝつてお礼を申したいもので」
重助「時々入つしやいますが、伊皿子台町ですからお出なすつても造作も有りませんが、今に忤も歸つて参りますから、何うか今晩は私の処へお泊り遊ばして、忤に御案内致させますから、明わたくしにち
日 仙太郎親方の処へ往つてお会いになつたら宜しゅうございましょう、なか／＼ 俠おとこぎ氣のお人ゆえ、またお力になる事も有りましょう……旦那様、此の頭巾の裏に白い布きれがあつて、それへ印とかゝ押してあるそうです、此の品は忤の申しますには、お屋敷で

お揃いに出来た頭巾ゆえ仇敵かたきの手掛りになるかも知れない、大旦那は組討でも成すつたものか、紐が切れたのを持ったなりでお落ちなさいましたとの事で、後日の証拠に取って置こうと、親方が取ろうとしましたが、固く握っておいでゆえ指を一本ずつ折って、漸く頭巾を取ったというくらいでございました」

小「左様でございますか」

と慌てゝ頭巾の裏を返して見ると、白羽二重きりの布が縫付けて有りまして、それへ朱印が押してございますのを熟々つく／＼視て、

小「誠に何うも思い掛けないことで、これは実父が突落される臨い終まわの一念で放さずに居たものと見える、あゝ天命は遁のがれ難いもので、これは分りました……ウーム彼奴あいつの所為しわざであろう」

重助「知れましたか、誰でございます」

小「これは矢張同藩でござつて、大野惣兵衛という奴だが、壮年の折柄心掛けが宜しくないのです、実父から一言殿様へ申し上げた処からお暇になったので、それを遺恨に心得、実父を欺いて高峯たかねから突落すとは卑怯な奴で、大野が所為と知つて居たらば濃州から歸るのではなかった、大野が親族は国あに在るて」

重「悪い事は出来ないものでございますな、其の事を仙太郎親方や重三郎が聞きましたら嘸悦さぞびましょう」

小「これが大野惣兵衛と知れましたからには、私は直わしに出立致して、遠からず大野惣兵衛の生首を引提ひっきげて歸つて来たならば、其の功に依つてお屋敷へ歸参が叶うかも知れません」

重「へえ、これはお導みちびきでございますな、何にしても今晚はお泊り遊ばせ、今に忤も帰つて参りましょうから」

小「イヤお前には初対面だし、重三でも居おれば厄介に成りますが、重三が遅く帰つて来るようでは氣の毒だから、私わしは是から万年町の岡本方へ参つて一泊致し、明朝また来て重三にも会いますから、いらん物は預かつて置いて下さい、これは重くてならんが、大切の釜だから其の積りで確しつかり預かつて置いて下さい」

重「成程初対面たなでございますから、それも然そうでございます、万年町のお店へお泊り遊ばすなら、重三が帰つて来ましたら、お店へ差出す事に致しましょう……これはお履はき難にくいか知りませんが、此の下駄をお履きなすつて、傘をさして往いらつしやいまし」

といいながら傘から下駄まで揃えて出しましたから、これを借り、

小「くれ／＼も仙太郎親方にお礼を云わなければ、どうも気が済まんようで」

重助「はい／＼仙太郎親方がお聞きなすつたら、どんなにお悦びか知れますまい、左様なら御機嫌宜う」

小「大きに御厄介になりました」

と表へ出ました。武家はメソ／＼泣かないものだが、外へ出ると小左衛門の横死を思い出し、胸に迫つて流石にさすが猛きたけ氣象だが、オロ／＼涙を落しながら、番傘を片手に持ったなりクヨ／＼と思ひ詰め、高橋を渡つて霊岸の方へ曲る道へ下りにかゝると、向う

から駈けて来た一人の男は仙太郎で、闇くらさは闇し、互に顔は知らず、間違いの出来る時には仕方がないので、仙太郎が駈けてまいる途端に小三郎に突当りましたが、きかない気象だから、

仙「ヤイ気をつけて歩け、間抜け奴め、この頓痴とんちき気」

小「何だ怪けしからん奴だな、手前の方から突当つて置きながら悪あ口つこうを申すとは無礼至極な奴だ、此方こちらは避けて歩いて居いるに」

仙「なにイ此の間抜けめ、下を向いてグズ／＼歩いて居やアがるからだ」

と云いながらツカ／＼と寄つて来て、

仙「この野郎」

と小三郎の胸ぐらを取り、五人力の拳骨で押え付けられた時に

は、流石小三郎も息が止りそうになりました。通常の者なら躊躇^{よろ}て倒れるところでございますが、小三郎は柔術も剣術も名人な人ゆえ力^{ちから}足^{あし}を踏止めて、懷中より一節切を拔出し、仙太郎の利腕をモロにグツと落しますと、痛いからバラリと放すところをば、機^{とたん}をうたしてドンと仙太郎を投げる。仙太郎は始めて投げられて口惜しいけれども暫くは起る事が出来ません。

小「斯様な無法のことをすると、暴^{あら}い侍だと此の首を打落されるぞ、以後たしなめ」

とコツ／＼一節切で仙太郎の頭を打ち、逃げもせず急ぎも致しませんで、泰然と番下駄を履いたなり往つてしまふ。仙太郎は口惜しいの口惜しくないのツて何うも我慢が出来ませんから、急い

で重助の処へ駈けて参り、

仙「爺さん一寸明けてくんちよつとな、何か手頃の棒を出しねえよ」

重「親方何んでございます」

仙「何でも宜いいやアな、早く出しながら、今喧嘩をして来たんだ」

重「喧嘩は止して下さいましよ、怪我でもするといけませんから」
仙「チョツ、エ、早く出しな」

と叱られましたから有合せた棒を出して渡すを引ツ取って、其の儘駈出し、高橋を渡って海うんべだいくちよう辺大工町を曲り、寺町から靈岸前

へ先さきまわり廻まわをして、材木屋の処かくに匿かくれて居て、侍の向ずねう脛ぶつぱを打

払らって遣はなろうと思しい、頻しきりと覗ねらつて居ゐりますと、向むかうから小

三郎がクヨ／＼しながら下を向いて遣つて参ります処を覘い詰め、いきなりに、

仙「覺えたか」

と云いながら腰車骨こしぐるまを覘つて横に払いました。是からどうなりますか。

三十四

仙太郎は小三郎に逢いたいと思い、待つて居りますが、小三郎も仙太の俠氣おとこぎに感服して逢いたいと思う二人が、知らぬ事とは申しながら、仙太郎が赤あかがし檜の半棒で打込みましたが、武辺の心

得ある侍は油断のないもので、片手に番傘を持ったなり、ヒラリと四五尺ばかり飛び上つて空を打たせ、下りながら木剣作りの小脇差を引抜きますと、刃の光が鼻の先へピカリと刀尖が出たから、仙太郎は驚いて棒を投り出したなりで、無茶苦茶に逃戻り、仙「オイ爺さん明けてくんなよ」

重「ハイ私は何んなにお案じ申したか知れませんよ、お願いだから喧嘩は止めて下さい、私が死んでからして下さい」

と云われ仙太郎は悄悄々と、

仙「己はもう喧嘩は止めだ、若い時分はもう少し強かったが、年を老ると怯むから、うっかり喧嘩は出来ねえ」

重助「あなたが権幕を変えて出て往つしやいましたから、私は跡

で何んなにヒヤ／＼して居たか知れません」

仙「なに、新橋の汐留しおどめの川岸かしから船が出ると、跡から芸者か丈

助さん／＼という声がするから、其の中に丈助さんという奴が居

たので、丈助と云うのは手掛りの名だから、先の奴の顔を知らね

えから重三さんに見せてえと思つて、万年町のお店たなへ往いくと、此

方ちうへは来ねえというから、此方こつちへ来ようと思つて高橋を渡ろうと

すると、突当つた奴が有るから、十二此の野郎殴り付けるぞ、何

んだ手前てめえ氣を付けろと、生意氣なことを云つたから、胸ぐらを取

ると、小癩なことをするなツて己ほうを抛り投げて、棒で己の頭をコ

ツ／＼やつて往いきやアがつたから、口惜しくつて堪らねえから、

棒を持って先へ廻り、車ツ骨をやろうと思つと、酷ひどい強つええ奴で、

ピヨイと頭の上まで飛上りやアがったが、天狗を見たような奴だ、下りて来ながらスラリと抜きやアがったから、危険だから逃げて来たが、魔がさしたんだなア、もう喧嘩ア止めだ」

重助「お前さん、人の宅へ来て頬被りしたなりは酷いじやアありませんか」

仙「オ、然うだっけ」

と頬被りの手拭いを脱ると、ジヨキリと手拭ぐるみ鬚のイチがそげて居りましたから、手を当てゝ見て、流石の仙太郎も肩から水をかけられるように、ゾツと総毛立ち、

仙「爺さん喧嘩ア止めだ……こいつは止めだ、滅法界に強え奴もあれば有るものだ、飛びながら抜きやアがったが、刀尖が己の

鬚へ当つて手拭ぐるみ殺ぐというのは、刀劍きれものも善いいいのだろうが、
何どのくれえの腕うでめえ前だか知れねえ」

重助「おゝ怖い事、おまえさん、もう少し下なら何うなさる」

仙「パクリと柚子ゆず味噌の蓋を見たように頭を殺がれるか、もう少し下ならコロリと首が落ちるんだ、オゝ怖おっかねえ、喧嘩は止めた、酷い奴が有るものだ」

重助「冗談じゃありませんよ、シタが彼あの稻垣小三郎様が帰つておいでなすつたよ」

仙「エ、若旦那が何うして」

重助「此の先の軒下で笛を吹いて居た修行者が有ったから、四国の心持でお泊め申し回向を願うと、仏壇に立たてかけて有った一節切

を見てお聞きなすったから、これ／＼と申上げると男泣にお泣きなさるから、貴方は小三郎様かと云つても初まりはお隠しなすつたが、私は重三の親父でございますという、実は己が小三郎だとお打明け下されたが、其の時は私は何うも胸が一杯になりましたね」

仙「ウン／＼^{さぞ}嘸お力落しだつたろう……それからお前アノ何を云

つてくれたか、小左衛門様の死骸を引取つて葬式^{とむれえ}を出した事を、

お侍さんを町人が無闇勝手に引取つて葬式を出したつて、滅法^{めつぼう}

^{けえ おこ}界に怒ると困るがなア」

重助「いえ何うして怒るどころじゃありません、誠に御親切なお方さまだ、お目にかゝつてお礼が申したい、実に感心なお方だ、

侍も及ばんと仰しやつてゞございました」

仙「然うか、シテ何処へお出でなすつた」

重「重三が居ないから、万年町へ往つて泊ると仰しやつて、もう少し先刻岡本へいらつしやいました」

仙「留めて置けば宜い^いに、それにアノ頭巾を見せたか」

重助「へえ、頭巾をお目に掛けたら、何とかいう人だと仰しやつたが、チャンと目標^{めじるし}が有つたのが解つて、仇討^{あだうち}に出ると仰しやいましたよ」

仙「然うか、何にしても会いたかつたなア、これから万年町のお店^{たな}へ往つて来ようか」

重助「明日^{あす}の朝おいでなさると仰しやつたし、忤も今に歸つて来

ましようから、又人に突当つて喧嘩でもなさるといけませんから、今夜はお泊んなさいな」

仙「じゃア然う仕様が、何だか気色きしよくが悪くつていけねえから酒を買つて来てくれ」

と是从から酒を飲んで其の晩は重助の家へ泊りうちましたが、翌朝早く起き、手拭を頭へ巻いて朝湯へまいりました。跡へ入違つて重三郎と稻垣小三郎が連れ立って帰つてまいりました。

重助「何うした、滅多に宅うちを明けた事はねえに、昨夜ゆうべ帰らねえもんだから大變に心配をした」

重「昨夜は万年町のお店たなへ泊りました」

重助「おや／＼若旦那さま、これは何うも、私は御一緒とは存じ

ませんでした、さア／＼何うぞ此方へこちら」

小「昨日は図らざる事で段々御厄介に成りました、あれから万年町へ参ると重三も来合せて、段々話も尽きないゆえ、重三は親父が案じるから帰ると云ったが、どうせ明朝あすは私も往くから一緒に参ろうと申して無理に引留め、お前に案じさせて誠に相済みません」

重助「いえ、どう致しまして」

重「だん／＼私の不調法をお詫び申した処、お諦めの宜いお方ゆえ、皆定まる約束事だろうと仰しやって、何とも別段やかましい事も仰しやいませんで、それから店の主人も斯様なお行装みなりにお成り遊ばしてお氣の毒でと、種々お話が尽きない処から、ツイ遅

くなりまして帰られませんでした」

重助「まあ然うでございましたかえ」

小「何うもね実に万年町の政七も誠に眞実な男で、たとえ仮令浪人して

困ろうとも、私の宅の奉公人から出来たことゆえ、あなたお一人

ぐらいいは何うでも致しますから、何処へも往ゆかずに二階に居てく

れろと云われ、誠に忝かたじけない力を得たようなものだが、私も仇討に

出立せんければならぬが、手に入いった品々は重役に預けて置き、

私は一度濃州の郡ぐんじょう上へ立越えます心得である」

重助「左様でございますか、それに重三や昨夜仙太郎親方がお前

に逢いたいとおいでなすつて、間もなく跣足はだしで駈出して、暫らく

経つて帰つておいでだからお泊め申して……おや親方お帰んなさ

い、今親方の噂をしているところで……申し若旦那これが仙太郎親方でございます」

小「おや／＼これはお初にお目にかゝります、手前は稻垣小三郎と申す不束ふつゝかの浮浪人此この後ともに幾久しく御別懇に願います」
仙「これは何うも、私わっちはいけぞんぜえ者の仙太郎と申す、通常たぐなら旦那様方にお目通りなんざア出来る身の上ではござえやせんが、私のような人間へお交際つきええなさるようじやア御運ねの無えのでござえやすが、お父様とっさんのことをお聞きなすつて、嘸お力落しだらうつて、あなたのお噂で夜よを更かし、直じきに夜が明けちまったようなことで」

小「万年町でもお前さんのお志の程を承わりまして、実に感服い

たしました、御無礼な儀だがお身分とは違い、何うも見ず識らずの者を助けて下さるのみならず、人のために命を棄てゝも刀の詮議をして遣らうとは、実に侍も及ばん処の御氣象、如何にも珍らしいお方だと言つて感心して居りました、又親共の横死の折にはごねんどご御懇ろなる御葬式で、これごそうしきくくわと精しく万年町から聞きました、何とももつてお礼の申し上げようはありません、千万忝うございまする」

仙「何ういたしましたして、昨夜きのうも爺さんとつと話をしたんですが、無闇にお侍の死骸を引取つて、伯父の積りで葬式とむれえを出しましたから、若旦那おこが怒りやアしねえかつて心配して居るんです」

小「どう致しまして昨夜さくやも重三へ申しまするに何ともお礼の申そ

うようはないが、何うか其の伊皿子とやらのお宅へ参つて、しみ／＼お礼を申し上げたいと申して居たのですが、幸いおいでゞございまして、何ともお礼の申そうようは有りませんのに、若旦那などと仰しやつては却かえつて困ります、只今にては笛を吹いて修行をして歩く身の上ゆえ、乞食も同じことで、あなたの方がお身柄はずツと高いので、殊ことわたくしに私は兄弟もなく、また親戚みよりも至つて少ない身の上でございますから、此の後ごとも私を子分おぼしめとも思召して、小三郎とお呼び捨てなすつて、末永く力に成つて下さるよう、貴方おとこを俠客と見掛けて願いまする」

仙「それはどうも飛とんだ事」

と云いながら手拭で涙を拭き、

仙「誠にどうも勿^{もつて}体ねえ話でござえます」

とまた手拭をねじつては涙をふきく頭を擡^あげ、

仙「こんないけぞんぜえものゆえ、貴方たちにお目にかゝつても
御^{ごええさつ}挨拶も出来ねえ人間だから、馬鹿な野郎と思召^{めい}しようが、
重さんに逢^なつてからは是れまでは随分永^{なが}え間の話ですが、私^{わつち}は其の
侍の容^{なり}恰好も知^しつてゐるから、岡ツ引に頼^{たの}まねえで詮索^{しんさく}をした処^{ところ}か
ら遅^{おそ}くなつちまつて、店^{たな}へも済^すまなく成^なつたのですが、お父^{とつさま}様
を殺^{ころ}した野郎は分^わりましたか」

小「はい、これは大野惣兵衛といつて矢張金森家の藩中で、三百
石取^とつた奴なれども、心掛^こけの善^よくないものゆえ、殿のお側へ置
いてはお為になるまいと、一言御^ご前^{ぜん}体^{てい}へ親父から申し上げた事

が有るので、それがためにお暇いとまになったのを遺恨に心得、親父を欺いて殺したものでしょうが、親父も一人や二人討つて掛ろうとも無慚むざんに殺されることは有りませんが、何うかいう係蹄わなに掛けて、左様な横死をいたしたので、誠に残念なことでございますから、私は直様すぐさま仇討に出立致し、遠からず大野の生首を提げてお屋敷へ帰つたらば、親方へはまた手前何どの様ようにも御恩返しを致しまする」

仙「お願いですが一緒に私わっちを連れてつて下さいな、私は助太刀に従ついてつて一緒に仇討を遣りてえね」

小「エ、何う致しまして」

仙「何うか供に連れてつて下さい」

小「供と仰しやっても、御家内様も子分衆しゆもあるお方が、お宅は明けられますまい」

仙「ナニ、彼奴あいつは私の居ねえ方が却つて悦びやす、私が居ると種いろく

々な難儀をしている者を引摺込むので、留守の方がのうくするつてえます、それに野郎共が船え漕いでますから喰うにやア困りませんから、お願いねげですが一緒に連れてつて下せえ、助太刀に」

小「手前は誠に未熟不鍛錬の腕前でございまするなれども、大野の如き仇かたきを討ちますのに助太刀を頼んだと云われては、故主こしゆへ対して手前が済みません、又同藩の者へ外聞というわけでも有りませんが、助太刀のことはお断り申しまする」

仙「成程これは外聞が悪かろう、船頭などに助太刀を頼んでは、

お侍さんさむらいじゃアそうだろう……じゃアお供だけしてえね、途中で

泥坊や追剥でも出た時にはぶん殴りてえね」

小「いや道中は却って穏やかなもので、御府内の方が却って無
法な悪い奴が居りまする、現に昨夜も高橋のダラ／＼下りで理不
尽な奴が突当りましたがたいりき大力な者でした、手前が其の手を振
ど解き投げたのを遺恨に心得先へ廻って横町から突然に腰を払わ
れましたが、あの力で打たれては堪りませんが、手前も油断なく
飛び上って、威しおどのために小脇差を引抜いたら驚いて逃げたが、
理不尽な奴もあれば有るものです」

と云われて仙太郎は心うちの中で驚き、両手で頭を押えながら、

仙「モシ旦那……昨夜ゆうべのはあなたかね……これは何うも爺さん飛

んでもねえ事をした」

重助「それ御覧なさい」

と云われ仙太郎は頭を搔きながら、

仙「旦那何うも面目次第しでえもねえ、だしぬけにエイと遣ったのは
実は私わっちなんです」

小「おや然うとは存じませんで甚だ御無礼を致しました」

仙「いや、此方こっちが御無礼で、帰つて見ると鬻が殺げて髪を結うこ

とが出来ねえんだが、旦那工実わっちに私わっちア驚きやした、あなたは華きやし

奢やな細ほつそりした小さい体からだ軀だから、実はお案じ申したんですが、

鬻をジョキリと斬るくれえの腕前だから、仇が五人や十人出ても
大丈夫だ」

小「あなたも中々の大力だいきりきでお強いことで」

仙「余あんまり強くありません、もう少しで柚子味噌になるわけで、

頭を殺がれるところだった」

小「誠に危ないことでした」

仙「私わっちも殴ぶたなくって好いいことをいたしました」

小「手前も斬らなくって好いいことを致した」

と歎なげきの中の可笑味おかしみで、互いにドツと笑いになりました。小三

郎は其の晩重助の宅へ泊って、翌よくあさ朝早く白金の高野寺へ参り、

父小左衛門の法事供養をいたし、それから家老渡邊外記にも面会致し、蘆屋の姥口の釜に一節切を預け、表向きに大野惣兵衛を附つ

覬けねらい、敵討出立のお話でございます。

三十五

さて稻垣小三郎は、図らずも蘆屋の釜並ならびに山風の笛が手に入り
ましたから、早速右二品ふたしなを渡邊外記という金森家の重役へ預け、
仇討あだうちの免状を殿様より頂戴致しまして、公おもてむき然仇討に出立致
しまして、其の後再度渡邊外記始め万年町の岡本政七、荷足の仙
太郎、梨売重助等らへ心に掛けて書面を送りました故に、小三郎は
達者で居るといことが分りました、仙太郎も政七も安心致して、
小三郎の帰国を待つて居りますと、其の年の十一月頃から絶え
て音信おとずれがございませんゆえ、何うなすった事かと皆心配致しまし

たが、何処どこから何処へ参つたことか、讐かたきを探して歩く身の上ゆえ、
 頓とんと其の行先ゆくさきが分りませんので、梨売重助も心配して、お手紙
 一本お寄越しなされない訳はないのだが、旅で煩いらつて在いつしやる
 のではないかと案じられるから、売う卜ら者ないしやに占みて貰もらつたり、お伺
 を立てたりして居ります。其の頃向島の白髭に蟠竜軒という尼寺
 がございまして、それに美恵比丘尼という人が有りまして、能く
 人の未来の吉凶禍福を示しますので、これに帰依きえする信者も多分
 にございます。この比丘尼は坐禅をいたして大悟徹底たいごし、事を未
 然に悟る妙智力みょうちりきを備えて居ります。智識に成りますと山で
 坐禅をいたして居りましても、里あたのことは明あきかに分るといふ、応お
 驗うげん化道極けどきりなく百千年の前まで看みぬくといふえらいお比丘尼で、

五十余歳でございますが、年齢としよりも十歳も若く見え、でつぷりして色白く、婦人の身でありながら種いろく々なことを致します。お弟子もいかいこと居りますが、お弟子と同じように働き、立木たちぎを伐きりまして薪などにいたす事は労苦ことともしませんと云う、実に妙な尼でございます、重助は此れへ毎日く参りまして、重「名前は出しませんけれども、お尋ね申しますが、或あるお方が旅へ出まして、いまだに音信おとずれが有りませんが、御無事でいらつしやいまいしょうか、お比丘さまお示しなすつて下さいまし、私わたくしは実に案じられてなりません、まだお年若ゆえ、御病氣とした処が御全快になりますれば、何とかモウお音信たよりが有ろうと存じますのに、いまだにお音信が有りませんのは何うしたのでございまいしょう」

と聞かれて、美惠比丘尼は暫らく考えて居りましたが、

尼「いや老爺じいさん、心配おしでない、いまに音信たよりが有ろう、不図めぐりあ邂逅あひまひうことが有るけれども、旅へ出て難義をなすつておいでの

様子、殊に病難も見える」

と云われ、重助は力を得たから立歸つて、仙太郎や政七へも此の話を致し、何卒小三郎なにとぞさま道中にて凶事のないようにと神信心を致して居りました。さて小三郎の許もとから絶えて音信おとずれの無いわけで、小三郎は不図した感冒かぜが原因もとで寐つくと逆上をいたし、眼病になり、だん／＼嵩じて、末には霞んで見えないどころではなくバツタリ内障眼そこひのようになりまして、手紙一本書く事も出来ませんから、刀の詮議も仇敵かたきの探索も心に任せず、誠に残念に心得

て、実に私は薄命^{わし}の身の上であるが致し方はないから、一節切を吹いて人の軒先へ立ち一錢二錢の合^{ごうりよく}力を受けながら江戸表へ立帰ろう、もし大野惣兵衛の居処が分れば、私は盲目ゆえ迎^{とて}も仇^{あだ}は討てんから、屋敷の者を頼んで本懷を遂げよう、途中でも種^{いろ／＼}々能^いい医者^い者に聞いて手当もしたが、とんと其の甲斐がない故、

此の身の上を政七や仙太郎に知らせたならさぞ心配致すであろうから手紙一本遣らないが、此の眼病では迎^{りか}も刀の詮議も仇敵^あの所^い在^{なまじ}も知れよう道理はない、世に捨てられた私の身の上、愁^{なまじ}いに生^いき^{きはじ}はし

恥を搔くよりも寧^{いっ}その事一思いに割腹して相果てようか、それとも此の眼病が治る事も有ろうかと種々考えましたが、イヤ／＼迎^{なきち}も死ぬなら先祖の菩提寺へ詣で、亡^{なきち}父へ我身の薄命の申訳を

なして、直に其の場で切腹しようと、漸く心を決して、江戸表へ立歸つてまいりました。お話二つに別れまして、山口屋の音羽おとわでございます、是は稻垣小三郎の許嫁で、石川藤左衛門の娘おみゑという天下に勝れた美人でございますが、小三郎へ操を立て、他たのお客へは枕をかわせ肌を許しませんというが、誠に無理な事で、傾城けいせい遊女の身の上で、揚代金あげだいきんを取つて置きながら、お客に肌を許さんとは余り理のない話でございます。能くお客が立腹致しません。只今ならば直に警察署へ訴えになりまして相当の御処置が附きますが、其の頃は初会うらというと座敷限かぎりと云つて、顔を見たばかりでお客が得心で歸り、二会目に馴染が付き、漸くお床と云う、それでも厭なら二度三度も振ることが有りますが、振られて

もお客は人が好いから得心で帰り、あの花魁は振るから感心だ、振るといふのは見識が高いからだと云つて悦んで居たお方が昔は沢山有りましたが、誠に馬鹿氣たもので。遊びに往くのに妙な装をしたものです。天明の頃彼の千蔭という歌詠みがございましたが、此の人は八丁堀の与力で、加藤と申す方でございまして、同じ与力に吉田という人がございます、華美な装をして吉原へまいりましたことがなによらの書物にございましたが、千蔭先生は紫縮緬の紋付の対で、千蔭緞子の下着に広東織の帯を締めて遊びにまいつたということが、今の目で見ると狂氣じみて居ります。吉田さんは黒縮緬の羽織に對服御納戸縮緬の下着に、緋博多の帯を締めたんですが、此の上もない華美な扮装でございま

す。其の時に千蔭先生は稻^{いなもと}本のいなぎという名高い花魁を買つて居りました。吉田さんも同じくいなぎを買つて居りますが、互に知らずに居りました処、図らず互にいなぎを買つてゐることを聞き、ひらけて居りますから、

千「貴公も買つて居る^おそうだが私も買つて居る、これは甚だ不都合で、一人の遊女を^{ふたり}兩人で買うのはお互に心持が宜くないから、^{あれ}彼は貴公に差上げよう」

吉「いや貴公に」

と互に押附^{おツつ}け合つたが、内^{ない}々は惚^いれて居るから、

吉「左様なら花魁に極めて貰つたら宜かろう、花魁のいゝ方を取らせよう」

と是从から番頭新造^{しんぞ}へ話をいたし番頭新造から此の事をいなぎに話すと、いなぎも承知し、二人共に仲の町の山口巴屋^{やまぐちともえや}に並んで腰を掛けて居る処を、私が好いた人の手を引いて連れて往くのが真にいゝ人^{ひと}ぎますよ。という返事が来たので、

吉「若^もし私^{わし}が色男に取られたら何を散財しよう、黒縮緬の羽織をほうかん幫間へ残らず出そうじゃアないか」

千「もし私^{わし}を情^{いゝひと}人にとつたら紫縮緬の羽織を仕着せしよう」

と互に約束をいたし、両方とも百枚ずつ詔えまして、山口巴屋に腰を掛けて、りようにん兩人とも花魁の来るのを待つて居りまする処へ、

花魁がニヤリと笑いながら来ましたから、互に己かゝとを考えを附けて、のり出すと、花魁は千蔭先生の手を取つてスーツと茶屋

へ連れて往いきましたので、吉田さんは赤面いいたしましたが、昔の
 人は粹いだから腹は立ちませんが、何しろ仕様がないい、千蔭さんは
 情い人ひに取られたから、拵なえた百枚の羽織を幫間へ総羽織を出し、
 屋形船で中洲なへ乗り出す、花魁が中で琴を弾き、千蔭先生が文章
 を作り、稲舟いなふねという歌が出来まして、二代目名人荻江露友おぎえろゆうが手
 をつけて唄ういました。吉田さんは百枚の羽織を脊負しよい込んで遣り場
 が有りません、紫縮緬が仲の町へ行渡ゆきわたって居ゐまして仕方がな
 いから、深川へ往いつて、さて斯うくいうわけで弾はかれたが、百
 枚の羽織の遣り場がないから、深川の芸者に残らず着て貰もらいたい、
 恥を搔かいて間が悪いから吉田の顔を立たって着ておくれという、お、
 嬉しいこと、吉田さんわたし私が着よう、私も着あたようと深川の芸者が残

らず羽織を着たから、深川の芸妓げいしやを羽織衆はおりしと称えるような事になりましたので、貰わぬ者まで自分で染めて黒縮緬の羽織を着たという、誠に華美はでなことで。昔は振られるのを悦ぶのが流行はやりましたのですが、今なら何どのくらい怒おこるか知れません。悪くすると若衆わかいしゅを打擲ちやうちやく致すなど、いう乱暴なことになりますが、振られて粹がつてたんですけれども、これは余り好よい心持ではございません。然そういう華美はでな装なりを致しまするのを、延享えんきやう年中の流行言葉で伽羅きやらな装なりと云い、華美な装をする人を伽羅な人と云い、ちよつと様子の好よい事を伽羅じゃアないかと云い、持物が伽羅だとか、着物が伽羅だとか、男振りが伽羅だとか云いました、何が伽羅だか分りません、一体人間が伽羅だ了簡が伽羅だ

と云うんですが、何んだか少しも分りませんから、伽羅と云う事を段々聞いて見ると、贅沢という言葉であるという。其の頃「此の露で伽羅墨練らん白牡丹」と云う句が有り「吉原の奢始めは笠に下駄」という川柳が有りますが、仙台侯は伽羅の木履を穿いて吉原へおはこびになり、水戸さまは鼈甲の笠を冠ってお通いなされたと云いますが、伽羅は大した事で、容易に我々は拝見が出来んくらい貴い物で、一木三名と申しまして、仙台の柴舟、細川の初音に大内の白梅、此の一木三名を木履に作って穿くような事は出来ませんが、お立派な下駄が脱ぎ捨てゝ有ったのを豆腐屋の亭主が拾ったが、其の頃の流行言葉で伽羅な下駄だと称えたのかも知れませんが、伽羅伽羅という言葉は誠に好い言葉でござ

いまするな。只今ではオツと云いますが、オツというのも好い言葉でございます。其の時に伽羅大尽と云う人が華美な装をして来ましたが、紫緞子の羽織を着て緋博多の帯を締め、金造りの大小を差し、紫無地の壁チヨロの深い頭巾を冠つて吉原町へ這入りまするが、何時でも取巻の二人ぐらい連れて、一本差で、立派な家来が附いて参りまするのだが、山口屋七郎右衛門方の抱え遊女音羽は、実に勝れた太夫で、彼を身受けしようとか手に入れようかと思つて、足を近しくまいりますが音羽は誠に厭やで、何うも虫が好きません、傍へ来られても慄つと致しまするから振ります。いくら来ても振つてくゝ振り抜きますが、お客は来て来て来抜き、紋日の仕舞い何やかやまで行届かし、少しも厭らしい事を云わ

ずに帰ります。音羽の方では振つて帰すのゆえ手当は能く致しまして、何んな事でも否いやとはいいません、飲めない口だがチビく酒の相手を致し、

客「花魁茶会をしようじゃないか」

音「宜うございます」

客「花月かげつをしようか」

音「宜うございます」

客「花を活けようか」

音「宜うございます」

客「碁を打とうか」

音「宜うございます」

将基と云えば将基を指すのですが、真に巧いもので、すごろく双六を振り歌を詠みます。かの伽羅大尽が筆を執つてスラ／＼と認めたしたゝ歌は「音に聞く音羽の滝のことあやも見なれぬ袖に浪のかくらん」というので、笑いながら音羽の許へ出すを受取り、しみ／＼見て、此の歌を読んで居りましたが、

音「筆を貸してくんなまし」

と色紙を取つてスラ／＼と筆を染め、

音「これは私の心わちきぎます」

と云いながら伽羅大尽へ渡すを取上げ読んで見ると「寄るべなき袖の白波打返し音羽の滝の音も愧はづかし」という返歌でございまるから、伽羅大尽は尚お惚れまして、

客「何うだ藤六^{とう}」

藤「何うも実に感服でげすな、是^{こゝ}に於て花魁の何うも……実に取^とりあへ

敢^あず即答の御返歌になるてえのは、大概の歌^{うた}詠^{よみ}でも出来んこ

とでございますのに、花魁は歌^{うた}囊^{ぶくろ}俳諧囊何んでも天^{てん}稟^{びん}備わ

った佳人^{かじん}なんで、大夫がお通いなさるも無理はないテ、何うもこ

れを花魁の前でいうと太鼓を持つようでござるが、大夫が夢中になつて通つても宜しいんで」

客「いや花魁は私^{わし}の傍へ坐つて居るのも厭だろうが、私は嫌われ

ても何ういうものか花魁の顔を見て居るだけでも心持が宜しい、

と云つて何も厭がるものを無理に枕を並べろというは野夫^{やぶ}、只氣

に入つたものと並んで居るだけでも心持が宜しいて、なア、山田」

山田「実に手前は矢張其の通りで、貴方はお嫌いかもしれませんが、男同士は是は別で、わたくし私は何んだか貴方に惚れてますよ」

客「己に貴様が惚れてるというのか」

山田「へえ、只モウ貴方の傍に斯うやって坐つてれば心持が宜いのですから、それがために何時でもお供をしてまいるわけですが……これは何うも此のお歌は花魁手前が頂戴致したいね」

音「それは真ほんに出来が悪うぎます、人に見せておくんなますな、黙つてゝくんなまし」

と云いながら立ち上り、ニヤリと笑ったなり次の間へ立ち、瀧たきの戸とという番頭新造とヒソ／＼話を致して居りますので、どうも仕方がない。伽羅大尽は来て／＼来抜くが、何うも虫が嗜すきませ

んから振るも道理、此の者は実父石川藤左衛門を みかわしまたんぼ 三河島田圃に

待受け、鉄砲にて打殺した大野惣兵衛という者でございですが、

やつはししゅうま 八橋周馬と偽名致し、伽羅大尽といわせておりますが、音

羽は幼年の時は一つ屋敷に居りましたが、大野の顔を知りませんから、近しくまいりますが、父の仇とも知りません、或時雪の降る日に碁を打って居りましたが、愛想だから態と二三目音羽が負けて対手の快いように致します。

伽「ア、勝った」

と悦んで居る処へ酒を勧めたからグツスリ酔が廻り、伽羅大尽は碁盤の上へ俯伏してスヤリ／＼と眠ってしまいました。隣座敷で番頭新造が、

番新「花魁え、おまはんは本当に感心じやアありませんか……あら伽羅さんは碁盤の上へ俯伏して寐てしまったよ、額に碁石の痕が付きますよ、おまはんは幾度遣つても伽羅さんには敵わ^{かな}ないのねえ、讐^{かたき}を取つてやんなましよ」

と云う声に驚き、ふと目を覚^{さま}しキヨロ／＼身^{あたり}辺を見廻しながら溜息を吐^つき、

伽「ア、何を」

番新「おやお目が覚めましたね、厭ですよオホ、額に碁石が二個^{ふたつ}くツついてますよ」

伽「ア、大層酔つた好^よい心持だ、肝を潰したが今何んだか讐を何んとか云つたが何んだ」

番「ナニ花魁がおまはんに二度負けたから、私が讐を討つて遣んなましと云つたんぎます」

伽「そうか……ア、少し酒を飲み過して……山田今日は帰ろう、金吾も帰ろうかな」

山田「是からですか、今晚は貴方御一泊遊ばせな」

伽「イヤ少し気分が悪いから帰ろう」

と何時になくぐず附かずに帰りましたが、脛に疵持ちや笹原を走れぬという比喩たとえの通りで、音羽の親藤左衛門を殺した身の上、若し此の事が知れはせぬかと思うからで、茶屋から番傘を借り、山田が差かけ、渡を越えて向島の土手へかゝつてまいりますと、向うから破れ切つた編笠を冠り、細竹の杖を突き、旅慣れた行こしら

装^えで、脚半甲掛も汚れて居りまする、ちら／＼と降る雪の中を杖に縋^{すが}つて来た者は稻垣小三郎でございます。

三十六

稻垣小三郎が江戸へ這入つて来ましたのは、白髭の蟠竜軒に
いる美恵比丘尼は何でも能く中^{あた}るが、別して病氣のことなどは功者
だということを聞いたから、これへ往つて我^{わが}業病の全快するか為
ないかを占^みて貰わんと、トボ／＼遣つてまいったもので、此方^{こちら}は
山田藤六が、

山田「さア／＼土手へ上りましょう」

と土手へ上る途端に突当りました。其の頃侍は威張ったもので、町人や何かを見ると無法に見下し、

山田「コレ気を附けて歩け間拔め、気を附けて歩け、無礼ものめ」
小「これは怪けしからん、私わたくしは盲人でございますから、斯みち様に路ち傍たへ附いてまいりますのに、お目の見えるお方でありながら、貴方の方から手前へ突当つて置き、彼是仰せられるは御無体かと心得ます」

山田「此奴こいつ、高慢なことをいうな」

とドンと突きましたから、小三郎はヨロ／＼と蹠よろけて泥だらけの杖を彼かの伽羅かという結構みなりな身装へ当て、泥を附けましたので、伽「コレ山田、なんだ目の悪いものを突転ぶばして、コレ見ろ」

山田「これは……怪しからん奴だ、大夫の結構な召物へ泥を附けて」

小「あなたが突飛したから私が蹠わたくしけたので、盲目めくらでございますから何どのようなことを致しましたか存じませんが、それを彼是仰しやつては困ります」

山田「此奴理窟ツぽいことを申して、盲目じやアあるまい」

小「杖を突いて歩いて居おるものを、盲目でないとお疑りなさるは御無理でございましょう」

山田「まだ理窟にせを申すか、偽盲目か改め遣る、笠を取れ」

と云いながら小三郎の冠った編笠へ手を掛け、無理に引取りひつとましたから、小三郎は輪ばかり冠ったなりで、

小「あなた何をなさるんです」

と云いながらズツと寄つて来る顔を見て、大野惣兵衛はぞつといたし、此奴己を讐と附け狙い、国表へ出立したことは先頃ほのかに丈助から聞いたが、此奴何ういう事で眼病に成ったか、内障^{そこ}眼^ひのようだが、此処で逢つたは僥倖^{さいわい}、此奴があつては枕を高く寐^ひることは出来んから、此処で討果してしまえば丈助も此方^{こつち}も安^{やす}すく々と眠られる、幸いのことだと思ひ、雪は益々降出し、日の暮方ゆえ往来は止つて居りますから、

八橋「これく盲^{めくら}人」

小「ハイ」

八「手前は盲目かも知れん、また此の者が何うしたか存ぜんけれ

ども、予が服へ斯様に泥を附けて、其の上に理窟を申し、杖を以て手向い立だてをすれば許さんぞ」

小「誰方どなた様かは存じませんが、手前は盲人でござるゆえ、誰方が側にいらつしやるか心得ません、不調法が有つたら御勘弁下すつても宜しい訳、全体侍たるものが弱いものいじめをして歩くは宜しくないこと、あまりお情ない、俄にわか盲目で感の悪いものを突つき飛ばすとはお情ない人々だ」

八「まだ口答えを致すか、此の者に何ういう事があつたか知らんけれども、手前は此れに立つて居おるのに、服へ泥を附けて置きながら彼是と無礼を申せば斬捨てゐるぞ」

小「さアお斬りなさい、これは面白い、さア斬られましょう、手

前は盲人でございますが、何咎とがもない者を無闇に斬つて済みますか、さア斬られましょう、怪しからん事を仰しやいます、罪ない者を斬るということはありますまい」

八「イヤたとい仮令盲人でも無礼があれば斬つても宜しい、許さんぞ」

と云いながらズラリと引抜く太刀の光りに、傍に居た山田藤六がびく怖りいたしまして、

山田「大夫マアお待ち下さいまし、御立腹は御尤ですが、如何にも感が悪いと見えまして、変なところをねら覗つてる様子は全く盲目に違いありませんから、お手討は余りお情ない……コレ謝まれ、全体手前が宜しくない、盲目滅法界に人さまのお身柄も分らんから無闇なことを申して、このお方は拙者の主人同様の大切なお方

だから謝まれく」

小「イエ何も謝まる訳はありません、拙者の方では何も無礼は致しません」

八「だから許さんと申すのだ」

山「でげしようが……ア、危ない、マアく全く盲人でござい
すから」

と宥^{なだ}めて居りますが、中々聴きません。

小「何をなさいます」

と云いながら古竹の杖を持つて無闇に振廻しますが、盲目^{もうもく}でこそあれ真影流の奥儀^{おくぎ}を極^{きわ}めた腕前の小三郎、寄り附かんように振廻す。

山田「コレ危ない、左様なことを致すからお手討に逢うようなことになるのだ……あなためくら盲目などを斬つて罪を作るでもございませうまい」

八「まだ手向いをするか、もう捨て置けん、斬らんで置こうか」

と云いつゝ飛込んで一ひとうち討にと小三郎へ斬り掛りました其の刃やいば

の下へ、鼠の頭巾を冠った人が這入つてまいり、小三郎を後うしろに囲いながら、

尼わたくし「私は通りがかりのものでございますが、何うか御勘弁なすつ

て下さいまし、全く盲人の様子、殊ことに感の悪いものでございます、

盲目根性と云つて、なにか剛情な事を申しまして、お詫すべごとをいたす術も心得ませんゆえ、お腹立でもございましょうが、なり代

りまして私がお詫をいたしますからどうか御勘弁を」

八「手前だちの知つて居ることじゃアない」

尼「^{わたくし}私は白髭の蟠竜軒にいる尼でございますが出家の身の上として、今斬られるということを知りました、其の儘見捨てゝ往くわけにはまいりません、人を助けるのは出家の役、全く盲人で、殊に感の悪いゆゑ^{そそ}粗忽をいたした上に、剛情なことを申して居りますから、御立腹は御尤もでございますが、どうか私にお免じ下さいまし」

と詫びる。山田藤六はどうかして斬らせたくないと思つて居るところ故悦びながら、

山田「能く中へ這入つてくれた、誠に忝^{かたじけ}ない、大夫尼が這入りま

した、此奴が剛情を張るもんだから大夫がお腹をお立ちなさるのだ、コレ尼お止め申してくれ」

八「なにも手前の知ってる事じゃないから何も云うには及ばん、何うあつても斬らんければならん」

尼「どうぞ御勘弁を」

八「御勘弁たつて勘弁相成らん」

尼「もしもお聞済みなく此の盲人を斬ると仰しやれば、出家の身の上で此の中へ這入り、左様でございますかと此の儘に身を引く事は出来ません、仕方がありませんから此の上は此の者の代りに私^{わたくし}をお斬り遊ばして下さいまし……お前さんも黙つて居れば宜いのに、返し言^{ごと}をするから先方でも御立腹なさるのです……併^{しか}あ

なた私が斯う衣の片袖を此の者へ掛ければお助けなさる筈、お武家さまだけに御存じで入らっしゃいましょうがな」

八「いらざる処へ飛んだ者が出てまいった、宜しい、出家が中へ這入ったこと故其の衣に免じて許してやるが、無礼者め以後たしなめ」

小「^{わたくし}私が何時無礼を」

尼「まアくそれはお前さんが善^よくない、然^そういう性質だから眼も悪くなる、心を静かにしないで猛り狂うと、却って逆上して眼に障る、何事も私にお任せ」

小「はいく」

山田「尼、誠に忝ない」

八「コレ盲人理窟張ったことを申すと了簡せんで、尼さツさと連れて往けく」

尼「さアくお前さん、私と一緒においで」

と是からなだれに美惠比丘尼が小三郎を連れて白髭の方へ参るのを八橋周馬が見送つて居りましたが、

八「山田」

山田「へエ」

八「白痴め何んだつて取支えて詫口なんぞを利くんだよ」

山田「ですが全くの盲人をお斬り遊ばすつて常に似合わんことを仰しやいますから、大きに驚きました」

八「手前だちは何も知らんからだ、山田少し耳を貸せ」

山田「へエ」

と耳を口元に差付け、

山田「へ、……左様でございますか……フーン成程」

とコソ／＼暫く囁ささやいて居りましたが、慾よくというものは怖いもので、度胸のない奴ですが、

山田「宜しい、それでは今晚蟠竜軒へ忍び込んで様子を伺いましょう」

と是れから二手に分れて八橋周馬は堀切の八ツ橋畠へ帰り、山田藤六は蟠竜軒へ躡つけてまいりました。此方こちらは左様の事とは知らず帰ってまいりますと、多勢おおぜいのお弟子が、

「お帰り遊ばせ／＼」

美惠比丘尼は小三郎を三疊ばかりの部屋へ通し、

尼「さア、此処へおいで、私は彼方^{あつち}へ往つて看^{かん}經^{きん}をしまつて

から緩々^{ゆるく}と話をいたしましょうが、お前さん、輕はずみな事を

なすつてはなりませんよ、お前さんに会いたがつて、毎日の様に

当寺^{うち}へお参りに来る人があるから、その話もしましょうが、ひよ

つと私が間違つて居るか知りませんが、お前さんの眼病^{ひど}を酷く心

配^{いた}して居る様子ゆえお痛^{いた}わしゆう存じます、あんな荒々しい侍に

突掛^{つっか}ると並の身体ではないから、心を柔^{やさ}しく持たんとお身を果

すことになりますよ」

小「千万忝のうござるが、如何にも無法で、木履を持ちまして私^{わたくし}

の肩を蹴つて、二度目にまた耳のところを蹴ましたから、捨て置

かれんと存じました、たとい仮令修行を致す身の上でも、かゝる下郎のために父ちうはう母の遺体を汚けがされたは如何にも心外でございます」

尼「いや皆みんなそれは約束事でよい人も零落おちぶれる事も有れば、また心掛けの善く無い人でも結構な暮しをして、日にち々のことに困らないのは前世の因縁であるから、何事も気を永くして時節の来るのを待たなければならぬ、また病も治らん事はありませんからゆつく緩りお寝なさい、明日あしたは会いたいと云う人が屹度きつと来ましょう、其の人に逢えばお前さんの身も立ちましょうからよ」

小「千万忝けない」

尼「何んぞ上げましょうか、寺だからお肴も何も無いが、温あつたかいお粥でも拵えて雑炊のようなものを上げましょう、私は穀類はい

けませんそばがきが蕎麦搔は喰べるから有りますよ」

小「誠に御眞実まことに有難う存じます」

尼「お寒かろうから、もつと火を沢山持つて来て上げな」

とはから行あんどう灯を持つて参り、夜具を貸して寝かしてくれまし

た、美恵比丘尼は居間に這入り看経を仕舞い、蕎麦搔を少し喰べ

てから薄い木綿の座布団を内ないぶつ仏の前へ敷き、足を組んで坐禅か観

んぼう法をいたし、無心になつて頻しきりと公案をして居りまするが、雪

は夜よに入り深くなりますから一際しんと致しています。其の内に

お弟子の尼達も昼の疲れと見えまして、皆スヤリ／＼と寝附く。

中にはいびき鼾の強い者もあります。すると台所口から忍び込んだ山

田藤六は、そつと縁側伝いに来まして、破れ障子から覗いて見て、

障子越しに長物ながもので突殺せば、大野惣兵衛から五十両褒美をくれるといふので、慾張った奴で、劍術は少し心得ておりますが、至つて臆病者でございます、怖こわ々／＼様子を覗うかがいますと、小三郎は何を思いましたか不図起き上り、旅荷を引寄せ、合切囊の中から取り出して、大野惣兵衛の冠った頭巾と、傍かたわらには國俊くにとしの木劍造りの小脇差を置きまして、小さい位牌うやくを恭しく飾り、実父稻垣小左衛門が最後のときに握りつめたる仇かたきの頭巾を手探りで前へ置き、慇懃に両手を突き、

小「ア、残念でございます、お父さまとつ誠に残念でございます、小三郎薄命にして斯かる眼病に相成り、御尊父の妄執を晴らす事もお刀の詮議をいたすことも此もうもくの盲目では思いもよらず、又大野惣兵

衛しゅつかいに出会いたす時あるとも、
 一ひと刀なたとて怨むこともかなわぬと
 は、神仏にも見離されしか、
 斯かくの如き尾羽打ち枯した身の上にな
 り、殊に盲目の哀しさには、
 口惜くちおしくも匹夫ひつぷ下郎の泥脛どろすねに木履
 を持つて」

と云いかけて身をふるわせ、

小「足下そつかにかけられ、如何にも残念に心得ます、御両親より受け
 ました遺体を汚けがせし不孝の罪、いかに盲目なればとて口惜くちおしながら
 手出しも出来ず、此の儘に何時まで長らえ居りまして、素もとより
 稻垣の家を興す認めはござらん、生甲斐のない我が身の果、死す
 る時に死せざれば死に勝るの恥あり慙なまじいに生恥をかい、て稻垣の苗
 字を絶たやし、殿さまの御家名を汚します不孝不忠の小三郎、只今此

の処において切腹いたし相果てまする、場所も幸い尼寺、仮令仇は打ち得ずとも、悪人大野惣兵衛を組み敷いて首を掻き取ります心得で、只今この黒羅紗の頭巾を突き破り、惣兵衛の首を掻取り、直様此の場で切腹いたし、草場へ参つた其の上で本意を遂げざるお詫をいたします、あゝ残念でございます」

といいながら、かの黒羅紗の頭巾を左の手に握り詰め、片膝へ敷据えて、右の手にて木剣作りの小脇差を引抜き、十分の怒を面に表わし、見えぬ眼にて黒羅紗の頭巾を睨みつけながら、

小「吾身不肖にして本懷を遂げずとも、秦の豫讓の故事に擬らえ、この頭巾を突き破るは実父の仇大野の首を掻き取る心思い知れや、大野惣兵衛」

と彼の頭巾をズタ／＼に突き破り、國俊の小脇差を持ち直して我腹^{わが}へ突立てようとする処へ、何時か忍び込んだ山田藤六が障子越しに、小三郎を突殺そうと覗^ねつておりますが、山田藤六が突かなくつても当人は腹を切るの、当人が腹を切らなくても、後^{うしろ}に突殺す奴が来て居るから、稲垣小三郎の生命^{いのち}の助かりようは御座いません。

三十七

只今美恵比丘尼が坐禅觀法中、稲垣小三郎が自殺をしようとするところへ、山田藤六が忍び込んで、これを刺殺^{さしころ}そうといたし

ます。夜はしんくくと更け渡り、雪は益々降りしきる。北窓に当る雪折竹の音サラくくと聞えまするが、物音の思うように聞えんのは、余念が有るゆえに音を聞分けることが出来ませんので、草葉ですだく虫には種々有りまするが一緒に啼いて居りますと、何れが鈴虫か、松虫か、機織か、草雲雀か、とんと分りませんけれども、余念を去つて沈着いて聞きますと分りますから、年を老つた人が夜中に蟻の這うのも分るといふは、心が据つておりますると、細かい物でも真の闇に見えるという、これを心眼と申しまして、精神が沈着いて無心になれば何でも速かに分りまするものと見えます。雪の降るのを聞いて居て、今何れだけ積つたというのも分るそうでございます。美恵比丘尼は能く分

ると見えまして、坐禪中に小三郎の自殺しようとするのも、山田藤六が後から小三郎を突き殺そうとして居ることも、隣座敷に居りながらちやんと見るが如く分ると見えます。今藤六が障子越しに突込み^{つきこ}に掛る途端に大喝^{だいかつ}一声^{いっせい}で、

尼「喝^{かア}ー」

と云いました。死したるものゝ吐くを死喝^{しかつ}といい、生きたるものが吐くを生喝^{しょうかつ}という。この大喝一声は実に天地へ響く大声^{たいせい}でございまして、ガーと云ったときには氣の弱いものは胆^{きも}を挫^{ひし}がれます。獅子出^{いで}て吼^ほゆる時は百獸腦裂すというて、王獸^{おうく}が怒^{いか}つて吼える時は小さい獸の頭が砕けるといふぐらひでございまして、と比喻^{たとえ}にも申しますことで、釋迦^{しや}がいう事は羅漢でさえも腦裂す

るくらいの力が有ったといひます。今只た一たつ言ひとこと美惠比丘尼の

「ガーツ」という一喝が山田藤六の耳へ響きますると、パタリと尻餅を搗ついて氣絶致しました。と云うと嘘のようですが必ず氣絶するということです。稻垣小三郎は劍術も上手で胆力の据った人だが、耳元を突き透した一声に思わず知らず國俊の小脇差を取落したところへ、美惠比丘尼が小さい鉄くろがねの如意を持って出て参り、小三郎に向い、

美惠「まア何ういうもので其様そんな心得違いをなさるのじゃ、そんな事をするといけなから私がくれ／＼云つたのだ」

小「お道場を汚けがそうといたし誠に相済みませんが、生甲斐のない此の身の上、強しいてながらえて居りますれば家名を汚し、主名を

辱かしめ、実に此の上ない大罪、何卒お見遁なにとぞし下すって、御当庵にて自殺いたし相果てますれば、手前幸いの死しにどころ 処でございませう」

美恵「いや、いくら死にたいと云つて腹へ刀を突込んでも、死ぬ時節が来なければ死なれんものじゃ、また死ぬ時節が来れば何程助かりたいと思つても助かることは出来んものじゃから、慌てゝ死のうとするは迷いじゃ、宜くない思いちがいじゃゆえ、まアノ脇差をお渡し」

と無理に取上げ、後うしろを振向き、

美恵「知行ちこうや、妙桂や、出ておいで、泥坊が這入ったよ、戸締りを宜くして置かないからだ、妙達みょうたつや、宗榮そうえいや」

なかと呼びましたから、お比丘さん達が皆出みんなて来て見ますと、
拔身ほうしんを投げ出し、板の間の処に眼を廻して居りまするものがあり
ますから、

知「何うしてマア此処へ賊が這入りましたろう」

妙「拔身を持って居ますよ」

宗「腰にもまだ差して居ります」

美恵「そっくり其の儘グル／＼巻にして藪の中へ投げ出してしま
いな、また這入るといかんから」

とはから多勢おおぜい寄つて集つてたか藤六を縛つて外へ突出しましたが、

藤六は終夜凍よつびてえるような目に逢いました、此方こちらは美恵比丘尼が
頻しきりに小三郎の死を止めてとゞ居りまする内に、夜よも明け渡し、翌日

になりますと、雪の明日あしたゆえ快晴でございます。巳刻よつ半時分に参詣に來ましたのは高橋に居りまする梨売重助で、図らず小三郎に巡り逢い、

重「あなたはお情ない、何故なげ私の処をお尋ね下さいません、仙太郎親方も万年町の旦那さまも貴方の事ばかり申してお案じ遊どばして在いつしやいますから、兎も角わたくし私の処まで入いつしやいまし、何どの様な事でもお力になりましょう、あなたが輕はずみな事をなすつて下さいますと、跡のものゝ嘆なげは如何ばかりか知れません、兎も角も」

と云うので蟠竜軒を連れ出し、高橋の宅うちへ歸つてまいり、急に仙太郎や万年町の主人を迎いにやりましたから、皆みんなな來まして驚

き、情ない御眼病で有る、兎も角もお世話を致しましょう、と其の頃の名医を頼んで段々と手当を致しました処が、お医者云うには、ナニ丹誠したら治らんことも有るまいが、余程逆上をして居るし、殊に悪い血が有るが、手当をして見ようと云うので、岡本政七が私の宅へ引取つて何の様にもお世話をしようと云えば、仙太郎が傍から斯ういう旦那ゆえ、お嬢さんやお母さんがちやほやすると御心配でもなさるといけないから、却つて別にお家を持たして上げる方が気兼ねなくつて宜かろうと云うので、方々探すと、深川扇町に明家が有りましたから、此家へ小三郎を移らせ、雇い女を一人附けて気楽に暮させ、使い早間には何うせ遊んでゐるからと安吉を附けて置き、政七も仙太郎も重三郎も折々来

ては、小三郎の心を慰めることを申しますが、小三郎は只々鬱ふさいで居まして、何時までも厄介に成つて居るは氣の毒だと云つて、何にも商売は知らんが、少々は指田流の笛を吹くから、習いに來るものが有るなら教えてやりたいと云うので、門口へ指田流の標ひようさつ

札を掛けて一節切の指南を始めましたが、品の善いい芸は習う人は稀でございます。たま／＼木場辺あたりの子供衆しゅが二人三人まいります。が、これを相手にして居ると、お嬢さんが稽古にまいります。るので、奉公人が多勢附いてまいりますから、月々可なりに手当をしてくれるゆえ、大きに小遣取りになります。其の年も果て、翌延享三年二月二十九日の晩に、浅草馬道うまみちから出火いたし、吉原へ飛火とびひがしました。或あるは飛火がしたのではない、吉原からも

出たのだと申します。此の火事で吉原が類焼したために、深川に
仮宅が出来ましたから、深川の賑にぎわいは実に大したことで、小さい
女郎屋は馬道山谷へん辺の船宿の二階などを借りて、立退たちのきちゆう中稼がが
せて居ります。其の頃評判の遊女屋山口七郎右衛門の仮宅は深
川なかつちよう仲町で、大した繁昌でございます。仮宅の時には好よい花魁
を買えることが有ります。只今と違って昔は尚おゴタこぞく挙こぞつ
てまいり、名高い花魁を買って見たいと、身分の無いものは悪才わる
覚をして山口屋へ登あがりまするが、立退中ゆえ万事届きませんど
さくさして居ります。

客「何うしやアがつたんでえ、若わえ衆しゆ」
と無闇に手ばかり叩く。

若「へい〜」

客「オ、若え衆」

若「へい〜」

客「返事ばかりしてえやアがる、冗談じゃアねえぜ、オイ若え衆、
こつち此方へ這入んねえよ」

若「へい」

と障子を明けてお辞儀をする。

客「其処じゃア話が出来ねえから此方へ這入んねえ」

若「へい」

と首を擡あげて恟びつくり致し、

若「旦那悪戯わるいたずらをなすつては困ります、畳を残らず揚げて段々

積み重ねちまつて、其の上に乗ってらっしって何う致したんでございます」

客「オ、若え衆、少しものをなくしたから畳を残らず揚げて見たが知れねえから、これから天井板を引剥ひっぺがして探して見ようかと思うから、踏台か何か持つて来てくれ」

若「ヘイ、何なか紛失なくなりましたか」

客「まア此方こなたへ這入はいんねえ」

若「でも這入はいられません」

客「足の親指で爪立はつて這入はいんねえ」

若「ヘイ」

と中へ這入りながら、

若「何が紛失なくなりましたか知りませんが、斯んな悪戯わるいたずらをなすつてはいけません」

客「先刻さつきの、番頭新造が花魁を一寸ちよつと連れて来たかと思うと、直すぐに居なくなつちまつたんだが、慥たしかに此処へ這入へえつたのに違ちがえねえものが居なくなつて見れば、この座敷は己が借りたもの、此処の主人が大金を出して抱えた花魁なら、大切な預り物よ、それが紛失なつては己が済まねえから、畳を揚げたり天井板を引剥ひっぺがして探そうというのが分らねえか、此処に小さい箆笥ひらこが有るから引出まで明けて探したが、何にも無なえ様だ」

若「御冗談を仰しやつては困りますナ、女郎衆しゅは継針つぎはりや二朱金では有りませんから、ピヨコ／＼畳の間に隠れることはありません

んのに、煤掃すすはきでも始まったような事をなすつては困ります、ホ

ンの立退中の仮宅でございますから行届ゆきとどきません勝でしょう、

此の通りゴタ／＼して居りますのに、悪戯わるふざけをなすつては困ります、

好よい花魁わたくしは私どもの自由にはなりませんので、ヘエ」

客「篋棒奴べらぼうめ、出されねえものなら何で客にして上げたのだ」

若「でございますが、好い花魁になりますとお初会の処は大概お座敷限ぎりで」

客「生意気なことをいうな、仲の町の茶屋で顔を見て座敷限けえで帰るくれえな事は知ってるが、立退中だつて斯うちんな宅を借りていやがッて、座敷もねえもんだ、物置き見たようなものだから叩こわつ毀こわしても宜いいんだ、何うせ銭の有る人間じゃアねえから、足を近く

来るのではねえや、大層な花魁だてえそうと名高いから、斯ういう時でなけりや会う事は出来ねえと思つて、態々わざと来たんだのに、早く出さねえと殴るぞ」

若「乱暴でげすな、お殴りは困ります、ハイ、もう今にお出でございましょうが、花魁は御病身でげすから、お癪が痛くなることが折々有りますから、ハイ」

客「なんだ、お癪が痛くなると、ヘン篋棒め、手前てめえじゃア分らねえから、もう少し訳の分る奴をよこせ」

若「別に分るものは居ないので」

客「手前てめえより些ちつとは分るものが有るだろう」

若「些とぐらい私わたくしより分るものは居りまする」

客「分るものが有るなら其の分るものをよこせ」

若「ひけすぎ丑刻過はねずのぼん不寝番の係でしんすけ新助の係りではございませんから

わたくし私の係りになります」

客「丑刻過は不寝番の係ぐれえの事は知ってらア、吉原の事を知らねえ人間だと思ふのかえ、おつウ指図がましい、教えるような変なことを云やアがるが、吉原の作法を知ってるか」

若「吉原に奉公致して居りますから大概の事は存じて居ります」

客「それじゃア吉原町は以前は何処に在あったか手前てめえ知ってるか、

昔慶長年中の相州の浪人でしようじんえもん莊司甚右衛門というものが願つて、遊

女三千人の御免の場所をたてお建置かれる事になつたが、其の前は常ときわ

磐はし橋御門からどうさんばし道三橋の近辺をやなぎまち柳町ばしといつて、又鎌倉河岸

に十四五軒あつて、麴こうじまち町にもあり、方々に散ちらばつて居たのを、
 今の吉原へ一ひとまと纏まとめにしたので、吉原というのは、其の頃葭よしあし葦あし
 の生へえて居たのを埋うめた立つたから葭よし原わらというのだが、後に江戸繁
 昌を祝して吉よしの字を書いて、吉原と読ませるんだという事を聞い
 てるが、一いってえ体てえは花魁めえに大層な装をさせては済むわけのもので
 はねえのに、朝飯前めえには持上らねえような帯を締めて、大層な装
 なんぞしては済むめえ、総縫金銀摺箔そうぬい きんぎんすり はくい せつき一切着せ申間もうすまじく
 という旧時もとの願たてい立とお触ふれ出しのお書付に違つてゐるんだ」
 若「誠に何うも心得ませんで、へい」

三十八

客「何にも面倒なことをいうのじゃアねえ、花魁に会わせりやア
宜いんだ、己ア伊皿子台町の者で、遠い処から来たものだから思
いやれよ、手前の面は乙ウ青いなア」

若「へえ病身でげすから」

客「何か宜い薬でも飲んで身体をしつかりしねえ、厭にブテく
肥つてやアがるナ、青脹れだな」

若「どうでもようございます」

客「只花魁の身の上が聞きてえのだから、早く呼んで来てくれ」

若「中々私などの手には乗りません花魁で、何か申しても返事も
致しません、主人が言葉を掛けてもいいけませんくらいなので、へ

エ、私は花魁方に使われて居る身の上でございますから」

客「こん畜ちきしよう生殴るぞ、腕がリュウ／＼鳴るぜ」

若「腕なぞを鳴らしては困ります」

客「能く主人に然そう云つてくれ、これっ限きりしか来ねえお客と見く

びつてゐるだろうが、己は花魁が来ても床いそぎのじん助とは違ふ

から、やぼを云うのじゃアねえや、山口屋の音羽と云つちやア名

高い花魁で、大したものだ、亭主のために身を売つたというから、

其の身の上話を聞きてえと思つて来たんだから、一ちよつと寸会わせろ」

若「へい、只今直じきに、少々立込んで居りますから、明あけがた方まで

にはお廻りになりましょう」

客「お神輿みこしでも待ちやアしめえし、お廻りになるつてやアがる、

殴るよ本当に、仲どんは止めちまや、可愛相に青脹れで、頭髪を
剃^すツちまいねえ、衣の勸化^{かんげ}ぐれえはしてやらア」

若「へ、何れ^{いず}また」

と云い捨て、往^ゆきました。

客「オイ冗談じゃアねえぜ、オイ、逃げてしまやアがった」

するとまた隣座敷で、

客「若い衆^{しゅ}さん、ちよいと若い衆さん、其処をお通りかえ、若い
衆さん、ちよつと御尊顔を拝したいね、あなた」

若「へエ、これは何うもお淋しゆうございましょう、生憎^{あいにく}立込
みまして、花魁は只今じきおいでになりましたよう」

客「成程明方までにはお廻りに成りましたようから、それまで目を

覺^{さま}して待つてましよう、あなたは青くはありせんね」

若「お隣ずからで聞いて居らッしやつて、おひやかしなすつては困ります」

客「誠に弱ったね、何か隣の真似をするじゃアないが、我々共が花魁^{だっ}を買い上げて、抱こして寐^だんね仕ようと云つちやア些^ちと増長した申し分だから、然うは云わないが、只花魁に一寸会つて見たいので、歌を詠んだり碁を打ったり、花を活けたりして高尚ということを聞いたが、だん／＼聞けば劍術の先生のお嬢さんだとか、お屋敷さんだとかいうことだが、何ういうわけで斯んな苦界へ沈んだかと御様子が聞きたくつて来たんで、決して何うしようの斯う^し為ようのという訳ではありませんが、隣でバタ／＼畳を揚

げるといので、何分にも寝られません、あの騒ぎですものを」
若「へい、誠に御迷惑な訳で、まるで煤掃すすはき見たようで、畳を積み揚げて、御丁寧に其の上に布団を敷いて坐ってるんですぜ、天井へ頭が支つかえて居りますので、誠に驚きました」

客「あゝ云うものを相手にして無理なことを云われゝば、誰だつて虫があるから、何を云やアがる、手前てめえばかりがお客じやアねえと突掛つつかりたいとこだが、青脹れといわれても何といわれても逆らわずに居て、気の折れてるところは実に感服しやした、恐れ入りやした、これは何うしてなか／＼苦勞をしなければ出来ないわけだが、お前さんも余よっぽど程苦勞をしたね、やつぱり道樂のあげく、親兄弟に見放され、抛よんどころなく斯んな処へ這入ったのでげしよう、お

前さんがまだね息子株の時分に、様子の好い花魁のそこへ足を近く通つた末に、花魁に乙な臭いが有つたところから病を引受けたんでげしよう其の何うも青く白いのは、種々いろくなことを御存じでしよう、親がやかましくつて勘当をされ、親類には見放され、抛なく斯んな処へ這入つて、濡雑巾を握つかんで板の間を這つてゝ、番頭新造や何かゞ我儘をいうことを聞いてるような身になりさがつたのでしよう、女のために責め殺されて死にたいという念が有りましょう、お前さんはそれが願いでしよう」

若「へゝゝゝなに願いと云うわけではありませんが」

客「何でもお前さんは沢山遊たんとんだ人に違いない、さん／＼親不孝をした揚句、斯ういう処へ這入つたんでしよう」

若「へ、へ、へ」

客「然うでしょう、少し声がしやがれてるし、一いつちゆうぶし中節を習やつ

たろう、あのーなにを唄ったろう……あれは端物はものだがいゝねえ、
はなぶさよう え きかく さん

英一蝶の画に其角が贅をしたという、吉田の兼好法師の作の徒然
草を」

若「へえ何方どちらさまで」

客「お耄とぼけでない、唄ったよ、お前が撥ばちを持つて、花魁の三味線
でお前が変な声を出して唄ったという噂が残ってるよ」

若「御冗談ばかり仰しやいます」

客「何うもお前は本当に苦勞をした人に違いないが、お前が客で
遊びに来る時分には、女郎衆そばが傍に居た方が宜よいか居ない方が宜い

いか、何方が心持が宜かつたえ」

若「へいく」

と頭を搔き、

若「真綿で首を締めるように仰しやいましては困ります」

客「只ちよつと花魁にお目にかゝれば宜い^いんで、私は伊皿子^{わたくし}台町
じやアありませんよ、深川万年町の先でございます」

若「へいく」

と云い捨てゝ出て往^ゆき、

若「花魁エく」

音羽は次の薄暗い座敷で丈助に向い、

音「丈助どん能く来なました」

丈「其の後は存外御無沙汰を致しましたが、只々お案じ申し上げるのみでございますが、何分お音信たよりさえも出来ませんと、若旦那さまも、あなたさまの事をお案じ申し上げ、日々あなたさまのお噂ばかりでございます、此の度はまた吉原町御類焼のことを承わり、お怪我がなければ宜よいがとお案じでございますが、若旦那が色里へお這入りなさる事も出来ませんゆえ、早く往つて様子を見て来いと申し付けられ、吉原へ往つて見ますと、焼跡のみで分りませんから、段々聞きましたれば、当所こちらへお立退きに成つたということを承とりわりましたから、取敢とりあえず罷まかり出しました」

音「そう、私も毎日神信心をして若旦那の事ばかりお案じ申してお刀がお手に這入ったら、もうお屋敷へお帰りになりそうなもの

だと思つて居りますよ」

丈「へい、それが又あなた悪者に欺だまされてお刀を持つて往いかれ、

永い間旅で御苦労をなさいました」

音「若旦那は嘸さぞ御難儀、それにお前方も共々難儀をしたろうね」

丈「悪者のために欺かされましたが、漸くの事でお刀はお手に這入りました、それには種々手蔓をもつていたしましたから、其の方へ遣つかいもの物や、何や彼かやで沢山物も掛りました、永い間あのお

刀ゆえ若旦那の御辛苦というものは一通りでは御座いませんでしたが、急に当廿日までに芝のお屋敷へ御帰参に極りました」

音「それはまア嬉しい事で、私わつしはそればかり案じて居りましたが、

それはまア何よりの事で、それに勇助は達者で居りますか」

丈「へい……勇助さんも永い間の旅で、年齢としが年齢でございました、私わたくしと違ひ大層苦勞をなすつたので大きに衰えました、お嬢さまにお目に懸りたいが、此の頃は持病の疝氣で腰もたゝず、そう致すことも出来んから宜しゅう申し上げてくれろとの事でございました」

音「勇助はドツと寝ているか……それで能く来なましたね」

丈「就きまして只今では高輪たかなわ八ツ山の前にお漁りようなどに往らした時分、お馴染の船宿の二階を借りて居らっしゃいまして、御歸

参のお支度にかゝつて居りますが、故郷へは錦を飾れの比喩たとえゆえ、

切せめてはお歸りの時には立派にしたいと若旦那さまも仰しやいまするし、私共もお立派になつてお歸りになるように致したいと存

じまする、それに差支えますると云うは、明後日渡邊外記さまに
 お目に懸らなければなりませんから、お上かみしも下でお召も御紋附に
 致し、お大小の処もあゝいう訳で、お脇差一本でお出向きに成り
 ましたのですから何やら彼かやら差支えまするので、至急金子百兩
 入用に付いては、勤めの中へ再度無心をいたし、苦勞を掛けて済
 まんが、他たに何うも頼み入れる処もないからと仰しやつてで、其
 の代りお屋敷へ歸参すれば直すぐにお身受に成つて、御重役様が媒なこう
 人どで芽出度く夫婦になるので、これは小三郎さまからの御書面
 でございます」

と懷から手紙を出して音羽に渡し、

丈「右の訳ゆえ誠に恐れ入りますが、今晚うちの中に金子百兩だけ御

才覚を願いますよう、丈助も若旦那さまに成り代つて共々にお願
い申します」

音「あい、然うございますか」

と云いながら文を取上げて封を押切り、読んで見ますると、女
房に手を下げて頼むが如き文面で、何うしても丈助の企たくみとは、
是れまでも欺むかれて居りましたゆえ知らぬも道理でございます。
其の文中に何う有つても今晚中に百両の金子が無ければ、明後日
渡邊外記に面会する事が出来ん、如何に尾羽打ち枯すとも斯かる見
苦みなりしき身装で重役に対面もならず、屋敷の聞えも宜しく有るまい、
殊にお刀を渡邊外記へ渡して、殿様へ御覧に入れるのも、何かと
何うも今の処では不都合で有り、また家来共にもそれ／＼身装

の手当もせんければならんが、屋敷へ帰れば直に才覚すぐしてお前の身受をいたすから、何うぞ百両の金を調こしらえて丈助に渡してくれろと云う文面ゆえ、貞実の音羽でございますから、

音「心配しますな、何うか私わっしが才覚をしようから待つて居てくんなまし、大引おおびけ過おまでには何うかして見ましょう」

丈「いえ明けまで宜しいのでございます」

音「少し待つて居なまし」

と立上り、此の席を出て自分の座敷へ来まして、次の間の方へ番頭新造を呼んで相談致しましたが、音羽の許もとへ来る客は有りますけれども、二回うら目の返ためた例がないから無心をいう人があります、せんが、此の番頭新造は親切ものゆえ、種々心配いたし、

番新「花魁無理だよ、能く考えて見なまし、おまはんは別に取り留めたお客もないのに、此の類焼やけの中で又してもくそうく内ないしょはなし所へ談をした処が、おまはんが年季を増したのも幾度いくたびだか知れない、亭主のためとは云いながら、丈助さんの来る度たんびにチビノ上げたのも巨おおきい事じゃアないか、今度また急に百両、おいそらと云つても、斯んな立退中ぎますもの、碌なお客はありやアしまへん、あんな乱暴もんの畳を揚げたり、布団を脊負しよつたり、廊下を駈けたりする奴ばかり来るんざいますものをそんなお客を相手にしたつても仕方がないじゃア有りまへんか」

音「何かどうして工夫を」

番新「エ、それだつて内所へは云えないもの……」

と暫く考えて居りましたが、やがて何かうなずきました。

三十九

番新「一人ねお金を沢山持たんとっている客人があるのざんすよ、先刻さつぎ私わつしがねお召を着替なましって広袖どてらへ浴衣を重ねて貸したのさ、初会客だが、目の悪い二十五六の好よい男の、品の好いい人だが、初めて斯んな処へ来て様子を知らんから何分頼むよと云うから、今花魁そに然そう云いますが、着物を畳んで置くから出しましと云ったら、斯んな汚よごい着物だから畳まなくつても宜よいと云うのを、無理に取って寝巻と着替えさせると、お酒は飲めないと云うから甘味

を出して遣つたら、斯んな甘いお菓子まで手当をされて斯んな嬉しいことはないが、音羽の身の上は何ういうものか聞きたいと云うから、花魁はお屋敷さんのお嬢さんですが、種々訳があつて亭主同様の人のために苦界に沈んでるんざいますと云つたら、能く然う云つておくれ、亭主のために斯んな辛い思いをしていることを、其の亭主が聞いたら嘸悦び、金があれば直に身受をするだらうつて、お前さんのことを思いやつて涙ぐんで居たが、本当に可愛相だアね、其の人が着物を着替る時に、紺縮緬の胴巻がバタリと落ちたら慌て、匿すから、私ア取りやアしないつたら、ニヤリと笑^{わらいがお}顔をして居たが、彼は何んでもお金をボツ／＼虎の子の様に貯めたに違いないでしょうが、あの目の悪い客衆が百兩

ぐらいお金を持つてゐるようですから、彼れあが馴染あの客ならどうでもなるがねえ」

音「無心を云つて見てくんなましょ」

番新「でも私わつしには無心は云えないわ、馴染あんななりでも何でもない人だし、誠に彼様装あんななりをして、一生懸命にチビく貯めて持つてゐるんですから、貸せなんぞと云つたら肝を潰して見えない眼でもまわすといけないからさ、無駄だよ、斯んな好いいお茶や甘味を食べたことはないと云うくらいだからいけまへんが、花魁無駄として、おまはん無心を云つて見なましな」

音「それく中橋なかばしの繁しげさんが来ていると云うじゃアないか」

番新「あの人は色男がつて、好いい装なりをして、持物に凝つてゝお金

の有る振をしていて、お金は持っていないが、私は繁はんの処へ往わつしつて機嫌を取つて来るから、おまはん彼の目の悪い人の処へ往つて、気休めの一言も云つてやんなましょ、宜うございますか」

と瀧の戸という番頭新造は出て往きました。後で音羽が箆笥あとの引出から出しましたは嗜みの合口でございます。其の内に引過ひけすぎに成りましたから、禿も壁に寄り掛つて居寝りを致して居ります。音羽はそツと行灯あんどうの許へ来て鞘を払つて合口を見ますと、錆も出ない様子ゆえ鞘に納めて懷へ匿し、

音「どうも亭主の為には替えられない、こんな苦界へ沈んだのも稲垣様ゆえ、その稲垣さまが百両のお金が無ければ一生埋木うもれぎになつて朽ち果てると、よく／＼なればこそ女房の私に手を突いて

頼むような此のお文を見ては此の儘に捨て、置く事は出来ない、
 ふりに登^{あが}ったお客なれどもお金をたんと持つて居るとの事、目の
 悪い客衆に会い、私の無心を諾^きいて下さるか、若^もし否^{いや}と云わば仕
 方がないから其の目の悪い客衆を刺^{さし}殺^{ころ}して百両のお金を奪^とつて
 丈助に渡し、若旦那さえ世に出れば私は縄に掛^げつて解^げ死人^{しにん}に立と
 うとも、私の身は何う成ろうとも、何うか若旦那の世に出るよう
 に」

と良人^{おとと}を思^{おも}う一^ず図^い意^いに屏風の許まで忍んで来ましたが、屏風の
 中に居る目の悪いお客と云うは即ち稻垣小三郎で、深川扇町に居
 りまするが、山口屋の抱え遊女音羽というものは、浅草田原町に
 町道場を出して居た石川という剣術遣いの娘だが、許嫁の亭主の

ために身を売つて、他たの客には肌を触れんという名高い花魁だ、
度々たびぐ無心に来る毎ごとに良人に金を送るとは貞実な者だという噂を
聞いたが、石川の娘で許嫁といえわしば私より他ほかに無い筈だが、幼年
の折に別れて顔かおかたち貌を知らぬに付け込んで何者かに欺むかれ、
斯かる苦界に沈んで居るとは如何にも不憫、盲目の身で会つても益
ないが、何うかして此の金をやりたいというので、渡邊外記から
餞別に貰つた百両を包み、重三郎に頼み、ちゃんと自分の名を書
いて渡そうと思つて登あがつたのでございますから、早く打明ければ
宜よかつたのに、それ程私を思う石川の娘おみゑに、私が稻垣小三
郎と云えば、斯様に盲人に成つた姿を見たら嘸嘆くことだらうか
ら、今晚は帰る方が宜しいと、百両の金をそつと寝巻くるに包んで、

コソ／＼帰ろうと致しまする処へ、音羽が合口を持って、良人のために此の客衆を殺そうと思い、一生懸命に怖こわ々／＼ながら屏風を明けて中へ這入り、稻垣小三郎を殺そうと致しまして、嗜みの合口を取出し、鞘を払って行灯の許へ来て見ると、まだ錆なりも出ぬ様子ゆえ、ピタリと鞘に納めて懷へ入れ、部屋着の服で屏風の許へ来て立つて居りました。情ないことには互に顔を知りませんから、亭主の為に亭主を殺しにかゝりましたので、実に小三郎の身の上は危うい事でございます。すると次の間に立つて居りましたのは番頭新造の瀧の戸で、

番新「花魁工」

音「あい……びっく悔ひくりしたんざます」

番「ちよいと此処へ来なまし、まア沈着おちついて其処へ坐つてくんなましよ」

音「あい、おまはんは中橋さんの方へ往つたんじやア有りませんか、何うして此処に居なましたの」

番新「少し気になることが有るから歸つて来たんぎますが、花魁今おまはんが懷から脇差見たようなものを出して、行灯の前で、こう鞘を払つて、おまはんが見て居たのを、私わっしは何をしなますかと思つて、廊下の障子を明け掛けたが、怖いから立つて見て居たんぎますが、おまはんそんなものを懷へ入れて往くいからには、彼あの屏風の中の客衆を殺す気なんぎますか」

音「静かにしなましよ」

番新「沈着いてくんなましよ、能く考えて見なまし、おまはんは
 小三こささんの事というと氣違のようになりますが、あの目の悪い客
 衆を殺せば、たとい仮令小三さんが世に出ればとて、人を殺しちやア斯
 う遣つて居る事は出来まへん、解死人に立たなければなりません
 い、能く考えて見なまし、亭主のために苦勞をして、幾ら添いた
 いからと云つても、人を殺しちやア小三郎さんと添えることは出
 来ないじやアありませんか、あとさき後先見ずの無分別なことをしてく
 んなます、のぼ逆せ上がつて仕舞うんざますよ、本当に馬鹿らしいじ
 やアありませんか、しっかりと沈着きなましよ」

といわれて音羽は沈着きはらい、言葉静かに、

音「瀧の戸はん、能く考えて見なまし、何んわっしば私が悪党でも、眼

の悪い客衆を刃物三昧して殺そうというような恐ろしい心は有り
まへんよ、ふりに登^{あが}った客衆ゆえ無心を云つてもお金を貸しては
くれまいから、若し貸さないと云つたら、今夜に迫^{とて}る手詰^{てづめ}の金、
迎も生きては居られないから自害をすると欺^{だま}かして、無心を云つ
て見ようかと思うんざます」

番新「いえ、嘘を吐きなまし、そんなことを云つても、おまはん
の顔色が異^{ちが}つてるよ」

音「後生お願いだから、そんな大きな声でいうと客衆に聞えるか
ら静かにしてくんなましよ」

番新「聞えるたって、あの茫然^{ぼうとう}として居る柔^{やさ}しい人で、お酒が嫌
いだいうから、甘味でお茶でも飲んで、呉^{あいに}なまし、生憎^{にく}お

客が立込んで花魁もおまはんに煙草一服吸い附けて飲ませる間もないのだから、腹ア立つか知りまへんが、是に懲りずに又来てくんなましよと云つたら、少しも厭らしい甚じんすけ助らしい事をいわないで、今日ふりに来たのは只花魁の名高いことを聞いて来たのだが、花魁の身の上が聞きたい、以前はお屋敷さんだろうと聞くから、私ははつきり知りまへんが、種々いろく訳があつて斯んな所へ来ているんざいます、その許嫁の亭主の為にといひ掛けると、下を向いて考えてたくらい可愛相あなんざいますよ、彼の人を殺す……」

音「シツ……静かにして呉んなましよ、私は人を殺すわつしなんという事はありません」

とコソ／＼話をして居りましたが、幾ら小声でいっても大引近おおびけ

い頃ゆえ手に取るように屏風の中へ聞えましたから、小三郎は驚きまして、

小「此処に居ると殺される、私を小三郎と知らずに殺す心になる

も、何者かに欺されて、私のために私を殺そうという音羽の真実、

寧ろ私が小三郎だと名告ろうか……イヤ／＼愁じいに打明けて身

の上を話したら、是程までに思ってくれる音羽ゆえ、私が俄盲

目に成り、笛を吹いて修行をする身の上に零落れ果てたと聞い

たら、嘸嘆く事で有ろうから、身の上を明かさずに帰る方が宜か

ろう、就いては渡邊外記から餞別として貰った此の百両、盲目に

在って益ない金ゆえ、良人のために苦勞する音羽にやりたい」

と思ひ、重三郎に頼んで上書まで致して有る包金を胴巻

からこき出して、そつと寝衣ねまきにくるみ、帯を締直して屏風の中から出ながら、

「私わしは帰るからね、其処みちゆきぶりらに道行振が有ろうから取っておくれ」

番新「アツ、ア、出て来たよ、……お願いします後生だから沈着いてゝくんまし」

といい捨て小三郎の傍そばへ参り、

番新「今漸く花魁が来しましたの、今お茶を入れて何か甘味を取りますから緩ゆるくり遊ゆんでいって呉くんなましな」

小「私わしは此処こに居おられん用事が有ったのを頼と忘れて居たが、今思ひ出したから直すぐに帰ります、それから彼処あそこへ寝衣ねまきを円まるめて置きました、あれを能く振ってね、だいなしに成って居るだろうか

ら、振^{ふる}つて見れば分るけれども、大方皺クチャに成つて居ようから、能く畳んで置いておくんなさい」

番新「少し話が有るから待ちなましよ、おまはんは沈着いて呉んなましよ」

音「若しえ、おまはん生憎今夜はお客が立込んでお話もできず居たんざますが、漸^{よう}々今客衆^{みん}も皆な歸つたから、まア／＼緩くり話でもしましうから、待ちなましよ」

小「イヤ／＼今夜は是非歸らんければならんが、四五日内にまた尋ねて来ますから、お前、身の上を大切に、宜^いいかえ、夜更^{よふか}しをするしうばいだから身体に障らんようにして、宜^いいかえ」

番新「だけれども花魁も心配していませんから、今夜は泊^いつて往

きなましよ」

小「然うしちやア居られない」

番新「じやア何う有つても帰んなますの」

といいながら、音羽の袖を引き小声で、

番新「花魁あの事を聞いたんぎますよ、うっかりした事はいえま
せんね」

音「あのね、おまはんは何処へ帰りなますの」

小「あい、私はあの扇町というへ帰ります」
わし

音「扇町という処は何処なんぎますえ」

小「やつぱり深川の内で中木場を越えて四つ程橋を渡ると直に往
じき

かれます」

音「そう……それじゃア是から何処へ出て歸んなますえ」

小「是からマア私は眼が悪いので狭い道は歩き難いから、やつぱり土橋を渡つて中木場の横町を曲ると真直に出られるから、然う往く積りです」

音「屹度直に扇町へ歸んなましよ」

小「私は直に歸ります」

音「少し待つておくんなまし、いう事がありんすから……瀧の戸はん、後生お願いなんざますが一本爛けて来てくんないまし」

と無理に小三郎を引止めて置き、音羽はそツと抜け出して丈助の匿れて居る暗い座敷へ参りまして、

音「丈助どん」

丈「へエ、誠に何うも毎度参りましては御無心を申し上げ、御迷惑な事は若旦那さまもお察しでございますが、能々と思召しよくく おぼしめて下さい、御無理なお願いでございますが遅くなりましても聊かいさゝ厭いといません、夜明けまでにさえ金子が出来ますれば、若旦那さまの在いらっしゃる高輪までは造作は有りません、船で帰つても訳はないのですが、御才覚のお手懸りがございましたか」

音「あい丈助どん、私わつしも種々と心配したんですが、何をいうにも立退の中なり馴染の客衆は無し、何うしてもお金が出来ないんですが、今夜ふりに登あがった客衆は百両ひとつばかりのお金の塊を持つてゐるんですが、初会のお客に無心をいったつて貸して呉れよう道理は有るまいが、俄盲目の身の上で有りながら、私の心持でも推すい

した様子で、急に帰るといい出したから、何処へ帰るんぎますと聞いて見たら、扇町という処へ帰るんだが、中木場という処の土橋を渡れば真直に出られるという帰り道まで聞いたんぎますが、^{わしこゝ}私は此家を出るわけにはいきまへんから、おまはん其の目の悪い客衆の跡をソツと躡^つけて往つて、人の居ない処で其の持つて居るお金を貸してくれと、^{わっし}私になり代つて頼んで見て呉んなまし、若し貸さないといったら仕方がありまへんから、丈助どん、殺^{つみ}生のようだが其の目の悪い客衆を殺しても其のお金を奪^とつて若旦那へ上げて呉んなまし、おまはんには決して難儀は懸けまへん、其の罪は私が引受けて解死人とやらに立とうから、何事も皆若旦那のおため、私は斯ういう因果の身の上で泥水に沈んで見れば、^{たとえ}仮令

年が明けても若旦那のお傍へ往くことも出来ないような賤しい身
に落ちたのざますから、若旦那さえ世に出れば私の身の上は何う
なつても厭いといしません、おまはんには難儀をかけないから、若し無
心をいつて諾きかない時は、洲崎すさきの土手あたりの淋しい処で……な
ア、ようざますか、なア」

丈「へエ……宜しゅうございますが、何う致しまして、あなたに
も御迷惑はかけません……ア、命を捨てゝも若旦那を世に出した
いという其の御貞心を、若旦那様がお聞きなすつたらば、さぞ御
落涙なされましょう……何んなお客でございますえ、盲目なら造
作ア有りませんが」

音「其の内廊下へ来るだろうから少し此処に待っておいで」

丈「宜うございます」

番新「ちよいと花魁え……じゃアおまはん直に帰りますの」

音「おまはん何うでも帰りますかえ」

小「私は直に宅へ帰ります、わしすぐうち大きにお世話になりました、また四

五日内に来てゆるく緩々話を致すが、何分用事のあることを打忘れて

長居を致した、また来て話をしましょうから、今夜は止めずに帰して下さい」

音「然うございますか、誠に済まない、待ちなまし、危のうございます、さア手を曳いて上げようから」

と音羽が小三郎の手を曳いて、瀧の戸と二人で漸くに小三郎を二階から下して廊下おろを通るのを、丈助が暗い処から延び上り小三

郎の姿を見て驚き、此奴小三郎だナ、成程眼が悪くなつて江戸へ
歸つたという話を此の間大野から聞いたが、何処に居るか様子が
分らねえで居たが、少せえ時分の許嫁で、互いに顔を知らねえか
ら殺してくれろと音羽の頼みを幸い、洲崎の土手でばらしてしま
い、大野の処へ往つて己が小三郎を殺したから褒美をくれろとい
やア、百両ぐれえ出るに違えねえ、都合二両有れば大阪へ往つて
何んな商法にでも取附けると、主人と知つて主人を殺す大悪人の
丈助が、しめたと腹の中で悦んで居りましたが、小三郎は神なら
ぬ身の左様の事とは存じません。

音「そんなら何処へも寄らずに土橋を渡つて洲崎の方へ往きなま
しよ、佐助さすけどん送つて上げなまし、氣を附けて往きなましよ」

小「あい〜」

と出て行きゆました。

四十

瀧の戸は気になるから跡へ取って返して、床の上に円めて有つた寝衣を振って見ると、ぱたりと落ちた百両の包み金、音羽びっくも惻りして、

音「何なんざますえ」

番新「花魁、見なましよ、今の客衆がお金を置いて往いきなましたの、あらまア何うも可愛相じやアありまへんか、眼の悪い身の上

で虎の子の様にして貯めたお金なんだよ、ぐず／＼して此処に居て殺されては大変だ、命有つての物種だと思い、貯めたお金を置いてツたんざいやしようが、お気の毒だよ」

音「どれお見せ」

と云いながら手に取上げて上書うわがきを見ると、金百両石川藤左衛

門娘みゑどのへ、許嫁稻垣小三郎よりと書いて有りましたから、

また恟り、エ、と呆氣あつけに取られ、オド／＼しながら、

音「瀧の戸はん、見なましよ稻垣小三郎さまから私わつしのところへ届けてくんなましたお金ざますよ」

番新「何を云うんざます、小三郎さまからお金がなければならねえツて、丈助どんを頼み、書附まで添えて無心によこし、今夜中

に才覚しろというのは無理な小三さんだと思つてた、その小三さんが、お金を置いて往くとは何ういうわけなんざいましょう」

音「何ういうわけなんだかさっぱり分りまへんが、私は大變な事をしたんざいますよ」

番新「何うしなましたの」

音「おまはんに云つたら叱られようが」

と云いさし、顔へ袖を宛てゝ泣き沈み、

音「丈助どんに頼んであの客衆のあとを躡けさせ、無心を云つて若し貸さない時には殺してお金を奪つてくんまし、私が解死人に立つツて、帰り道まで教えたんざますが、何うしたら宜うございましょう」

番新「あらまア、可愛相に、小三さんがあの眼の悪い人を頼んで
お金を持たしておまはんの様子を聞きによこしたのかも知れない
よ」

音「^{わっしちいさ}私は少い時分に別れたから小三さんの顔は知りまへんが、品
といい様子といい、誠に実の有りそうな人だったが、若しや彼の
目の悪い客衆が小三さんなら何うしたら宜うございましょう」

番新「それ見なまし……あらまア、待ちなまし、何処へ駈け出し
なます、藤助どんも伊助どんも寝ず番も居るから出られるもんじ
やアありまへん」

音「^{わっし}でも私が往かずに居て殺さしては済みまへんから、何うか工
夫して私を遣つてくんなまし」

番新「そんなら少し待ちなまし」

と番頭新造の瀧の戸が、駈け出して他の室から持つて来て、

番新「これが丁度宜うございます」

と差出す品を見れば、仲木場の寺町辺の坊さんが内証で浮れに
来た者ので、長合羽に頭巾がありましたから、音羽は櫛笄を取り、
島田髻を揉み崩して山岡頭巾を冠つて両棲を高く取り、長合
羽を部屋着の上に着て、おかしな身装でお客の積りで瀧の戸が音
羽の手を曳いて、そつと遣手部屋の前を通る。遣手衆は枕を付け
洒落本を読んで居りましたが疲れてかバタリと本を落して、スヤ
リ／＼と寝附いて居る様子ゆえ、音のしないように窃つと忍んで
二階を下りてまいると、寝ずばんの藤助が居眠りをして居りまし

たから、これ幸いと瀧の戸が音羽の手を曳いて、はだし跣足で土間へ下りにかゝるとき藤助が目を覚まし、

藤「瀧の戸さん誰方どなたでございますか」

番新「今急に客衆がお帰りなはるんだが、藤助どん此処へ出ちやアいけないよ」

藤「客衆がお帰りになるなら茶屋を呼びに遣りましょう、何方どちらのお方で」

番新「ツベコベと何も云わねえで引込ひっこんで居なまし……花魁の処へ往つて聞いて来なましよ」

藤「お茶屋は何方で」

と云いながら様子が訝おかしいから瞳を定めて能く見ると、透通つ

て見えるような真^{まっしろ}白な足を出して、赤い蹴^{けだし}出がベラ／＼見え
ましたから、慌てゝ立上りながら、

藤「おや花魁じゃありませんか」

と云われた時には流石^{さすが}に音羽もどつきり致しましたが、此の儘
に止^{とど}まれば見すゝあの人を見殺しにしなければならぬ、仕方
がないと心を決し、握り拳を固め、予^{かね}て習い覚えた起倒流^{きとうりゅう}の腕
前で藤助の横ツ面を殴^はる、殴られて藤助はアツと云つて倒れたが、
藤「何をなさいます花魁、何方^{どちら}へお出でなさる」

と云いながら起上ろうとするる処を、

番新「藤助どん、何うしなました」

と云いながら藤助の結髪^{たふさ}を取つて引倒し、

番新「花魁早く往きなまし」

と大戸をガラ／＼と明ける。音羽は跣足でバタ／＼と
 洲崎の土手の方へ駈けて参りましたが、もはや間に合いません。
 小三郎は左様な事とは知らず、杖に縋^{すが}つて土橋を渡り、仲木場の
 方の曲り角の柵矢来^{さくやらい}の処まで来ますと、ドブリ／＼と浪^{なみよ}
 除杭^{けぐい}へ打ち附ける潮の音が聞えます。丈助は忍んで小三郎の
 跡を躡^{あたり}けてまいり、四辺を見まするとパツタリ往来^{ゆき}も絶えました
 様子ゆえ、後^{うしろ}から声をかけ、
 丈「オ、お盲目さん、オイ其処へ往^いく按摩さん」
 小「ハイ、手前は按摩じゃア無い、揉療治を致すものではないが、
 間違いでござりましょう」

丈「ナニ山口屋の音羽に頼まれて来たんだが、お前は懷に金え持
つてるそうだが、何うか悉皆貸して貰えてえ、誠に無理な無心だ
が、急になければならねえ金だと云つて花魁も氣を揉んでるから、
オイ按摩さん金を出しねえ」

といわれて小三郎はキツと身構え、

小「汝は何んだ、賊だな、音羽が左様のことで私に無心をいうわ
けはない、また金はもとより懷中には無いが、寄り附くと免さん
ぞ」

丈「ナニ音羽に頼まれたのだ、若し貸さなければ殺しても金を奪
るんだ」

小「ナニ此奴が」

と云いながら柵矢来に寄附こだていて小楯に取り、腰に差して居た木
剣作りの小脇差を引抜き、

小「寄れば免さんぞ、サア寄って見ろ」

と真影流の奥儀を極きわめた名人に二ツ三ツ振廻され、此方こっちは剣術
も何も知りませんから中々寄り附くことが出来ません。

丈「生意気な事をしやアがる、感の悪い癖にジタバタ騒ぐと叩つ
斬って仕舞うぞ」

小「これへ参って見ろ、己も眼が悪いから斬られようが、其の代
り汝てまいも殺し、差違そって死ぬから然そう思え」

丈「ナニ、此ん畜生」

と閃ぎらつく長いのを引抜いて振り上げたが、寄らば斬らんと小三

郎が前後左右へ振廻して居りますから、寄り附けません。丈助は横着者ですから刀を抜いたなり息を殺して踞しゃがんで居りましたが、盲人めくらの哀しさに、

小「ヤイ逃げ失せたか、ヤイ何処へ参った、これへ寄つて見ろ、免さんぞ」

といいながら柵矢来を離れて段々前へ出まする処を、そツと後うしろへ廻つて、丈助が力に任せて小三郎の右の肩口をしたゝかに斬りました。斬られて小三郎は片手にて疵口を押えながら、

小「此奴おの汝れ斬ったな、何処おに居るか」

と刀を振り廻す。丈助はまた小ちいさくなつて暫く息を殺して居たが、小「エ、残念な、匹夫下郎の為に不覺を取つて……ウーン何処どれに

匿かくれて居おるか、これへ参れ」

とまたうつかり前へ出る処を後へ廻り左の肩口へ斬りつける。

小「エ、汝おのれ」

と云つたが敵かないけません事で、剣術は上手でも胆たんが据すわつてゝも、

感の悪い盲目のことゆえ、匹夫下郎の丈助の為にふたかたな二刀程斬ら

れました。丈助は今度は突こうかと覘ねらつて居る処へバタ／＼

／＼と駈けて来ましたのは山口屋の音羽でございますが、此の足

音を聞き付け、人が来たかと驚き慌てゝ丈助はバラ／＼と須

崎の土手を折曲おりまがつて逃げてしまう。音羽は一生懸命に駈けて来

て見ると、小三郎が血に染つたなりで小脇差を振り廻して居りま

するので、怖くて寄り附く事が出来ませんから、遠くにて、

音「申しえ、私は山口屋の音羽^{わたし}ますが、おまはんがお金を百両置いてツてくんまして、書附の様子では稻垣小三郎さまから私^{わたし}にくれたお金^{わつし}ますが、小三さんに頼まれて来たおまはんは何という人^{わつし}がますか、様子を聞かしてくんなまし、誠に済みまへんことだが、小三さんがお金を才覚してよこせという手詰^{てづめ}に成り、罪のようだが若旦那のためにはかえられまへんから、丈助どんに言附けて、おまはんを殺そうとしたのも私^{わつし}ますが、おまはんは小三郎さまに頼まれて来た人か、ひよつとして小三郎さまでは有りまへんか」

という声も涙に出かねて、オロ／＼泣きながらいうを聞いて、小「エ、……お前は石川のみゑかえ、能く来てくれた、私^{わし}は稻垣

小三郎でござる」

音「エ、……小三郎さまか」

といいながら、怖いのも打忘れて傍そばに寄り添い、取り縫すがり、

音「何うしておまはんは今夜名指しで登あがつて置きながら、何故稻

垣さまということを打明けておくんはいまへん、おまはんはお

金を置いて往いきなはるくらいだのに、何んで丈助どんにお金を才

覚しろという手紙を附けて遣よこしなました、実は私わつしの身の上はこれ

くで、若旦那が東海道藤沢の蓼たばこや屋から手紙を遣し、二百両の

お金がなければ、粟田口國綱のお刀が手に這入らんとのことゆえ、

お刀のために私は苦界へ沈みましたが、丈助が再度来てはこれノ

で、今までお金を才覚して送って居りましたが、あなたは御存

しないことか」

と一いちぶしじゅう伍一什を語りました。

四十一

小三郎は音羽の話を書いて驚きましたが、

小「アゝ……左様か、私わしは永らく旅に居て、頓と江戸表の様子は存ぜんで居たが、新参者に丈助という若党が居たが、其そいつわし奴私にせの偽手紙をこしらえてお前を騙し、斯様な処へ沈めたのであろう、私が旅で艱かん難なん苦勞をした事や、お刀詮議のために辛苦をいたしたことを細やかに話したいけれど、此処は往来なり、受けた疵も幸

い浅いゆえ、兎も角私の仮宅なる扇町まで手を曳いて往つて呉れろ」

というので、音羽は手早く上締うわじめを取り、疵口を幾重にも巻き、小三郎を労いたわり、

音「亭主のために亭主を殺すとは、えゝ何たる事か、私のような因果なものは無い」

と泣きながら漸々ようくに小三郎に聞きく扇町へ参りますると、表は一寸生垣ちよつとになつて居る狭い宅うちだが、小綺麗な家作で、昇夫かごかきの安吉が働きにまいつて居り、留守居や何かして居りまする。

○「安吉どん明けて下さい、安吉どん、ちよつと明けて下さい」
安「へエ……眼の悪い癖に夜出るからいけねえんだ……へエ只今

明けます」

と云いながら立つて参り、戸を明け、

安「お帰んなせえ、何方どちらへ、お迎えむけに往いきたくつても見当が分らねえから出る事が出来ねえんだ、お目めが悪いわりから親方も心配してました」

小「誠に遅うなりました、今日こんにちは少々仔細あつて仮宅ゆへ往ゆきました」

安「エ、仮宅なんぞへ往つちやアいきません……オヤ真赤まっかになつて何うなすつたんです」

小「帰り路みちに洲崎の土手で賊に出会あひ、過あやまつて手傷を受けたので」
安「エ、……いけませんね、私わっちやア親方に叱られやす、黙もつてポ

イと仮宅なぞへ往つちやアいけません、眼の悪いときには一番毒だどね、私が叱られるから困りやす」

小「イヤ／＼決して心配せんでも宜しい、傷は浅いから……お前こつち此方へお上り」

安「お連が有るんですか」

小「私の宅わしうちだから遠慮はいらん構わずズツとお上り」

音「御免なさい」

と云いながら頭巾を取って中へ這入ると立派な花魁姿ゆえ、

安「若旦那、なんですすえ此女これは」

小「これが其の山口屋の音羽という遊女なんだ」

安「困りますね、眼が癒りませんよ女じょうろ郎なんぞ引張ひっぱり出して来

て、併し^{しか}お若いから無理はねえが」

小「イヤ／＼左様じゃない、予て^{かね}話をした石川の娘で、許嫁のみゑだよ」

安「エ、此のお嬢さんが、然^そうでございますか、仙太郎親方も様子を聞きたいって往^いきましたつけ」

小「エ、左様か」

音「若旦那がまた種^{いろ／＼}々おまはんにお世話になるという事を道々聞いたんですが、誠に有難う」

安「これは何うも思い掛けねえことで、お噂を聞いていましたが、夜^{やちゆう}中能く主人が出しましたね」

小「イヤ／＼実は廓^{くるわ}を抜け出して来たのである」

安「マア兎も角疵口は大丈夫でございやすかえ」

小「イヤ決して心配はない、丁度宜い薬が有る、先達せんだつて美恵比
丘け尼がが負傷けがをする事があるう、其の時に此の膏藥を貼れば悪血あくちが
発して眼病が癒るといつて、十二枚膏藥を貰つて来たが、仏壇の
引出へ入れて有るから出してくれ」

と是れから膏藥を貼つて居る処へ仙太郎が歸つて参りました。

仙太郎は音羽の身の上を聞きたいと思ひ、名指しで山口屋へ登りあが
ましたところ、音羽が逃げ出したという事を聞き、驚いて飛んで
歸つて参り、此の始末を聞きまして何なんにしても山口屋へ掛合うま
で、花魁みかくの身匿みかくしをしなくつちやアいけねえ、何うせ談はなしは面倒に
なり、年季を増す事になるかも知れねえが、万年町へ談をしてお

身受けをすることに致しましょう、大丈夫で、私が吞込みやした
……負傷^{けが}アなすったか……丈助は劍術を知らず、刃物^{きれもの}も悪かつ
たか横に殺^そいだぐれえだから心配^{しんぺえ}はねえ、浅傷^{あさで}だったは勿怪^{もつけ}の
僥倖^{さいわい}、何^{なん}にしても此処に居ちやアいけねえから、早く船へお乗
んなせえ。と固^{もと}より荷足船が参つて居りまするから、これへ小三
郎音羽の二人に安吉を乗せ、苦^{とま}を掛けて、
仙「矢切の渡のお乳母さんの処へ往つてらつしやれば、何処へも
知れず、身匿しをするには至極宜^よいが、別に心配はありますめえ
ね」

音「何も心配は有りませんが、何^{なん}にしても若旦那が眼が悪いんざ
ますから、私は神^{かみほとけ}仏に願つて御全快を祈りましょう」

仙「お嬢さまさぞ懽お悦びでござえやしよう」

音「実に斯んな嬉しい事はありませんよ」

仙「私がわっちお送り申したいが、人目に立たねえ方が宜いから、私はすぐ直に帰りまして、万年町と相談して花魁のお身受けの相談がピツタリ極つたら、私がお迎えに出ますから、それまでコツソリ匿れていらつしやい」

安「お目を大切だいじになせえ、此処のところが肝心ですから、目にはいつ一チ毒だというから」

仙「余計なことを云うな」

と是から船を出して矢切の渡口へ船を繋つけ、上へあがり、おしの、門口へ参りました、音羽は勝手を存じて居りますから中へ

這入り、

音「乳母^{ばあや}ア乳母ア、ちよいと明けてくんまし、乳母ア山口屋の

音羽ぎますよ」

しの「誰か表へ来たようだよ、恭太や明けてやれよ」

恭「あいよ」

と戸口へ立ち、

恭「さア這入^{へえ}んねえ」

とガラ／＼／＼と重たい上総戸^{かずさど}を明ける。

音「アノ山口屋の音羽ぎますよ」

恭「やア叔母さん、あのね^{せん}前来た花魁のお嬢さんが這入って来たよ」

しの「おやまア何うも能くまア、さアお上んなせえまし、私もハ
 ア何うかしてお目にかゝりてえと思つて心配しんぺえして居やしたが、
 能くまア来ておくんなせえました、此間こねえだは焼けた跡へ吉原へ駈
 けてまいりやんして探しやしたが、田舎もんだからハアさっぱり
 分らねえで歸けえつて来やしたが、深川へ仮宅が出来たつてえから、
 ちよつくらお尋ね申すべえと思つてゐる内に、段々日が遅れやした
 だ、能くまア、さア何うぞ此方こつちへ……お連が有りやすかえ、何う
 ぞあなた此方へお上んなせえまし」

小「御免下さい……初めてお目にかゝります、手前は稻垣小三郎
 であるが、永らく旅をいたして居たから頓と江戸の様子が分らん
 が、これに乳ばあやをくれた乳母おが居ると聞きました、態々わざくお前を尋

ねて来ました」

しの「おやまア何うも、なんとハア魂消たまげましたね、誠にハア思い

掛けねえ事でござえます、これは何うも始めてお目にかゝります、

わし

私はおしのと申しやすやくざ婆アでござえやす、段々丈助が御厄

介になります、あんな悪党野郎で御座ござえやすが、旦那さまの御丹

誠で此の頃は正直に成りやして、親孝行や忠義てえ事を覚えやし

たのも、みんな旦那さまの御恩だと、蔭ながら拜んで居りやすが、

何んとハア貴方あんたさまゆえにお嬢さまは、相談ずくとはいいいながら

吉原へ這入へえつて、誠にハア何うも心配しんぺえして居さつしやったが、

その甲斐けえがあつて、斯うやつてお兩人揃ふたりつておいでなさるてえの

は誠にお嬉しいことで、よくまアおいでなせえました、丈助がお

供で参りましたか」

小「いや、まア乳母ばあや、いうも気の毒な事だが、丈助はお前とは相違して悪人である」

と是从から丈助の悪事の一伍いちぶしじゅう一什話をしたときには、田舎氣質かたぎ

のおしのは肝を潰してぶる／＼手を震わし、涙を膝へ落しまして、

しの「何んとまア、何うもまア、あの野郎魂消やしてや、嘸まア

腹が立つとも悪い野郎にくとも、実じつにね悪党野郎でござえまして、牛う

裂しぎにしても飽足らねえ奴の親だから、坊主が悪けりや袈裟まで

悪いという譬たとえの通りで、私の処わしとこなんどへお両人ふたりさまがおいでなさ

る訳はねえのでござえましように、私だけを人間と思ひ、お嬢さ

まに乳をあげた乳母だというので、心持を直して能くまア尋ねて

来ておくんなせえました、私イはア実に魂消やした、あの野郎は若えわけ時分に道楽をぶちまして、其の根性は中々直らねえと親父が見限つて勘当しやして、決して宅うちへ寄せ附けるなど遺言してなくなりましたが、大切なお嬢さまが入らして詫言をなさるから、全く改心したと思つて免ゆるして遣りやしたが、あの野郎私を欺だましやアがつて、皆みんななあの野郎の企たくみと知らねえで、永ながえ間お嬢さまに苦しみを掛けて、其の上に嬢様から頼まれたからつて、御主人さまのお顔を知つて居ながら、殺すべえとしたは実に狗畜いぬ生にも劣つた彼あの野郎……宜うがアす、此の村にも役人も目明しも有りやすから、それを頼んであの野郎を探し廻つて、そうして宅うちへ引寄せかよえて、あなたさまはお眼が悪いし、嬢様は軟弱かよええから又あの野郎に

逃げられでもすると仕様ががんせんから、強え人^{つえ}を頼んで来て、あの野郎を捕め^{おさ}えて置き、お前^{めえ}さまたちの怨みの霽^はれるようにしますべえから、緩^{ゆっ}くり宅に居て下せえまし」

といいさして泣沈^{なみ}みました。

音「私も実^{だま}に欺^{だま}かされたが、丈助はあれ程の悪人とは思いがけないことで」

しの「本当に然うでござえまする、私^{わし}は何の因果でござえましよ
う」

と話してる処へ表の戸をトン／＼。

男「御免なさい、ちよつと明けておくんなさい、お母^{つか}さん明けて
おくんなさい」

しの「誰だかえ」

男「エ、丈助でございます」

と云われて、おしのは低声こごえになり、

しの「丈助が来やアがった……今明けるだが締りイ附いてるから、
もう少し待ちてろ……若旦那お嬢さま、丈助が此処こけへめえりやした
が、若旦那さまはお目が悪し、お嬢さまは軟弱かよわえから、あの野郎
には敵かないません、何うぞ少しの間此処こゝに匿かくれて、おくんなせえよ、
私わしい、ハア兎にも角にもあなた方にお怪我をさせねえように為しま
しょうから……今明けるから待ちてろ、恭太や、ちよいと此処こけへ
来こう」

恭「エ、なんだ」

しの「今丈助が此処へ這入つて来ても、お兩人さまが泊つてると
いう事をいうじゃアねえよ」

恭「ア、何んともいやアしねえや、誰も彼処に居やアしねえつて」
しの「馬鹿め、早く明けて遣んな」

というので恭太郎が土間へ下りてガラリと戸を明けると、丈助
は一本差し、羽織を着て実体らしく、

丈「お母さん誠に暫く」

と這入つて参りました。

四十二

小三郎と音羽の二人が、反故張障子の内の二畳の部屋に隠れて居るとは知らず、丈助は母親おふくろを首尾よく騙し遂せる心得で、わざと猫なで声で、

丈「お母さん誠に御無沙汰をいたしまして、お母さん、何うも都度く書面を差上げなくっちゃアならねえんでございますが、むずかしい字で書いては読めもしまいから、ちよつと様子を知らせたいと思つても、何分御主人さまに附つきツ切りゆえ、参る事も出来ないので、存じながら大層御無沙汰になつて、誠に相済みませんが、何時もお変りなくお健すこやかで私も満足致しました」

しの「まア何うして此処こけへ来た、誠に思おもえがけねえことで、私わしも会あいてえくと汝われがの事べえ思つてたアだが、若旦那さまやお嬢

さまは何うしたアだ」

丈「へい、早速お知らせ申しますが細かい話は聞くのも御面倒でしょうが、実は若旦那小三郎さまのお手へ國綱のお刀が這入るばかりになった処、悪い奴が中へ這入りましたお刀をまたがい転買を致しましたところから、それがために若旦那は九州の方へまで往いかつしやるような事で、よう／＼手に入りました、永い間の旅でしたが、只今では高輪の船宿で、伊勢屋と申す宅かたにおいでゞすが、此の事を御重役渡邊様へ達して、渡邊さまからお上かみへ伺いました処が、早々召返すようにというので、御苦勞遊ばした甲斐があつて、いよく御歸参になります、私も永い間辛勞致しました甲斐が有つて、若旦那さまさえ御歸参になれば此の上ない事ゆえ、何うか

お悦びなすつて下さいまし」

しの「それは何^{なん}にしても芽^め出^で度えことだ、汝^{われ}も骨を折った甲斐が

あり、若旦那も永^{なが}え間^{しん}心^ん配^へをなすつた甲斐があり、お嬢さまも

吉原のような、あんな恐ろしい処へ身をいれて、苦^く艱^{げん}をなすつた

甲斐が有ったアだ、おれも心配して、汝^そがに会いてえと思つたが、

然^そうかえ、若旦那が御帰参になるようになったら、汝何うする気

だ」

丈「若旦那さまの仰しやるには、手前は^{ひと}方^{かた}ならず骨を折つてく

れたから、侍分に取立てゝ遣ろうと仰しやつて下さいましたが、

金子や品物でお礼を受けても使えなくなつてしまいますが、侍
分にお取立になりますれば、此の身の幸い、また此のお刀がお屋

敷へ歸つて見れば、若旦那さまは必ず御出世でございましょう、前には五百石お取り遊ばしたお身柄ゆえ、八百石か千石にもお成りなさるに相違有りませんから、私も大した御扶持ごふちが戴けましようから、然うしたらお母さんを斯んな処には置きません、直すぐに屋敷へ引取つて柔らかい着物を着せ、置おき巨燵ごたつをして樂をさせ、是まで御苦勞をかけたお埋合せに孝行をいたします」

しの「何とまア嬉しい事だな、汝われ工はア是まで道樂ウぶつて種いろ／＼心配しんぱえさせたけど、汝が殿さまの為に苦勞したお蔭で、侍分にお取立になれば親を引取つて坐布団の上で樂をさせべえと、生れ變つたような柔やさしげな心に成つたかえと思うと、私わしイはア誠に嬉しいだよ、死んだ父さまも嘸さぞ悦ぶべえと思うと嬉し涙が出るだ

よ」

丈「実はお泣きなすつても宜よいくらいで、真に私も骨折甲斐があると思ひまして、此の上ない悦びでございます」

しの「それに就いて、勇助どんは汝われと一緒に若旦那へ従ついて出たが、勇助どんは歸けえらねえが、なにか矢張り汝がと一緒にか」

丈「へい、勇助どんは年を老とつていますから、高輪の伊勢屋で若

旦那のお傍に附いてしまして、私わたしだけ方々駈け摺り廻まわつてゐるん

ですが、若旦那がお屋敷へ御帰参になるので、実は大騒ぎというの

は、お衣服みなりから、大小からお荷物まで拵もえて、華やかにしてお屋

敷へ御帰参になるようにしなければならず、また私わたくしも侍分に取立

てると仰しやるんですから、今までと違いますれば、上かみしも下しもから

小袖まで相当のものを買^{かいと}調^のえなければなりません、けれども
若旦那のお買物に多分に費^かりますので、自分の支度金どころでは
ありません、就きましてはお母さんは誠にお心掛けの宜^いいお人ゆ
え、少し金子のお貯えが有るなら私^{わたくし}に貸して下さいな、それに親
父が正月名主さまの処へ年始に往^いく時に差した、あの大切にして
いた脇差がありました、あれで間に合うからお父さまの形見に
下さいな、能くお父様がこれだけは己も武士の果の印だと御自慢
なすった事が有りましたが、あれをお譲りを願います」
しの「あゝ譲るとも、それに己^{おら}も心にかけて、此の畠や田地^{われ}を汝^わ
がに譲つても額^{たか}が知れてるから、切^せめて金でも遣るべえと思つて、
己が身の上では巨^{えら}く貯めた積りだが、父様の脇差も汝より他に譲

るものはねえ、今出して来て遣るから少し待ちてろよ、能くマア
汝工はアそんな柔やさしげな心になってくれたかと思うと、己アはア
実に何だか飛立つ程嬉しいだよ」

丈「左様でしょう、これは何どんなにお悦びなすつても宜しいので
……恭太」

恭「エ、何い」

丈「己の留守中にまた何か叔母さんに世話ア焼かせやアしないか」
恭「うゝん……今お前勇助さんが何ど処に居るつて然う云ったね」

と云われて丈助は驚き、

丈「旦那さまのお傍に居るのよ」

恭「うゝん叔母さん嘘だよ、勇助さんはね、矢切の渡わた場しばでね、

この叔父さんが殺しちまつたんだよ」

と云われて丈助は弥々いよく驚き、

丈「コゝ此ん畜ちきしよう生、ナ何を云やアがる、そんな馬鹿ア云やアがつて」

恭「ナニ本当だよ、身体へね石を巻き附けて、利根川の深え処ふけとこへ投り込んだんだよ」

丈「コ此ん畜生、ナ何を馬鹿ア云やアがる」

しの「エ、馬鹿な奴のいう事だから構うなよ」

恭「それからアノネ叔父さんが己おいらにお銭あしを四百くれて、黙つてろ

くツて、喜代松という船頭と二人で、曲金から附いて来た泥坊だから殺したんだツたが嘘なんだよ、勇助さんは疾とうに殺してし

まつたから、生きて居やアしねえんだよ」

丈「バ馬鹿、此ん畜生何を云やアがるんだ」

しの「エ、馬鹿な奴のいう事を取上げて余計なことを云わねえが
宜^ええ、恭太もまた何もいうな……此んな愚^{おろか}な者のいう事だから、
何も汝^{われ}が小言をいうにやア及ばねえ」

と云いながら立つて戸棚から取出して来ましたは小脇差で、

しの「さアこれを見ろ、薄錆は出たが、父さまの形見だ、また金
も是だけ有るから」

丈「へえお母さまは何うも誠にお心掛けの宜^よいことで、有難う存
じます」

と脇差を取上げ、

丈「中々立派なもので」

しの「少し汝^{われ}がに云い聞かせるが、己^{おれ}は何にも知らねえが、これは父^{とつさま}様が御先祖さまから譲られた品だから、貧乏してもこればかりは放せねえ、貞宗^{さだむね}とか何とかいう脇差だつて、大切^{でえじ}にしていたから、父さまが死んで以後出さねえもんだから、少し錆たアだよ」

丈「へえ」

と丈助がうつかりして居る処を、おしのは手早く小脇差の鞘を払い、丈助の横^{よこ}腹^{はら}を目掛け、一生懸命力に任せてウーンと突^つ込む。

丈「アゝゝお母さん何をなさる」

と前へのめる。

しの「動きやアがるな此の野郎、うぬ、殺さねえで置くものか、うぬ、己ハア気も何も違わねえ、汝^{われ}え殺すべえと思つてゐる処へヌクく」と来やアがつて、此の野郎く」

丈「ウム……お母さん、何だつて己を殺す、何の咎^{とが}で私を殺すのだ」

しの「誠にハア何とも言ひようのねえ奴の癖に、能くまア己^{おら}がの前^{めえ}で何の咎でなんてえ事が云える、汝^{われ}のような鬼とも蛇^{じゃ}ともいいよ
うの無^ねえ悪党の子を持った己^{おれ}は、何うもお兩人^{ふたり}さまに済まねえからよ、よくもく己^{おら}が乳を上げた御主人さまのお嬢さまを若旦那の爲だつて欺^{だま}かして、吉原の山口屋へお女郎に売りやアがつて、

其の身の代の二百両も若旦那へ上げるてえのは嘘で、皆な汝が費
 やアがつて、うぬ」

と刀でこじる。

丈「アイツ、アイテ、お母さん何うぞ免してくれ、少し
 手を放してくれ」

しの「手を放せツて放すものか、何うせ汝工殺すべえと思つて
 んだ……コレ汝はそればかりじやアねえ、今聞けば勇助どんも汝
 が殺したゝな、それから度々嬢さまの処へ往きやアがつて、お
 嬢さまを欺くらかして偽手紙イなんぞをこせえて、若旦那さまの
 入用だつて嘘べえ吐いて、金を取つて費やアがつて、うぬ、一
 昨日の晩も汝え山口屋へ往つて、お嬢さまを欺かして百両取る

べえとしたアだな、其の時に若旦那さまが匿^{かく}れてお客に登^{あが}つてゐるのを、お嬢さまは若旦那の顔を知んねえもんだから、亭主と知らずに汝がに殺してくんろと頼んだ時に、汝は眼^{まなこ}があるから若旦那を知つてべえ、若旦那てえことを知つてながら跡を躡^つけてつて、洲崎の土手で若旦那さまを騙し殺しに殺すべえと思つて、斬り掛けやアがつたとは、何んてハア何うも、呆れるとも呆れねえともいいようのねえ野郎で、其の上又くくと此処へ来やアがつて、只^{ただ}一人の此^{これ}の己^{おれ}の死^し金^にまで貪^{むさぼ}り取りに能く来やアがつた、うぬ」

丈「ウーム：ハツ、ハ……おめえ何うしてそれを知つてゐるのだ」
しの「知つてねえかえ、汝^{われ}より前^{さき}にお嬢さまも若旦那さまもおい

だが有つて、婆ばあやお前めえと違つて丈助はこれ／＼の悪党だが、廓を
 出て来たのだから少しの間匿れて居るんだと仰しやつて、おいで
 なすつて、汝がの企たくみの段々を聞いた時は、実に魂消たとも魂消ね
 えとも、若旦那や嬢さまに対てしても汝を助けて置くことが出来ね
 えから、お役人を頼んでも汝を縛つて、御公儀さまの御厄介に成
 つて、汝をおつ殺すべえと思つてるところへ、汝が来るてえのは
 罰ばちだ、只た一人の忤を親の身として殺したんだぞ野郎、御主人さ
 まへ刃向はむけえ立だてをしたんだから、汝は磔はりつけ刑にあがる程の悪党だが、
 親の慈悲だからまだしも此の畳の上で、お父さまの形見の脇差で
 斬殺きりころして遣るから、有難ありがてえと思つておつ死ちんでしまえ……ヤ
 ア、おつ死んでしまえ……ヤア、おつ死んでしまえ」

丈「ウーム…ウームお母さん少し待つて下さい」

と云いながら片手で袖を握り溢れ出る血を押え、ハツハツと息を吐く途端に、中矢切の総寧寺の勤めの鐘がゴーン／＼と市川の流れに響いて聞えます。二畳の室の反故張り障子の内で、小三郎が一節切を取つて手向の曲を吹きました音色が、丈助の心耳へ聞えますすると、ア、悪いことをしたと、始めて夢の醒めた如く改心致し、母の手を握り詰め、ハツハツと外へ出るばかりの苦しき息をやつと遣う。

しの「目が醒めたか野郎、目が醒めたか、うぬ」

丈「ウーン……お母ア少し待つてくんな、余り強く遣ると己ア死んじまう、己の息が止つちまうと、若旦那さまのお尋ねなさる仇

敵^{たきかく}の匿^{かく}れ家もお探しなさるお刀の手掛りも分るめえ、これまでの悪事のお詫ごとに残らず己がお話し申し上げてそうして死ぬから少し手をゆるめてくれ、ちいと手をゆるめてくれ」

しの「さアいってしまえ、汝^{われ}工知つてたらば残らずいッちまえ」

丈「ハツハツ、お母アお前^{めえ}のような正直ものゝ腹へ己のような不孝者が何うして胎^{やど}ったかと、目が醒めて見りやア、実に何うも済まねえことをした」

しの「済まねえ事をしたって今氣イ附いたか」

四十三

丈「実は稻垣さまの処へ御奉公にあがつてゐる内に、稻垣さまの下役に大野惣兵衛という奴が有つて、其奴が石川のお嬢さまに惚れて、時々己に鼻薬をくれちやア種々頼むから、己も種々な悪事を謀し合せてゐる内に、其の大野惣兵衛はお暇に成つたが、浪人しても己を呼び出しちやア頼むくと云つてはくれる鼻薬に、つい目が昧れて、粟田口國綱も己が手引をして盗ましたのだ、また石川藤左衛門さまを日暮ヶ岡で鉄砲で打殺させた手筈をしたのも皆んな己、それから鴻の台の鐘ヶ淵から小左衛門さまを突落させた手引もおれがしたのだから、石川さまの仇敵も矢張り大野惣兵衛だが、今は八橋周馬と名を変えて、田地や山を買い、堀切の傍の別荘に居て、金貸しをしているが、その大野惣兵衛の差料

にしている刀が粟田口國綱だから、早く其の刀を取返し、仇^{あだ}を討
 って御帰参になるようにして下せえ、今お前がいう通り、主人と
 知^{はむけ}つて刃^{だて}向え立をした丈助だから、磔^{はりつけ}刑に上つても飽き足らね
 え奴だが、畳の上でお母アの手に懸つて死ぬのは親の慈悲という
 ことを、今初めて覺えた……ア、わかつた、お前も定めて悪^{にく}かろ
 うが、若旦那さまが此^{これ}処へおいでになつて、己^{びん}の鬢の毛を一本ノ
 引^{ひッ}こ抜き、五分だめしにしてお胸を晴して下さるようにお詫こ
 とをして下さい、誠に悪い事をしましたから、どうかお詫ことを
 して下さい」

とハラ／＼と落涙して泣き沈みました。

しの「今になつてそんなことを云やアがつて、漸く悪いことをし

たと氣イ附いたか」

丈「わかりました、ハツ／＼」

恭「叔母さん堪忍して遣んなよ、叔父さんが痛えツて大騒ぎイや
つてゐるからよ」

しの「エ、黙つてろ、用にやア足りねえが、われいつ汝も寧ろ此の恭太郎
見たように馬鹿にでも生れたらこんな苦勞はしめえものに、生
いかく才覚が有るばかりで、斯んな惡をしやアがつて」

といひさして奥の方をふり向き、

しの「若旦那さまもお嬢さまも、只今お聞きの通りの訳でがんす
から、お嬢さま何うか此処これへおいでなすつて、あなたの御存分に
なすつて、此の野郎の鬢の毛を一本／＼ひッ引こ抜いてお胸はらを晴して

下せえまし」

というのを聞き、反故張り障子を明けて出て来たのは、小三郎に音羽の二人で、

小「婆ばあや其方そちは誠に男おとこ優まさりの氣質である、現在の一人の悴を

手にかけて殺すとは、実につらい事であろうが、私わしや音羽に義理

を立て、お前が手を下おろして斯う計らい、また丈助も先非ぜんび後悔して、

刀の在所ありか、仇敵かたきの匿家かくれがまで教えて呉れた其の功に愛めで、永く

苦痛をさするも不便ふびんゆえ、この小三郎が介錯して取らせるぞ」

丈「へい、誠まことに何うも面目次第もございません、面目次第もございません」

音「乳母ばあやア始めの内は私はしがみ附きたいほど悪にくらしく思ったが、

またお前の心根を考えて気を取直し、今まで此の室に這入つてしまふ／＼泣いて居たんがますが、お前は嘸つらい事だらうね」
しの「はい……はい、貴方がた、何うぞ御存分に此の野郎をジキ／＼斬つてやつておくんなせえまし」

小「これ丈助、手前に斬られた疵口から悪血が発したため、眼病も大きに全快の端緒に赴き、こぐち おもむ少しずつは見えるように相成つたが、その八橋周馬とか申して堀切村に居る奴は、全く仇敵のかたき大野惣兵衛に相違ないか、又國綱のお刀を差料にして居るに相違ないか」
丈「全くそれに相違有りません、実に面目次第もございません、大悪非道の私を悪いとも思召おぼしめしませんで、若旦那さまが御介錯下さるとは有難う存じます……丈助は浮うかび上ります……他に子ほ供

も何も無い只た一人の母親おふくろでございます、私は悪い奴でございますけれども、母親は正直一図の少しも悪気のないものでございますから、どうか不便ふびんのものと思召しましてお目をお懸けなすつて下せえまし……お母つかア堪忍してくんねえ」

しの「今になつて懋なまじいにそんな事はいわねえで、黙つておつ死ちんでしまえ、何うぞ若旦那さま、何時までも苦痛をさせたくねえでがんすから首を打落ぶちおとして下せえまし」

小「おゝ、尤もの事」

と小三郎は立上り、小脇差を引抜いて丈助の領元えりもとへあて、呼吸をはかつて、

「エゝ」

と声をかけて打落すと、丈助の首はゴロ／＼と土間へ転がり落ちました。

恭「ア、彼の叔父^あさんは酷^{ひど}い事をする、丈助さんの首を斬ツちやった」

しの「静かにしろやい」

といいながら仏間に向い、おしのは念仏を唱えて居ります。

これから名主へ右の次第を届けて、丈助の死骸は中矢切の法泉寺へ葬り、事^{ことすみ}済に成りました。処へ仙太郎が小三郎音羽を迎いに

参りましたから連立って帰りましたが、音羽の身受けの相談は極つたなれども、岡本政七方に居ては人出入も多いからというので、二人とも高橋の重三郎の宅へ参って居ました。おしの婆^{ばあ}は只^{ただ}一

人の忤^かが斯^かような悪人に生れ附いたのも前世の約束事だろうと思
 い諦め、所持の田畠を残らず人に譲り、恭太郎を連れて向島へ参
 りまして、白髭の蟠竜軒の美惠比丘尼の弟子になり、恭太郎諸共
 クリ／＼坊主になりました、姪^{めい}の若草もまた子供も然^そういうこと
 になるも皆約束事だろうと思ひ、綾瀬^{あやせがわ}川の渡口へ庵室を作り、
 念仏を唱えながら礫^{こいし}を拾つて山のように積み上げるといふ、是か
 ら敵^{かたきうち}討^{うち}になります。稻垣小三郎は高橋の辺^{ほとり}なる重助方へま
 いり、段々療治を致して居ります内に、美惠比丘尼のいう通り、
 眼病も次第／＼に全快致しましたから、逃げられん内に早く仇^{あだう}
 討^{うち}をしたいが、栗田口國綱の刀を先へ取返して置き、それから
 大野を討ち果したいと、種々^{いろ／＼}手を廻して心配して居りました、

お話二つに分れて堀切の別荘に居る紀伊國屋の伊之助は、病氣全快してブラ／＼遊んで居りますところへ、たいこもち幫間の正孝が侍を一人連れてまいり、

正「今日は、御免…えゝ御免」

伊「誰方どなたか知りませんがお上んなさい、誰だえ」

といいながら出て参り、

伊「イヤ師匠か」

正「えゝ今日は」

伊「構わずつと庭から廻つて這入んなよ」

正「これは何うも、イヤお一人で…何うも好よいお庭でげすな、お鉢前から下草誠に様子が好うがすな」

伊「そんなことをグズ／＼云わねえでも宜よいからおあがりよ」

正「実に御様子の好いお庭で、三日ばかりお客のお供わきで他へ往つてましたが、斯ういう広々とした景色の好い所は見られません：

…お一人でげすか」

伊「みんな摘つみくさ草に出かけたよ」

正「成田以来お目にかゝりませんか、彼のあ時に若旦那が掘出物をなすつたが、あの釜は幾らでしたっけ……然う／＼一両二分です

か、それが二百両にもなると仰しやったから、私も何わたくしうか彼アい

う釜があつて安かつたらお目にかけて、二百両でなくとも五十両にでもなれば、幫間やを廃める氣でげすから釜の有る度たんびに買つて来

ますが、碌なものは有りませんで、考えれば可笑しいなんと、昇か

夫ごかきに取捕とっつかまつてね、あの時は、あなたも変な顔をなせえました。が、虚無僧さんが出て来て、編笠を脱とつて、エ、と遣つたんですが、私は人わっちを斬るを始めて見ました、実に驚きました……フ、若旦那、今日ね、仲の町の客で、何時も取巻に来て、変に分らねえ奴なんでですが、其の人が急に売りてえ刀があるんだが、手前てめえは方々へ出這入るから世話アしてくれろつてえ言いますから、若旦那はお目が利いて、大概堀切に居らつしやると思ひやしたから、一緒に連れて来たんで、三百両ぐらいの価も格は有るんだが、即金ならば百両でも宜よいというんですが、それが三百両とか五百両とかになれば、私も大きいにお世話の仕甲斐があるんですが、何うでげしよう」

伊「刀といえは己も買いてえ心持が有るんだが、其処へ其の品を
持つて来たのか」

正「エ、彼所あそこに変な訳の分からねえ侍が居るんですが、祝儀の
くれッ振ふりが悪いもんでげすから、何処の茶屋でも忌いやがられる山田
さんてえ人が持つて来ているんでげす」

伊「そんなら早く此方こちらへお入れ申せば宜よいのに……あなた何うぞ
此方へ、お構いなくお這入り下さい」

山「いや御主人はお在宅いでで、御免」

伊「さア何うぞ此方へ、お構いなく」

山「御免を蒙る……、これは立派なお住居すまいで」

伊「生憎あいにく誰も居りませんで……師匠菓子器の蓋ふたを明けとくと砂

が這入つていけないから……あなた何うぞ此方へ、これはお初にお目に懸ります、わたくし私は紀伊國屋伊之助と申しまする至つて不調法もので」

山「手前は山田藤六という者で、始めて会います、正孝がねえ、かね予て鼯鼠になるコレのおおめきの主人は大目利であるから、お世話を為しようという事だから、取敢とりあえず罷り出たいと思つても、お宅が分らんと申したら、お寮においでだろうという事で出ましたがね、此の品は手前てまい上役の者が売るのが、余程価値ねうちものなれども、此の度国表たびへ歸るに就いて、是は手放すのに誠に惜しいが、幾いくふり口も有るから手放すのだと申し、刀屋に見せると、差料を売つたという事がぱつとしては宜くないというので、心配なしにオイソレ

と云つて、即金で買つてくれゝば百金で手放してしまふ、併し次第に因よつて価値ねうちが有つたら、それだけの事にしてくれなければ困る」

伊「私は質を取つて居りますが、小道具の方に目が届きませんけれども、番頭に目の利いてるものも御座いますから、お品を拝見致しましてから御相談をいたしましょう」

山「品はこれへ持参致した」

伊「兎に角拝見致しましょう」

といいながら風呂敷を解くと、中に袋入りに成っておりますから、押戴き、

伊「拝見を」

と風呂敷包から取出して見ると、白茶地亀甲形古金襴の袋で、紫羽二重の裏が附いておりまする結構な打紐を解いて、ズーツとこき出すと、鞆は別に念の入れようは有りません紹色で、丸繰りまるぐり形身がたみ入れ白に成つており、淵頭ふちかしらに赤銅しやくどうなぐこ七子で金の二足の狂い獅子、目貫は横谷宗珉よこやそうみんの一輪牡丹に、鍰のぶいえは信家でございます。鮫は占城チャンパの結構なところ、柄糸は煮紺にこん三分に巻き揚げ立派な物でございます。

伊「何うもお立派なもので」

山「我々には分らんが、売る当人は中々大した金をかけたのだらう、だが火急の事に相成つて値売ねうりをしている訳にはいから、あなたの目利き次第で価値ねうちが有れば、一杯に買つて貰いたい」

伊「お刀身なかくを拝見致します」

と是から鞘を払つて見ましたが、私は刀の見様などは存じませ
 んが、先ず刀を真直まつすぐに立つて暫くの間こう遣つて見ると、刀脊みなね
 の三つ棟みむねに相成つてゐるカサネの厚い所を見て、又こう袖を当てま
 して暫くの間 銚ぼうしき 尖ほうしきから横手下物打したものうちから鎬しのぎ、腰刃こしばの辺あたりを見ま
 すると、腰刃みだれ深くいたして丁子乱れちようじみだに成つて居りまして、
 二尺五寸余よもあります。

伊「誠に結構なお品のよう存じますが、これは御銘ごめいは誰でござ
 います、作名さくめいは確しかと有りましたような」

山田「それはもう正しい銘が有ります」

伊「誰でございます」

山田「誰だつて、それは云えんが、金子を出して渡せば速すみかに銘あかを明あかそう」

伊「左様なら一寸ちよつとおナカゴを拝見致しましょう」

山田「それはいけん、それがナカゴを何うも見せるといふ訳にはいかん、金子を渡してしまつてからなら何うでも宜しい」

伊「何分にもお銘が分りませんと誠に何うも困りますが、お銘を仰しやつて下さる様に願います」

山田「何うも然ういふ訳にはいきません、売人うりてに確しかと頼まれて居おるんですから」

正「山田さん、ちよいとこれは何んてえ作銘だと仰しやいな」

山田「然ういふ訳にはいかんよ、大夫から確と頼まれてるんだか

ら、いよく愈々買うと云つて金子を渡せば、ナカゴは見られるのだ」

伊「それでは少々お刀を拝借致しとうございます、番頭は少々心得ておりますから、番頭に見せるまで拝借を願います」

山田「然ういう訳にはいきません、直すぐに引取るのなら格別、何うもお前の方へ預ける訳にはいかん」

伊「能く拝見致しました上では百両と仰しやつても、二百両にでも三百両にでも、五百両にでも頂戴致します……左様なら後刻番頭を同道致しまして、お宅さまへ出ますが、何処へもお渡しなくわたくしわたくしかた私方へお譲りが出来ましようか」

正「そんな事をするのも億おつくう劫でげすから、云わない積りわたくしで私まで内証で、耳打で、その作銘を一寸いって下さいな、云わねえく

らい強氣げうきと訳の分らねえ事は有りやすめえ」

山田「然うはいかねえよ、それでは金子をもつて大夫のお宅まで来て下さい」

伊「へえ、金子を持参して遅くも夕景までには頂戴に出ますが、
何方どちらさままでございます」

正「ナニ、あの、八橋畠そばの傍で、立派な御門が有つて、生垣に成
つてるお宅でげす」

山田「他わきへお見せなさるんではいかん、金子と引替でなければな
らんよ」

伊「へえかしこま畏りました、後程相違なく私わたくしが出ます……師匠お前少し
跡に残つてゝくんな」

正「へい……山田さん御免蒙ってお送り申しません」

伊「誠に何うも、左様なら」

山田「それでは後刻」

と山田藤六は歸つてしまいました。

正「あゝいう分らねえ奴なんで、時々変な洒落をいうんでげすがね、忌^{いや}な心持になる洒落なんで……刀の銘を云ったつていゝじやありませんか、此方^{こつち}で買うのだから、團十郎とか菊五郎とか左團次とかいわなければ給金が打てませんのにさ」

伊「あの刀に就いて少し心に当る事があるから、師匠気の毒だが船を言付けるから一緒に万年町まで往つてくれないか」

正「へえ、何処へでも往^いきましよう」

と是从から屋根船を逃あつらえて万年町の岡本政七方の棧橋へ船を繋つけ

まして上り、門口から、

伊「誠に御無沙汰を致しました」

政「おや／＼これは伊之助さん、能くおいでなさいました、私わたくしも一寸お尋ね申したいと存じながら、種々取込が有つて、つい／＼御無沙汰をいたしました、私も彼方あつちの方へ保養かた／＼々々見舞に往ゆきたいと思つてましたが……おや、誰かお連れが有るなら此方こつちへ」

伊「ナニ彼あれは正孝という幫間たいこもちで、師匠此方へ上んねえ」

正「これは始めまして、私わたくしは櫻川正孝と申しまする幫間ほうかんで、春木町さまには毎々一通りなりません御最良を戴きます……御当家は

宜^よい御商売でございますな、若旦那、此の位結構な御商売は有りますまい、お店は小^{ちい}くつてキッチンとしていても一寸箱の蓋^{ちよいと}を取ると金目の物が有ったり、ちよいと立掛けて有るお品でも千両二千両ツてんでげすから、此のくらい結構な御商売は無いと思います」
政「流石^{さすが}に職^{しょうばい}業^いとはいいながら、這入りながらお世辞は恐れ入りました」

正「いえ全く御世辞じやアないので、真^まから湧^わ出^きしたので、ちよいと彼^あの箱の中^あに在^ある目貫^{めくわ}を一つ取つても千両にもなるんですが、盗^すめば直^{すぐ}に露^ろ顯^{げん}しますから瞞^{ごま}かすことは出来ません」
政「恐れ入りますな……先^{せん}達^だて心当^{しんた}りが有りましたから、段々と聞いて見たら、いけないんで」

伊「今日こんにち師匠が連れて来た侍の持つて来た品が、其れではない

かと思うんですが、予かねてのお話とは乱れが少し違うようですが、

國綱が山の内に居た時の乱れは何うとか、此の間重さんの話でしたが、刀を売りに来たから、買いましようが作銘は誰でげすと云つても云わないんですが、何うしてもそれに違いないんです」

政「誠に何うも有難うございますが、何処からまいりましたので」
伊「八橋畠に居る人なんだそうで」

政「それは何うも、早速重三を呼びに遣りましょう」

と直すぐに手紙したを認め、高橋へ小僧に持たしてやると、荷足の仙太

郎も何か仲直りの交際つきあいで、子分を二人連れて重三郎の処へ来て居りましたから、重三郎が披ひらき見て飛立つ程の悦びで、これから

小三郎音羽だけは姿の见えないように屋根船に乗らせ、仙太郎も重三郎も取敢えず政七方へ出てまいりました。

四十四

重三「只今はお手紙ゆえ取敢ず出しました」

政「今春木町が来て知らせたから直に呼びに遣つたのだ」

重「これは春木町さま、其の後は誠に御無沙汰をいたしました、

此の度はまた御親切に有難う存じます、小三郎さまの仰しやるの

には、上の手をもつて何んするような事では武士道が立たんと、

其処に種々仔細がございまして、敵討をなさいますんけれ

ばならない事に成つて居りまするが、お刀を取つてしまわない内は踏込む訳にもいかなないので、困つて居りましたのです、誠に有難う存じます、夫に相違ないので」

伊「重三さん、お前さんが私の手代の積りで往つて下さいな、私は金子を持つて往きますから、百兩なら百兩其処へ金子を出すから、お前さん其の刀を持つて先へ歸つて下さい」

重「誠に有難う存じます…さア仙太郎親方お上んなさい」

仙「御免なせえ」

政「おや／＼丁度好い処へ」

仙「今ね高橋へ来てえると、此方こつちからのお手紙でしたが、何んとも何うも今まで苦勞した甲斐が有つて、此の上ねえ悦びで、まア

何ういう手蔓で其の刀を持つて来たので」

政「此処これに居る正孝というたいこもち幫間の世話で」

仙「お前めえかオイ正孝というてえこもち幫間はお前か」

正「へえ」

仙「幫間てえこもちなんてえものは彼方あつちへべつたり此方こつちへべつたりしてえや

アがるから、向うの奴に何か吐ぬかすとたゞア置かねえぞ」

といわれ正孝は仙太郎の口の利きようの暴々あらくしいのに驚きま

して、けぐんな顔附きをして、

正「へえ、泥坊物もんでげすかな、係かかり合あいになりやすからお世話ア

しなければ宜かった、驚きやしたな」

仙「本当に冗談じゃアねえぜ、向うの野郎に内通して何か云やア

がると手前てめえの首をヒン捻ねじツちまうからそう思え」

正「へえ首捻りや何かは驚きやす……おや、あなたはなんだ、オ、あなた、お前さんだ、誠に何うも」

とピヨコ〜お辞儀をするので、

仙「何んだ〜」

正「アノそれ、いつぞやそれ四年あと後の九月の廿日はつか、吉原土手で親方が中へ這入って下すって、侍がエーツてって刀を引ひッこ抜いた時に助けて下すった親方に違いねえようで」

仙「ウーン……あの時のてえこもち幫間はお前めえか」

正「モシ若旦那お礼を仰しやいよう」

伊「私は親方には時々お目にかゝっているから疾とうにお礼はいっ

ちまつたよ」

正「酷^{ひど}うございますね、然^そうなら早く知らせて下されば宜^よいのに……その節は親方誠に有難う存じました、私^{わたくし}は助かりましたが、あの晩に長次さんはポカリと斬られしまいました、あの時の御恩は私は死んでも忘れませんあの時には誰も中へ這入^てって止め人がないところへ、親方が這入^てって下すって、無法といつては済みません、向うで驚いて手を放したので私は逃げられたので、それからというものは貴方のお顔が目^めに附いて、忘れませんが、お名前が知れないから只土手さま^{こちら}くって、真に神の如く毎日く拝んでましたが、此方^{こちら}でお目に懸るとは斯んな嬉しいことはありません、親方のためなら内股膏藥どころじゃア有りません、私^{わたし}は按

摩膏に成つて親方の方へピッタリ粘著くっいて離れませんので、お手伝いでも遣りましょう」

仙「それは有難い、何なにしても斯んな結構なことはねえが、早くしなければ逃げられでもするといけねえから、早いが宜いい、正孝も一緒に往いきねえ、旦那は何うなさる」

政「私はまいりましてかえも却つてお邪魔になるばかりで、何んのお役にも立ちますまいから御免を蒙りますが、重三郎と正孝さんとを伊之さんが連れて往つて、お刀を先へ取つておしまいなさい、それに親方は子分を二人連れて往いくと仰しやるから」

仙「ナニでえじょうぶ大丈夫でござえやす、遅くも今夜の亥刻時分よつまでに帰けえつて来て、芽出度祝めでたくいをしましょう」

と仙太郎が先へ立ち、後^{あと}から三人が棧橋へ出まして、これから船へ這入りました。

正「若い衆^{しゅ}さんお頼み申しますよ」

伊「師匠^{こっち}此方へお這入り」

正「へえ御免下さいまし」

小「これは誠にお久しゅうお目に懸りませんが、何時も相変らず御機嫌能く、誰^{どなた}方もお変りなくって」

伊「へえ、有難う存じます、貴方さまにも御機嫌宜しゅう」

小「これは正孝どの、久しゅう逢いません」

といわれて正孝はげんな顔をして、暫く考えて居りましたが、正「おや、是は、成田街道で笠を冠って、笛を吹いてた方で……」

旦那誠に久々でお目に懸ります、これはどうも思いがけない、若旦那、あなたホラ私達を助けて下すつた旦那なんで……お礼を仰しやいよう」

伊「己は疾うにお礼は済んでるよ」

正「貴方のような皮肉なお方はありませんね、そんなら何故早く知らせて下さないんで……あの時から何うも立派な方だと思いましたが、お大名さまでいらつしやいますか」

伊「芝の金森さまというお大名の御重役で、稻垣小三郎様と仰しやるお方なんだが、お刀紛ふんじつ失に就いて虚無僧のような真似をして、散々御苦勞をなすつたんだが、是から其のお刀を取りに往ゆくのだ、斯ういう芽出度い事になったのも、お前のお蔭だよ」

正「へい、道理で彼奴^{あいつ}はお刀の銘^なをいいませんでした」

四十五

正「これは何うもお立派な奥さまで、初めましてお目通りをいたします。^{わたくし}私は正孝と申す^{ほうかん}幫間でございます」

音「正孝はん、久しゆう会いまへんね」

正「おや……これは山口屋の花魁、これは驚きやした、種々^{いろん}な方に出^{でつくわ}会しますな、花魁え、何うもすっかり御様子が変りましたから間違いたんですが、花魁ばかりは何うも只の花魁じゃない、お姫さまの筋の花魁だつていつてましたが、成程これは成田

街道で舁夫かこやを投げた方の御新造に違えねえ」

伊「許嫁のお方々さまなんだが、互いに顔を知らず小三郎さまはお刀詮議のために遠国へお出いでの後あとで、お父さまを殺した奴は大野惣兵衛というもので、其奴そいつが矢張りお刀を盗んで持つてゐるばかりでなく、石川さまを殺した奴ゆえ両家ともに敵かたきに成つてゐる大野惣兵衛、然そういうわけだからお前と己と番頭さんと三人で先方へ往つて、価値ねうちに構わず二百両でも三百両でも金子を投ほうり出して其の刀を取上げてしまふ、跡へ若旦那とお嬢さんが踏ふんご込んで往くといふ仇討かたきうちののつけの案内がお前だよ」

正「これは恐れ入りやす、これはどうも御免を蒙りましょう」

伊「御免を蒙るつてえ奴が有るかえ」

正「だってサ敵討なんぞに幫間の出る訳のものじゃア有りません、
煤掃すすはきのドンパタやる時でさえ何の役にも立ちませんもの、敵討
の処へ往つたら腰が抜けて這つて逃げるくらいのものでげすから
御免を蒙りやしよう」

仙「今若旦那や花魁の御恩は死んでも忘れねえと云つたじゃアね
えか、殴るぜ」

正「これは恐れ入ります……宜うございますわたくし私は死にますく、
私は蔵前の売卜者うらないに占て貰つても、お伺いをしてても寿命が短かい、
目の上に何とかいう黒子ほくろが現われてるといいましたが、土手で斬
られ損ない、成田街道でも殺されるところを助かつたのでげすか
ら、三度の神は正直で、今度は殺されるんでしょうが、こんな事

は正直でない方が宜しい」

と云つて居る内に船が著きましたから、

伊「師匠お前案内をしねえ」

正「宜しい」

といいながら端折はしおりを高く取りましたので、

伊「そんなに尻を端折はしよらないでも宜いじやアねえか、さツさと這

入んねえな、取次を頼みねえ」

正「えゝ、取ツ付き、取ッ附じやアねえ取次だ……お頼み申しま
すく」

と震え声でいう。

伊「変な声をするな、しつかり云いねえ」

正「お頼み申します」

山田「どーれ」

正「オウびっく恠りした」

山「おや／＼これは何うも、大夫もお待兼だ、番頭さんを御同道
かえ、正孝上んな、どうぞ此方こつちへ」

伊「へー御免を蒙ります……さア正孝往いきなよ」

と云われて正孝はかたまつてしまい、両手を合せて拝みながら、
正「私わたくしは何うぞ御免を」

といい捨て表へ駆け出してしまふ。是から伊之助と重三郎は座
敷へ通ると、お茶烟草盆菓子などが出る内に、奥から出て来たの
は八橋周馬で、何ういうことでございますか水色に染紋の帷子かたびら

を着まして、茶献上の帯を締め、月代さかやきを少し生やして居ります。

年齢三十七八、色白く鼻筋通り、口元の締った、眉毛の濃い、品の好よい男で、ピタリと居り著ついた処は成程五百石も取る見識があり、其の上にこやかで、横着ものゆえ猫撫声を出して、

周「さア／＼何うぞこれへ、始めまして手前が八橋周馬で、此の

度火急たびに国表へ帰らんければならんで、丹誠して拵えた刀ゆえ

惜しいものだが、然う／＼幾いくふり口もは荷になつて持つて往くこと

が出来んに依つて抛よんどころなく払つてしまふのだが、他たへ見せれば何いかかほど

程でも二つ返事で金子を出そうけれども、名高いものゆえパツ

と致すと宜くないから、作銘の処は云わないようにと言付けて遣つたために、お前の方へ手数てかずを懸け、誠に御面倒なことで」

伊「いえ何う致しまして、わたくし私にはほとんど目が届きませんから番頭を連れて参りましたが、少々其のお腰を拝見致しまして、其の上代価の所は二百両でも三百両でもお好み次第に差上げまする心得で」

周「ア、左様か」

と刀懸に懸けて有つたのを持つて来て伊之助に渡すを、受取り、又重三郎に渡す。重三郎は拵えなどは見は致しません、すぐ直に引抜いて見ましたなれども、栗田口國綱の刀は見る度たびみだれに乱が違ふものだから、心を静めて熟々つく／＼見ますると、疑いもない國綱なれば、刀を鞘に収め、

重「エ、これに相違ちがひございません」

といい捨て刀を持ったなり伊之助と一緒にバラ／＼／＼／＼と表の方へ駆け出しましたから、八橋周馬は驚き、山田藤六も**びつく**致しました。

周「コレ待て賊」

といいながら追掛けて出る処へ、音羽小三郎の二人は襟を十字に綾取り、端折を高く取り、上締をしめ、小長いのを引抜き物をも言わずツカ／＼と進んでまいり、今八橋周馬が敷台口へ下りようとする前に立塞りました。たちふさが

小「おのれ大野惣兵衛、吾は稻垣小三郎なるぞ、父の仇覚悟致せ」かたき

と身構えた様子を見て山田藤六は肝を潰して、玄関の長四畳の処へペタ／＼と坐ってしまう。八橋周馬は物をもいわず奥の方へ

逃げ込む。小三郎は跡から続いて追い掛ける。音羽は女ながらも胆たんすわの据すつたもので、今腰が抜けて坐いつて居る藤六を振向きながらひとかたなあび刀浴せる。

藤「ア—」

という声諸共にパタリと倒れて息絶える。小三郎は追い掛けながら、

小「おのれ逃げるとは卑怯であろう、丈助と其の方と合体して國綱の刀を盗み取り、三ヶ年以前父小左衛門を鴻の台にて殺せし大悪人、立派に侍らしく、逃げかく匿れを致さんで尋常に勝負を致せ」
音「王子権現の帰り路に、三河島の茂みに待受け、鉄砲で父を打殺したに相違有るまい、そのみならず丈助といい合せ、だまし

て私を廓へ沈め、のめくくと客に成り、能くもくくのめくくと此の身を受出し女房になれと云いおつたな、云おうようなき人にんびに非人最早逃げる道はないから覚悟をしろ」

大野「才、音羽か」

と言つたが惣兵衛も肝を潰し、大刀だいとうの鞘を払って振り上げたが、斬込む了簡もなく、只ウーンくと云つてるばかり、小三郎は元より早業はやわざの名人ゆえ、

小「天命思い知つたか」

と斬り込むを、惣兵衛は一步退しりぞいてチャリくと受け止め、チャくくと二三合ごう合せ、少しの隙を覗ねらつて惣兵衛が庭へ飛び下り、パタくくと駈けてまいり、生垣を飛び越えて土手の方へ

逃げ出す。

小「卑怯だ返せ」

音「逃げるとして逃がそうか」

と跡から追い掛ける。惣兵衛は土手伝づたいに綾瀬の方かたへ逃げて往ゆくと、ガヤ／＼おおぜい多勢黒山のように人が立って居りまして、バラ／＼いしほう礫を投りました。此の石は矢切の渡わたしぐち口くちに居りましたおし
のと恭太郎が、御名号ごめいごうを書いては積み上げたのが、山のように
なつて居りまする間へ匿かくれて居るのは、恭太郎に昇夫かごかきの安吉、重
三郎、正孝などで、バラ／＼石を投げると弥次馬も手伝つて投
ります。大野惣兵衛は最早目が暗くらんで居りますから、先には助太
刀が有ると思ひ、後あとへ帰ろうとしたが、後からは小三郎音羽が追

い掛けて参るので、これは堪らんと思ひ、刀を持ったなりドブリと綾瀬川へ飛び込むと、葎よしめしの繁った処に一艘船が繋つないで居りましたが、苦とまを揚げて立たち出たは荷足の仙太郎で、楫柄かじづかを振り上げて惣兵衛の横面よこつらを殴る。

大野「アッ」

といいながら此方こつちへ泳ぎ著つき、上あがりにかゝる処を小三郎が飛び込んでズーンと惣兵衛の肩先深く斬り込む。

大野「アッ」

といつて倒れるところを音羽かたなが一刀斬り附ける、小三郎は惣兵衛の髻たぶさを掴んで上へ引揚げ、

小「ヤイ大野、其の方は卑怯な奴であるぞ、何うあつても汝の首

を提げて屋敷へ歸らねば武道がたゝぬ、実に悪むべき奴であるぞ」
音「天命思い知ったか」

と二人して止めを差しましたは実に立派なことでございます。

小三郎は泰然として少しも騒がず後へ退く処へ、船から仙太郎も
上つてまいり、

仙「お芽出度うござえます、お怪我はござえませんか」

小「仙太郎親方本懷を遂げて此の上の悦びはございません」

仙「何んとも何うも申そうようはございません、先ずまアお芽出
度うござえやした、止めはお差しなすったか、私も此奴じやア何
のくれえ苦勞してえるか知れやせんから、少しばかり斬らして下
さい、重さんも此処へ来ねえ」

重「ヘイ／＼此奴でございますか、畜^{ちきしよう}生^{せい}め、四年^{この}以来^{かた}一通

りならない苦勞をさせやアがつて、此ん畜生^{ちんしやうせい}め」

といいながら鬢^{びん}の毛を一本／＼引抜く、仙太郎も榮螺^{さざえ}のような

拳骨を固めポカ／＼殴り、

仙「安^{てめえ}やい、手前も此処へ来い」

安「誠にお芽出度うござえます…此ん畜生^{ちんしやうせい}め、人に散々こええ思^{おも}

えをさせやアがつて」

と二ツ三ツ打つ。

伊「師匠此処へ来なよ」

正「私^{わたくし}も一寸^{ちやうど}と向^{むこう}脛^{すね}の毛を三本ばかり抜きましよう」

と云つてるところへ、向うからバラ／＼と侍が駈けて参りま

したから、小三郎は血に染った刀を提げたなり油断なく身構え、何者が来たかと思い、ト見ると重役渡邊外記が先へ立ち、金森兵部少輔さまの御舎弟八良五郎様がお野懸けの歸りで、稲垣小三郎の仇討ちあだうのことをお聞き遊ばし、お出いでになりましたので、これから小三郎が栗田口國綱のお刀を殿さまに差上げました。金森八良五郎様もことのほかお悦びにて、稲垣小三郎は元へお召し返しに相成り、石川家も再興致しまして、音羽と小三郎とは夫婦になり、後に両人の中に子をもうけ、長男を以て石川の家を相続させまして、八百石にお取立になりましたして、家長く栄えましたが、伊之助は全快に相成りましたゆえ、岡本政七いもとの妹お雪を元々に婚姻致して、これも末長く中よく栄えました。また仙太郎は金森様のお舟ふね

御用^{なごよう}を達^たしますという、末お芽出度いお話でございます。これで粟田口のお話は読切に相成りました。

（拋酒井昇造速記）

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の三」近代文芸資料複刻叢書、世界文庫

1963（昭和38）年8月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の三」春陽堂

1927（昭和2）年1月28日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返す記号は原則としてそのまま用いました。同の字点「々」と同様に用いられている二の字点（漢数字の「二」を一筆書きにしたよ

うな形の繰り返し記号）は、「々」にかえました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、「彼《あ》の」と「彼《あの》」は、それぞれ「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落をあらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にかえました。

※底本に混在している「衛」と「衛」、「嶋」と「島」「鐘ヶ淵」と「鐘が淵」、「美恵」と「三恵」、「長次」と「長治」、「寶」と「寶」、「芦屋」と「蘆屋」、「劔」「劔」は「剣」、「姪」

と「妊」は、それぞれ「衛」、「嶋」、「鐘ヶ淵」、「美恵」、「長次」、「宝」、「蘆屋」、「剣」、「妊」に統一しました。※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：門田裕志、仙酔ゑびす

2010年10月18日作成

2011年2月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

粟田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

粟田口霑笛竹（澤紫ゆかりの咲分）

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 三遊亭圓朝

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>